
ガンダム00～変革への道～外伝：生命の樹

ウォリアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダム〇〇〜変革への道〜外伝：生命の樹

【Nコード】

N9019R

【作者名】

ウォリアー

【あらすじ】

西暦2307年、人類は未だに争いをやめれずにいた。

そんな世界情勢の中紛争根絶を掲げるソレスタルビーイングは六機のガンダムという力を持って世界を変えるべく活動を開始した。そんな彼らをサポートするために作られた幾つかの組織。

この物語はその内の一つ、セフィロトの活動を記すものである。

剣也さんの作品、ガンダム〇〇〜変革への道〜の三次創作小説兼外伝になります。

機体設定（前書き）

MS設定は随時更新していきます。

機体設定

C B I X X X ナハトマート

ソレスタルビーイング内で極秘に開発されたMS。

開発を担当した技術者達は当時のこの機体のマイスターであったバ
ージルにより全員が抹殺されている。

額から真上に伸びる二本の角、目を覆うバイザー、口元のマスク上
のパーツ、等の形状からわかる通り、ガンダムである事を隠して行
動する事が基本的な使い方になる。

武装

G N ビームマグナム

機体からの粒子供給が追いつかないため、特殊なカートリッジを使
う。

威力は調節出来るが最大の威力はヴァーチェのGNバズーカに匹敵
する。

ただし、GNバズーカと違いカートリッジが無くなると撃つことが
出来なくなる。

G N ツインビームガトリング

ドミオンのガトリングを小型化した物を二つ連結させた物。
イメージとしては某一角獣のガトリング。

盾の裏にマウントしてある。

GNビームサーベル

両手に二つ、腰部に二つ、背中に二つと計六つのサーベルを装備している。

両手のサーベルは抜かずに使う事でビームトンファーとして使う事が出来る。

技

ビームコンフューズ

知る人ぞ知るあの技。

サーベルを投げ、投げたサーベルを撃ちビームを拡散させる。

バールが考案した。

GNS - 06 ザク

ソレスタルビーイングの技術者達が開発した試作機。

粒子貯蔵タンクで動く。

開発当初から粒子貯蔵タンクを動力にする事が決まっていたので、粒子貯蔵タンク型にしては長く活動する事が出来る。

結局、正式採用には至らなかったがロールアウトした機体をセフィロトが改修して使用している。

武装

マシンガン

この機体は稼働時間を延ばすため、兵装は全て実弾兵器である。

通常のみSが使うマシンガンと同程度の性能を持つ。

バズーカ

オプション装備としてマシンガンと選択して使用する。

威力は通常のみSの使用するバズーカより多少高い程度。

ヒートホーク

斧状の近接武器。

レイが使用する時は大型の物を使っている。

高熱で溶かし斬る。

機体設定（後書き）

どうでしたか？

ちなみにナハトマートにガンダムの名前をつけなかったのはミスではありません（黒笑）

登場人物設定（前書き）

機体設定と同様随時追加していきます。

登場人物設定

ゼロ・バージュ

男

22歳

首輪付き

元傭兵のガンダムマイスター。

笑い声と物事がある意味では達観したような態度が特徴。

嘗てはモラリアのPMCに所属していたが、同僚の死を追いかけるうちにソレスタルビーイングと接触。

エージェントとの死闘を繰り広げた末にソレスタルビーイングにスカウトされる。

要は強い敵は仲間にしてしまえという考え方。

享楽主義者で何事も楽しむ事ができる。

同僚の死を追いかけていたのもその理由は面白そうだったからだったりする。

フェレシュテのフォン・スパークとは組織に入る以前からの付き合い合

いがあった。(妙な笑い声は彼の影響)

フォンからはかなりの影響を受けている。

黒髪無造作へアー

レイ・アーデルハイト

19歳

男

イノベイド

セフィロト所属のガンダムマイスター。

元は平凡な大学生だったのだが、その正体はヴェーダが人間を理解するために世界に放ったイノベイドの一人。

?回収?されかけていた時に偶然にも自我が強かった彼は妹と二人で脱走。

その際にエージエントと死闘を繰り広げていたゼロ(当時は本名を名乗っていた)に出会う。

その後、紆余曲折あってゼロと共にソレスタルビーイングに入る事で彼の数奇な運命は加速することになる。

彼と妹は二人とも戦闘タイプの内イノベイドでありマイスターとしての適性があることが判明。

彼は妹を実戦に出さない事を条件にマイスターとなった。

真面目で礼儀正しい性格。

自分を誤魔化すのが得意。大抵女物のロングコートを着ている。

バージル・リム

35歳

女

首輪付き

セフィロトの管理官であり元ガンダムマイスター。

ソレスタルビーイングに入る以前は殺し屋だった。

ソレスタルビーイングに入ってから組織にとって都合が悪い人間を何人も始末している。

こう書くと誤解を招くかも知れないので予め書いておくが、筆者は別にソレスタルビーイングアンチと言うわけではない。

ただ、実際に活動を起こすまでの間、ソレスタルビーイングは目撃者は基本皆殺し、都合の悪い人間は抹殺という組織だった事実がある。(公式でも微妙に匂わせている)

その時の習慣からか、極度の過眠症を患っておりどこでも眠ってしまう。

性格は真面目一辺倒に見えて意外と天然ボケが入っていたりする。

後ろ暗い仕事をしてきたせいか、心身共にかなり図太い。

恐らく生身の戦闘なら全てのマイスターより強い。

ゼロをして生身では決してやりあいたくない相手と言わしめた。

元ナハトマートのマイスター。

リナ・アーデルハイト

16歳

女

セフィロトのガンダムマイスターの一人。

レイの妹。

ヒリング・ケアと同タイプのイノベイド。

しかし、性格は正反対であり、しっかりとした芯の強さと自分の意思を持つ。

表面的にはおっとりしている（悪く言えばボンヤリしている）ので何人もの男がそれに騙され、付き合っても長続きした試しが無い。（ただし、付き合ってた男は普通に男友達になっているので嫌われているわけではない）

誰に対しても優しく、どんな相手でも彼女を前にしたら心を開いてしまう。

その才能はバージルに驚異と言わしめるほど。

これが彼女のイノベイドとしての能力なのかは不明。

リン・シャオロン

17歳

女

セフィロトの整備士兼オペレーターの少女。

明るい性格と前向きな思考。何より空気が読める事からある意味セフィロト最大の重要人物。

セフィロト内の独特な循環（レイカリナかバージルが何かを言う。セロがそれに皮肉を言う。三人の内誰かがキレる。喧嘩寸前に発展する。リンが場を収める）の内、最も重要な位置にいる。

セフィロトについて

ソレスタルビーイングのサポート組織の一つであり、暗殺、殲滅等の露払いを担当する。

バージル・リムが管理官を務めており、オリジナル太陽炉を一基所

持している。

使用機体は随時追加していく予定だが、太陽炉を使うガンダム。粒子貯蔵タンクを使用するGNSシリーズを基本的に使う。

ただし、これはファーストシーズン開始時の事なので今後業務内容は変わってくる可能性もある。

ファーストからのガンダムにおける善悪の曖昧な境界線をイメージしてもらえれば幸いです。

ロバート・ウォーカー

享年41歳

男

ガンダム〇〇〇変革への道々本編の主人公であるクロスの父親。

パレスチナの民族紛争における軍事介入の際に死亡している。

豪放磊落を絵に描いたような性格で部下に慕われていた。

市民を護ることこそ軍人の本懐と考えている。

パイロットとしての実力は超一流と言うに相応しく、ユニオンのエースだった。

家族の事を何よりも大切に思っており、家族との時間を何より大切にしていた。

エイフマン教授との親交もあり、彼にフラッグのテストパイロットに誘われたが、上記の理由（市民を護ること…）からそれを辞退。自らが才能を見いだしたパイロットであるグラハムを推薦した。

その事からグラハムに感謝されており、彼がテストパイロットに選ばれた際には家族ぐるみで祝った。

軍務で家にいることは少なかったが家族関係は極めて良好であり、家族にとつてもかけがえの無い存在だった。（少なくともヘレンに再婚する気が無くなるくらいには）

リアルドの隊長機を使用しており、この機体にはリミッターの解除が可能、パーソナルカラー（黄色）等、幾つか一般機との差異がある。

アール5

アルエット・ルーラー

性別：女

年齢：26（2307時）

所属：傭兵、サーシエスと同じ立場（表向きはユニオンの適当な部隊）

性格：ガンダムに対して激しい怒りと憎しみを抱いている。それ以外の性格は温厚であり、特に子供には優しい。反面、大人に対してはかなり厳しい。四年前の一人称は俺、現在の一人称は私。四年前には語尾に〜っすとつける癖があったが今ではそのような事は無い。

好んで使用する戦法はロバートと同じく接近してのゼロ距離射撃。

乗機にこだわりは無いが、ユニオン系の機体を好んで使う。

ベリア・^{リム}・スー

性別：女

年齢：20

所属：セフィロト

性格：明るく社交的

ドミオンのマイスター候補の一人だったがユノとの交流を通して自分では役不足と考え、マイスターの座を明け渡した。

名前からわかる通りバージルの娘であり、母親から幾つもの戦闘技術を学んでいる。

その際は護身術と言われていた。

レイが着ている女物のコートは元々彼女の物であり防弾、防刃効果がある。

レイとは酒の勢いでアレした仲。

その際にレイはバージルに殺されかけている。

第一話 天使の影（前書き）

剣也さんの作品の外伝的なものを書かせてもらいます。

第一話はとりあえずメンバーの顔見せ程度に。

彼らの個性を少しでも見ていただければと思います。

第一話 天使の影

西暦2307年

人類は化石燃料の代わりに太陽エネルギーという新たな資源を獲得していた。

大規模な太陽光発電システムを持つ三つの超大国は、しかし己の利権拡大と保身のための勢力争いをなおも続けていた。

そんな中、世界に降り立った六機の天使たち。

彼ら？ソレスタルビーイング？は？武力による紛争根絶？という理念を掲げ、世界にその名を知らしめる事になる。

その中で実行部隊になる？トレミーチーム？

そのサポートを目的として作られた？フェレシユテ？

…最後に隠密行動、暗殺、殲滅、露払いを主な任務とするサポート組織、？セフィロト？

この作品は彼ら？セフィロト？の活動を描く物である。

画面の中、エクシアがイナクトをバラバラにしている

「…ようやく、始まった」

感慨深げに呟くのは？セフィロト？管理官のバージル・リム

彼女はソレスタルビーイングが活動を開始するまで幾度となく汚れ仕事を担当してきた。

故にこの光景には一種の感慨があるのだろう。

「ホントですね、これで世界が少しでもマシになれば良いんですが、バージルの言葉に返答したのはリナ・アーデルハイト、マイスターを引退したバージルの代わりに新たにマイスターになった少女だ。

「そうだな、リナ」

リナの言葉に頷いたのは、レイ・アーデルハイト。

「セフィロト？所属のマイスターであり、リナの兄でもある。丁寧な操縦をする事でマイスターに選ばれた。」

「そうですね、これから私も忙しくなります」

「セフィロト？の整備士、リン・シャオロンがこれからの思いを馳せる。」

「そいつぁ、どうかな」

最後に疑問を投げかけたのは？セフィロト？所属のマイスターの1

人であるゼロ・バージュ。

彼の言葉に皆が一斉に彼に注目する。

「…どついつ事です?」

全員の意味を代弁して、レイが尋ねる。

「この程度の事で世界が変わるわけがないっつたんだよ」

ヒハツ、と特徴的な笑い声をあげてゼロは全員を見渡す。

よく見るとゼロの首には爆薬がついている。

「何、この程度で変わる様な世界なら俺たちが存在する理由はねえ
つて事だ」

単純な話だろ?、彼はそう言う。

「…世界を変える事の困難を言っているのなら、それはここにいる
全員が覚悟している」

バーゼルがゼロに言う。

「そりゃそうだ、寧ろそんな事も覚悟せずにこんな馬鹿げた事、出
来ねえよなあ」

ゼロは馬鹿にしたような口調で言う。

「今回のミッションにしてもそうだ。最新鋭MSを圧倒する事で自

らの力を示し、起動エレベーターの襲撃でAEUが条約以上の力を
持っている事を他国に示した」

「待ってください」

リナがゼロの言葉を遮る。

「それなら人革へのテロを防いだ事は…」

「あんなミサイルもろくに揃えられないテロリスト、人革だけでも
どうにか出来ただろうさ」

ゼロのまるで味方を批判するような声にバージルは眉を潜める。

「ゼロ・バージュ、それはお前がソレスタルビーイングのやり方に
不満を持っているということか？」

バージルの詰問にゼロは、

「その通りですが？」

「それなら何であなたがここにいる！！」

レイの声には怒りが籠っていた。

「それこそ簡単な話さあ、俺は世界に喧嘩を売ったソレスタルビー
イングを買っただけの話だよ」

そう言って、ゼロはヒハハと笑う。

「それはそうと、私たちにも任務が言い渡されてたんじゃなかった
っけ」

空気を変えるべくリンが発言する。

「そうでしたね、私たちの任務は哨戒中のユニオンの部隊を殲滅する
ことです」

バージルはヴェーダからの情報を読み上げる。

「彼らは私たちの地上における活動拠点の一つの周辺警戒を行っており
ます。その存在を許しておけば地上におけるソレスタルビーイングの活動に支障
が出る可能性があります。我々は早急にこれを排除する必要があります」

そこまで読み上げてバージルは、

「要はいつも通り目撃者は皆殺しにしろ、だ。なお、今回の任務は
？ナハトマート？を使うよう指示されている」

「なら俺の出番だな」

そう言ってゼロが名乗りを上げる。

「…了解しました。それでは僕はザクで待機しています」

そう言ってレイはドックに向かう。

「ゼロ・バージュ、ナハトマートの運用は貴様に一任してある。その
意味はわかっているな？」

バージルの確認にセロは面倒そうに、

「わーってるよ、何度も何度も。そんなに自分のガンダムが大切か？」

セロの問いかけにバージルは一瞬黙る。

「…わかっているなら問題無い。早くドックに行け」

「りょーかいつと」

そう言ったのを最後にセロはドックに向かう。

二人がドックに行った後、バージルは気が抜けた様に座りこむ。

「大丈夫ですか！！バージル管理官！」

すぐにリナがバージルの体を支える。

「すまん、あの男と話すのは気を使うんでな」

そのままバージルは目を閉じる。

「すまないが少し寝る。何かあったら起こしてくれ」

そう言ってバージルは寝息をたてはじめた。

「本当に、この人はどこでも眠れるんですね？」

リナが呆れた様に言う。

「ハハ…、しょうがないよ、この人は重度の過眠症なんだからさ」
リンがフォローする。

「とりあえず、バージルさんを過眠室に運ば、多分何も起こらないからさ」

そう言ってリナはバージルをおぶる。

そして、仮眠室に彼女を運ぶ。

リナを見送った後、リンはオペレーターとして、席に座る。

「お二人とも、通信は繋がってますか？」

「こちらゼロ・バージュ。当たり前だろ？」

「レイ・アーデルハイト、準備はいつでも万全だ」

二人は対照的な返事をする。

「了解、出撃タイミングをお二人に譲渡します」

リンの言葉に二人は頷く。

「I have control.いつでもいいぞ」

「上と同じく、です」

二人の返事にリンは頷く。

「Mission start、二人とも戦果を期待しています！」

その言葉を最後にセフィロト用強襲コンテナは出撃した。

セロの哄笑と共に。

第一話 天使の影（後書き）

第一話、どうでしたか？

力量の無い言い訳ですが、元々は戦闘シーンを入れる予定でしたがキリの良さを優先してこうなりました。

第二話から戦闘シーンを入れることを約束します。

ちなみにバージルが何かかっこいい事言ってますが彼女は単に眠かったです。

本当に気を使う相手の前ではずっと目が冴えているハズなので。

第二話 AD2303 (前書き)

やっと書き終えた。

と言うわけで本編のクロス君の父親の話です。

どうぞお楽しみください。

ついでに剣也さん、後書きでちょっとした依頼がありますので、是非お願いします。

第二話 A D 2 3 0 3

西暦2303年、ユニオン空軍式典

五機のリアルドが飛行形態で空を飛んでいる。

この式典の目玉であるフライトパフォーマンスだ。

リアルドの編隊は、空中で急速旋回する。

その内の一機、黄色いリアルドだけが鋭い飛行機雲を描いていた。

外伝 B C 2 3 0 3

「お疲れ様です!!ロバート大尉」

そうやって黄色いリアルドのパイロットにユニオン兵がスポーツドリンクを渡す。

「ありがとう」

そうやってリアルドのパイロットはスポーツドリンクを受け取る。

彼の名はロバート・ウォーカー。

ユニオンのエースである。

「これから俺たち飲みに行くんですけど、一緒にどうですか」

尋ねてくるユニオン兵にロバートは、

「済まないが今日は家族たちとのホームパーティー兼グラハム君のテストパイロット就任祝いの約束をしているのでね。またの機会にしてくれ」

そう言つてロバートは妻と家に帰るべく隊舎を後にする。

「ヘレン准将なら今は司令部にいらっしゃると思つたよ」

彼の愛妻家ぶりを知っているユニオン兵は気を効かせて彼の妻であるヘレン・ウォーカー准将の居場所を告げる。

「ありがとうございます！」

彼はユニオン兵に礼を言うと司令部に向かつていった。

「ハムさんのテストパイロット就任に」

「……乾杯……！」

ロバートの息子であるアベルが乾杯の音頭を取る。

彼の声に皆がコップを打ち鳴らす。

大人たちはビールで、未成年者はジュースで。

「まずはグラハム君。テストパイロット就任おめでとう」

「こちらこそ、口利きありがとうございます」

ロバートの言葉にグラハムは礼を言う。

「何、新型は我々のようなロートルではなく、君たちのような可能性に溢れた若者が使うべきだ」

「恥ずかしい事言うなよ、父さん」

アベルの言葉にロバートとグラハムは苦笑する。

「それに親父は明日からパレスチナに出張だろ？家族で騒げるのも今日くらいなんだから少しくらいハメ外しなつて」

「あなたは外しすぎです」

いつの間にか近くに来ていたヘレンに頭を小突かれる。

いってえと踞るアベルにカレンがよっていく。

「でも、父さん本当に大丈夫なの？パレスチナは今でも激戦区だってニュースで言ってたよ」

もう一人の息子であるケビンが父親の事を心配そうに眺める。

「大丈夫だ、ケビン。激戦区などいつもの事だ」

ロバートはそう言ってジョッキのビールを飲み干す。

「あなた、余りお酒は……」

ヘレンは心配そうにロバートを眺めている。

彼の事だから心配は必要無いと思うが、それでも言ってしまう。

「何、どうせ着いてすぐに飛ぶことにはならんだろ」

それを気にせず酒を飲み続ける。

そうして楽しい時間は過ぎていく。

この時、これがロバートにとって最後の家族団欒になるとは誰も考えていなかっただろう…。

太平洋に浮かぶ一つの無人島。そこには私設武装組織『ソレスタルビーイング』の地上における拠点があった。

この拠点では主にMSの整備や開発等を行っている。

「バージル。ガンダムB・R・（ブリュウラーレツスル）の調子はどうか？」

整備士の言葉にこの機体のマイスターであるバージル・リムは返答する。

「悪く無いな」

バージルは簡潔に答える。

「そうか、それではこの機体のテストについて、話すが構わないな

？」

疑問の形をとっているが整備士の言は確定事項を話すそれだ。

「構わない。続けてくれ」

バージルの言に整備士は話し出す。

「我々はこれよりパレスチナに向かい現地入りする。そしてユダヤ人側に肩入れし、紛争を幫助しているユニオンの部隊を殲滅させる事がテストの内容だ。何か質問は？」

「特には無い」

バージルは素っ気なく答える。

「そうか、それでは現地入りの準備をしておけ。着いてすぐにテストというわけでは無いからな」

そう言って話を切り上げた整備士は部屋に戻っていく。

「さて、私も準備をするかな…」

そう言っただけでバージルはコクピットから這い出す。

そして目の前の巨人 ガンダムB・R を眺める。

一瞬何かの物思いに耽ったかと思うとすぐに自室に戻っていった。

地上に無数のアンフがいる。そして空中にはアラブ人を支援するA

EUのヘリオンがこれまた何機もいる。

しかし、それら全てが黄色い機影を捉える事が出来ない。気づいたら一機、また一機と墜とされている。

「流星は黄色だな!!」

友軍から通信が入る。

黄色いリアルドのパイロットであるロバートはただ一言、当然だと応える。

「いったん帰投しろ!!」

「了解した!アール小隊全員帰投しろ!!」

「アール2、了解!!」

「アール3、了解!!」

「アール4、了解しました!!」

「アール5、帰投します!」

そうして黄色いリアルドを中心とした部隊は基地に帰投していく。

「全く、ここに来て何度目の出撃だ……」

ゆっくり酒を飲む暇もありゃしないとロバートはぼやく。

パレスチナ問題はかねてからの問題に加えユニオンがユダヤ人を、
A E U がアラブ人を支援し始めた事で完全な全面戦争となっていた。
お互いに譲れないのはロバートにもわかる。

ユダヤ人は国を持たないが故に迫害され続け、アラブ人もイスラエ
ルの建国により長年住んでいた土地を追われた。

その後、彼らはその恨みを利用され、大国の権益確保の為の駒とし
て、或いは戦争の代理人として戦い続けている。

「俺も変わらないか…」

ロバートはそう一人ごちる。

むしろ自分は全てを理解している分余計に悪質だろうか、そう考え
た時だった。

『ロバート・ウォーカー大尉及びアール小隊はすぐに司令室に出頭
してください。繰り返します…』

そのアナウンスを聞いて、彼は何事かと思いつつ部屋を出た。

「遅いっすよ大尉」

「すまない。ところで急に呼び出しとは、何があったんです?」

ロバートの疑問にその基地の司令官は用件を言う。

「難民達を本国に送る為の船については知っているな」

「はい、確か本国に難民を受け入れる政策でしたね」

「そう、大体はそれで会っている。しかし問題が一つあってな。避難船に到着するまでは陸路を使用するのだが、アラブ人のテロリスト勢力がこれを狙っているとの情報を本国の諜報部がもたらした。貴官らには難民の護衛を願いたい」

「すみません！！一つ質問があります！」

ロバートの部下の若いユニオン兵が質問する。

「何故我々がそのような任務を？仮にMSが必要だとしても一般的な部隊で事足りるハズでは？」

若いユニオン兵の質問は最もだ。

パレスチナに来てからのアール小隊は多くの戦果を挙げている。彼らを前線に出すのは若さ故の暴走では無く至極真っ当な意見だ。

その疑問に答えたのは司令官では無くロバートだった。

「簡単な話だ。この政策は国際社会から既に一定の支持を得ている。期待されているということだ。そんな物がいきなり失敗してみる。バッシングは避けられんぞ」

なるほど、と若いユニオン兵が納得したのを見計らってロバートは司令官に敬礼する。

それに習って彼の部下達も敬礼する。

「ロバート・ウォーカー大尉及びアール小隊。任務を受領しました
!！」

そう言っつて司令室を出た。

翌日、難民が乗ったトラックが発進する。

ロバート達の任務はリアルドのMS形態でそれに随伴。万一の事があればすぐにでも迎撃に移るように言われている。

「とは言え、本当にテロリストなんかくるんすか？」

「さあな」

「さあなっつて…」

「どんな任務であろうと俺たちは全力で遂行するまでだ」

その言葉を最後にロバートは通信を切る。

ちょうどそのタイミングだった。

リアルドのレーダーがアンフを捉えたのは。

「噂をすれば何とやら、だな!！」

「俺のせいっすか!？」

「アール2、アール5。お前等はそのままトラックを防衛。アール3、アール4は俺に続け!!!」

ロバートは部下に指示するとリアルドにリニアライフルを構えさせる。

そのままロバートは敵に向けて機体を進める。

ここに戦いの火蓋が切って落とされた。

「私たちの出番は明日か」

バージルが現地スタッフに確認する。

「ああ、明日の午後六時。その時間帯に敵部隊を誘い出す」

エージェントの情報によると、明日の午後六時にAEUの支援を受けたアラブ人勢力が作戦を展開する。

しかし、エージェントによればその作戦はユニオン諜報部に既に筒抜けになっておりガンダムB・Rのテストはその間隙を縫って行われる事になる。

作戦の手順は第一フェーズでユニオンの部隊が来る前にアラブ人勢力の部隊を殲滅。

第二フェーズで到着したユニオンの部隊を殲滅。ガンダムB・Rの機能が確実に機能している事を確かめる。

言葉にすればそれで終わりだ。

この作戦で犠牲になる人間の命の重さなど感じる事すら出来ない。

「了解した。私は少し寝る」

そう言っただけでバージルは部屋に戻って行った。

バージルが眠りについたころ、ロバートはアンフと激突していた。

ロバートのリアルドはアンフの機関銃をさけ、そのコクピットにリアライフルを叩き込む。

コクピットを貫かれたアンフは弾丸をばらまきながら倒れる。

「よくも仲間を!!」

いつの間にか接近してきたヘリオンを避ける。

攻撃を避けられたヘリオンは一瞬つんのめった。

そして、その一瞬は黄色い死神には十分過ぎる一瞬だった。

コクピットを破壊されたヘリオンはそのまま倒れる。

「こちらは終わった。そっちはどうだ!!」

「アール3、目標の消滅を確認」

「アール4、目標は全滅した」

着いてきた部下から次々と通信が入る。

「目標はクリアしたと判断！アール2とアール5に合流する！！」

そう言っつてロバートは機体をトラックの方に向けた。

結論から言えば今回の任務は容易く成功した。

難民達は無事に本国に送り届けられ、隊内の死者はゼロ。

完全な成功だ。

「チヨロいつすね、こんな任務」

アール5が帰投する最中に口に出す。

他のメンバーも口には出さないがみんな似たような気持ちだった。

「油断はするなよ。それに本番は明日だ」

ロバートは若い部下をたしなめる。

「了解つす」

そうして彼らは基地に戻った。勝利の美酒に酔いつつ、次の任務に気を引き締めながら。

翌日、基地内は慌ただしく動いていた。

アラブ人勢力がユニオンの部隊に対し作戦を実行するとの情報が入ったからだ。

その情報をもつてユニオンは敵部隊が集結した時点で少数のエース部隊による電撃作戦を決行。

敵に気付かれずに接近して殲滅するというものだ。

その為に現地で結成されたのがアール小隊であり、ロバートはその指揮を執る為に本国から派遣されたのだった。

「それにしてもこれが終わったらロバート大尉とはさよならっすか」

若いユニオン兵がロバートとの別れを惜しむ。

「おいおい、まだ任務は始まってすらいないんだぞ」

ロバートはそう言って部下をたしなめる。

『アール小隊のメンバーは自機で待機してください』

アナウンスが聞こえる。

「それじゃ、行きますか」

そう言ってロバートはリアルドに向かって歩きだす。

その顔はさっきまでのリラックスしたものは無く、一人のパイロ

ツトの顔だった。

「ユダヤ人もめ…」

アラブ人勢力のヘリオンパイロットが呟く。

この作戦が成功すればユニオンの部隊に大打撃を与える事ができる。後ろ楯となるユニオン部隊がいなくなれば自分たちはユダヤ人勢力に対して大きくリードすることができる。

「隊長！！上空に機影が！！！」

その瞬間、ビームの雨がアラブ人勢力に降り注いだ。

無数のビームに貫かれたアラブ人勢力の隊長が最後に見たのは、背中から光を噴き出す悪魔の様なMSだった。

「…おかしい」

ロバートは呟いた。今回、MS形態で襲撃地点に向かっていったロバート達は違和感に取りつかれていた。

「確かに…敵の気配が全くしませんね」

「逃げたんじゃないっすか」

「…とりあえず、各機警戒を強めろ」

そう言った時、ロバート達は違和感に気付く。

「レーダーが効いてない？」

A E Uの新兵器か、そう考えつつ進んで行くと

「何なんだ、あのMSは」

そこに有ったのは大量のヘリオンとアンプの残骸、そして光を噴き出すMS　ガンダムB・Rがそこにいた。

B・Rが左腕をロバート達に向ける。

その瞬間、ロバートは通信機に向かって叫んでいた。

「総員、撤退しろ！！」

次の瞬間、B・Rの左腕のGNビームガトリングが火を噴いた。

散開してGNビームガトリングの一斉射を何とかかわしたロバート達は、ロバートを残して撤退した。

「隊長…！」

「安心しろ、俺は生きて帰る」

ロバート自ら囷になって部下を逃がそうとした。

「あの指揮官…、まあ良い。さっさと片付けて追いかけるか」

バージルは一人呟きガトリングでロバートを撃つ。

「ユニオンのトップガンをナメてもらっては困る…！」

ロバートは操縦テクニックをもってしてそれを回避、ゼロ距離でリニアライフルを叩き込むべく接近する。

そしてロバートが接近したとき、それは起こった。

「何だっつ…！」

B・R・の右腕からトンファーの様にビームが噴き出す。

そのビームの刃をロバートはギリギリでかわす。

かわした勢いを持ってロバートのリアルドはB・R・の背後に回り込む。しかし、それすら予想の範囲内だったのかB・R・は左腕の盾でリアルドを殴り付ける。

ここまでか…、ロバートが思わず諦めかけたその時だった。

「隊長っ…！」

撤退したハズの部下達が、B・R・に攻撃していた。

時間は少々さかのぼる。

「…つ駄目だ！！俺には隊長を見捨てるなんてできないっすー！！」
そう言つてアール5のコールサインを持つリアルドは反転し、来た道を引き返す。

アール5はそのままスピードを最大限まで上げて、ロバートとB・R・の戦場に引き返す。

「こちらアール2、君に付き合おう」

「アール3、しょうがない、付き合つてやる」

「貴様ら、帰つたら全員懲罰だぞ。俺も含めてな」

アール4もアール5に着いていく。

これでアール小隊は全員が揃つた。

そのままロバートの所まで行くと、ロバートのリアルドにB・R・が光刃を突き付けていた。

それを見たアール5はB・R・を攻撃。

そして時間は元に戻る。

「お前ら…」

「隊長にはっか良いカツコさせないっすー！」

そう言つてアール5はB・R・にリニアライフルを向ける。

だが…、

「…貴様らに、敬意を表しよう」

そう言うとバージュルはGNビームマグナムの威力を絞る。

そして左手にビームサーベルを構え、投げつける。

空中で回転しているビームサーベルを威力を絞ったビームマグナムで射つ。

回転しているサーベルに当たったビームはサーベルのビームを拡散させ、アール小隊のメンバーの機体を一瞬で破壊する。

「ビームコンフューズ。この技を使う事になるとはな」

ロバートは呆然とした顔で仲間を殺したMSを見た。

「さて、最後は貴様だけだな」

そう言ってバージュルはB・R・にビームトンファアを構えさせる。

そのまま勢いをつけてリアルドのコクピットを突き刺す。

そのままロバートのリアルドは爆散した。

死神が、自分を貫こうとしている。

ロバートは自身の末期を悟った。

「すまない…ヘレン、アベル、カレン、ケビン」

それがロバートの最後の言葉となった。

久しぶりの休日、自宅の電話が鳴り響く。

「はい、」

ヘレンが電話に出る。

「あ、あの…、ヘレンさん。落ち着いて聞いてください。ロバートさんが…」

直後、ヘレンは電話を取り落とす。

その音を聞き付けた彼女の子供達が寄ってくる。

「あなた…」

翌日、新聞の一面にはこのような大見出しが載る事になった。

【ユニオンのトップガン、民族紛争に巻き込まれて戦死】

これを期に、ロバートの長男であるアベルは民族紛争を憎む様になり、CBに身を投じていく事になるが…それはまた別の話である。

蛇足

大破したりアルドの残骸の中から一人の青年が這い出す。

彼のコールサインはアール5。彼はB・R・の暴虐の中、幾つもの奇跡的な偶然が重なり命を捨てていた。

「光のMS……っ」

その後の彼の行方を知るものは誰もいない。

ただ、戦場に黄色く塗装されたMSが出現する事が、これ以後あったと言っ。

第二話 AD2303 (後書き)

さて、次はレジスタンスの更新だな…。

それと、剣也さん、どこでも良いのでアール5を本編に出してやってくれませんか？

黄色いMSに乗ってガンダムを激しく憎んでいれば良いので。

ついでに殺さないでくれたら最高です。

第三話 再会（前書き）

今回はセフィロトの通常業務です。

時間はかなり飛びますが、彼らの普段はこんな感じですよ。

第三話 再会

人革連のティエレンがとある地点に集結している。

彼らの目的はガンダムの鹵獲。

そのために集められた部隊だ。

「隊長、総員配置につきました」

その部隊のメンバーがその部隊の隊長に通信を入れる。

その言葉に隊長はうむ、とただ一言返し、

「では、総員ガンダム鹵獲作戦の準備を」

そこまで言った時、隊長のティエレンが突如粒子ビームに撃ち抜かれる。

必要最低限に絞られた粒子ビームはコクピットのみを的確に破壊する。

「敵襲だっ！！さんか」

次の瞬間副隊長の機体が斬り裂かれる。

副隊長の機体を斬り裂いたのは巨大な斧。

それを操るのは濃緑のサイクロプス一つ目鬼。

「ヒいつハハハハハハハハハハハハハハハハ」

セロの哄笑が響きわたる。

それと同時に何機ものティエレンがビームガトリングの掃射で破壊されていく。

「セロさん、あんまり僕の出番を取らないでください」

そう言いながらもレイは丁寧な操縦でティエレンを血祭りあげる。

「テメエも張り切ってんな！やっぱあれか！！人体実験とか許せない質か！！」

「そうですね」

あっさり認めたレイは最後のティエレンを大型ヒートホークで斬り裂く。

と、そこでセロのナハトマートとレイのザクに通信が入る。

「お疲れ様です、二人とも」

「ナハトマート、セロ・バージユ。任務は完璧に遂行した」

「ザク、レイ・アーデルハイト。ミッションコンプリート。帰投する」

二人がここに来るときに使った強襲用コンテナに機体をセット。

ナハトマートからの粒子供給が行われた強襲用コンテナはセフィロトの拠点に向けて飛んでいく。

と、通信機から声が聞こえる。

「お二人とも、着いたら次の任務の説明があります。ついでにベリアさんも帰ってくるそうですよ。」

その言葉にレイはあからさまに嫌そうな顔になる。

「あの人が帰ってくるんですか…」

「迎えに行くのはお前な」

我関せずと言った口調でセロは言う。

「何で僕が…」

レイの疑問に対する答えは簡単だ。

「まあ、安心しろ。骨くらいは拾ってやるぞ」

「殺られるのは確定ですか…」

ベリア・R・スー^{リム}。CBのエージェントの一人であり、かつてはユノとドミオンのマイスターの座を争った人物だ。

名前からわかる通り、バージルの実の娘である。

バージルから幾つもの戦闘技術を学んでおり、生身で完全武装のテロリストを壊滅させた母親の遺伝子を完全に継いでいる。

「今回の任務は極秘裏に建設されたAEUの基地の殲滅だ」

いつも通りと言った口調でバージルが言う。

「今回の任務はあらかじめ基地内に潜入したベリアが工作を行っている。情報支援その他は完全だと考えてもらって差し支え無い」

「あゝ、一つ質問があるんですが」

そう言っただけでレイが手を挙げる。

「どうした？レイ」

普段とは違う、完全なアサシンの目でレイを睨み付ける。

「ベリアさんの回収は…」

「主戦力のナハトマートでない機体のパイロットが行う事になるな」

「じゃあ、今回は僕がナハトマートに…」

「残念だが、ナハトマートの認証は私とセロしか通らない」

バージルの返答にレイは肩を落とす。

「まあ、お前のザクも追加装備があるんだ、戦力的には第二世代のガンダムと大差は無い」

バージルの冷たい声にレイは身震いする。

普段素っ気ない態度を取ってはいるがこの管理官は娘を大切にしている。

そして、それ故にセフィロトに合流した際のベリアとレイの関係に複雑な思いを持っている。

簡単に言えば？手え出したら殺す？だろうか。

「任務開始は明後日だ。各員準備をしておけ」

バージルのその言葉を持って場はお開きになった。

「お兄ちゃん？」

リナがレイに話しかける。

「リナか…、どうかしたのか？」

「なんか嬉しそうだったから…」

「…そんなに嬉しそうだったか？」

レイの疑問にリナは答える。

「うん、なんかスキップでもしそうなくらい」

「それは勘違いだ!!」

思わずリナにツッコミを入れるとレイは我を取り戻す。

「でもお兄ちゃん、いつもベリアさんのコート着てるでしょ」

妹の言葉に返せなくなる。

「大体、いくらあの時お酒の勢いがあつたからって…」

「どこまで知っている!？」

妹の情報網に驚異の念を抱きつつレイは思考を入れ換える。

「とりあえず、もう寝る。明日の任務に支障がでる」

「りょーかいつ」

そう言つてリナは寢室に戻っていった。

「…スキップでもしそう、か」

妹がいなくなった中、レイは一人そう呟いた。

彼らがセフィロトに籍を置き、自分が血にまみれてから妹は随分と明るくなった。

隠しているつもりなのだろう。

自分が人間でないと知った時の絶望を、血にまみれる兄の怒りを。

「…考えてもしょうがないな」

レイはそう呟いて自分も寝室に戻った。

極秘裏に建造されたA E Uの基地。

軌道エレベーター建設の遅れに対しA E Uの首脳部が下した結論は軍事力の増大だった。

その結果がこの基地だ。

そして今、この基地の内部は喧騒に包まれていた。

「いたぞー!!」

そう言つてA E Uの兵士が潜入していたスパイ ベリアに向かってマシンガンを放つ。

放たれた弾丸はしかし、潜入者に当たる事は無くむしろ弾丸の嵐の中を潜入者は駆け抜けてくる。

A E U兵の目の前に来たかと思うと潜入者は彼の首に両手を回す。

外から見れば抱擁しているようにも見える。

しかし、彼女は両手に力を込める。

ポキツと言う音がしたかと思うとA E U兵は動かなくなった。

騒ぎを聞きつけたA E U兵が何人も乗り込んでくる。

乗り込んで来たA E U兵に対しベリアはマシンガンを掃射。

抵抗する間も無くA E U兵は蜂の巣になる。

「これで終わりかな？」

ベリアはそう呟くと外から響く轟音に耳を傾けた。

基地のM S隊が出撃したのだろう。

「後は任せるわよ。ゼロ、レイ」

彼女はそう呟いて回収ポイントに向かった。

「ゼロ、わかっていると思うが今回の任務は基地への攻撃はN Gだ」

「ベリアを回収するまでは、だろ？」

ゼロの言葉通り今回の任務はベリアを回収するまでは基地施設への攻撃は禁止されている。

「わかっているなら問題ない」

バージルの言葉が終わると同時、ナハトマートが飛び出す。

基地の防衛部隊であるヘリオンを次々と撃墜する。

セロが任務を開始したところ、レイも任務を行っていた。

今回、レイのザクにはいくつかの追加装備が施されている。

フリッパーアイと呼ばれる索敵兵装に加え、ヒートソード、そしてGNビームライフルがそれにあたる。

ヘリオンがザクに対し射撃をするが、レイはザクの機動性を生かし、それを回避。

そのままGNビームライフルでヘリオンを撃ち抜く。

「…あなた達の犠牲は決して無駄にはしません」

そう、呟いてレイは名前通り光の如く素早い動きでヘリオンを殲滅しつつベリアとの合流ポイントに向かう。

「…」

レイが合流ポイントに到着したとき、ベリアはすでにそこにいた。

「遅い！！」

到着早々ベリアの叱責が飛ぶ。

「…勘弁してくれ」

長い潜入生活の中、彼女は全く変わっていなかった。

レイはザクの手を差し出す。

ベリアは迷わずザクの手の上に乗る。

そのままザクのコクピットにベリアを乗せる。

「まあ、来てくれたってのは評価の対象にしてあげても良いわね」

「あんたの上から目線も久しぶりだな」

レイはそう言った後、ナハトマートに通信を入れる。

「こちらの仕事は完了した。予定通り基地を壊滅させてくれ」

レイのザクが基地から離れるのをセロは視認した。

バージルから通信が入る。

「粒子圧縮システムの解放を許可する。意味はわかるな？」

バージルの言葉に

「許可するって言ったよな」

「ああ、確かに言った」

「ヒハッ、そんじゃ派手に行くぜえ!!」

その瞬間、機体のラインに緑色の線が走る。

そして、その線に沿って機体の装甲が展開する。

最後に頭部のブレードアンテナが左右に伸長し、口元のマスクと目のバイザーが外れ、収納される。

血の涙を流しているような独特のアイラインを持つその機体は

「ナハトマート、圧縮粒子解放形態、ガンダムB・R。目標を破壊し尽くす!!」

次の瞬間、火力が増大されたガトリングのビームがAEUの基地施設を破壊し尽くした。

「と言うわけで、しばらくレイの部屋にお邪魔になるよ」

任務終了の翌日、別の任務の為にバージルがセフィロトを離れ、セロは機体の整備、リナとリンは買い物に行っている。

「どづいつわけですか…」

レイは嘆息しつつも拒否はしない。

セフィロトにベリアが戻ってきたこと。バージルが任務でセフィロトを離れたこと。

これが彼らにとって吉と出るか凶と出るか、それは誰も知ることは

ないのだった。

第三話 再会（後書き）

と言うわけでB・R・の武装の伏線回収とデスティニー顔変身MSの登場。

あの顔は個人的には良いと思います。

ヒールっぽくて。

第4話 墮罪（前書き）

やっと終わった、さて、今回はアルエットの過去編です。

彼女の過去に何があったのか、また何故彼女があれほどの力を持つに至ったのか、理解していただければ幸いです。

第4話 墮罪

硝煙が漂う廃墟、そこではつい先ほどまで武力闘争が行われていた。

しかし、今ではそこには一人の女性がいるだけだ。

女性の名はアルエット・ルーラー。

つい先ほどまで存在していたユニオンのエースパイロットチーム？
アール小隊？におけるコールサイン、？アール5？を持つ軍人だ。

彼女は今、満身創痍と言うに相応しい怪我を全身に負っていた。

普通の人間なら死んでもおかしくないような傷を負いながらも、しかし彼女は足を止めない。

「隊長……」

彼女は一つ、呟いた。

「リチャード……」

また、彼女は呟いた。

「ヨハネス……」

「ウエンディ……」

次々と、彼女はつい先ほどまで生きていた仲間の名を呼ぶ。

そして

「俺は忘れないっすよ…光のMS」

そうやって彼女は戦火の跡が色濃く残る廃墟を後にしようとした。

しかし、彼女にはすでに動けるだけの力が残されていなかった。

そのまま彼女は力なく倒れこむ。

「まだっス…、まだっスよ…」

まだ俺は何も成し遂げていない。

そう言おうとしたのだろうか、しかし彼女が追った傷はそんな恨み節を言う力すら奪っていた。

薄れていく意識の中、彼女はただ一つの事を意識に浮かべた。

『死にたくない…、あいつを殺すまでは…』

そのまま、彼女の意識は闇に堕ちていった。

…あるいは、ここで死んでいた方が彼女にとっては幸せだったのかも知れない。

しかし、世界と言うものは人が思う以上に残酷に出来ている。

彼女は一度全てを失った。

しかし、彼女には最後に命が残されていた。

彼女の物語は加速する

悪路を走るジープ、そのジープの揺れ具合に不快感を覚えつつ助手席に座る青年、ロト・ラジエストーンは周囲の警戒を行っていた。

「全く、何でパイロットの俺がこんな事を…」

ぶつぶつとぼやきながらも彼は自らの職務を全うする。

近年、A E Uの首脳はパレスチナへの軍事介入を縮小する方針になっている。

そのため優秀なパイロット達は本国へと帰還しており彼もまた同じように帰還する予定だった。

「ん…？」

スコープ付きのライフルで周囲を警戒していた彼は、

「おい！！止める！」

そのままジープを止めさせる。

そして、彼は見つけたモノ…、ユニオンのパイロットスーツを着た女性と出会った。

自分の体が光に包まれる。

そして、気付いた時はアルエットは不毛の荒野を歩いていた。

彼女の足には枷がついている。

白い、人間の手の骨のような…いや、それぞれの物が彼女の自由を制限していた。

『お前のせいで…』

『何でお前だけ…』

声が聞こえたと同時に、地から這い出した亡者達が彼女を捕らえる。

そして

「っ!!」

彼女は目を覚ました。

「おゝ、起きたか」

その声と共に、彼女の意識は完全に覚醒する。

「ここは…」

そこまで言ったとき、彼女は上半身に何も着てない事に気付く。

そのまま、彼女は被せてあつた毛布を抱き寄せる。

「な、なんで!?!」

「あゝ、落ち着け。怪我が酷かったから治療のために服を脱がせただけだ」

そう言つて白衣を着た男はアルエットに病院服を渡す。

「俺は? 国境無き医師団? のエリックだ。よろしくな」

そう言つて白衣を着た男、エリックが話しかける。

病院服を着ながらアルエットはエリックに疑問を投げかける。

「一つ聞いて良いっすか?」

そう言つてアルエットは尋ねる。

「何で俺を見つけられたんすか？」

アルエットの疑問はもつともだ。

彼女の所属していたアール小隊はユニオン内部ですら秘匿性が高い部隊であり、あそこで作戦行動を取ると言うことは限られた人間しか知らない事だからだ。

「あゝ、それはだな」

エリックが答えようとした時だった。

病室の扉がノックされたのは。

「おっと、答えが来たようだ」

そう言ってエリックは病室の扉を開ける。

そして、A E Uの軍服を着た男性が入ってくる。

「紹介しよう。彼の名はロト・ラジエストン。君を発見してここまで運んできた人物だ」

そう言ってエリックは入ってきた男性、ロトを示す。

「ロト・ラジエストンだ。A E Uでヘリオンのパイロットをやっている」

簡単に自己紹介をした後、ロトはベッド脇の椅子に座る。

「さて、何故あんな所で倒れていたのか、答えてもらおうか」

ロトの言葉にアルエットは一瞬詰まる。

「おい、こいつは病み上がりだぞ?」

そう言っただけでエリックが質問をやめさせようとする。

「…いいつす。全部話します」

そう言っただけでアルエットは全てを話した。

自分がユニオンのアール小隊に所属していた事、任務中に光を放つMSに遭遇したこと、そしてユニオンのトップガンであったロバートがそのMSにほとんど何も出来ずに葬りさられた事を。

やがて、ロトが一言呟く。

「^{にわか}俄には信じ難い話だな」

「…自分でも話しててそう思ったッス」

エリックの言葉にアルエットが返答する。

「まるでモンスの天使だな」

ロトがそう言った。

「いいつすよ、こんな与太話、どうせ信じてもらおうなんて思って

ないっすから」

アルエットはそう言った。

話していて自分の手が震えていることに気付いた。

「まあ、俺は信じるさ。こんな所でウソ吐いてもしょうがないからな」

ロトがそう言った。

「…同情ならいらぬッスよ」

アルエットはそう言って再びベッドに倒れ込む。

「さ、病人が寝てるんだ。悪いが医者としてこれ以上の質問を許すわけにはいかない」

そう言ってエリックはロトを追い出す。

その時にロトはアルエットに言った。

「このおっさんは胡散臭いが腕は信用できる。任せても良いぞ」

そう言ってロトは部屋を出ていった。

「…心配してくれたんスカね」

アルエットはそう呟いた。

「ハハッ、あいつは昔から女に甘いんだよ」

そう言ってエリックは、

「さて、ここがどこでどういう状況か。話しておこうと思うが」

「…心配ならいらないッス。始めてくださいッス」

それからエリックの説明が始まった。

曰く、ここはパレスチナの小さな集落で今は引き上げ途中のAEU兵と地元の住民が住んでいること。

今は、ロトの物と防衛用にAEUから貸し出されたヘリオンがあるが元々はロクな兵装も無く、盗賊紛いのテロリストに襲撃されていたこと。

「まあ、そう言うわけだな、ここの任務が終わったらあいつも引き上げなんだってよ」

エリックはそう言って話を締めくくる。

「さ、今日はもう寝る。続きは明日の朝だ」

そう言ってエリックは部屋を出ていった。

その晩の事だった。集落にテロリストが現れたのは。

外から聞こえた爆発音でアルエットは目を覚ました。

部屋にエリックが駆け込んでくる。

「おい！さつさと逃げるぞー！！」

「何があつたんスカ！？」

「昼間話したテロリストが襲ってきた！！今はロトがヘリオンで応戦しているー！！」

そう言ってエリックはアルエットの手を引く。

「とつとと逃げるぞー！！ここも危ないー！！」

その時、何を考えていたのかは、アルエットには思い出せない。

ただ、やたらと切羽詰まっていたのだけは覚えている。

「MSはどこッスか？」

は？、と思わずロトは聞き返す。

「…教導で、AEUの機体の動かし方は知ってるッス」

「無茶だー！！そんな病み上がりの体じゃ落とされるのが関の山だ！」

そう言ってエリックはアルエットを連れ出そうとする。

しかし、アルエットは頑なに動こうとしない。

「いいからー！！ヘリオンは後一機残っているハズッスー！！」

そう言ってエリックを問い詰める。

「…集落の南側の大きな倉庫にMS形態のヘリオンがおいてある！
！わかったら早く逃げ」

「ありがとうッスー！」

言うが早いかアルエットはエリックから聞いたMSの倉庫に向かって駆け出して行った。

「お、おい！！」

そして、置いてきぼりにされたエリックも彼女を追って走りだす。

集落の倉庫。そこでは地元の青年がヘリオンに乗り込もうとしていた。

「ああ！！まだるっこしい！」

そう言ってアルエットは青年を押し退けてヘリオンの操縦席に座る。

「あんたはさっさと逃げるッスー！！」

そう言ってアルエットは機体を起動する。

「…慣れないツスけど、アルエット・ルーラー。ヘリオン。出撃するツス!!」

テロリストのアンプの機関銃をロトのヘリオンはかわす。

その勢いのままソニックブレイドで斬りつけアンプを破壊する。

「全く、どいつもこいつも相手見て商売しろ!!」

そう叫ぶと次の敵を破壊するべく機体を動かす。

彼のヘリオンは前線で幾度か改修を施されており、土地に合った仕様になっている。

そのまま次の敵 自らが利用する機体と同じ、ヘリオンに機体を向き合わせる。

しかし、彼が攻撃をする前にテロリストのヘリオンのコクピットに風穴が開いた。

そのままテロリストのヘリオンは力無く倒れ込む。

そのまま味方のヘリオンはテロリストの所有するMSに接近していきコクピットを的確に破壊していく。

一瞬あっけに取られていたロトも攻撃を再開。

敵MSを血祭りに上げた。

敵MSを全て破壊した所でロトは味方のヘリオンに通信を入れる。

「助かった、礼を言う」

「礼を言われる程の事じゃ無いツスよ。この程度の相手」

その声を聞いてロトはそのヘリオンに先日助けた女性兵士が乗っている事に気がついた。

「そう言えば名乗ってなかったツスね。俺の名はアルエット。アルエット・ルーラーツス」

そう言っただけでアルエットは顔をしかめる。

病み上がりでMSに乗って無茶な機動をした為に傷口が開いたのだ。通信機から洩れてきたアルエットの苦悶の声にロトは思わず大丈夫かと尋ねる。

しかし、アルエットの意識はその言葉を最後に闇に落ちていった…。

「全く、無茶しやがって!!」

翌日の夕方、アルエットは再び意識を取り戻した。

「…すみませんツス」

アルエットはエリックに謝罪する。

「…済んだ事はどうでも良い。それよりどうするんだ？あんたの怪我は、ここの医療施設じゃどうにもならんぞ？」

その言葉に反応したのは意外にもロトだった。

「それなら明日、俺と一緒にAEUに向かいませんか？負傷した現地民の治療って言ったらついでだし多分通ると思うが」

正に渡りに船、そんな都合の良い提案だった。

「良いんスカ…？俺はユニオンの軍人ツスよ…」

そんな事を言うアルエットにロトはこう返した。

「女性に助けられて助けてくれた相手を見殺しにするのは気が引けるんでな。無論生きたくないなら断っても構わないが」

そう言ったロトに何と無く申し訳無い物を感じつつ、アルエットは断ろうと思った。

しかし、エリックがそれを許さなかった。

結局、エリックが随伴する事でアルエットはAEU行きを了承した。深い深い闇の中、アルエットはただひたすらに走り続けていた。

背後に迫る亡者の群れから、悪魔の様な光を放つMSから。

そのまま亡者の群れに追いつかれた所で彼女の目が覚める。

彼女の叫び声を聞いた医療スタッフが駆けつける。

「…ちよつと嫌な夢を見ただけっス」

そう言つて彼女は精神安定剤を拒否する。

あの日から毎日こんな夢を見るようになった。

医者はPTSDの一種だと言っているがアルエットはこれを贖罪と
考えていた。

自分だけが生き残ってしまったこと、それが自分の罪であると。

少し落ち着いてくると彼女は病院の廊下を散歩代わりに歩いてみる。

「お、もう出歩いても良いのか？」

歩いているとロトが話しかけてきた。

「…何でここに居るッスか？」

「見舞いだよ、あんたのな」

そう言つてロトは持っていた買い物袋を示す。

「後、エリックからはこれだ」

言いながら彼はリンゴを取り出す。

「…何でリンゴなんスか？」

「さあな、病人にはこれが良いらしい」

「俺は怪我人なんスけどね…」

そう言いながらアルエットは足を進める。

「ところであんた、何かほしい物とかあるか？」

「何スか…、いきなり」

「俺はあんたに助けられたからな。恩返しの一環とでも思っておいてくれ」

ロトはそう言つと時計を見る。

「おつと、もうじき模擬戦の時間か。今日こそあのコーラ野郎に勝たないとな」

何やら内輪の話をしたかと思うとロトは病院の出口に向かって歩きだす。

「…待つツス」

アルエットはロトを呼び止める。

「一つ、お願いがあるツス」

そして、彼女のお願いはロトを大いに驚かせ、また叶えられる事と

なる。

数ヶ月後、アルエットはA E Uの基地でヘリオンのコクピットにいた。

彼女がロトにした頼み事、それは自分がA E Uの軍に入れるように口利きしてもらおう事だった。

ロトの口利きの結果、彼女はA E Uのパイロットとしてヘリオンを受領した。

彼女のヘリオンは黄色く塗装されている。

彼女がA E Uとしての初陣で多大な戦果をあげた報酬だった。

「目標を捕捉。これより撃墜する」

そうやって彼女は敵M S…アンフに狙いを定める。

そのまま彼女は飛行形態のヘリオンでアンフに向かって急降下する。

そして、アンフに激突する直前、ヘリオンに上昇機動を取らせる。

上昇機動を取らせる寸前に放ったリニアライフルはアンフのコクピットを完全に破壊していた。

「…まだッス」

そうやって彼女は機体を基地に向け、そのまま基地に帰投する。

「お疲れ様です！」

そう言っつて整備スタッフが彼女にタオルを渡す。

「ありがとうございます」

そう言っつて彼女は汗を拭く。

「それにしても、今日もナイスフライトでしたね！」

その言葉にアルエットはただ一言こつ返す。

「私なんてまだまだツスよ」

そう言っつて彼女は整備スタッフに背を向ける。

彼女が与えられた個室に行こうとした時、いきなり声をかけられた。

「おい！」

「何なんスか、今日は」

アルエットはそう言っつて声をかけた相手…ロトを見る。

「今日の無謀なフライトはどう言う事だ！！後少しでお前も死ぬところだったんだぞ！？」

彼の指摘は当然だ。あの時コンマ一秒でも遅れていたらアルエットのヘリオンはアンフに突っ込んで爆散していた。そして彼女はAE

に所属してから何度も無謀なフライトを繰り返していた。

「…任務は完了しました。何も言われる筋合いはありません」

アルエットはそう言って手を振り払う。

「…そういう問題じゃない！！お前は死ぬのが怖くないのか！！」

その言葉にアルエットはピタリと足を止める。

「…怖いっスよ」

見れば彼女の手は震えている。

「でも、みんなはこんな事感じる暇もなく死んでいったんス」

「だったら何故あんな無謀なフライトを！！」

「強くなるためッス！！あの光のMSに勝つために！！」

アルエットはそう叫ぶ。

まるで、今まで溜め込んでいた感情を吐き出すように。

「あなたにはわかるッスか！？仲間を目の前で喪つ気持ちか！！自分だけ生き残ってしまった苦しみが！！命なんて惜しんでいたら私は、私は…」

アルエットの激情に、ロトは言葉を失う。

「…すいません、取り乱してしまいました」

アルエットはそう言うのと口トをおいてシャワールームに足を運んだ。

口トには、その背中を追いかける事は出来なかった。

翌々日、彼女はとある武装勢力の掃討に駆り出された。

敵部隊はヘリオンを使用しており、基地内でもエースと呼ばれる口トとアルエットが先行部隊に選ばれた。

「アルエット、聞こえているな？」

口トはアルエットに確認を取る。

「…何すか？」

口トはそう言うのと、アルエットに話しかける。

「この前の話なんだが、やっぱり俺にはわからない」

「そっツスか」

「だが、強くなりたい気持ちはわかる」

「…で？」

「…ここからは帰投してからにしよう」

口トはそう言うのと飛行形態のヘリオンを加速させる。

テロリストの武装はヘリオンが六機だ。

「… A E Uも相手見て商売した方が良いツスね」

「言ってくれるな」

そのままロトは後続の部隊が来るまでの時間稼ぎをするべくテロリストに対しヘリオンの機銃で牽制する。

対してアルエツトは敵部隊ヘリオンに上昇機動をとらせる。

急上昇したヘリオンをテロリスト達は見失う。

そして、最高域まで上昇した後アルエツトのヘリオンは急降下する。

急降下したヘリオンは、そのままテロリストのヘリオンにまっすぐ向かっていく。

そして、リニアライフルでテロリストのヘリオンを撃ち抜く。

かつてのロバートが得意としていた戦術だ。

この攻撃を受けテロリストのヘリオンは大破、そのままアルエツトのヘリオンは地上に激突する寸前まで加速、そのまま急上昇して地面への激突を避ける。

「まずは一機」

続いて彼女は20mm機銃で牽制しつつ、テロリストのヘリオンに接近する。

「アルエツト！！」

ロトが自分の名前を呼ぶ声がする、がそれを強引に振り払ってアルエツトは敵部隊のヘリオンにリニアライフルを放つ。

その攻撃を上手く避けたヘリオンに舌打ちをすると、そのヘリオンが破壊された。

ロトのヘリオンが放った攻撃だった。

「…何してるんスカ？」

「見てわかんねえ！？」

そのままロトのヘリオンはテロリストに攻撃を加え続ける。

アルエツトも負けじとテロリストのヘリオンを落とす。

後続の部隊が到着した頃にはすでにテロリストは壊滅していた。

アルエツトは焦っていた。

いつの間にかロトが強くなっていたことに。

初めてロトの戦いを見た時、彼の力は自分には及ばないと判断した。

確かにアルエツトと初めて会ったときのロトはお世辞にも強いとは言い難かった。

しかし、アルエットは全く知らない事だったのだが彼は強くなっていた。

模擬戦でのコーラサワーとの戦い。テロリスト達との戦闘。幾度も
の訓練飛行及びシミュレーターによって。

「…駄目、あんなのに追い付かれてたら、あの光のMSには…」

そこまで思考した時だった。

自分を探していたロトと出会ったのは。

「…何の用ツスか？」

アルエットは訝しげな態度を隠さずにそう告げる。

「出撃した時の話の続きだ。聞いてくれるか？」

その言葉に返せないでいると、それを了解と受け取ったのか、ロト
は話し出す。

「この前の話の続きだが、やっぱり俺には理解出来ない」

「…で？」

理解出来ない、と言われた事に一抹の寂しさを感じ、そんな感情が
自分に残っていたことに驚きを覚えながらアルエットは続きを促す。

「あゝ、何つーか、自分でも余り整理できてないんだがな」

そう前置きしてロトは話す。

「あんと初めて会ったとき、何かさ、こうビビって来たんだよ」

何を言っているのか理解出来ないでいるアルエットにロトは続ける。

「そいで、あなたの無謀なフライト見ている内にさ、あなたがいなくなるって考えると、スゲー怖くなってきたんだよな」

「それが、何の関係が…」

「それで俺は強くなるうと思ったわけだな。あんとについていけるように、あんたを護れるように」

そう、彼が言いたい事、それは既にアルエットにもわかっていた。

ただ、認める事が怖かった。

もし、認めてしまったら、また喪う物が出来てしまうから。

「…頼む、あなたの背中を護らせてくれ」

それは、不器用な告白だった。

正直な所、アルエットは混乱していた。

この状況でこの男にこんな事を告げられるとは思っていなかったからだ。

「何で、私なんか…」

思わずアルエットは口に出してしまった。

「…さあ、ただいつの間にかあんたじゃ無いといけなくなっていた」

ロトはそう言ってアルエットを抱きしめる。

「あんたは俺が護る。だから」

「だから？」

復讐を諦める、そう言われたならこの告白を受け入れるわけにはいかない、アルエットはそう決意していたが、

「俺に、あんたと同じ道を歩かせてくれ」

その言葉にアルエットは今度こそ涙した。

最早、二人の間に言葉は必要無かった。

それから数カ月後、二人のコンビはA E U内で屈指の物になっていた。

この二人ならどんな戦場でも行って帰ってこれる。

そんな神話めいた話まで言われ出す程に。

「黄金ペア、か」

白金でもおかしく無い、

二人のフライトを見た人間なら誰しもそう思うほどの息の合いようだった。

アルエットも、これまでに目立った無茶なフライトから、安定したしかし超高速のフライトを身に付け、ロトはアルエットの背中を護ると言う理由を持って実力をつけていった。

「あ、ロト。今夜は大丈夫？」

アルエットの話し方は変わっていた。

その理由は、付き合い始めた頃のロトが

「せっかく可愛いんだからもっと女の子らしくしろ」

と言った事が原因だ。

その後、彼女はそれまでの髪型からやや長めに髪を伸ばした。

もともとが良かった事もあって彼女は美しくなっていた。

「今夜か、ま、大丈夫かな？」

ロトの言葉にアルエットは頷く。

この時の彼女は、この幸せが続く事をただ祈っていた。

数日後、二人にある任務が言い渡された。

任務の内容は、単純なテロリストの掃討。

「以上が任務の概要だ。二人とも期待しているぞ」

基地司令の言葉に二人は敬礼を以て返す。

そのまま二人は司令室を出ていく。

「明日は久しぶりの実戦か」

「そうね、必ず生きて帰りましょう」

そう言ってアルエットはハンガーへ向かう。

それに口トも続く。

彼らは実戦の前には必ず自分の機体は自分で調整する事になっていた。

もし、これから死ぬことになって後悔だけはしないように。

「フェルナンド准将。例の計画の準備は整いました」

そう基地司令 ジャン・フェルナンドに彼の副官が告げる。

「ふん、あの二人が顧客を減らしすぎたんだ。極東のことわざにもあるだろう？ 雉も鳴かずに撃たれまいと」

そう言っただけでジャンは厭らしく嘲った。

翌日、二人は自分で最後の調整をした後ヘリオンで出撃した。

目標は横流しされたヘリオンを使用するテロリストであり、敵MSは何の因果か黄色く塗られていた。

「…ロボット隊長と同じ色、か」

アルエットは静かにそう呟く。

「アルエット…」

「わかってる、それにあの色は程度の低いテロリストが使っている色じゃない」

そう言うとアルエットは機体に加速をかける。

そして、ロトもまた同じように加速する。

「アルエツト、俺が援護に回る。好きなように暴れてくれ」

「了解!!」

言うが早いかアルエツトは機体上昇機動をとらせる。

「ロバート隊長を愚弄した罪!! 購ってもらうぞ!!」

そのまま急降下しヘリオンを撃破。

テロリスト達はMS形態のヘリオンのリニアライフルで応戦するが、ライフルの弾丸はアルエツト達に掠りすらない。

そのままアルエツトは急上昇をかけ、攻撃をかわす。

テロリスト達がアルエツトを追いかけてる内にロトが接近。リニアライフルでまた一人、テロリストを葬りさる。

そのまま六機いたテロリストのMSは次々と数を減らしていった。

「大丈夫か？アルエツト」

頭では敵と理解していても尊敬していた人物の物と同じ色のMSと戦っていたアルエツトの負担を慮ったロトが彼女に声をかける。

「私は大丈夫」

そう言いながらアルエツトは基地への帰還ルートを取るうとする。

ロトもそれに続こうと、機体を基地に向けた時、それは起こった。

帰還ルートの途中、一機のティエレンがバズーカを構えていた。

このティエレンは後にA E Uに鹵獲された物であることが判明する。

しかし、そのような事はこれから起こることには一切の関係が無い。

ティエレンが構えたバズーカ、そのターゲットはアルエットのヘリオンだった。

そして、ロトはそれに気づいた。

「避ける！！アルエット！！」

ロトは通信機にそう叫ぶ。

そのままティエレンをリアライフルで撃つが、ティエレンの装甲に弾かれてしまう。

しかし、ティエレンはターゲットをアルエットからロトに変更。

ロトのヘリオンにバズーカの弾丸を放つ。

しかし、ロトもリアライフルの最後の弾丸をティエレンに放つ。

結果

ロトのヘリオンはバズーカの一撃を受けて大破、ロトは帰らぬ人と

なつた。

続いてティエレンはロトの最後の一撃が胴体、コクピットに直撃、沈黙した。

後日、ロト・ラジエストンの葬儀。

「大丈夫か、アルエット」

国境無き医師団に所属する医師であるエリック・ラジエストンがアルエットに話しかける。

「エリック…さんですか」

それに対し、アルエットはなんとか返事を返す。

「聞いたよ。ロトの最後は」

そう言つてエリックはアルエットに話す。

「…あいつはあんたを護れたんだ。きつと本望だったろうさ」

「…わかってます。わかってますよ。ロトは私が弱かったせいで死んだって事ぐらい」

そう言つてアルエットは笑みを浮かべる。

かつての明るく、生気に溢れた笑みではない、どこか狂気を感じさせる笑みを。

「そのせいで、ロトは…、ロトは、もう、守ってくれないんですから」

そう言っただけでアルエットは涙をこぼす。

エリックは、それをただ見ている事しか出来なかった。

それから数日後、アルエットはAEUからヘリオンを奪って脱走した。

行き先など無い。

後に彼女はこの時自分は死にたかったのかも知れないと述懐している。

基地からの追撃部隊は彼女の操縦技術で簡単に振り切る事ができた。

その数日後、AEUの主権領域ギリギリで乗り捨てられた飛行形態のヘリオンが発見された。

その後、彼女は幾つもの戦場でMSを奪い、敵味方関係なく攻撃し、その反撃を跳ね返し続けた。

その行動が彼女の不幸の始まりであるCBとかぶってしまったのは正に皮肉としか言いようがない。

やがて、彼女は一つの噂を耳にすることになる。

曰く、人革連では兵士を改造して強化する研究機関があると。

当時、自分の限界に突き当たっていた彼女はこの噂に飛び付いた。

そして…

数十日後、人革連超兵機関

その施設の守衛部隊は一機の黄色いリアルドに壊滅寸前まで追い詰められていた。

ティエレンが苦し紛れに放った砲撃も黄色いリアルドはあっさり回避してしまう。

そのまま黄色いリアルドのパイロット/アルエットはティエレンを掃討する。

そして、研究施設から逃げ出そうとした研究者達にリニアライフルを突きつけた。

アルエットは機体の外部スピーカーで研究者達に要求する。

「ここが、超兵機関だな」

研究者は頷く。

「要求だ。ここで施されている実験を私にも施してもらいたい」

アルエットはそう言って機体から降りる。

基地の部隊員がマシンガンを構えるが、リーダー格の研究者がそれを制する。

「折角の実験体志願者だ。急いで殺す事もないだろう」

それから更に数ヶ月後、超兵機関は脱走した被験者達の処理に追われていた。

基地を守るティエレン達が異形のMS…ティエレン四脚型に蹂躪される。

「これで、私も本物の化け物か」

投薬の影響で色素が抜け、銀色になった髪を見てアルエットはそう自嘲した。

かつて、部隊の仲間やロトが綺麗だと褒めてくれた赤い髪は既に無く、今の彼女を見てアルエット・ルーラーであるとわかる人間は殆どいないだろう。

アルエットは人間離れした反射でティエレン四脚型を操り基地のMSを破壊していく。

そのまま基地の外壁と研究施設の外壁を破壊。

被験体の子供達を解放した。

そのまま子供達を運ぶために輸送機を奪取。

中にティエレンを積み込んで、彼女は出立した。

復讐の鬼が解き放たれた瞬間だった。

「君がアルエット・ルーラーだな」

緑色の髪少年を伴ったアレハンドロ・コーナーがアルエットに話しかける。

「…国連の親善大使がこんな寂れた場所に何の用だ？」

アルエットは疑問に思いながらもいつでも逃げ出せるように、少なくとも子供達だけは逃がせるように浅く身構える。

「まあ、話を聞いてほしい」

「残念だが新聞の勧誘なら足りているぞ」

アルエットはアレハンドロの言葉に皮肉で返す。

「しかし、この情報は新聞には載ってないだろう。君の言う光のMSガンダムの事は」

光のMS、その言葉にアルエットは反応する。

その反応に満足したのかアレハンドロは続ける。

そして、アレハンドロは様々な事をアルエットに話して聞かせた。

CBの事、監視者の事、太陽炉の事、ガンダムの事、そして自分がCBを裏切るうとしてしている事を。

「私達は君に情報とMS（力）を与え、君はその技量を存分に生かせる。更に君の所の子供達の保護も行おう。断る理由は無いと思うが？」

アレハンドロの言葉に、アルエットは頷いた。

こうして、アルエットはアレハンドロに雇われる傭兵（飼い犬）となった。

終章

前方に三機のガンダムがいる。

アレハンドロの仕切りで動く三体のガンダムスローネだ。

アルエットは圧倒的なスピードで敵MSに接近。

GNアトミックミサイルを放ち長銃を持つ黒いスローネ…スローネアインを撃破した。

続いてアルエットは機体を変形させ、スローネツヴァイに急接近する。

いきなり接近されたツヴァイはろくな反撃も出来ずに撃ち抜かれて破壊される。

最後にスローネドライをビームサーベルで袈裟懸けに切り裂く。

三機のスローネを破壊した所で画面がブラックアウトする。

「どうだい、このMSは」

シミュレーターの外にいた緑色の髪の少年、リボンス・アルマークがアルエットに尋ねる。

「良い機体だな。正直これほどとは考えていなかった」

アルエットはそう言って笑う。

「ところで、このMSの名前だが、本当に私がつけても良いのか？」

アルエットはリボンスに確認を取る。

「当然、君の為に作ったMSだ。君が名前を付けて良いに決まっているじゃないか」

リボンスの言葉にアルエットは思い出す。かつて恋人と共に飛んだ空を、その時のエンブレムを。

「イカロス…、この機体の名前はイカロスだ」

アルエットはそう名付けた。

「良い名前じゃないか。期待しているよ、僕らの切り札」

そう言ってリボンスは帰路につこうとする。

「待て」

アルエットはその背中を呼び止める。

「その、僕らと言つのはお前とアレハンドロの事か？」

返事は無かった。

ただアルエットは間違いなく見た。

リボンス・アルマークの口の端が歪んだのを。

第4話 墮罪（後書き）

さて、次回はセフィロトの活躍です。お楽しみに。

ついでに一つ、

ティエレン四脚型

超兵機関が開発したMS。スピードと装甲の両立がコンセプト。

悪路の走破など、地上なら場所を選ばず活躍出来る。

武装は専用のバズーカ以外は通常のティエレンと変わらない。

第五話 墮天（前書き）

さて、やっと書き終えた第五話。

トリニティ 出沒注意。

後、出てくる作品を間違えた人達約二名出沒注意。

…そう言えば超兵の技術ってガンダムの強化人間の中では何気に一番完成度が高くないですか？

と言っか一番空気がなのが主人公でどーよ。

（まあ、間期には存分に働いてもらいますが）

第五話 墮天

バージル・リムはタクラマカンでの戦闘の資料を読んでいた。

タクラマカンでの戦闘、それは明らかに罠でありセフィロトが対応すべき事柄であることは明白だった。

実際、バージル達は動こうとしていた。

それでは何故セフィロトは動かなかったのか、その答えは結局一つに絞られる。

…ヴェーダの指示があったのだ。

即ち、今回の任務でセフィロトは動くなど。

無論、これに納得してない彼らは事実上の非戦闘員であるリナとリン、それにとある人物に対して潜入捜査を行っているベリアを残してタクラマカンの戦いに国連側の機体を使って潜入していた。

ちなみにこの時フェレシユテのフォン・スパークが潜入していたらしいが彼らとは接触する機会は無かった。

まあ、それは余談としてバージルは今、三体のガンダムスローネのデータを閲覧していた。

ヴェーダによれば彼らをサポートする必要は一切無いが、それでも情報を集めるのが超一流である。

しかし、彼女はタクラマカンでのアルヒスの戦闘データに違和感を持っていた。

いくらなんでもあの程度のMSにガンダムがあそこまで手こずるとは余りにも考えにくかったからだ。

そして、彼女は過去の不手際と対峙する事になった。

過去の己の不手際。パレスチナでの戦闘で殺し損なったパイロット。それが今のCBを追い詰めていた事を。

その瞬間、猛烈な睡魔が彼女を襲う。

あの地獄の底からベリアと共に救われた、その時彼女は恐らく生まれて初めて熟睡した。

その時の記憶の名残か彼女は重度の過眠症を患っていた。

彼女は近くのコーヒーカップに手を伸ばす。

セフィロトの管理官である彼女には他人事ではすまされない事物だからだ。

「それにしても…ヴェーダはどういうつもりだ？」

バージルは自分の手のひらにある、？二つ？の首輪を見た。

セフィロト用強襲コンテナが移動している。

目標はチームトリニティの地上における拠点。

ゼロ曰く挨拶らしい。

その後、ゼロとバージルの首輪がヴェーダの指示により外された。理由として、幾つかの事物が挙げられる。

セフィロトの存在理由。

それは本隊のサポートのみならず、ある事態に対応するためでもある。

即ち、組織内の自浄装置。

所有するガンダムであるB・R・の名の通りCBに反抗する裏切り者を抹殺する為の組織でもある。

スローネの過激な介入行動が今回のそれにあたる。

しかし、ヴェーダもバージルも今のところはセフィロトが動く必要は無いと結論していた。

今のトリニティはあくまで軍事施設のみを狙っている。

そして、民間人の犠牲者は許容範囲の内であるとバージルは結論付けていた。

チームトリニティの三人にはあらかじめセフィロトの来訪を告げて

ある。

そのためすぐにトリニティの拠点に入る事が出来た。

「お待ちしていました。セフィロトの皆さん」

懇篤な声でスローネのリーダー格であるヨハン・トリニティがセロとレイを迎え入れる。

「いえ、こちらこそ急な訪問を受け入れていただいて感謝しております」

そう言っつてレイは右手を差し出す。

その右手をヨハンは握り返す。

俗に言う握手だが、その握手に込められている感情は決して一般的な物では無い。

「さて、余計な挨拶はここまでにしとこうぜ、レイ」

そう言っつてセロはナハトマートの中から外部スピーカーを使ってレイに話しかける。

レイは一瞬だけ不愉快そうな顔になったが、ヨハンのそれもそうだと云う言葉に矛を納める。

「さて、私たちの素性については既に周知のようですのでここでは割愛させていただきます」

そうレイが切り出す。

「私たちの任務はC B本隊の露払い。隠密分野でのサポートです」

「で、それが何だっつーんだよ」

ミハエルがそう口に出す。

ちなみにネーナはヨハンの指示でスローネドライのコクピットで待機している。

万が一の時は彼女だけでも逃がすつもりらしい。

しかし、そんな事はこれからの話の内容には関係無く意味もない。

セフィロトは戦うためにチームトリニティと接触したわけではないのだ。

「まあ、我々の業務によるサポートを受ける権利はあなた方にもある、という事です」

そう言っただけレイはナハトマートに視線やる。

セロは何も言っただけ。

つまり自分は失敗してないと彼は安心する。

「あなた方の作戦行動を事前に教えていただければ我々はあなた方のサポートを行う事が可能になります。言っている意味、おわかりですよ？」

「つまり…、我々の作戦のサポートを行うために作戦情報の引き渡しを求めるという事ですか…」

ヨハンの言葉にレイは首を縦に振る。

「ええ、そういう事になります。無論、断つていただいても一向に構いませんが…」

「ああ？何で俺たちがお前らなんかの支援を受ける必要があるんだよ」

そう言つてミハエルが話に割り込んでくる。

「…ヨハン・トリニティ。このチンピラの退室を求めます」

レイは不快な態度を隠さずにそう言つ。

「それは出来ません。私たちの中でも戦闘能力が高いミハエルを外したら、万が一の事があり得るかも知れません」

暗に信用してないとレイに告げ、ヨハンは言う。

「それに、我々の今後の予定は秘匿が原則になります」

ヨハンの台詞でこの交渉が決定的になつたのをレイは感じ取つた。

「…つまり、あなたには我々のサポートを受ける気は無い、と」

レイの言葉にヨハンが首肯する。

それは、交渉の決裂を意味していた。

セフィロトの強襲用コンテナが飛び去っていく。

「良いのかよ、兄貴。オリジナル太陽炉を逃がして」

「…問題は無い。それに我々の次の任務はフェレシユテからの太陽炉奪取だ」

そう言ってヨハンは弟妹に準備をするように言う。

しぶしぶながらも二人は従った。

「結局トリニティの作戦計画は手に入れられなかったか」

「そうです。バージルさん」

そう言ってレイはバージルと話す。

「まあ良い。もともと期待していなかったからな」

バージルはあっさり切り捨てる。

「…で、我々からチームトリニティへの干渉はこれで終わりですか？」

レイはバージルに問いかける。

「ああ、あいつ等は人を殺し過ぎた。もはや世界はトリニティを許さないだろう」

バージルの予測は簡単だ。

そして、その言葉の真意も

「つまり、あれか？万一トリニティが鹵獲された場合俺たちが奴らを殺すって事か？」

セロの言葉に、バージルは無言で頷いた。

「…ついでにベリアがスローネの背後にいてと思われる人物のリストを送ってきた。レイはそちらに向かってくれ」

「俺は？」

セロが笑みを浮かべながらバージルに問いかける。

バージルはセロに笑みで返す。

「？ルシフェル？が完成した。お前はそれを受け取ってこい」

「これは…」

アレハンドロの別荘に使用人として潜り込んでいたベリアは別荘の地下にある物を発見していた。

「アルヒスをやった黄色いフラッグ…どうしてこんな所に…」

別荘の地下はドックになっており、さらにその中は正に旧世代MSの見本市といった有り様だった。

アンプからイナクトまで、多くの種類のMSが存在している。

ブラストまであったのには驚いた。

そして、それら全てが変質的なまでに黄色く塗られている。

『でもコレだけじゃ決定的な証拠には…』

そこまで考えた時だった。

ベリアの背後からカツンと大きな足音がした。

そして、それとほぼ同時に空気を切る音がする。

ベリアはそこからバックステップで飛び退いた。

すると、つい先ほどまでベリアの心臓があった場所を通り抜けて一本の軍用ナイフが地面に突き刺さる。

「どつやら、好奇心の強いメイドというわけでは無いようだな」

そう言ってナイフを投げた人物がベリアの前に姿を現す。

銀色の長い髪を持つ女性、アルエット・ルーラーが。

「えっとお、何の事ですかあ？」

とりあえずベリアは何かして誤魔化そうとしてみる。

しかし、

「とぼけるな、さっきの身のこなしは素人のラッキーパンチでは済まされない物だ」

そう言ってアルエットは二本目の軍用ナイフを取り出す。

「え、え〜とお」

ベリアはそう言いつつ後ずさる。

そして、ナイフが足元にある位置にたどり着いた時、彼女は思いきりナイフを蹴りあげる。

蹴りあげたナイフを彼女は右手でキャッチ。そして、

「そんな事、有りますよ!!!」

そう言ってベリアはアルエットに向かって駆け出す。

そして、右手に持ったナイフを勢いよく突き出す。

しかし、アルエットはその攻撃をいなす。

勢い余ってつんのめりそうになる体を強引にコントロール。

ベリアはその勢いで体を回転させアルエットに斬りかかる。

しかし、アルエットは身を屈めてそれを回避。ベリアのナイフはそのままアルエットの頭上を通過する。

そして、アルエットはナイフで下から斬りあげる。

ベリアは何かかわしたがアルエットはそのまま追撃。的確に急所を狙う。

このままでは埒が開かないと感じたベリアは直ぐ様地下のドックから脱出するべく元来た階段を探す。

そして、バックステップで階段までいく。

しかし、それを逃すアルエットではなくアルエットは手に持つナイフを投擲する。

階段を登っていたベリアはそれに気づいたがすでに遅く、ナイフはベリアの右肩に深々と突き刺さった。

『アルマークが近くにネズミが潜り込んでいると言っていたから見に来たが…』

アルエツトは思考しつつ仕留めた獲物に向かって歩き出す。

あの距離からの投擲なら間違いなくナイフは獲物に突き刺さったはずだ。

そんな物騒な事を考えながらアルエツトは獲物を捕獲すべく階段に向かう。

「っ!」

階段に向かい、捕縛すべくベリアに近づいたアルエツトはいきなり蹴り飛ばされる。

そのままアルエツトは派手に吹き飛んだ。

アルエツトを蹴り飛ばしたベリアはそのまま脱兎の如く駆け出した。

『ヤバい、今の全然手応えが無かった』

ベリアの予想通りアルエツトは蹴られる直前に後ろに跳ぶ事で威力を殺した。

現に吹っ飛ばされたアルエットはすぐに立ち上がりベリアを追撃しようとしてくる。

「何、あのターミネーター女!？」

ベリアはそう呟くとすぐに目標地点に向かう。

「リナ!!準備できてる!？」

ベリアは近くでMSに乗って待機しているリナに連絡をとる。

「はいはい」

気の抜ける様な声と共にリナはベリアに言う。

「とりあえず、海岸まで来れます?」

ベリアがそこまで聞いた時だった。

彼女の頬をナイフが掠める。

通信機が破壊されベリアは思わず向き直る。

そこには凄まじい殺気を放つアルエットがいた。

「…見つけたぞ」

アルエットはそう言ってナイフを逆手に構えベリアに迫る。

対するベリアは左手にナイフを構え、無言を貫く。

「お前には聞きたい事がある。大人しくついてくれば危害は加えな
いと保証しよう」

アルエットはそう言ってベリアに迫る。

ベリアはアルエットが一步を踏み出す度に一步ずつ後ずさる。

アルエットが一步踏み出す。

ベリアが一步後ずさる。

アルエットがまた一步踏み出す。

ベリアは更に後ずさる。

これを何度か繰り返したその瞬間、アルエットがいきなり駆け出した。

そのままベリアを捕縛すべくアルエットは接近する。

対し、ベリアはそのまま海岸まで走る。

アルエットはナイフを投げる。

ナイフはベリアの脇腹を抉り取った。

しかし、ベリアは表情を歪めただけでそのまま走り続ける。

そして、ベリアは海岸に到達。海に飛び込んだ。

「…逃げられたか」

あるいは死んだか、アルエットはそう考え、別荘に戻る。

そして、アルエットはどこかに通信をいれる。

「ああ、アルマークか。ネズミには逃げられた。それと例の情報だが…」

アルエットはそう言うと、地面に突き刺さったナイフを引き抜き付着した血液を拭き取る。

「さて、イカロスの調整にでも行くか…」

そう言ってアルエットは別荘に向かって歩き出す。

水中を一機のMSが移動する。

セフィロト所属の水陸両用MSGNS-04アツガイである。

「大丈夫ですか？ベリアさん」

リナの問いかけにベリアはただ一言大丈夫だと答える。

「結局決定的な証拠は掴めなかったわ…」

そう言ってベリアは肩を落とす。

ベリアを回収したときからリナは話し続けている。

意識を失ったらベリアは間違いなくそのまま死んでしまうからだ。

とりあえずの応急処置をしたとはいえ、彼女には余り猶予は残されていないかった。

「後ちょっとでエリックさんの所につきますから、頑張ってくださいー！」

そう言ってリナは急ぐ。

…その後、何とかベリアは一命をとりとめた。

それから数日後、ナハトマートの太陽炉はセフィロトの新たなガンダムである？ガンダムルシフェル？に換装されていた。

「ゼロ、太陽炉のマッチングはどうなっている」

バージルがゼロに問いかける。

「完璧だ！」

ゼロはそう答える。

「しかし…この機体どうやって作ったんです？」

レイはバージルに尋ねる。

レイの疑問は当然だ。

このガンダムルシフェルはCBはおろかヴェーダすら把握していない。

完全にバージルが独力で開発したガンダムである。

「何、構想自体は既に完成していた。私がB・R・を任されていた時点でな」

後は完成させる為の施設さえあれば問題無い状態だったと言う。

「いや、だから何でコリニック社の施設を使ったのかを…」

「何、研究員と多少？お話し？しただけに過ぎん」

そう言うとバージルは手元の端末を見る。

「…それに、ベリアの怪我ももう治るらしい。流石はエリックと言った所か」

そう言っつてバージルは目を閉じる。

「おい、寝るんじゃないぞ」セロがバージルに忠告するが、バージルはそのまま眠りについた。

第五話 墮天（後書き）

さて、どうでしたか？

ちなみにアルエットもベリアも技術は実戦を繰り返して向上させた物です。

ちなみにベリアが脇腹を挟られても走り続けられたのは単にベリア個人の力で別に特殊な技術を使ったわけではありません。

また、ルシフェルについてはセロの乗機と言うことになります。

それでは次回もお楽しみに！！

第六話 日常／特別（前書き）

さて、書き終えた第六話。

タイトル通りになっています。

それでは、どうぞー！！

第六話 日常／特別

「わかっていたんだらう？リンド・リンクス。貴様にはその資格が無いと言っことは」

とある宙域、バージルはOガンダムと共に一機のMSと戦闘、これを撃破した。

「…残念だよ、バージル・リム。君とは解り合えると思っていたのに」

撃破したMSのパイロットと通信していたのか、B・R・Rの通信機から声が漏れ出す。

「何、確かに私には何も無かった。貴様の言うような物はな」

「だったら…!!」

「私は、貴様が棄てた物を拾っただけに過ぎん」

そして

「…久しぶりの夢がああの時の夢とはな」

バージルは自嘲したように呟く。

ああの時の夢…つまり、バージルが仲間を殺した時の夢だ。

気づいてみればバージルの体にはタオルケットがかけていた。

「この癖は治さんとな」

そうやってバージルは起き上がる。

そして、そのまま部屋を出ていった。

…さて、今日もまた忙しい一日の始まりだ。

「それでは、定例会議を始めたいと思います」

レイの声がブリーフィングルームに響き渡る。

バージルがセフィロトを再編し、新たなメンバーとして迎え入れた彼らはお互いがお互いを補いあっている。

セロをレイが、レイをベリアが、ベリアをリンが、リンをリナが、リナをセロが、と言った具合にだ。

「さて、今回の議題は国連が投入してきた疑似太陽炉搭載型MSの件についてです」

議事進行役を務めるのは、大抵がレイかバージルだ。

「このMSは国連内部ではGN-X通称ジnkクスと呼ばれ、性能も一級品と呼んで差し支えありません」

詳しくはお手元の資料を、レイの言葉に資料を捲る音が響く。

「…なるほど、それで何か対策は？」

バージルの疑問に答えたのはゼロだった。

「B・R・ヤルシフェルを使えば問題は無いだろ？何せ、あの機体はそもそも太陽炉搭載機に対抗するための機体なんだからな」

そう言いながらゼロは資料を見る。

「そんな簡単な話でもないんですけどね…」

そう言ってレイは次の議題に移る。

「さて、ルシフェルの武装ですが、新規に作成されたGNビームセイバーが二つ、通常のビームサーベルが四つ、ビームガトリング及びビームマグナムはB・Rの物を流用。その他、新規の追加装備がいくつか有ります」

レイはゼロに説明する。

セロは追加装備の資料を見ながら、

「なるほど、俺好みの武装の見本市ってわけか」

そう言いながら武装リストを眺める。

「…まあ、そうなるでしょうね。続いて非常時の対応についてですが、『アンリ・マユ』のトランスフォームシステムの起動試験を先日行った結果いくつか不備が見られました。原因は一重に運用する人員不足であり、修正は不可能と…」

レイは会議の進行を行う。

何気無い、いつも通りの日常。

それが特別だと気づいているのは二人だけだった。

薄暗い部屋、そこで銀髪の女性がなにやら通信をしていた。

「なるほど、パーフェクトフレーム及び超高速巡行用ユニットは間に合わないか」

銀髪の女性、アルエットは通信相手にそう伝える。

何やら、すまなさそうな声が通信機から聞こえてくる。

「ああ、気にしなくて良い。今のままでイカロスは十分パーフェクトだ」

アルエットは本心からそう言う。

実際、今のままでもイカロスは十分強い。

アルエットの技量と組み合わせれば大半のパイロットは彼女の存在に気付く前に死んでいることになるだろう。

「そんなに不安か？まあ良い。開発は続けるか。わかった」

そう言いながらアルエットはこれまでのガンダムの記録を読み返す。

しかし、その中には彼女の仲間を殺したあのガンダムはいない。

リボンズ曰く、あのガンダムは番外であり、ヴェーダすら知らないと言っていた。

「ユニオンの軍人として、ガンダムと戦う事はもはや不可能か…」

出来ることならユニオンの軍人としてガンダムに復讐したかった。

しかし、それはロバートの、彼女の仲間の誇りに傷をつける行為だ。

故に彼女は決断する。

仲間の復讐のために戦うのはあの六機のガンダムまで、後は…、あのガンダムとは自分の復讐のために戦うと。

「…、苦しんで死になさい。ガンダム」

どこか狂気を孕んだ口調でアルエットは呟いた。

「さて、それでは定例会議を終了します」

レイの言葉を以て会議は終了する。

「やっと終わったか〜!!」

セロが伸びをする。

そんなセロをバージルが呼び止める。

「何だよ?」

「お前に話がある」

バージルはそう言ってセロと話し込む。

それを尻目にレイ達は部屋から出ていく。

「セロさんまたお説教ですか〜」

リナがレイに言う。

「まあ、あいつの態度はな」

レイは一切フォローステップせずに歩き続ける。

目的は医務室だ。

「入るぞ」

そうやって医務室の扉を開ける。

医務室の中では一人の女性がベッドに腰かけていた。

「おっ、レイじゃない。何、何か持ってきてくれたの？」

いきなり女性：ベリアはレイに見舞品をねだる。

「…定例会議の報告だ」

レイはそう言うつと必要事項を話す。

いつの間にかベリアも鋭い目付きになっている。

「ふん、やっぱりルシフェルはセロが乗るんだ」

そうやってベリアはベッドに倒れ込む。

「それで、母さんは何か？」

「とつとと治せだつてさ」

レイはバージルからの言伝てを言う。

「…そっか、出来ればもつと何か言ってほしかったんだけどな、まあ母さんならしょうがないか」

「まあ、バージルさんだからな。そんなのは期待するだけ無駄だと」
そう言ってレイはベリアに資料を渡す。

「まあ、俺も同じ気持ちだ。早く治してくれ」
そう言って、レイは部屋から出ていった。

いつの間にかリナは退出していた。

「…本気か？」

セロはバージルに尋ねる。

「ああ、まあ後の事を任せられるヤツもいるしな」
そう言ってバージルは微笑む。

「だけだよ…」

「セロ」

バージルは話を切り上げ、セロの名を呼ぶ。

「プランについては私が仕切る。まあ、最後の仕事だ。せいぜい目立たせてくれ」

バージルはあくまでも淡々と言う。

「…本当に考え直せないのか？」

セロはバージルに確認を取る。

「何を今さら」

バージルはただ一言、そうとだけ答えた。

硝煙が漂う、戦場となった町。

そこを一人の少女が駆け抜ける。

少女は赤子を抱いていた。

「もうすぐ、もうすぐだからね。ベリア」

少女がそう言った時、少女の近くで爆発が起こる。

幸い少女は爆発には巻き込まれなかった。

少女は震えていた足を叱咤し、とにかくこの場から離れようとする。

少女は思う。自分一人ではもう自分は生きていなかったらうと。

この子がいたからこそ、自分はこの絶望しかない戦場で生きているのだと。

そうして彼女は駆け出す。自分にとって唯一の家族を抱えながら、ただ一心不乱に走り続ける。

そんな彼女を嘲笑うかのように、殺戮の実行者であるMSが彼女に銃口を向ける。

彼女はほとんど反射的に赤子を守るべく、銃口に背中を向ける。

そのまま訪れるハズの終焉は、しかし訪れる事は無かった。

少女は恐る恐る目を開ける。

つい先ほどまで彼女に銃口を向けていたMSは完全に停止しており、ピクリとも動かなかった。

よく見るとコクピット部分に巨大な穴が開いている。

そして、少女は上を見る。

上空には、光の粒子を噴出する翼を持ったMSが存在していた。

「大丈夫かい？」

MSの外部スピーカーから声が聞こえてくる。

少女は、ほとんど上の空でその声を聞いていた。

後にその少女は彼女を助けた組織に所属し、幾つもの汚れ仕事をこなしていく事になる。

なお、組織に属した際、少女に新たな名前が与えられた。

？バージル・リム？と言う名前が。

第六話 日常／特別（後書き）

さて、最後に出てきたMSは活動報告の方に書いてある間期予告編で本格参戦してきます。

それでは次回もお楽しみに。

第七話 名を奪われし死神の希望（前書き）

やっと書き終えた第七話。

自分的に最高の出来です。

お楽しみください。

第七話 名を奪われし死神の希望

それは、余りにも唐突で。

私には未だに整理がつかない、そんな出来事でした。

だから、私はあの事を少しでも受け入れるために、このレポートを記そうと思う。

…とは言え、どこから書けば良いのか。

最初はやっぱりCBの崩壊から？

それとも、ルシフェルのテストから？

それとも、ユノと連絡がつかなくなった事とか。

まあ、そんな事は全部些細な事に過ぎない。

…まあ、ユノは良い娘だったし、私に色んな事を教えてくれた。

でも、それでも私にとっては些末な出来事に過ぎない。

まあ、確かに会える物なら会いたい。

会って相談に乗ってもらいたい。

…でも、それは当分無理だろうなと私は思う。

そう言えば、ルシフェルのテストでは、ブレードロッドが絡まって大変な事になりかけたっけ。

本当に、特別な日々を私たちは送っていた。

それが特別だと、気づいていたのはきつと母さんやセロだけだったのだろう。

だからこそ、母さんは準備が出来て、セロには覚悟が出来たのだろう。

まあ、状況を整理するためには時系列に沿って順番に書いていこう。

忘れないために、刻み込むために。

くベリア・リムのレポートより抜粋

オリジナル太陽炉のトランザムシステムが開放され、ルシフェルの性能テストも終了したところ、バージルはセフィロトに配備されていた八口をいじっていた。

『CBの崩壊は避けられんか…』

バージルは呟く。

それは同時にそのサポートを生業としているセフィロトの運営が困難になる事を示していた。

「これで完成だな」

そう言つて、バージルは八口の外装を付け直す。

その八口は通常の八口と違い稲妻模様サンダーパターンに塗装されていた。

「…悪としてのCBは、滅びの道を辿るか…」

ベリアの潜入報告から、既にアレハンドロ・コーナーとコーナー家が計画を乗っ取るうとしている事が解っている。

恐らくそこにいるのだろう。

自身の不手際の証でもある女が。

それにもう一人、あのリボンズ・アルマークがアレハンドロに協力している。

以前ならいざ知らず、今のセフィロトで彼に挑むのはバージルにとつても他のメンバーにとつても遠回しな自殺でしか無い。

ならば、セフィロトにとつての選択肢はただ一つ。

即ちCB本隊との合流。

それが今のセフィロトが生き残るのに最も適した行動だ。

幸い、トランザムとか言うシステムも開放された事だし上手く行けば表舞台に立てるかもしれない。

そこまで考えて、バージルはその考えを振り払う。

自分たちは裏から世界を変えると決めている。

ならばこそ、誰よりも強靱になる必要がある。

「それに、例の問題もあるしな……」

まあ、あの件はセロに任せる事にしたしな、彼女はそう呟く。

後は不手際を拭うだけだ。

「アルエット・ルーラー、君に頼みたい事がある」

リボンス・アルマークはアルエットに唐突に頼み事をした。

「どうしたの？ 傭兵としての依頼ならそれなりに高くつくわよ。アルマーク」

アルエットはそう言って断ろうとした。

フォーリンエンジェルスでの戦闘から、彼女はまだ完璧とは言い難い状態だった。

肉体的にではなく精神的な面だ。

彼女はあの最終決戦において、肉体的には殆ど無傷だった。

しかし、彼女はあの戦場で何一つ成す事が出来なかった。

それが彼女の精神に影を落としていた。

しかし、彼女は傭兵でもある。

その気があればいつでも戦場に出れるようにはしてある。

「なら、君を雇おう。…とはいえ、君なら間違いなくこの仕事を請け負うだろうね」

そう言っつてリボンスは口の端を歪める。

「君の仲間を奪ったガンダム。B・R・との再戦。その場をセツティングしてあげようと思っつてね。彼らの本拠地への襲撃。そして彼らが保持するオリジナル太陽炉の奪取。それが君の仕事だ」

そう言っつてリボンスはアルエットの肩を叩く。

「期待しているよ。アルエット・ルーラー」

「…これがパーフェクトフレームか」

それから数日後、アルエットはコリニック社で改造されたイカロスの予備機を受け取った。

「ええ、時間の都合上この機体しか改良できませんでしたが、後の機体は別にあなたが乗るわけではないのでしょうか？」

技術者の言葉にアルエットは頷く。

「なら安心だ。この機体は凶悪でね。君以外には多分使いこなせないだろう」

そう言っつて技術者は笑う。

「まあ、我々はデータさえ取れば別にパイロットがどうなるうが一向に構いませんが」

「…冗談にしても笑えないぞ」

アルエットは技術者が冗談を言っているようには思えなかった。

セフィロトの本拠地である施設。

普段は小惑星に偽装しているこの施設に警報が鳴り響いた。

「何があった」

「接近してくるMSが三機！！凄まじいスピードです！！」

オペレーターを兼ねているリンがバージルの質問にそう答える。

「レイ、セロ、ベリアはそれぞれの機体で出撃。ルシフェルにはGNブレードロッドを持たせる。リナとリンは？アンリ・マユ？の操舵と砲撃を担当してくれ」

バージルはセフィロトのマイスターに指示を出す。

「セロから通信です」

「俺はいつでも行けるぜ」

ゼロは既にルシフェルのコクピット内にいた。

やや遅れてレイとベリアからも通信が入る。

「自分のザクは大丈夫です」

「私のジムもね！」

三人の声を聞いてから、バージルは号令をかける。

「スクランブル！！敵は三機、強敵だ。腕の見せ所だぞ！！」

その言葉を聞いた直後、三機のMSは戦場に飛んでいった。

時間は少々遡る。

セフィロトの本拠地に迫る三機のイカロス。

その内の二機は通常の装備を、そして最後の二機は他の機体と違い、両腕がそのまま武装に組み込まれている。

「聞こえるな、二人とも」

腕が武装になっているイカロス、イカロスパーフェクトフレームのパイロットであるアルエツトは僚機に通信を入れる。

通信が入った二機のイカロスのパイロットはすぐに返事をする。

「それではコールサインの確認だ。私がゴースト1。二番機、三番機はそれぞれゴースト2、3。作戦内容は確認した通り、イカロス三機による強襲。ガンダムの相手は私がする」

「了解です」

「わかってますよ」

僚機のパイロット…二人のイノベイドはそう答える。

「超高速巡航用ユニットに火が入る前に確認しておこうと思ったが、必要無かったようだな」

それでは、とアルエットが前置きする。

「状況を開始する」

アルエットの声と同時に、三人に凄まじいGがかかる。

そのまま三機のイカロスは敵陣に突入した。

超高速巡航用ユニットをパーシした三機のイカロスを出迎えたのは強力な粒子ビームだった。

三機のイカロスは散開してこれを回避、そのまま射点にいるMSガンダムルシフェルと、ザク、ジムの三機に向き合う。

「二人とも、作戦通りに行動しろ」

そう言ってアルエットはイカロスPFのGNツインバスターユニット

トから超高出力GNバスターサーベルを展開、GNブレードロッドを構えるルシフェルに攻撃を仕掛けた。

「ハッ、良い度胸じゃねえか！」

ルシフェルのパイロット、ゼロ・バージュはイカロスPFのバスターサーベルにGNブレードロッドで真っ向勝負を挑んだ。

両刃の長剣であるブレードロッドは刃にGNフィールドを纏わせる使い方ができる。

つまりエクシアのGNソード同様二つの斬撃が可能なのだ。

そのまま二機は鏝ぜり合う。

イカロスPFが出力に任せてルシフェルを弾き飛ばし追撃をかけようとするが、吹き飛ばされた勢いを利用してルシフェルはそのまま距離を取る。

そして、左手の盾に装備してあるGNビームガトリングでイカロスPFを牽制する。

ビームの奔流にイカロスは飛行形態に変形、そのまま加速する。

戦域ギリギリまで離れた後、凄まじいスピードでルシフェルに接近する。

「ヤル気か!!！」

そのままイカロスPFはルシフェルに接近、バスターサーベルで切り裂こうとする。

「もらった!!」

「殺らせるかよ!!」

しかし、ルシフェルは機体に取り付けられたスラスタを上手く使い攻撃を回避、そのままブレードロッドで斬りかかる。

「その程度なら!!」

しかし、イカロスPFはGNフィールドを使用、攻撃を一瞬だけ止める。

その隙についてイカロスPFはルシフェルを蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたルシフェルはそのまま吹っ飛んでいった。

レイのザクとベリアのジムは背中合わせで戦っていた。

「そんな旧世代機に毛が生えたような機体で!!」

二機のイカロスに翻弄されつつ二人はマシンガンで牽制、致命傷を避けていた。

いかに強力なMSと云えど、パイロットが伴わなければ鉄屑と変わらない。

二人がまだ生きているのはそれによる部分が大きかった。

二人のイノベイドはこの機体を完全に使いこなせていない。

それがレイとベリアにとっての救いだった。

「ほらほらほら〜!!」

「っ何よ、こいつ等!!」

ベリアがジムの右手のマシンガンで迎撃する。

その攻撃を掠りながらも回避したイカロスはそのまま高出力ビームサーベルでジムに斬りかかる。しかし、その隙をザクがマシンガンの掃射で牽制する。

マシンガンの直撃を受けたイカロスは下がる。

もう一機のイカロスが攻撃をビームマグナムで攻撃を試みるも、ザクとジムはギリギリで回避してしまう。

「私は施設の攻撃に向かうわ」

相方の唐突な台詞にゴースト2 リード・リカオンは賛同する。

「そうだね、こいつ等は僕一人で充分だし」

そう言ってセフィロトの本拠地に向かっていく一機のイカロス。

「レイ……！」

「解ってる……！」

それを追いかけてようとするザクとジムにイカロスがビームマグナムで射撃する。

「行かせると思っかい？」

セフィロトの施設に近づいたイカロス。

セフィロトの施設は普段は小惑星に偽装してある。

その施設にビームマグナムを放つイカロス。

そのまま発射もビームを叩き込む。

「これだけやれば……」

いくら何でも壊れただろう、彼女はそう考えていた。

やや遅れてザクとジム、そしてリードのイカロスが移動してくる。

「まさか、わざわざ殺されに来るとはね……！」

そう言って二人に向き直るイカロス。

「…レイ」

「何だ？」

「今までわがままばかりでゴメン」

「…生き残ってから続きは聞く」

そう言ったレイは機体を二機のイカロスに向ける。

そのままイカロスは機体の出力に任せて突っ込んでくる。

いかに、パイロットの差が有ろうとも、機体の性能差は簡単には埋まらない。

…ここまでか。

二人の心を絶望が満たす。

その時、ザクとジムに通信が入った。

『二人とも、その場で回避運動を取れ』

レイとベリアはほとんど反射的に回避運動を取った。

次の瞬間、圧倒的な粒子量を持つビームが二人がつい先ほどまでいた位置を通りすぎ、そのまま一機のイカロスの胴体に直撃した。

急所に攻撃を受けたイカロスはその場で爆散する。

そのままイカロスの粒子が宙域に広がる。

「リードー!!」

思わず動きを止めるもう一機のイカロス。

だが、そのイカロスに通信が入る。

「高機動MSが動きを止めて良いのか？」

「しまっ」

次の瞬間、GN粒子を煙幕代わりにして近づいてきたB・R・のビームトンファアによって、イカロスのコクピットは綺麗に抉り取られた。

時間は少々遡る。

「…私はB・R・に行きます」

リナが砲撃をバールに任せてMSデッキに行こうとする。

リナもマイスターであり、如何に兄の約束があるとしても、この窮地でじっとしてられる様な人柄では無かった。

「…」

席を立つたりナの前に、バージルが立ち塞がる。

「…どいてください。バージルさん」

バージルは何も言わずにリナの腹に拳を叩き込む。

当たり所が良かったのか、リナは一撃で気絶する。

「リン、リナを頼む。まずはあの二機のMSが排除されたらそのまま偽装を解除。MSを回収して全速で戦域を離脱しろ」

そう言っつてバージルは司令室 もはや、艦橋と呼ぶべき部屋から出ていく。

「バージルさん!!どこに行くつもりですか!!」

リンの疑問にバージルは簡潔に答える。

「私のガンダムの所に、だ」

「二人とも、疑似太陽炉のマッチングを手伝ってくれ」

バージルの声に我に帰るベリアとレイ。

「母…さん」

「どうした?ベリア」

そのままイカロスの疑似太陽炉をB・R・に移植すべくバージルは機体を操る。

レイは何も言わずに黙々と作業を行った。

少し時間が経ち、

「GNドライブ「T」マッチングクリア。何時でも行けます」

レイの言葉にバージルは感謝の意を伝える。

そして、イカロスの残骸を示し、

「これは回収しておけ。何かの役に立つだろう」

そう言っつて二人に指示を出す。

見れば、小惑星の外壁が剥がれ、一隻の戦艦…アンリ・マユが現れる。

「お前等はこれを回収してそのままアンリ・マユに帰投。セロが戻ってきたらそのまま離脱しろ」

「母さんは？」

ベリアの質問にバージルは簡単に答える。

「不手際を拭いに行く」

そのままB・R・は次の戦域…アルエットとルシフェルの戦場に飛

び立った。

吹き飛ばされたルシフェルは、そのままGNブレードロッドの連結を解除した。

GNブレードロッドの連結が解除されたその姿、それは

「連結刃、だと!!」

そのまま連結刃を振るうルシフェル。アルエットはその不規則な動きに圧倒されそうになる。

「だが!!」

そのままアルエットは強引に機体を制御、そのまま連結刃の射程から離れる。

しかし、そのまま再びブレードロッドを連結させたルシフェルが接近、バスターサーベルと再びの鏝迫り合いになる。

「ヒィっハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハあ!!」

笑い声をあげながら、セロはイカロスPFに斬りかかる。

イカロスはバスターサーベルでそれをいなす。

『ふざけるな』

アルエットの思考に言葉が浮かぶ。

『ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな!!』

あの、仲間を奪ったガンダムを討つために、彼女は今まで戦ってきた。

彼女にとってそれまでの戦いは前座であり、やっと、やっと本番に出れる。仲間の仇を討てる、その為にここに来た。

「こんな…前座で…」

次の瞬間、アルエットの瞳に強い光が宿る。

「負けっ、られるかあああああああああ!!」

そのままアルエットは機体の出力をフルに使い、ルシフェルを吹っ飛ばそうとするが、そうしてくると読んでいたセロには通用せず、逆に勢いを利用され蹴り飛ばされてしまう。

そのままルシフェルのビームガトリングをGNフィールドで受け、そのまま耐える。

耐えながら、ビームバスターをルシフェルに向け

「つらっ抜けええええええ!!」

ルシフェルはビームバスターを回避しようとするが、間に合わない。

勝った!!

アルエットの思考はこの一言に支配されていた。

目の前に光の奔流が見える。

そのまま目を閉じてしまえば楽になれるのだろう。

『まったく、俺ってば真性のマゾなんじゃねえの？』

しかし、セロは楽になる道を選ばず、ルシフェルに盾を構えさせる。

そのまま盾からGNフィールドを発生させ、ビームバスターを防ぐ。防ぎながら、光を受け流し、そのまま機体を光から離す。

「やってくれたじゃねえの」

そのままイカロスPFにガトリングの銃口を向けるルシフェル。

だが、その直前に通信が入る。

「セロ、お前はアンリ・マユに戻れ」

「…解ったよ」

そのままセロはアンリ・マユに帰投する。

ついさっきまで戦っていたガンダムが退いていく。

しかし、アルエットはそれを追おうとはしなかった。

?ソレ?を視認した途端、アルエットの背筋に電撃が走る。

思い出すのは、あの時、圧倒的な力をもってして自分たちを撃破したあのMS、ガンダムB・R。

それが、彼女の前に立ち塞がっていた。

『こいつを…、こいつを殺れば…』

復讐を終わらせる事ができる。

アルエットがそう思考した時だった。

B・Rから通信が入ったのは。

「貴様が、アルエット・ルーラーとか言う奴は」

突然の通信に戸惑いながらもアルエットは通信に返答する。

「そうよ、私がアルエット・ルーラー」

そう言うあなたは？アルエットは逆に聞き返す。

「私の名前はバージル・リム、だ。コードネームだが本名は忘れてしまった」

そう言ってB・Rはビームトンファアを構える。

「私の唯一の不手際と話しておきたかったんだが、その必要は無かったようだな」

アルエットは冷静を装うとして一つ、気になる事があった。

「不手際？」

「ああ、私と貴様は一度会っている。六年前のパレスチナで、あの時貴様はリアルドに乗っていたな」

その瞬間、アルエットの頭の中で何かが弾けた。

「まさか…、お前が…」

アルエットはイカロスPFにバスターサーベルを構えさせる。

「ロバート・ウォーカーとか言ったか？あの黄色いリアルドのパイロットは。まあ、結局ザコだったわけだが」

次の瞬間、イカロスPFは飛び出していた。

目の前の敵を殺す、ただそれだけのために、一切の躊躇いなく。

「貴様が…、貴様のせいだ！！隊長達は、皆はっ！！」

「はっ、笑わせる。それは貴様等が弱かったと言っただけの事だ！！」

対し、ビームトンプアーを構えたB・R・GがイカロスPFの攻撃をかわす。

今、ここに殺戮者と復讐者の決戦が始まった。

『…強い…！』

アルエットの思考に浮かんだのはそれだけだった。

初めて会ったときの死神や、これまでに葬ってきた奴らとは根本的に異なる。

それは、まるで

『本物の、死神？』

そんなわけが無いと頭では解っていても、疑念を拭う事は出来ない。

「どうした？動きが鈍いぞ？」

通信で聞こえてくるバージルの声。

その声にハツとした時には既にB・R・はビームトンファアの間合いに入っていた。

すぐにGNフィールドを起動して攻撃を防ぐ。

「この程度なら！」

アルエットが吼える。

そのままビームバスターでB・R・を撃つ。

しかし、当然のようにビームバスターの射撃は避けられる。

しかし、そもそも当たるとは考えていなかったアルエットはそのまま強引に接近。

バスターサーベルで斬り込む。

「腕の一本くらいくれてやる!!」

B・Rは左腕を犠牲にしてイカロスPFに強引に接触。

そのままイカロスの腕を切り裂く。

お互いに左腕を失い、一端離れる。

「すぐに仲間の所に送ってやる」

「冗談!!」

そのままアルエットは破壊された左腕を見る。

『バスターユニットはまだ生きている…これなら!!』

「フィンファング!!」

次の瞬間、左腕から四機のファングがB・R目掛けて飛んでいく。

「こんなもの!!」

B・Rはビームガトリングでファングを迎撃する。

迎撃されたファングはその場で爆発する。

その隙にアルエットは接近する。

「もらっ、たあああああ!!」

そのままコクピットにバスターサーベルを降り下ろす。

しかし、B・Rは機体を大きく反らせて回避、そのままイカロスを蹴り飛ばす。

「貴様の憎しみ、この私が持っていく!!」

ガトリングを捨て、ビームトンファアを展開。

イカロスPFに斬りかかる。

「させるか!!」

イカロスPFはデッドウェイトにしかならないファンングを切り離し、バスターサーベルで接近戦を挑む。

それから、凄まじい勢いで斬り合うイカロスとB・R。

その様はまるで戦う為に生み出された修羅の様にも見える。

イカロスは頭と右足を、B・Rは左足を失う。

「最後の決着といこうか」

コクピット内が破損して、頭から血を流しているバージルが宣言する。

「……………」

何も言わずに、アルエットがイカロスにバスターサーベルを構えさせる。

そのまま二機はお互いに向かい合い、それぞれの武器を構え、そして

イカロスの右腕が斬り飛ばされ、宙を舞う。

そのままイカロスは力を失ったように動きを止める。

それから数瞬経った時、B・R・が小規模な爆発を起こす。

「私の、敗け、か……」

バージルはコクピットの中でそう呟く。

回線が繋がったままのイカロスのコクピット内にバージルの呟きが漏れ聞こえる。

「ふざけ……るな」

アルエットは呟く。呟きはやがて叫びになる。

「ふざけるな！！最後の一撃、何故私に譲った！！」

常人のソレを遥かに越えるアルエットの知覚は、バージルが最後の一撃を自分に譲った事を、確かに捉えていた。

「…言っただろう、貴様の憎しみを持っていく、と」

バージルは静かに言う。

「ふざけるな！！貴様は…貴様は私から復讐すらも奪つのか…！」

「そう言っている」

バージルはあっさりと断言する。

「貴様が復讐に現を抜かしている間、私は一つ学んだことがある」

バージルは静かに語る。

「何だと思う？」

バージルの問いに、アルエットは答える事が出来ない。

「希望、だよ。このどうしようも無い世界を照らす、希望。それを

私は手に入れた」

そう言っつてバージルは笑う。

「そして、私は希望を手にするには血で汚れ過ぎている。なら、私より少しでもきれいな人間の道を拓くのは、合理的だろう」

バージルの言葉が、どんな攻撃よりも鋭くアルエットに突き刺さる。

「だから…私に、譲った？」

「解っているじゃないか」

そう言うと、一際大きい爆発が起こる。

「お前はもう憎しみを捨てる。それがお前の復讐の…報酬だ」

そのままバージルは静かに目を閉じる。

「行け、復讐者よ。いや、もはや何者でも無い女、か」

そのままイカロスもB・R・も流されていく。

復讐は終わった。

アルエットはただそれだけを最後に意識を失った。

「母さん、母さん!!」

B・R・のコクピットにアンリ・マユからの通信が入る。

「…どうした、ベリア」

バージルは娘の呼びかけにそうとだけ答える。

「良かった、今から迎えに…」

「その必要は無い」

そう言ってバージルは笑う。

「どちらにせよ、私はここで終わりだ。セフィロトは今後、セロの指揮下でソレスタルビーイングとの合流を目指せ。ああ、その前に……」

「バージル」

通信にセロが割り込む。

「あんだ、最初からこのつもりだったのか？」

セロの言葉に全員がセロを見る。

「どうだか。ただ、私は不手際を拭う事ができた。そして、あの女から復讐を奪っただけの事だ」

そうやってバージルはベリアを見る。

「すまない、ベリア。結局何も母親らしい事は出来なかったな」

「そんな…、そんなこと!!」

次の瞬間、B・Rが小規模な爆発を起こす。

「…終わりか。セロ、レイ、リナ、リン。セフィロトを…ベリアを頼む」

そう言ったのを最後に通信が切れる。

「母さん!!」

そこに、ベリアの叫びを残して。

「ミッションは全てコンプリート、不手際は拭い去り、希望は未来に繋いだ」

完璧だ、バージルはそう思考する。

「後は、？案内人？として最後の役目を果たすだけだ」

そう言っつてB・R・の頭部を機体から切り離す。

…これでいい。

バージルは自分が睡魔に襲われるのを自覚した。

一つ、苦笑する。

「もう、眠っても良いか？」

そして、バージルは永遠の眠りに落ちる。

次の瞬間、主の死を悼むかのように、B・R・は爆発した。

「これくらいかな」

ベリアはそう言っつてレポートファイルを閉じる。

すると、メールが入っていることに気づく。

「B・R・の再現が終了した、か」

あの後、鹵獲したイカロスのパーツとB・R・の予備パーツを使い、B・R・は再生した。

しかし、それに乗るべき人間は、もはや存在しない。

いや、乗るべき人間は私になる。

ベリアはそう誓う。

あの後、セロは復讐するなら力を貸すとベリアに言った。

しかし、ベリアはそれを断った。

母さんは命を懸けて憎しみの連鎖を絶ちきった。

それを娘の自分が再燃させるわけにはいかない。

ベリアの決意にセロはただ一言、そうか、とだけ言った。

そのままベリアはアンリ・マユのドックに向かう。

決意を胸に秘めて。

「お久しぶりです。ヘレン少将」

あの戦いの後、しばらくアルエットは虚脱感を振り払えずにいた。

そんな彼女に連絡を取ってきた人物　ヘレン・ウォーカーがそこにはいた。

「今日はオフなんだから、少将は付けなくて良いわよ」

ヘレンは苦笑しながらそう言うと、アルエットを連れて少し歩く。

やがて、アルエットが口を開く。

「隊長を殺したガンダムを、討ちました」

その言葉にヘレンは足を止める。

「そう…」

ヘレンはそれだけを言う。

「お礼を言っておくわ。あの人を殺したガンダムに、何も思う所が無かったわけでも無いしね」
「そう言ってヘレンは歩く。」

アルエットもそれに着いていく。

ヘレンは以前会ったときとはアルエットの雰囲気が変わることに気づいた。

以前はもっと暗い、そんな雰囲気だったのが、今では…そう、まるで迷子の子供の感じられた。

「そのガンダムのパイロットが言ってました。憎しみを捨てると、

それが復讐の報酬だと」

アルエツトは語る。

「…それで、貴女はどうするの?」

ヘレンは静かに問いかける。

「…え?」

その反応にヘレンは苦笑する。そして思う。

彼女は復讐した後の事を考えずに戦っていた。

それほどまでに仲間の事を大切にしていたのだと。

「…わかりません。ただ、そのガンダムのパイロットは私に希望を
掴め、て言っていました」

「ならそれで良いんじゃない?」

そう言ってヘレンは笑う。

「貴女は充分苦しんで、充分傷ついた。なら、希望?を掴む資格は
充分有ると思うわ」

そう言ってヘレンは一枚の写真を渡す。

「これって…」

その写真はアール小隊の集合写真だった。

「私が持っていてもしようがないから」

ヘレンはそう言う。

アルエットは写真を見る。

その後、少し歩いて二人は別れた。

それからアルエットの携帯に電話が入る。

「アルマークか」

「リボンスで良い」

そう言ってリボンスが話を切り出す。

「君はこれからどうする積もりなのかな」

リボンスの言葉にアルエットは一つ、言う。

「リボンス。お前に雇われようと思う」

アルエットの言葉にリボンスは驚いた表情を見せる。

「理由を聞いておこうか」

「簡単だ。私も希望とやらを信じてみたくなったのさ」

だからこそ、アルエットはそう続ける。

「私たちに潰されるような希望なら、貴様に人類を支配させた方がマシだ。そう思わないか？リボンズ」

「…アルエット・ルーラー。君を歓迎しよう」

リボンズは追って指示するとだけ言って通信を切った。

「希望、か」

アルエットは呟く。

「掴んでみせるさ」

それが、あのバージルと言うパイロットへの詫びだと、アルエットはそう考えた。

そして 彼女は新たな未来へ歩み出した。

生命の樹は、案内人の死を悼み、

復讐者は新たな未来へ歩み出し、

彼らは再び相見えるか。

そして、希望を掴めるか、

それを知る人間は、今はいない。

第七話 名を奪われし死神の希望（後書き）

間期第一話 サンクチュアリ襲撃戦（前書き）

間期の一話です。お楽しみください。

間期第一話 サンクチュアリ襲撃戦

「案内人、及び名を奪われし死神の消滅を確認。計画はいつでも実行できます」

バージルが死を迎えた宙域、そこに彼女の死を見ていた存在があった。

「そうか、それでは計画をより完璧な物にするための準備を行ってくれ」

「…それで良いのですか？」

「疑問を持つことを教えた覚えは無い」

どこか歪んだやり取りをする二人はそのまま黙る。

「あの案内人には実に苦杯を舐めさせられた。だが、これで計画は実行できる」

そして、彼は彼女に命じる。

「ファーストフェイズ、最高位天使の奪取。それを行ってくれ」

「了解」

人里を離れた砂漠。

コリニック社特殊新技術開発施設？サンクチュアリ？

この施設はそんな場所に建てられていた。

「カレンちゃん、どうかしたの？」

この施設の職員の一入であるベリア・スーさんが尋ねてくる。

「あ、何でも無いです。ただ、おつきい施設だなくって」

カレンの感想通り、その施設は巨大だった。規模だけなら軍事要塞にも匹敵してしまいそうだ。

「そうね、まあ私も始めて来たときそう思ったわ」

少なくとも一般企業にはこんな施設は必要無いんじゃないか、カレンにはそう思えてならなかった。

「まあ、あの雌狐の実家だしね…」

カレンはそう思いつつ、施設を見て廻る。今回、彼女はコリニック社の最新鋭施設に触れ、技術の向上を図るためにこの施設での研修を受ける事になった。

「お兄ちゃんは行方不明だし、ケビンもいきなり学校辞めてどっか行っちゃうし、私がしっかりしなきゃ」

カレンはそう思考しつつ、ベリアの説明を聞く。

「この施設は太陽炉の性能向上やMS、MAの開発、生産が行われているわ」

ベリアはそう言って近くの工場に入っていく。

カレンはあわててベリアについていく。

「この施設はMSの試作を行っている」

そう言って施設内部のMSを示す。

ベリアが示したMSは上半身は普通のMSだ。

最近、開発されていると言うアヘッドとか言うMSのようなボディにバイザー付きのジnkスの頭部がくっついている。

その背中には、巨大な翼のようなパーツ（アルヴァアロン砲と言うらしい）がついており、やたらと銃身が長いライフルを両手に持っている。

しかし、最も目を引くのはその下半身だろう。

このMSの下半身は四脚型なのだ。

「ああ、そのMSはこのトップの道楽よ」

そう言ってベリアは説明する。

「正式な型番はまだついて無いけど、名前は確か…」

「カンダタだよ、MS・ベリア」

二人の背後から声がした。

「翁じゃないですか」

ベリアの言葉にカレンは不思議そうな顔になる。

「ああ、この人がこのトップ」

ベリアの紹介を聞いて思わず居住まいを正すカレン。

「はっはっは、何、楽にして良い」

そう言っつて翁は右手を差し出す。

「私がこの施設の所長を務めている。シャオ・ヴォーダンと言っつ。

皆には翁と呼ばれているがね」

また会うこともあるだろう、そう言っつて翁は帰っつて行っつた。

「…ふう、驚いたわね」

そう言っつてベリアは他の施設を廻るようカレンに促す。

カレンはやや戸惑いながらもベリアの指示に従い施設を見て廻っつた。

「準備は出来ているか？ケビン・ウォーカー」

ティエレンのコクピットに通信が入る。

通信相手 ティエレンのパイロットであるケビン・ウォーカーは固い表情で答える。

「はい、大丈夫です。イヴェットさんはどうなんですか？」

ケビンの返答に、通信相手である女性、イヴェット・テレーズはこうとだけ答える。

「お前のようなひよっこと一緒にしてもらっては困る」

そう言ってイヴェットは自分のイナクトの最終調整を終える。

「まあ、どちらにしろ？協力者？の存在が無ければこの作戦は成功しない」

「？協力者？ですか。…信用出来るんですか？」

「それを決めるのは我々では無い」

そう言ってイヴェットはコクピットから出る。

「お前も調整が終わったら寝ておけ。明日は実戦だ」

そう言ってイヴェットはテントに向かって歩いていく。

ケビンは自分のティエレンの調整を行っていた。

「ちと」

ケビンはティエレンの整備を終えそのままテントに向かう。

作戦の決行まで、力を蓄えるべくケビンはそのままテントに向かう。

「これがジンクスa+。通称プラスジンクスよ」

翌日、カレンは一機のMSの紹介をされた。

「あなたはこのMSの副操縦席でこの機体のデータを取ることが研修の課題になるわ」

そう言っただけでベリアはプラスジンクスを見上げる。

「あゝ、副操縦席と言うことはメインのパイロットは……」

カレンがベリアに尋ねたその時、

「それは私です」

彼女の背後から少女の声が聞こえてきた。

カレンが振り向くと、そこには一人の少女がいた。

「紹介するわ。この娘がプラスジンクスのメインパイロットのカトレアちゃんよ」

「カトレア・ヴォーダンは。今回、貴方とプラスジンクスのテストを行う事になりました。よろしくお願いします」

「こゝ、こちらこそよろしく」

カレンはカトリアを見て、どことなく儚そうなイメージを持った。

「それじゃ、早速機材の説明を始めるわよ」

「あの、基本的な事はすでに教えてもらっていますが…」

カレンの言葉にベリアが固まる。

「そ、それじゃ、コクピットに乗って、早速テストを始めるわよ」

その時だった、サンクチュアリの外壁が破壊されたのは。

イスラエル南部　ネゲヴ砂漠　旧セフィロトMS開発施設

「リン、八口のデータは本当にこの座標を示しているんだな」

そこに現れた一機のガンダム　ガンダムルシフェル　は施設　もはや廃墟と言える　を見下ろす。

「そのハズです。バージルさんが残したデータが確かならこの施設は地下に伸びているハズです」

リンの言葉にルシフェルのマイスターであるセロは施設の隠された入り口を見つける。

ルシフェルはアルエットとの決戦の時とは異なり、大剣を装備している。

ルシフェルは大剣　GNバスターブレードをバスターモードにして施設の入り口を破壊、そのまま施設の下層に降りていく。

「でも、ガンダムジャオエルでしたっけ？そんなMS本当にあるん

でしょうか」

リンと同じくオペレーターをやっているリナが率直な感想を述べる。

「さあな。ただ、バージルは無駄な事をする様な人間だったか？」

ゼロの言葉に二人は黙りこむ。

バージルは無駄な事を一切しなかった。

「つまり…、あんなバケモノが実在すると？」

「さあな」

ゼロはそう言って地下に進む。

やがて、広いフロアに出る…ガンダムが飛び回れる様な。

その中央には無数の羽のような機械に包まれた一機のMSが存在していた。

「これが…ガンダムジャオエル」

ルシフェルを通して映像を見ていたリンとリナはジャオエルの持つ余りの迫力に圧倒されていた。

ゼロは何も言わず、ジャオエルにバスターモードのGNバスターブレードを向ける。

「とりあえず、この機体を破壊する。リナ、リン。サポートをたの

…」

次の瞬間、施設が凄まじい振動に襲われる。

更に通信が繋がらなくなる。

そして、突如としてジャオエルが動き出す。

「おい！聞いて無いぞ！！」

ジャオエルはそのまま施設の天井を突き破る。

ルシフェルもその後を追いかける。

地上に出たら、リンとリナとの通信が回復した。

「何でジャオエルが動いてるの！！」

「知るか！！」

羽のユニットは重かったのかそのまま地上に捨てる。

そして、ジャオエルは再び舞い上がる。

「逃がすか！！」

ジャオエルを追ってルシフェルが飛び立つ。

そこに粒子ビームが撃ち込まれる。

ジャオエルはバスターブレードを盾に攻撃を防ぐ。

そして、ビームの発射点を見据える。

そこにはジンクスが三機、こちらに銃を向けていた。

再びジンクスは粒子ビームを撃ち込む。

ルシフェルは今度はそれを回避、接近戦に持ち込む。

「ヒハッ、覚悟しやがれ!!」

ゼロの声と共にバスターブレードが降り下ろされる。

三機のジンクスは大振りなその斬撃を容易くかわす。

と、かわした瞬間三機のジンクスがコクピット部分から真っ二つになる。

「何だっただよ、ったく!!」

三機のジンクスを葬ったゼロはアンリ・マユに通信を入れる。

「イレギュラー発生！出来る限り早急に対処が必要！」

「サンクチュアリ 聖域、か」

確かに聖域だと、B・R・のコクピットの中から地上を見てレイは思う。

「さしずめ、俺たちは聖域を犯す悪魔の群れ、と言った所か」

そう言いながらレイはビームマグナムで砲台を破壊する。

砲台を全て破壊したと同時に、施設の外壁が破壊される。

彼が協力している反政府勢力が攻撃を開始したのだ。

「さて、あいつ等が暴れている内に…」

次の瞬間、B・R・を粒子ビームが掠める。

見ればそこにはジnkスのバリエーションと思われるMSが銃口を向けている。

「…なるほど、楽しめそうだ」

そうやってレイはB・R・にビームトンファアを起動させ、ジnkスのバリエーション機…プラスジnk스에攻撃をしかける。

「うわ、向かってきた!!」

プラスジnkスの後部座席でカレンは思わず叫んだ。

「ちょうど良いです」

「何が!?!」

「単調なテストには飽き飽きしていた所です」

そう言ってカトレアはプラスジnkスの両手にGNランスを構えさせる。

「…行きます!!」

「さて、太陽炉搭載機はどこだ？」

「イヴェットさん!!こっちです」

ケビン達の勢力は疑似太陽炉搭載機を奪取すべくサンクチュアリ内部を探索していた。

「とつとつ機体を奪って逃げましょう!!」

ケビンの提案にイヴェットは首肯しつつ、道を探す。

サンクチュアリ内部、司令塔

「テロリストは今どうしてる!!」

「現在テロリスト達は…」

「最寄りの連邦基地から救援が来るそうです!!」

オペレーターの一人の言葉にホッとする司令塔。

「…民間の施設を襲うとは、卑怯者どもが」

「シユバルツ隊長、相手はガンダムタイプらしいです」

「ふん、今さらガンダム一機で何が出来る」

そう言って白く塗装されたジnkスの小隊がサンクチュアリに向かう。

「ミッション開始！テロリストを排除する。総員、油断するなよ！」

「……………了解！」

役者は揃った。さあ、茶番を始めよう。

間期第一話 サンクチュアリ襲撃戦（後書き）

見えない斬撃

ゼロがルシフェルで行った技。

その正体はGNバスターブレードの柄から伸びる超硬度ワイヤー。

それにGN粒子を纏わせる事で硬度を増し切断力を持たせる。

当然、扱うには優れた技術が必要。

ルシフェルの特徴は独創的な武器が多いことです。

間期第二話 乱戦（前書き）

警告 ぶっ壊れ注意報。

間期第二話 乱戦

セフィロト所属艦アンリ・マユ。

この艦はセフィロト用の隠密艦として、通常の戦艦よりも性能が高い。

水中航行、大気圏離脱は当たり前、戦艦としても十分一流の性能を持つ。

現在は砂漠で光学迷彩によって隠れている。

そんな戦艦の中、セロはカタパルトにルシフェルを接続していた。

先ほどジャオエルを取り逃がした代わりに、と言っては何だがセロはレイの援軍に行こうとしていた。

「セロさん、解っているとは思いますが…」

リナの言葉にブレードロッドを装備したルシフェルのコクピットからセロが返事をする。

「解っている、目標は例のアレだろ？」

「セロさん!!!いつでも出れます!!!」

割り込んできたリンの声にセロは返す。

「了解!ルシフェル、出撃する!!!」

「これがジンクス……」

ケビンはジンクスの格納庫にティエレンで到達していた。

そして、ケビンはジンクス2に乗り込む。

「さてと」

ケビンは味方の識別信号を出す。

「ケビン・ウォーカー、ジンクス。行きます！」

ケビンが武器を奪い格納庫から出ると、味方の識別信号を出しているジンクスが何機か出撃していた。

そんな中、やたらと鋭角的なデザインを持つジンクスがいた。

「どうした？ケビン」

鋭角的なデザインのジンクス ジンクス高機動特化試作型を奪ったイヴェットからケビンのジンクスに通信が入る。

「何で解ったんですか？イヴェットさん」

ケビンの疑問にイヴェットは答える。

「動きを見ればわかる」

イヴェットはそう言うのと離脱するべく行動を開始する。

ケビン達も彼女に続いて離脱した。

B・R・のビームトンファーとプラスジnkスのGNランスが鏝せりあう。

二本の槍を振り回すプラスジnkスに対し、B・R・は回避に徹する。

「逃げてばかりですか…、押し込めますかね」

「逃げようよ、カトレアちゃん!!」

後部座席から聞こえてくる悲鳴を黙殺。

距離を取りGNランスをライフルモードに変形させ、乱れ撃つ。

「こんな子供騙し!!」

レイは巧みな操作でそれを回避。ビームマグナムで反撃する。

「うわぁ!!」

カレンは思わず悲鳴をあげる。

「カレンさん、ちゃんとデータ収集しています?」

カトレアがカレンに問いかける。

「それ所じゃ無いって!!」

「それじゃ、優秀な（変態）技術者にはなれませんよ」

「なれなくて良い!!」

カレンはカトレアに怒鳴り返す。

「何ですか、さつきから。いきなり喚きだしたり。まさか噂の高血圧ですか？」

駄目だこりゃ、カレンは一瞬で諦めた。

「…なんで黙るんです?」

カトレアの質問に答える余裕が無くなっただけ、カレンはそう言いたかった。

乱れ撃つ弾幕をくぐり抜け、かわし、レイは接近を試みた。

（こいつが例のカトレアとか言うテスターか）

カトレアの事は予め潜入していたベリアから聞いている。

（確か、1000通りのテストパターンを繰り返しているとか…）

つまり、彼女に対抗するためには1001番目の戦法が必要になってくる。

「無茶言うな!!」

レイはB・R・を地面すれすれまで下降させ、そのまま盾を構え急上昇をかける。

カトレアはプラスジnkスのGNランスを振り回す。

GNランスの質量に吹っ飛ばされたB・R・は建物に突っ込む。

「こんな物が実戦ですか…、拍子抜けです」

そう言ってとどめを刺すべくGNランスを向け

「圧縮粒子解放!!」

レイはB・R・に本来備わっているシステム 圧縮粒子の解放による一時的な機体性能の強化を使う。

疑似太陽炉とは言えこのシステムの使用は可能だ。

トランザムとは似て非なるシステムにより、B・R・は急加速をかけ、プラスジnkスに接近、そのまま盾で殴り付ける。

殴られたプラスジnkスはそのまま地上に落ちていった。

「うう…、大丈夫？カトレアちゃん」

「対応が早いな…」

シュバルツは敵の対応の早さに一瞬驚くも、すぐに平常心を取り戻す。

「各機散開、各個撃破に専念しろ」

そうやってシュバルツは自ら先陣を切る。

そして、彼の部下もそれに続く。

「行くぞ！！」

シュバルツの部隊とイヴェットの部隊が戦闘を開始した丁度その時、砂漠に隠れた一機のガンダムとジンクス？がいた。

「人から奪ったんだ、まさか自分は奪われないとか思って無いよな」

ガンダム…ヘルメストートのマイスター、クロス・グレイヴが静かに呟く。

そして、ヘルメストートがGNスナイパーライフルを構えたその時…、

「無粋なことしてんじゃねーよ」

そして、回収したのがGNランスを持っている。

GNランスのライフルモードを乱れ撃つ。

それが合図になったのか、今ここにバトルロイヤルの幕が切つて落とされた。

間期第二話 乱戦（後書き）

キャラクター紹介

カトレア・ヴォーダン

性別 女

年齢 16歳

性格 ブツ飛び系お嬢様／狂戦士

所属 コリニック社

カトレアと言う名前はヴォーダン家に養子に行った際に付けられた名前で別に本名がある。

1000パターンのテストをこなしており、対応力が非常に高い。

特殊な戦闘適性を持っている。

セロのかつての恋人の妹にあたる人物である。

現在は精神が崩壊した姉の治療費を稼ぐために戦っている。

普段は丁寧な、狂戦士の時はぶっ飛んだ戦い方をする。

また、百合の人でもある。

セロとは顔見知りであり、狂戦士等はセロの影響。

姉の見舞いに来るセロを何だかんだ言っただけで気に入っている。

剣也さんへ。

何だかんだでカトレアの百合やら狂戦士やらに辟易しつつもカレンとカトレアは良いコンビになっていきます。

と言うわけで、どこかで使ってもらえませんか？

間期第三話 殲滅（前書き）

完成しました。

クロスvsゼロvsカトレアです。

連結刃の刃はヘルメストート目掛けて飛んでいく。

ヘルメストートはバックステップでこれを回避、そのままGNソードで斬りかかる。

「厄介な武器だが!!」

クロスは不規則な動きをするブレードロッドの弱点を見抜いた。この武器は一度回避してしまえば…

「当分二度目はこない!!」

そのままヘルメストートはルシフェルに接近、GNソードで斬りかかる。

「甘ちゃんが!!」

しかし、セロはルシフェルを大きく回転させ、逆の手からビームトンファアを発振させる。

ビームトンファアでGNソードを受け止めたセロは、ヘルメストートの背後にジnkクスのバリエーション機：プラスジnkクスが接近しているのを見て取った。

しかし、プラスジnkクスはジnkクス?によって引き離される。

「リズ!!」

「余所見している暇があるのかよ!!旧型が!!」

ゼロはそのままヘルメストートに蹴りを入れる。

受け身を取ったヘルメストートに今度は連結したブレードロッドで斬りかかる。

「こいつ…っ」

対するヘルメストートもビームサイズを抜く。

一合、二合、三合、

四合、五合、六合、

二機は、踊る様な軌道を描きながら、斬り結ぶ。

「やるじゃねえか！！旧型さんよお！！」

「くっ…」

しかし、徐々にヘルメストートが押され始める。

原因は簡単だ。

元々戦闘に関して最大限の配慮を持って完成された、ルシフェル。

それに対し、改良されているとは言え元は試作機であるヘルメストート。

更にはマイスターであるクロスの迷いもそこには関係していた。

そして、ジンクス？の両足をがっちりホールドし、

そのままジャイアントスイングの要領で振り回しルシフェルに向かって叩きつけた。

不恰な得物となったジンクス？のコクピットの中で、リズは気を失っていた。

「アハッ」

カトレアは無邪気な、狂気すら感じさせる笑顔を浮かべた。

「カトレア…ちゃん」

その笑顔は、ここが戦場であることを忘れさせるには十分な効果を持っていた。

イヴェットのジンクス高機動特化試験型、通称シャープジンクスは連邦の白いジンクス小隊の攻撃をかわしていた。

そして、彼女と共に戦っていた部下たちは、慣れないMSを上手く利用して、何とか互角に渡り合っていた。

「とりあえず、ビームライフルで迎撃っ」と

ケ빈はビームライフルで敵部隊を迎撃する。

更には、シャープジンクスに乗ったイヴェットはすでに一機のジンクスを落としていた。

「よくも…！」

騎士の面類の様なパーツを着けた白いジnkスのパイロット、シュバルツはシャープジnkスに斬りかかる。

シャープジnkスは両手の銃を利用して迎撃する。

イヴェットの銃撃に、シュバルツは近づく事ができず、そのまま退避する。

「くっ…、このままでは…」

シュバルツは歯噛みする。

いくら機体の性能がよくてもパイロットが、の理論で戦ったこのテロリスト達は当初の予測より遥かに強力な戦力だった。

「…通信だど!!」

突如、シュバルツのジnkスに通信が入る。

「…腕を落としたな、シュバルツ・E・ベリアシュタッド」

その声、それに言葉には残念そうな響きがこもっていた。

「その声…、イヴェット・テレーズ!!何故君が!!」

イヴェット・テレーズ。その名前を聞いた途端、シュバルツの部下が動揺する。

曰く、A E Uの悪魔

曰く、虐殺の騎士

曰く、大虐殺の英雄カルネイジ・ヒーロー

そして、彼女がかつて行ったある行為を思い出す。

それは、かつて難民の中に紛れ込んだテロリストがA E U領内で奪った核を使用しようと、難民に紛れ込みそのままA E Uに侵入しようとした。

当時、A E Uの諜報部はこの情報を事前に察知、テロリストの排除に取りかかった。

しかし、用意周到なテロリストは幾重のダミーを利用して、特定されることを防いでいた。

やがて、テロが実行に移されようとした時、そのテロはイヴェット・テレーズによって阻止された。

彼女は数百、数千の難民を虐殺し、しらみ潰しにテロリストを抹殺した。

その後、彼女と彼女の部隊は軍を脱走、以来足取りは完全に途絶えていた。

彼女とは軍学校時代からの戦友だったシュバルツは何とか説得しようとして、結局失敗していた。

「いや…、もはや言葉は不要か」

しかし、プラスジnkスはいきなり回避運動を取る。

と、ついさっきまでプラスジnkスがいた場所を粒子ビームが通りすぎる。

「…後ろに目でも付いてんのかよ」

クロスのGNスナイパーライフルの狙撃、完璧な認識外からの一撃は、カトリアにあっさり回避される。

ジnkス?の機体状況を見るが、意外と損害は軽微だ。

「まあ、マニピュレータで殴っただけだしな」

しかし、衝撃はダイレクトにパイロットに届いたらしい。

リズはすぐには目を覚まさない事を確認すると、ヘルメストートはビームサイズを抜く。

「行くぞ!」

そして、ヘルメストートは再びバトルロイヤルに参戦した。

「ヴァーチャービット、駆動率上昇」

「ハンドレットドライブ、機動確認」

「カテドラルシステム、システムオールグリーン」

「以上、いつでも稼働できますよ。翁」

翁と呼ばれた老人、シャオ・ヴォーダンがうむ、と一ツ頷く。

「カテドラル、起動。戦域を掃討しろ」

「掃討、ですか」

カテドラルのオペレーターの声にシャオはうむ、と言う。

「良い性能テストになるかのう」

そう告げた老人の声は冷たかった。

「しかし、カトレア様が…」

「命令を復唱しろ」

シャオの声にオペレーターは慌てて命令を復唱する。

「対象戦域の殲滅!!!用意!!!」

「どうした？シュバルツ。貴様はこの程度では無いだろっ?」

イヴェットはシュバルツを挑発しながら戦闘している。

「ぐうっ!」

対するシュバルツはうめき声をあげる。

イヴェットは完全にシャープジnkスを使いこなしている。

まるで敵などいないかのように戦場を飛び回るシャープジnkスにシュバルツはただただ翻弄される。

「ジnkスに慣れすぎたか…」

シュバルツは悔やむ。

イナクトに乗っていた頃の自分なら確実に勝っていた。

機体の性能に知らず知らず頼っていた事に今更ながら気づく。

「だが…!」

しかし、彼自身の高速戦の適性は極めて高い。

それはイナクトを使いこなしていた所からわかる。

そして、彼は疑似太陽炉のリミッターを外す。

トランザム程では無いが機体が加速する。

「何だと…!」

「一太刀くらいは返させてもらおう…!」

「ハッ」

セロがブレードロッドを振るう。

「…」

クロスは無言でビームサイズを振るい、

「キャハハっ」

カトレアは二機を相手に素手で挑む。

「マジで何なんだよ、こいつ等…」

トランザムで切り抜けるか？

クロスはそう考え、しかし彼の第六感が告げる。

今トランザムを使ったら生き残れないと。

しかし、彼がトランザムを使う必要は無かった。

遠距離から、ジンクス？…リズが援護射撃を行う。

それを察知して二機がリズを潰しにかかる。

「行かせるかよー!!」

しかし、二機を食い止めるべく、クロスがビームサイズを振るう。

大振りな攻撃に加え、それにフェイントを織り交ぜる。

背後からプラスジnkスの打撃を受け、よろめいたがその勢いを利用して逆に蹴り飛ばす。

しかし、ルシフェルのビームトンファーで切り裂かれそうになるのを間一髪でかわし

「ヴァーチャービット、展開」

次の瞬間、戦場に幾つもの球状のビットがばらまかれる。

ビットから放たれる凄まじい光は戦っていた三機を呑み込み

球状の物体を見たイヴェットは部下に叫ぶ。

「全機戦域から離脱しろ！！アレはまずすぎる！！」

球体から放たれた光は、連邦の部隊をも飲み込む。

「バカな！！我々は味方だぞ！！」

そう言いながらシュバルツは攻撃を回避する。

部下達も何とか着いてきているようだ。

数時間後

「まったく、災難だったな。リズ」

クロスはリスにそう声をかける。

あの後クロスとセロはトランザムを起動。

二人とも戦域から離脱した。

「あの敵……」

「？どうした？リス」

「怖かった」

「だろうな」

それからクロスは小さく延びをする。

「さつて、次はどこに行こうかな」

カレンが目覚めたのはベッドの上だった。

隣にはカトレアが眠っている。

「あ、起きたわね」

ベッドの脇に立っていたベリアがカレンに声をかける。

「ベリアさん？」

「あゝ、まだ横になってて良いわよ」

そう言ってカレンを横にさせる。

「さて、何から聞きたい？」

まあ、カトレアの事よね、とベリアは確信を突く。

「…」

カレンの無言を肯定として、カトレアは話し出す。

「この子はね、お姉さんがいたの」

「お姉さん、ですか」

「そう、この子のお姉さんはすっごい美人でね、何であんな奴と付き合っていたのか」

若干わからない部分があつたが触れないでおく。

「まあ、この子のお姉さんは戦場でね、当時は本当に凄惨だったらしくて男は殺され、女は犯された後殺され、そんな感じだったらしいのよ」

段々と話の核心に近づいていく。

「カトレアはね、お姉さんが犯された姿を見ていたらしいのよ。幸いお姉さんは彼氏に助けられて生きていたけど今でも心を閉じたまままだとか」

そんな経験から、カトレアは歪んだとベリアは言う。

「さっ今はもう寝ときなさい」

そっだ、とベリアは何かを思いつき、

「あなた、カトレアの友達になってくれない？」

「何とか逃げ切ったか…」

ケビン達はヴァーチャービットから逃げ切り、合流地点にいた。

「まあ、よくやった」

イヴェットはケビン達を誉める。

「死ぬかと思いました…」

「…やはり、例のアレは間違い無いんだな？」

「そのようです、セロさん」

リナとリンがヴァーチャービットのデータを解析した結果、ヴァーチャービットのGN粒子が強力な毒性、それも通常の濃縮粒子以上の物を人為的に持たされている事が判明した。

「これで、世界の終わりが近づいたか」

「怖じ気づいたのか？セロ」

「アホ、あいつを取り戻してすらいないのに、むざむざ死ぬるかよ」

そう言ってセロは笑った。

間期第四話 トリニティ

「さて、どう言うことか説明してもらいましょうか？シャオ・ヴオーダン」

シュバルツはシャオに対し怒りをぶつけていた。

「何の事ですか？」

対するシャオは飄々としている。

「とぼけるな！！あの無差別攻撃でどれだけの被害が出たと思っ
ている！！」

シュバルツの部隊は当初の五人から二人にまで減っていた。

一機はイヴェットに落とされ、そして残りの二機はカテドラルの掃
射に巻き込まれて消滅した。

「ふむ、どうやら情報の伝達に齟齬があったようだな」

「貴様…、ふざけているのか！？」

「いえいえ、ふざけてなどいませんよ。ただ、埋め合わせをさせて
もらいましょう」

「埋め合わせ、だと？」

「ええ、我が社の最新鋭MAと、MSをパイロット付きであなた方

に貸与しましょう」

シャオの言葉にシュバルツは訝しげな顔になる。

「世界に名だたるコリニック社の最新鋭戦闘兵器をたかが一兵卒の立場で使えるのだよ。十分埋め合わせになると思うがね」

コリニック社施設？サンクチュアリ？医務室

そこではやたらと高いティーセットにこれまたやたらと高い紅茶が淹れられていた。

「どうしました？カレンさん」

ちなみにこの紅茶、一杯約5000円する。

「えーと、あの、良いの？こんな高いの飲んじゃって」

「大丈夫ですよ。シャオが経費を使い込んで買っている物ですから。あんな羨びた老人に飲まれるより私たちみたいな美少女に飲まれる方が紅茶も幸せでしょう」

「美少女ってそんな…」

若干不穏当な言葉が聞こえた気がしたが流しておく。

「それに良く言うでしょう？砲火後ティータイムって。紳士淑女のたしなみですよ」

「初めて聞いたわよ、そんな言葉」

カレンが返答した時、カトレアがあ、と何かに気付いたような声をあげる。

「そう言えば忘れてました。お茶菓子が無かったですね」

そう言っただけでベッドの下からカレンでも知っているような超高級ブランドのクッキーを取り出す。

「何でそんな物がベッドの下に入ってるの!!」

「私だからです」

そう言っただけでカトレアはカレンにクッキーを薦める。

「合いますよ」

カレンは薦められるままとりあえずクッキーを摘まむ。

「！美味しい」

「でしょう」

そう言いながらクッキーをパクつく二人。

「まあ、貴女には頼みたい事がありまして、単刀直入に言いますと私とテストチームを組んでくれませんか？」

いきなり理解できない事を言われてカレンの表情が固まる。

「えと、今なんて？」

「ですから私とテストチームを組んでほしいと」

カレンは何とかして断ろうとする。

「だって私まだ研修生だよ。そんなのがパートナーとか、カトレアちゃんとしても嫌でしょ？」

カレンの言葉にカトレアはそんな事は無いと言う。

「今まで私と一緒に戦って戦った後も仲良くしてくれたのは貴女だけなんです！！」

うっ…、とカレンは言葉を詰まらせる。

「それにチームを組めば貴女はほとんど確実にコリニック社の社員になれるんですよ。どうです、この特典！！」

「でも…」

「さあ」

「いや、だから」

「さあさあ」

「あの、ちょっと待っ…」

「さあああああああ…！！」

空を三機のMSが駆け抜ける。

そのMSは世界にとって忘れられない機体だった。

ガンダムスローネ。

三機はそう呼称される機体に極めて近い外見を持っていた。

「しかしホントにコイツ使えんのかよ、ロダン」

三機の内の一機、スローネツヴァイに似た特徴を持つ機体のパイロットがスローネアインに似た機体のパイロットにスローネドライに似た機体を示しながら問いかける。

それに対し、返答したのはスローネドライに似た機体のパイロットだった。その声は年端のいかない物で、

「ご心配には及びません。私の戦闘適性はミケランジェロさんを選かに上回っています」

「はっ、言うねえ」

そう言ってスローネツヴァイに似た機体のパイロット…ミケランジェロは鼻で笑う。

「実際の戦闘でそんな数字が役に立つわきゃ無いだろ、なあロダンは

「それを決めるのは我が主だ」

そう言ってスローネアインに似た機体のパイロットであるロダンは

ミケランジェロを諭す。

「ちっ」

ミケランジェロは一つ舌打ちする。

そして、スローネドライに似た機体のパイロットに告げる。

「先に言つとくぜ、メスガキ。俺たちの足だけは引つ張るな。邪魔だと思つたら即お前を落とす」

そう告げて、三機のスローネは攻撃目標 セフィロト所属艦、アンリ・マユを捕捉した。

「ゼロ・バージュ、ルシフェル。行くぜ!!」

「レイ・アーデルハイト、B・R。出撃する」

三機のMSの接近を感知したアンリ・マユからルシフェルとB・Rが出撃する。

「敵機体データ照合開始 そんな!! 敵部隊は」

次の瞬間、ゼロとレイは自らの目で敵を確かめる。

「スローネだど!!」

現れたMSはスローネに追加装備を施したような姿をしていた。

「スローネアインネイリング、目標を消去する」

スローネアインに似た機体スローネアインネイリングは二門の砲を以てアンリ・マユを攻撃する。

「させるかよ!!」

ゼロがGNブレードロッドを振るい、攻撃を止めようとする。

しかし、振り切る前に二本の大剣を持つ機体が割り込んでくる。

「スローネツヴァイテュルフィング!!行け!!ファングウ!!」

鏝競り合っている状態からファングを射出、背後から攻撃を仕掛ける。

「こっちだって二人いるんだよ!!」

しかし、その隙にB・Rがアインネイリングに接近、ビームトンファアを振るおうとするが

「GNステルスフィールド、展開」

次の瞬間ビームトンファアを形成していた粒子が拡散する。

「何だと!!」

「スローネドライメーディア、目標を捕捉、作戦行動を開始します」

そう言ってGNステルスフィールドを展開する。

強化されたステルスフィールドは粒子を拡散させる事が可能になる。

「兄さん！！粒子が！！！」

「わかってる！！！」

そう言いながらレイは思考を切り替える。

「ゼロ！」

「使いな」

そう言つてルシフェルはB・R・にブレードロッドを渡す。

「バカが！！武器を手放しやがって！！！」

ミケランジェロはそう叫ぶと二本のバスターソードで斬りかかる。

「…甘ちゃんが」

ゼロは侮蔑も露に言い捨てる。

そして、ルシフェルの右手をツヴァイテュルフィングに向け

「三下風情が」

ルシフェルの右腕が回転し、簡易な作りの手を持つ形になる。

そして、三本指の手が射出される。

ワイヤーで繋がれた手は、ツヴァイテュルフィングに命中し、

「が、あああああああああ！！！！！！！」

次の瞬間凄まじい電流がツヴァイテュルフィングに流れる。

「ミケランジェロ！！」

アインネイリングがビームライフルで援護しようとするが、

「ステルスフィールドを忘れてますよ、残念ながら」

ステルスフィールドの影響でビームの使用が不可能になっている。

「ちいっ！！！！」

ロダンは苛立ちも露に機体持っているライフルで殴りかかる。

B・Rはそれを簡単に回避し、すぐに一撃を返す。

「お二人とも、だらし無いですよ」

そんな状況を救ったのは意外にもドライメーディアだった。

メーディアはステルスフィールドを解除。

高速でツヴァイテュルフィングのバスターソードを拾いしフェルに斬りかかる。

ルシフェルはエグナーウィップを巻き戻し、攻撃を回避する。

ルシフェルが通常腕に戻した時にはすでにツヴァイテュルフィングは戦場に復帰していた。

「あいつの動き…」

どこかで見たことがある、セロの思考に一人の女性が浮かび上がり、しかしセロはそれを振り払う。

「…まさかな」

ステルスフィールドが解除された事により、戦場にビーム兵器が戻ってきた。

「私の砲撃をかわせるかな」

ロダンはそう嘯きながら、攻撃を繰り返す。

さらに、ドライメーディアもGNハンドガンで攻撃を開始する。

「コイツ等…」

この三人の動きから一つわかった事がある。

それはこの三人がオリジナルのトリニティには遠く、及ばない事だ。確かに機体自体は強化され、パイロットの腕もトリニティより技量は上だ。

しかし、三機の連携がちぐはぐなのだ。

まるで、その動きは…

「誰かが犠牲になる事を前提に？」

まさか、とレイは思考する間もなく次々に繰り出される攻撃に防戦を強いられる。

「強い…だが…！」

レイは左腕にビームトンファアを、右手にブレードロッドを構える。

「さあ、見せてやる」

次の瞬間、B・Rは圧縮粒子を解放した。

大剣を以て二機と渡り合うルシフェル。

対するは二機のスローネ。

斬る、かわす、糸を張る。切断する。

この動作を飽きるほど繰り返す。

やがて、打ち合った勢いを利用して後退する。

「正直使いたくなかったが…」

セロは意を決する。

「トランザム!!」

赤い光に包まれたルシフェルは、圧倒的なスピードを手に入れる。

緋色の光を手にしたB・R・は機体性能を増大させる。

「行くぜ行くぜ行くぜ行くぜええええええええ!!!!!!!!!!」

「さ、お仕置きの時間だ」

二機のガンダムは三機のスローネに対し連携戦術を取る。

右手から大剣が迫る。

アインネイリングはそれをギリギリでかわすが、かわした先にブレードロッドの連結刃が存在する。

「ぐっう!!」

連結刃を回避しきれず右腕を持っていかれるアインネイリング。

そして、ツヴァイテュルフィンクに向けB・R・がビームガトリングを放つ。

ガトリングの細かいビームを回避した所にルシフェルがビームマグナムの一撃を叩き込む。

ビームマグナムは容赦なくツヴァイテュルフィングの頭部を奪っていった。

残るドライメーディアに目を向けたとき、すでにメーディアは行動に移っていた。

メーディアはステルスフィールドを展開、さらにダメージを与えられた二機を回収して、帰投した。

深追いする必要は無いと、セロが判断を下したことで追跡は無かった。

帰投する三機のスローネ。そのコクピットの中でミケランジェロがドライメーディアのパイロットに話しかける。

「あ、あー、なんつーか」

「何？」

疑問符を浮かべるドライメーディアのパイロットにミケランジェロは言う。

「サンキュな。あんたのお陰で死なずにすんだ」

そう言ってミケランジェロは更に付け加える。

「ま、後でなんかで埋め合わせる。楽しみにしといてくれ」

そんな会話をしながら、三機は帰っていった。

それから数日後、ドライメーディアのパイロットとはある街角で男達に囲まれていた。

「おいおいおい、お嬢ちゃん。ぶつかっついて詫びも無しかよ」

そう言うチンピラ達に、ドライメーディアのパイロットは考えていた。

どんな順番で戦えば最速で殲滅出来るかを。

「ちょっと、やめてくださいー!!」

突如、チンピラ達に声がかかる。

「女の子一人にそんな事しちゃ」

そう言った少年…ケ빈は腕の腕章をチンピラ達に見せる。

「っち、ずらかるぞ」

そう言うってチンピラ達は帰っていく。

「大丈夫？怪我とか無い？」

ケビンは少女に問いかける。

少女はただ一つ、頷く。

「良かった、この街じゃちょっと気を抜くとすぐこれだから……」

そう言ってケビンは笑う。

「そうだ、君の名前は？僕はケビン。ケビン・ウォーカー」

その言葉に少女はこう答える。

「ニネット・カリオン」

カトレアにほとんど無理矢理契約書を書かされたカレンはM Aカテ
ドラルの居住区画にいた。

「えっと、どうなってるの？」

「私にもわかりません」

そう言った彼女達の前に一人の軍人と翁が現れる。

「どう言う事です？シャオ」

「何。カテドラルのテストに連邦の部隊が巻き込まれたのでな。その埋め合わせとして試作兵器とテストパイロットを貸与する事になった」

「…シャオ・ヴォーダン。一つ聞かせてもらいたい。この年端もいかないような少女を戦場に出すと、貴方はそうおっしゃるので？」

「実力は保証しますぞ」

シャオはそう言いながら執務室に戻る。

「どう言うこと？カトレアちゃん」

カレンは混乱した頭で考えていた。

シャオの言葉が意味する所はつまり

「すみません。どうやら実戦でのテストが私たちの初任務となりそうです」

間期第五話 束の間の（前書き）

日常編です。

間期第五話 束の間の

「それで、ここまで連れてきたわけか」

イヴェットは頬をひきつらせながら無理矢理笑顔を作る。

「すみません、でも…」

ケ빈はイヴェットに対し謝る。

「まあ良い。方法はともかくやった事自体は正しいからな」

そう言いながらイヴェットはケ빈の隣にいる少女に目を向ける。

「それで、ニネットだったか。連れはいるのか？」

ニネットはその質問にやや戸惑う。

「…知り合いが二人、一緒にいました」

「そうか、待ち合わせは？」

「あります」

イヴェットは頷き、

「ケ빈、この娘を送ってやれ」

「僕がですか!?!」

「お前が助けたんだろ？ だったら最後まで責任を持って」

そう言っただけでケビンに車の鍵を渡す。

「さて、そろそろ私にも用事があるのでな。失礼させてもらっ

そう言っただけでイヴェットは部屋を出ていく。

しばらくすると、外からバイクのエンジン音がする。

「…行っちゃいましたね」

「…そうだね」

「例のスローネに似たMSについての分析結果です」

そう言いながらリナは資料を示す。

「まずはスローネアインに似た機体。この機体は今後アインと呼称します。この機体は全体的な火力を強化した物で、スローネアインの発展強化型と言えるでしょう。また、これは他の二機にも言える事ですが、機体のフレームが全く新しい物に変わってます」

「次にスローネツヴァイに似た機体、例によってツヴァイと呼称します。この機体は接近戦闘能力を強化した機体であり事は明白であり、また片手でバスターソードを扱える事から極めて高い攻撃性を持つ事が予測されます。また私たちのバスターブレードと同じようにバスターソードにはライフルモードが組み込まれている可能性があります」

そして、リナは一息を吐く。

「最後にスローネドライに似た機体。ドライは前述した二機に比べて変更点が多くなっています。まずは強化されたGNステルスフィールド。これは強力な力場を発生させ、粒子を拡散させる事が可能になっています。更に、この機体は前述したステルスフィールドを発生させるため、複数のGNドライヴを積んでいる可能性があります。またツヴァイのバスターソードを使用した事から戦闘能力も極めて高い状態になっていると推測できます」

ここまで言った所でゼロが質問する。

「ちょい待ち、解らない事があるぞ」

「何がです？」

リナの疑問符にゼロはこう返す。

「アインとドライだよ。戦ってみてわかったが俺が指揮官ならぜってーこいつ等を組ませねー。理由はわかるな？」

その言葉に空気が変わる。

「確かに、それは俺も思ってた。粒子を拡散させるフィールドを持つMSと強力なビーム兵器を持つMS。お互いがお互いの利点を消しあってる」

レイがゼロの言葉を補完する。

「…兄さん達の言う通りですが、そんな事考えてもしようがないで

しょう」

そりゃ、そうだとセロが呟く。

「以上でミーティングを終了します」

そう言ってリナはミーティングを終了した。

イスラエルにあるこの街は、実質的にイヴェットの支配下にある。

その為、イヴェット率いる武装勢力『中隊』に所属している人員には迂闊に手出しはできない。

彼らを普通の市民と見分ける方法は簡単だ。

『中隊』のメンバーは腕章を付けており、それを見て判断すれば良い。

「えっと、確かもうすぐ先の広場の前だっけ」

「はい、ニネットはそこでミケランジェロさんと待ち合わせをしています」

ニネットはそう言うと足早に歩き出す。

ケ빈は慌てて後を追う。

「そのミケランジェロさんって人がニネットをここに？」

「はい。私にこの街で何か買っていいと言って少々お金を渡してから用事があるとかで…」

「…それは何か買わないとそのミケランジェロさんって人に失礼なんじゃないかな」

ケビンの言葉にニネットは首を傾げる。

「何故です？何も買わなければこのお金はミケランジェロさんに返す事ができますし」

「そういう事じゃなくって、そのミケランジェロさんはニネットに何か買ってほしいんだよ」

そう言いながらケビンは近くのアクセサリー屋に入る。

そして、適当な商品を見繕う。

「これなんか良いんじゃないかな？」

ケビンは一つのネックレスをニネットに見せる。

そのネックレスは銀色のチェーンに下品にならない程度に装飾がなされている物だった。

「それじゃ、それ」

そう言ってニネットはお金を出す。

「それでは、私はここからは一人で行けますので」

ニネットはそのまま広場に向かっていった。

「お前等が協力者、か」

イヴェットは町外れの路地で一人の青年と話していた。

「はい、俺がセフィロトのガンダムマイスターの一人、レイ・アーデルハイトです」

そう言っつてレイは一礼する。

「『中隊』のイヴェット・テレーズだ。直接会うのは初めてだったな」

そう言いながらイヴェットは半歩下がる。ギリギリでレイの手が届かない位置だ。

「そうですね。改めてよろしく願います」

そう言いながらレイは持つてきたカバンから資料を取り出す。

「これは？」

「我々を襲撃したMSに関する情報をまとめた物です。あなた方を襲撃する可能性もありましたので」

資料をめくりながらイヴェットは核心を突く質問をする。

「それで、お前等の目的は何だ？」

「それについては自分にはお話しする権限はありません」

そう言っつて話を切り上げる。

「…そう言えば」

いきなりイヴェットが話し出す。

「聞いたことがあるか？ コリニック社の一部研究者が行っていたと言っつ研究を」

イヴェットの言葉に足を止めるレイ。

「この噂にはコリニック社の部分にアイオワ社、人革連、ユニオン、AEU、CBなんかが入るんだがな、これ等の組織が孤児を引き取っつてその子供達を人体実験の被験体に行っているとか」

「…超兵機関の事では？」

レイの疑問を無視してイヴェットは言っつ。

「何でもその施設では記憶や精神の転写技術が開発されていたらしい。まああくまで噂だがな」

「…何故、そんな話を俺に？」

「さあな？ 単なる噂話だよ。私の周りの女は大抵こっつ言っつ話が好きなんだ」

そうやってイヴェットは街の入り口に歩いていく。

そして、レイもまた歩き出した。

「カテドラルのシステム中枢に謎のブラックボックスを発見。ハッキングを試みたが失敗。また、ブラックボックスの他にも異常なまでの動力機関の巨大さ、及び侵入不可能区域に関する情報の入手を引き続き、試みる。なお、先日の戦闘に関しての評価について」

ベリアはカテドラル内部の居住区画の自分の部屋で、セフィロトへの報告書を書いていた。

この報告書は幾重ものプロテクトをかけられ、アンリ・マユに送られる。

「これくらい、かな」

ベリアはそう言って幾つかの資料と共に報告書を送信する。

『それにしても……』

スローネか、とベリアは思う。

「まあ、考えてもしょうがないっか」

今の自分に必要なのは考える事ではなく少しでも有益な情報を集め、それを仲間に送る事だ。

「遅いですよ、ミケランジェロさん」

「っと、わりいわりい」

ニネットは待ち合わせの時間に少し遅れたミケランジェロに声をかける。

「おっ、良いもん買ってんじゃない」

そう言ってミケランジェロはニネットのネックレスを見る。

「似合ってるぜ。小遣いやった甲斐があるってもんだ」

ミケランジェロは笑いながらそう言う。

「あの…、なんで私にお小遣いを？人間が一番大切なのはお金なのに」

ニネットの疑問にミケランジェロの表情が曇る。

「あー、何っーかな。要はアレだ。金より大事な物があるって事だ」

「お金より、大事な物、ですか？」

ニネットの表情は暗にそんな物が存在する事を知らなかった事を示している。

「ま、まあ、アレだ。お前にもいつかわかるよ、うん」

そう言って誤魔化しながらミケランジェロはニネットを利用している自分たちに嫌気がさしている事を自覚した。

『…まあ、俺はロダンに従うだけだしな』

ミケランジェロはそう思い込んで自分に言い訳する。

「さ、俺たちも行くぞ。確か、行き先は」

「カテドラルツアーアホでかいMAだ」

キャラクター紹介

ミケランジェロ・ネスカ

男

22歳

所属 傭兵

フリーの傭兵であり、現在、表向きは再現されたガンダムの性能検証と言う名目でコリニック社に雇われている。

高名な芸術家を両親に持ち、その重圧から逃げるように家出して、その先で野垂れ死にする所をロダンに拾われた。

女子供が戦場に出る事を快く思っていない。むしろ反対している。

最初に二ネットに辛くあたっていたのは怯えさせて任務を中止にするため。

自分の命を救ってくれたロダンに絶対の信頼を置いている。

また、幼いころから受けていた英才教育の影響で、楽譜さえあればピアノで大抵の曲は弾けたり、絵はそこらのプロより上手い。

本来の性格は気の良い兄ちゃんといった感じで世話好き。

裏表が無い。

戦闘ではツヴァイテュルフィンクのGNバスターソードによる接近戦を得意とする。

ファングも使えるが余り得意な兵器では無い。

間期第六話 ？中隊？（前書き）

遅くなりましたが間期の第六話です！！

最後にちょっとした企画があります。

間期第六話 ？中隊？

「うう、気分悪い」

「大丈夫ですか？カレンさん」

気分悪い原因が何を言うと、カレンは本気で殺意を抱いた。

あの後、正式にカトレアのテストパートナーとして採用されたカレンはカトレアの狂った操縦でも意識を失わないように耐G訓練を受けていた。

「そう言えば、今日は本社から増援が来るそうですよ。何でも処理に困ったMSを処分するにはちょうど良いとか」

そう言いながらカテドラル内部のMSデッキに向かう。

カテドラルはMAでありながら戦艦の様にMSを収容したり、修復したり、最終的には改造する事すらできる。

二人が歩いていると、MSデッキから怒声が響いてきた。

「どういう事だ！！これは！！」

二人がMSデッキを覗いてみると、シュバルツが整備士に何かを言っていた。

そして、彼の背後には、

「何あれ？」

「さあ？」

やたらと凝ったデザイン的面頬のようなパーツを顔に付け、やたらと精緻なデザインが刺繍してあるマントを取り付けられたジnkクスらしき機体が鎮座していた。

「落ち着いてくださいよ大尉。かっこいいじゃないですか」

「そう言うセリフは笑いを堪えてから言うんだな。准尉」

そう言いながらシュバルツは改造された自らのジnkクスを見る。

そして、MSデッキに入ってきた二人の少女に目を向ける。

「え〜と、お邪魔な様なので私たちは失礼しますね」

そう断ってカレンは部屋から出ていこうとする。

「待ってくれ！！君たちからも何か言ってくれ！！」

シュバルツはそう言って二人を引き留める。

「別に、何で文句を言う必要があるんです？かっこいいじゃないですか」

カトリアは冷笑を浮かべながらシュバルツに言う。

シュバルツのジnkクスは改造されていた。それもこれ以上無いほどにダサくなっている状態で。

「とりあえず、元には戻せんのか」

「無理です」

そう言ってカテドラルの整備士は作業に戻った。

「…これに乗って私はイヴェットとやりあわなければいけないのか
…」

シュバルツはどこか絶望感を漂わせた声音で呟いた。

ベリアはコリニック社のテスト記録を調査していた。

彼女が調査していたのはガンダムの再現を行いその性能を検証するための物だ。

「…やっぱり。スローネはこれから来る事になっているけど、エクシアもデュナメスもヴァーチェもキュリオスもアルヒスもドミオンも、廃棄の方法が不明瞭になってる」

再現されたハズの六機のガンダムは、検証終了後、どれも廃棄されている。

しかし、そのどれもが廃棄の方法が不明瞭なのだ。

「…どう言う事？」

ベリアは呟く。

そして、コリニック社のデータベースにはこれ以上の情報は存在し

ていない。

『つまり、これ等の機体のデータは既にコリニック社の管轄外ってことっ。』

ベリアはそこまで考えて頭を振る。

コリニックの技術者は変態だが、兵器開発には並々ならぬ情熱がある。

そんな彼等が兵器を棄てるなら、百歩譲って間違いなく自分たちで破壊しようとする筈だ。

『…最悪、脱出手段を考えておかないと』

ベリアはそう思った。

「久しぶりだね。アルエット。僕に何の用だい？」

「惚けるな。アルマーク」

そう言つてアルエットは大量の資料をリボンスの前のテーブルにぶち撒ける。

「死神のガンダム…いや、あれは紛い物だったが。何故私をあんなモノと戦わせた？」

アルエットの声は怒りを押し殺した物だ。

「何、忠誠心を試す為さ。傭兵ならすでにアリー・アル・サーシエスで間に合っているしね」

そう言いながらリボنزは足を組む。

「さて、君が戦ったアルヒスのコピー機だが…どうだったかな？」

リボنزの言葉にアルエットは資料の一つを示す。

そして、逆にリボنزに問う。

「それで、今回の件ではお前自身は動かないのか？」

「ああ、確実に失敗するとわかっている計画を妨害するほど僕は暇でも物好きでも無いからね」

そう言ってリボنزは資料を捲る。

「…なるほど、君にとっては戦い辛い相手だったようだね」

そう言いながらリボنزは一言呟く。

「全く、？完全なる器？も？最高位天使？もましてや？教え導きの場？も幻想以外の何物でも無いと言つのに、ご苦勞な事だ」

リボنزの言葉の意味は、アルエットにはわからなかったが、その声には明らかに侮蔑の色が混ざっていた。

三機のスローネがカテドラルに運びこまれる。

「あれが…、ルイスの家族を奪った…」

カレンは運びこまれるスローネの同型機／親友の家族を奪った機体を見て複雑な気分になる。

「どうせ廃棄する予定だから持つてきたらしいですよ」

カトレアはカレンに話しかける。

「うん…、でも私はあの機体、好きにはなれないかな」

「何故です？今回はあの機体は味方ですよ？」

カレンはカトレアの言葉を聞いて、自分の事を余り話してない事に気づく。

「あのガンダムはルイス…私の親友の家族を奪った機体なの」

カレンはカトレアにそう説明する。

「なるほど…。妬けますね」

カトレアは一言、呟いた。

「まあ、事情はわかりました。とは言え私たちに出来る事は任務をこなしてとつとあの機体を廃棄処分するだけです」

そう言ってカトレアは冷笑を浮かべる。

「カレンを傷つけた機体です。まずはメインカメラを抉りとって、

マニピュレータを一本一本へし折って、次にコクピット周りを時間をかけて切り刻んで…」

ぶつぶつと何事か呟きだしたカトレアにカレンは少し引く。

「ま、まあ、あれはルイスの家族を奪った機体じゃないし、大体、ほら、MSは所詮MSじゃない。使う人の問題で」

カレンはそう言ってカトレアを宥める。

「言ってる事をコロコロ変えると信用されなくなりますよ」

「…誰のせいだと思っているの…」

ケビン・ウォーカーは自分のジnkスの整備をしていた。

「目標は、コリニック社の新型MAだ」

整備しながらスピーカーから聞こえてくるイヴェットの声。

「このMAは戦艦クラスの巨大さ、MSの搭載数。何より圧倒的なレベルの粒子量による環境の汚染と言う実践に投入されたら我々にはどうする事もできない」

ケビンは手を動かしながらイヴェットの言葉を聞く。

「私たちはMAカテドラルを襲撃。人類種そのものに対する脅威となりうるバケモノを退治していく」

そこで、イヴェットは一度間を置く。

「諸君、死ぬ覚悟はあるか？命を私にくれるか？或いは今ここで私が死ねと言えば死ねるか？これから私たちが戦う相手は、それほどまでに強大だ。生きて帰ろうなどとは思うな。一切の希望を棄てる。そして、殺し尽くせ。殺し尽くした後に死ね。私たちに死に方は選べない。そう、人を一人でも殺した時点で私たちは地獄行きが決定だ。新参も、それだけは理解しておけ。古参はその身を持って新参に教える。醜く、無様に死ぬ事によってだ」

そう言いながらイヴェットは自分の機体に取り込む。

「…怖じ気付いた奴はいないようだな？大馬鹿者ども。全く、度しがたい大馬鹿が」

イヴェットはシャープブジックスの操縦桿を握る。

「よろしい、ならば戦争だ。私たちは戦いによって自らを証明する。家族との最後の別れはすましたか？恋人の胎にはちゃんと子供を仕込んだか？」

その言葉に？中隊？のメンバーは答える。

「……………もはや我らに悔いはありません！！……………」

イヴェットはふっと笑う。

「イヴェット中隊。出撃するぞ！！」

カテドラルの破壊の為に、行動していたセフィロトのメンバー。

それに後ろからMS部隊が合流する。

「？中隊？のメンバーか」

「来てくれたんですね！」

「セフィロトとか言うんだったな。協力者。貴様等の情報が確かならアレは私たちにとって脅威に他ならない。作戦指揮は任せてもらう」

イヴェットはそう言いながらシャープジnkスを加速させる。

「行くぞ。軍曹」

「了解です。隊長」

そう言って迷彩色に塗られた二機のジnkスは先陣を切った。

「俺たちも負けてらんないな」

セロはルシフェルを加速させる。

対するカテドラルからはスローネの改造機を初めとするMSが続々と出撃する。

「今日こそ貴方を殺しますよ…。兄さん」

「准尉。余り私情で動くな」

「わかってますよお。だけど、アイツは僕が殺って良いって大尉は言ったじゃないですかあ」

「…任務に支障がでない範囲、でだ」

シユバルツは准尉にそういつける。

「わかってますよお!!行きます!!」

そう言つて准尉は二丁のGNハンドガンを持つジンクスを使い、戦場に入りました。

「厄介な部下を持つと苦勞するのう、シユバルツ大尉」

カテドラル内部からシャオがシユバルツに声をかける。

「…貴方とは、良い酒が飲めそうだ」

シユバルツは呟いてから、機体：ナイトジンクスを疾らせた。

「ヴァーチャービット展開。作戦行動を開始します」

オペレーターの声と共にカテドラルから球状のビットが展開する。

ヴァーチャービットは強力なGNフィールドを纏っており通常の火器では破壊する事はほとんど不可能だ。

「目標、敵戦闘艦、アタック」

次の瞬間。ヴァーチェの砲撃に匹敵する火線がアンリ・マユに集中

する。

「アンリ・マユ。GNフィールド展開!!」

対してアンリ・マユはGNフィールドを発動する事で攻撃を凌ぐ。

「MS隊、戦闘を開始してください!!」

『MS隊、戦闘を開始してください!!』

リナの声がMS隊のコクピットに聞こえる。

「了解した!!」

?中隊?のジnkクス部隊は散開、敵MS部隊を取り囲もうとする。

「各機、聞こえるな!!イヴェットの部隊に取り囲まれたらそこで
終わりだ!!やらせるなよ!!」

シュバルツは部下に命令した後、自らイヴェットが乗っていると思
われる機体 シャープジnkクスに機体を向ける。

「ほう、馬鹿の一つ覚えは治ったようだな。シュバルツ」

「お陰様でな!!」

シャープジnkクスは得意の高機動一撃離脱戦法を取る。

「准尉!連携して仕掛けるぞ!!」

シュバルツは部下である准尉と共にイヴェットと、迷彩色に塗装されたジンクスに攻撃を仕掛ける。

「軍曹、貴様はもう一機のジンクスをやれ。シュバルツは私が面倒を見る」

イヴェットは軍曹にそう命令すると、シャープジンクスの二丁のピームライフルをナイトジンクスに向ける。

「久しぶりの一対一だ。存分に楽しもうじゃないか」

「…君は変わったな。イヴェット」

「目の前で苦しむ部下に引導を渡し続けなければ誰だつてこうなるさ」

そのままイヴェットは銃撃を開始する。

シュバルツはGNランスのライフルモードで迎撃する。

「…なるほど、外見を犠牲にした甲斐はある」

前回、通常のジンクスでは全く追い付けなかったシャープジンクス。

ナイトジンクスとシュバルツはそれに追い付けるようになっていた。

「なるほど、ただの道化では無いようだ」

イヴェットは引き離す事を諦め、近距離での撃ち合いを開始する。

『性能は向上しているようだな』

文句を言った自分を恥ずかしく思うほどにシュバルツの機体の性能は向上していた。

中距離からの撃ち合いを戦術の軸とするイヴェット。

近距離の斬り合いを得意とするシュバルツ。

幾重もの罫を駆使し、限定された環境でなら圧倒的な力を持つ軍曹。訓練に訓練を重ね、兄である軍曹を越える操縦技術を身に付けた准尉。

因縁の戦いが始まった。

「それでは、私たちも行きましょうか」

まるで近くのコンビニに買い物にでも行くかのような気軽な口調でカトレアはカレンに告げる。

「…わかった」

カレンはデータ採取用の機器を起動させる。

「プラスシンクス。カトレア・ヴォーダン。テストを開始します」

そう言って、カトレアは戦場に飛び立った。

「今回はベリアさんも出てくれるそうですね」

カトレアはカレンに告げる。

「ベリアさんって、あの秘書の？」

「元はパイロットだったらしいです」

二人が話していると、一機のジンクスが戦場に飛び立つ。

「あれらしいですね」

そのままジンクスは敵部隊が密集している地帯に突撃する。

が、そこを一機のガンダムタイプのMS…ガンダムB・R・に止められる。

通信回線を開いているのか、ベリアの声がプラスジンクスのコクピット内に聞こえる。

『あなたがガンダムね…』

『殺り甲斐があるわ！！』

そう言ってベリアのジンクスとB・R・は斬り合いを始める。

『カレンちゃん、カトレア。見ときなさい。これが戦いよ！！』

そう言ってベリアは両手に持ったGNビームサーベルで連続で斬り続ける。

対するB・Rはそれを防ぐのに精一杯で防戦一方だ。

しかし、突如ベリアのジnkクスを異変が襲う。

『エンジントラブル!? そんな...』

「ベリアさん!」

『カレンちゃん...。一つ覚えておいて。何が正しいのかは自分で決めるって事を』

ベリアの言葉が聞こえた直後、通信に激しいノイズが混じる。

「ベリアさん!」

「落ち着いてください!!カレン。早く戦いを終わらせればベリアさんの捜索にも時間をかけられます!!」

そう言っている内に、プラスジnkクスを?中隊?のジnkクスが取り囲む。

「キャアツ!!」

そのまま?中隊?のジnkクスは取り囲んだプラスジnkクスに集中砲火を浴びせるが...

「チョーシくてんじゃねーぞ、ゴラ」

「カトレアちゃん!」

サーベルで切り刻む。

それでも？中隊？のジnkスは突撃してくる。

「何なのよ……」

カレンはそう呟くしかなかった。

「先の雪辱、果たさせてもらうぞ！！ガンダム！！」

「上に同じくう！！！！！！！！！！」

「…二人とも、油断はしないで」

アインネイリング、ツヴァイテュルフィンゲ、ドライメーディアの三機のスローネは、ルシフェルとアンリ・マユ、そしてケビンのジnkスの前に立ち塞がる。

「…手柄を上げてこいって言われても……」

手柄を上げてこい、ケビンはイヴェットにそう言われてセフィロトの機体の援護についた。

「……」

ドライメーディアが追加装備であるGNソードを構える。

セロは、一つの予測を立てる。

『こいつのステルスフィールドは、確かに驚異だ。何せ粒子を使った技術が無効化されちまうんだからな』

セロはルシフェルにブレードロッドを構えさせる。

『だがな…』

セロはバージルが遺したハロの中のデータを思い出す。

そのデータが正しいのならば、カテドラルの優先度はドライメーディアを遥かに上回る。

彼らが破壊するよう使命を受けたガンダムジャオエル。

しかし、それを運用するためのカテドラルが無ければ無用の長物と化す。

そして、カテドラルの主兵装であるヴァーチャービットはステルスフィールドの中ではほとんど役に立たない。

すなわち、

「この展開でステルスフィールドは無え!!」

そう叫んでセロはルシフェルと共に戦いに挑む。

「?中隊?の新入り!!着いてこい!手柄をくれてやる!!」

「り、了解!!」

ケビンのジnkクスはルシフェルに着いていく。

アインネイリングは四門に増えた砲を構え、ツヴァイテュルフィン
グは両手にバスターソードを持つ。

ドライメーディアはGNソードを構え

そして、激突した。

キャラクター紹介

イヴェット・テレーズ

性別：女

年齢：29

所属：？中隊？

元AEU軍人のテロリスト。現在は連邦による弾圧から地域を解放
して回っている。

AEU時代に大規模テロを防ぐため、難民を虐殺した過去を持つ。

そのため自分の命に価値は無い、人を一人でも殺した人間は救われ
ないクスだと考えるようになる。

シユバルツとは軍学校時代からの付き合いがあったが、上記の事件の後、軍を脱走しているため敵対している。

古参の部下とは深い絆で結ばれており、殆ど自分の体と同じように動く。

戦闘は中距離からの銃撃を得意とする。

軍曹

年齢：29

性別：男

所属：？中隊？

イヴェットの側近であり、最も信頼する部下。

かつて密林で前線に取り残された際にイヴェットに命を救われている。

それ以来イヴェットと共に戦い続けている。

イヴェットが今までに死んでいない最大の原因。

ブービートラップを駆使した戦い方をする。

ゲリラ戦において彼の右にでるものは殆どいない。

准尉

性別：男

年齢：28

所属：地球連邦平和維持軍

シュバルツの部下であるパイロット。

軍曹は実の兄であり、兄弟仲は非常に悪い。

兄がイヴェットの虐殺に関わったと知った時は自分の手で兄を殺せる事を喜んでいた。

シュバルツとイヴェットは軍学校の先輩にあたる。

性格は嫌味な自信家ではあるが、その実かなりの努力家であり、シュバルツはそこを買っている。

？中隊？について

イヴェットが率いる武装勢力。

元は虐殺の際にイヴェットに着いてきたAEUの部隊。

それが現地の武装ゲリラや反連邦勢力を吸収して巨大化した。

必要だったとは言え、多くの難民を虐殺した贖罪のために古参のメンバーは戦っており、新参のメンバーは自らの信念に基づいて戦っている。

イヴェットのカリスマによってまとめあげられており、死をも恐れない戦い方をする。

間期第六話 ？中隊？（後書き）

企画

軍曹と准尉の名前大募集！！

モブキャラ予定の二人ですが意外にもキャラ立ちしたので。

感想のついでにでも。

間期第七話 狂信

四機のジンクスが戦場で向かい合う。

一機は騎士の様な意匠を持つパーツを取り付けられたナイトジンクス。パイロットはシュバルツ。

彼と対峙するのは鋭角的なフォルムを持ち両手にライフルを構えたシャープジンクス。パイロットはイヴェット。

イヴェットに付き従う迷彩色のジンクス。通常機に塗装をし、幾つかの武装を追加したゲリラジンクス。パイロットは軍曹。

ゲリラジンクスを付け狙う、シュバルツの部下である准尉が駆る二丁のハンドガンを持つガンマンジンクス。

「ひっさし振りだねえ！！兄さんんん！！！！！！」

一番最初に動いたのは准尉の駆るガンマンジンクスだった。

続いて攻撃を仕掛けられたゲリラジンクスがハンドグレネードを使用。一瞬全ての機体が目を潰される。

その隙にシャープジンクスがナイトジンクスから距離を取ろうとするがシュバルツがそれを許すはずもなく、二機は付かず離れずの距離を保ち続ける。

「…この展開、懐かしいな、なあシュバルツ」

「おおおおお おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお
 おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお
 ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
 いい いい いい いい いい いい いい いい いい いい いい いい いい いい
 ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
 ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
 ああ ああ !!!!!!」

そのまま、カトレアは返す刀でフラッグを撃破する。

「こおおお おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお
 おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお
 おおのおお おおのおお おおのおお おおのおお おおのおお おおのおお
 おおのおお おおのおお おおのおお おおのおお おおのおお おおのおお
 おおお程度でええええええええええええええええええええええええ
 ええええええええええええええええええええええええええええええ
 えうえええええええええええええええええええええええええええええ
 ええええええええええええええええええええええええええええええ
 えうえええええええええええええええええええええええええええええ
 ええええ!!!!」

気合いと共に？中隊？のMSを切り裂き、引き裂く。

「…全軍に通達!!! こいつには手を出すな!!!」

？中隊？の指揮官の指示により、？中隊？のMSはプラスシンクスを無視してカテドラルに進行した。スローネの改造機である三体のガンダム。

対峙するのはセフィロトのエース、ゼロ・バージュが駆るガンダムルシフェルに？中隊？のホープであるケビンが駆るジンクス。

更には、先程までベリアの脱出のために芝居をうっていたB・R・が戦闘に加わる。

「…みんな、お待たせ」

B・R・は正規のマイスターであるベリアが操縦している。

「ベリアか！！レイはどうした」

「俺はここだが」

ゼロの疑問に答えたのはレイだった。

レイはGNアームズtype-N…ナドレ用に開発され、パーツ状態で放置されていたGNアームズに乗ってきた。

「俺はこのままカテドラルを攻略する！！足止めは頼んだ！！」

レイはゼロ達に足止めを任せると、GNアームズをカテドラルに向ける。

「させつかよ！！」

ツヴァイテュルフィングがGNアームズに攻撃を仕掛けるも、攻撃はルシフェルに阻止される。

続いて追撃にかかるうとするアインネイリングをB・Rが、ドライメーディアをジnkクスが防ぐ。

「邪魔……」

「消えた!?!」

一瞬で姿を消したドライメーディア。

直後、ケビンのジnkクスに震動が走る。

「いきなり後ろに!?!」

ドライメーディアは一瞬でケビンの視覚外に機体を移動させ、そのまま背後から蹴りを入れる。

そして、ビームガンをジnkクスのドライブに押し付け

「一応、今そいつは俺の仲間なんぞな」

次の瞬間、連結刃がドライメーディアを阻む。

連結刃をかわしたドライメーディアは一旦距離を取ろうとする。

「……消去する!?!」

「おててが塞がってんぞ!?!」

直後、これを好機と見たツヴァイテュルフィンとアインネイリングがルシフェルに波状攻撃を仕掛ける。

「私を忘れてないかしら？」

ツヴァイテュルフィングの攻撃をB・Rが阻む。

「ゼロ！あなたはドライメーディアの方に行って！！アレのパイロットを消せばジャオエルは欠陥MSに成り下がる！！」

「りょーかい！！」

ゼロはそう返事をする。ドライメーディアに向かう。

「注意して！！ドライメーディアのパイロットは強化措置を受けてる。反応速度は普通の人間の比じゃ無いわよ！！」

「私を狙ってくる？」

ドライメーディアのコクピットの中、パイロットであるニネットはポツリと呟く。

呟く内にもルシフェルはビームガトリングで攻撃を仕掛ける。

「その程度で、この私を？」

ニネットは普通の人間なら成す術無く撃墜されるような弾幕を、いとも容易く回避する。

そして、ビームガンで迎撃する。

「もらった!!」

ケビンのジンクスが射撃で牽制するも、それら全てを回避する。

「ステルスフィールド、前面に展開」

二ネットの思考に反応して、ドライメーディアのステルスフィールドが前面だけに展開する。

そして、前面にステルスフィールドを展開した状態でドライメーディアはジンクスに斬りかかる。

「…!」

しかし、一瞬二ネットの背筋を悪寒が走る。

二ネットは自らの感覚を優先してジンクスから離れる。

「コイツに気付いたあな」

『しっかし…、あの機動…』

まさかな、とセロは首を振る。

?アイツ?...今までに自分が出会った最強のパイロット...は今戦えるような状態では無いはずだ。

それに、?アイツ?の存在を知っている人間は数少ない。

ヴェーダクラスの情報収集能力を持ってしても難しいだろう。

「…考えるのは後だな」

セロは呟くとブレードロッドを腰に収める。

「リナ！バスターブレードを出してくれ！」

「了解！」

セロのオーダーに対し、すぐに反応したリナは、バスターブレードをカタパルトに接続。そのまま射出する。

射出されたバスターブレードをルシフェルは空中でキャッチ、両手持ちに構える。

「ヒハッ！」

そのまま大剣を振りかぶりつつ、大上段に斬りかかる。

「？中隊？のガキ！援護しろ！！」

「わかってますよ！！」

ケ빈は作戦のために装備された実弾バズーカでドライメーディアを撃つ。

ドライメーディアはその攻撃をあっさりかわし、背後から接近してきたルシフェルに対応する。

「何なんだ…、コイツ、後ろに目でも付いてんのかよ」

ドライバーディアは疑問に答える事無く機体の質量低減効果を一時的に解除。

一瞬本来の重量に戻る。

落下速度で下に回り込み、ビームガンで迎撃する。

セロはそれを回避。

すぐに左腕のビームガトリングで迎撃する。

更にケビンのジンクスもそれに追い討ちをかける。

「…二人がかりでようやくって所か」

「敵MA接近、翁！！」

カテドラルのブリッジ内、ここではオペレーター達が機体の制御を行っている。

このMAはこれまでの戦術兵器が必然的に抱えていた個人への戦力依存を断ち切るために数十人規模のチームが操作を行う。

そのため機体の防衛機構は強固に作られており、殆どブラックボックスと化している。

つまり、何が言いたいのかと言うと、このMAには致命的な弱点すなわち、対応力の遅さが存在する。

一人のパイロットが操縦するMSに対して、こちらは数十人。

どちらが素早い判断と対応が出来るかはもはや火を見るよりも明らかだろう。

「ブレードで薙ぎ払え。ヴァーチャービットは全て迎撃に回せ」

「了解、ヴァーチャービットの移動を開始します」

「ブレードの展開完了しました、攻撃を開始します」

しかし、今のカテドラルの中枢には、それらの弱点をカバーする事が可能な存在がいる。

シャオ・ヴォーダン。

かつては戦場で狙撃兵として腕を鳴らし、コリニック社のアドバイザーとして雇われてからは実戦派の意見から社の製品開発に協力してきた。

影で陰謀屋などと陰口を叩かれるが、その実力は決して侮れる物では無い。

「対応が早い…。シャオ・ヴォーダン、か。正直陰謀好きな政治家としか考えていなかったが」

GNアームズのコクピットでレイが眩く。

「まあ、やるだけやって、フケさせてもらおうとするか」

そう言ってレイは機体からGNビットを切り離す。

「行ってこい!!」

GNビットはカテドラルに対し接近してビームを放つ。

これは対カテドラル用に考えられた戦法であり、カテドラルの強力なGNフィールドを破るための方法でもある。

強力なGNフィールドを持つ機体を相手にするために考え出されたこの策は、確かに有効に働いていた。

と、そこにカテドラルの外壁の一部が水蒸気爆発を伴って動き出す。

外れた外壁の中から巨大なアームがこれまた巨大なビームサーベルを発振させながら周囲を薙ぎ払う。

「っ！厄介な腕だ!!」

レイは紙一重でそれを避ける。

「ふむ、今のをかわしたか。敵のパイロットは余程のやり手と見える」

「翁？」

「何、心配はいらん。アレとカテドラルでは地力が違う。倒すのも時間の問題だ」

シヤオはカテドラルのスタッフを宥めつつ、策を練る。

今、カテドラルを破壊されるのはまずい。

破壊されれば当然修理が必要となる。

そして、修理の最中にブラックボックス内で密かに製造しているアレが見つつかれば計画 project - Nore の実行は非常に難しくなる。難しくなる、であって不可能になる、では無いのはシヤオらしいと言えるだろう。

「各砲台の状況は？」

「迎撃には成功しているようです」

「ふむ…、左舷にもちゃんと弾幕は張れているようだな」

そう言いながらシヤオは指示を出す。

「プラン」を起動。MSを振り払いつつ前進せよ」

「了解、プラン」起動します」

「復唱、プラン」起動します」

そう言いながらカテドラルの機体各所から巨大な翼のようなパーツが競り上がる。

「さあ、戦場の終幕だ」

次の瞬間、戦場に紅い光が駆け抜けた。

「おおらあああー!!」

「消える」

「全く!!男二人がかりで女の子をいじめるなんて!!」

B・R・のコクピット内でベリアが不満げにそう呟く。

敵にとってB・R・のパイロットが女性か男性か、判断のしようが無いのだが、そこはベリアらしいと言っべきだろう。

「ミケランジェロ。ファングを使え」

「ええ、俺あの武器嫌いなだけでよ」

しびしびと言った感じでミケランジェロがファングを展開する。

ファングの攻撃を上手くかわすB・R・だが、回避した地点にアイ

ンネイリングのバスターキャノンが叩き込まれた。

「とっ、あつぶない危ない」

ベリアはB・R・の粒子を解放して攻撃をさける。

「さっすがはコリニックの変態どもね、まさか四発も連続でアレが撃てるなんて…」

データでは知っていたのだが、実際に目の当たりにすると驚くしかない。

「…逃がしたか、だが!」

「お、おい、どうすんだよ兄貴!」

ファングを回収したツヴァイテュルフィンゲに、アインネイリングが接触回線を開く。

「お前は二ネットの援護に向かえ。一人でも十分だとは思うが、一応な」

「…わかった。帰ったら全部話してもらうからな!」

ミケランジェロはロダンに言って戦場を変える。

「さて、相手をしようか」

ロダンは眩き、アインネイリングの特徴である四門の砲を折り畳み、両手にサーベルを持つ。

突然の敵の理解できない行動にベリアは一瞬呆気に取られる。

「それでは、行くぞ」

「動きが良くなつたあ!？」

「私は接近戦の方が得意でね!!ベリア・リム・スー!!我が主の仇敵の娘よ!!」

「何で私の名前を!？」

いきなりロダンはB・R・と通信回線を開く。

「知れた事を!!我が主、リンド様はその程度見抜いておられたわ!!」

「っ!!リンド・リンクス!」

ベリアが衝撃を受けている合間にも、アインネイリングは斬撃を放つ。

「我が主の理想のため!!消えて、無くなれえええ!!!!」

「我が主、我が主、キモいのよアンタ!!」

ベリアは言い返して切り返す。

「その理想のために何人の無関係な子供を実験の犠牲にしたの!!」

そして、ベリアは息を吸い込む。

そして、烈迫の気合いと共に斬りかかる。

「あの、ドライメーディアのパイロットだって！！あなた達のせいで人生を歪められた！！どう言い訳する気！？答えなさい！！ロダン・アルレッキーノ！！」

「理想のための礎となったのだ。むしろ感謝して欲しいくらいだよ！！」

「っ…それが、あなたの答え、ってわけ…」

狂っている。ベリアにはそうとしか思えなかった。

「何を今さら、貴様も同じ穴のムジナだろうに！！」

そうだ！！、とロダンは叫ぶ。

「人を一人殺そうが二人殺そうが三人殺そうが四人殺そうが五人殺そうが十人殺そうが百人殺そうが千人殺そうが万人殺そうが億人殺そうが！！、我が主の理想の前では些事に過ぎん！！」

「…もう良い、あんたは何も言つな」

ベリアは静かに怒りを燃やす。

そして、B・R・のビームサーベルを逆手に持ち替え、そのままビームトンファーを発振させる。

「…あんたを殺して、道を開く!!」

「やってみる!!理想を解さぬ愚か者が!!」

「援軍か…、厄介な」

「そんな…、今相手にするだけでも大変なのに…」

戦場は二対二になる。

「…おい、？中隊？のガキ」

「何なんです！えつと…」

「ゼロだ、ゼロ・バージュ。一つ頼みがある」

「俺が死んだら〜とか無しですよ!!」

「わかってるさ、ただな。お前の命、どうも持ちきれそうに無い」

「…そうですか」

喋りながらもルシフェルとジンクスは武装を構える。

「余り驚かないんだな」

「？中隊？の人間は戦場に立つ以上、誰にどんな形で殺されようとも文句は言いません。ましてや僕は…」

そこまで言ってケビンはジnkスの操縦桿を握り締める。

「僕は、ロバート・ウォーカーの息子だ!!!」

そして、ドライメーディアに斬りかかる。

ライフルはすでに失われている。

残された武装はもはやサーベルが一本。

「僕には!!!父さんの血と!!!母さんの骨と!!!兄さんを目指した努力と!!!?中隊?で仕込まれた根性がある!!!」

だから、とケビンは言う。

「兄さん達に追い付くまで!!!僕は死ねない!!!つまり勝つ!!!」

そう言っつてケビンは息を吐く。

「...これくらい無茶な理論、戦場では当たり前でしょ」

一瞬呆気に取られていたセロは、すぐに立ち直る。

「ああ、ならそんなお前の尻馬に乗る俺は、死なずに済むって所だな」

そして、ジnkスはドライメーディアに、ルシフェルはツヴァイテユルフィングへ、それぞれ斬りかかる。

「は、メスガキ一人に苦戦するような奴に敗けっかよ!!!」

二ネットは返事がない問いかけをする。

『…普通に戦ったらコイツには勝てない…、だったら…!!』

普通じゃない戦い方をすれば良い、幸いケビン・ウォーカーの人生の中では普通じゃない戦い方をする人間は周囲にたくさんいた!!

「…動きが変わった？」

「父さんのH&A!!」

接近し、すれ違い様に切り捨てる。

かつてロバート・ウォーカーが好んで使用した戦法だ。

しかし、その攻撃すらも、かわされてしまう。

「と、見せかけてのお!!」

そして、サーベルを手放しそのままドライメーディアの腕を掴む。

「そんな!？」

「捕まえた!!」

ケビンは叫ぶ。

ドライメーディアは何かして拘束から抜け出そうとするが、ジーンクスの拘束はキツく、抜け出す事ができない。

「こんな所で…」

その瞬間、不意に接触回線が開く。

「その声…、そんな!!」

「ひっ!」

通信機から漏れ聞こえた声、その声はケビンには聞き覚えのある物
で、

「二ネット…?」

「あ…や…」

やがて、二ネットの声はだんだん大きくなっていく。

まるで、現実を否定するかの様に。

「…ないで」

「…見ないで」

「見ないで、よぉ！…！！」

再びドライマーディアが暴れだす。

ニネットが乗っている事に気をとられていたケビンはドライマーディアを取り逃がしてしまう。

「そんな…」

ケビンは自分が戦っていた相手の正体を知って、愕然とした。

ドライマーディアが戦場を離脱したが、もはやそれを追いかけるだけの気力はケビンには残っていなかった。

戦場を離脱するドライマーディア。

「逃がすかよ！！」

それを追撃するルシフェル。

「テメーがいなくなれば当座は安心何でな！！」

ルシフェルはバスターブレードのライフルモードでドライマーディアを狙い撃つ。

そして、二ネットに乗せたアインネイリングは戦場を離脱した。

「逃がしちまったか」

セロは呟く。

「…クソッ、声まで？アイツ？に似てやがる」

「…ベリアさん！ベリアさん！！」

アンリ・マユの医務室の中、ベリアが目を覚ました。

「リナ…？」

「良かったあ。アインに撃墜されてからずっと心配で…」

そこまで言われて思い出す。

アインネイリングとB・R・の戦闘を。

ビームトンファーで斬りかかったあと、アインネイリングは敢えて踏み込んだ。

そして、コクピットを貫く突きを放った物の、わずかに逸れて、結果的に右腕と胴体を貫きそのまま何かを叫んで離脱した。

「もう少ししたら情報の解析も終わりますんで、まだゆっくりして
いてください」

そう言つてリナは部屋から出ていく。

「…やられちゃった、か」

それもあんな屑野郎に。

「思い出したらムカついて来たわね」

次は殺す。ベリアはそう心に刻んだ。

「次で、終いか」

「どいつもそつらしい」

GNランスを構えるジnkクスにはすでに右足と頭が無く、両手に二丁のライフルを構えるジnkクスの胴体には二本のビームサーベルが突き刺さっている。

「「准尉（軍曹）手出し（したら銃殺）は無用だ」」

二人はお互いの部下に念を押す。

しかし、二人の決着は持ち越しとなる。

圧倒的なGN粒子が周囲に展開したのだ。

「何が起こった！」

シュバルツは部下に尋ねる。

「わかりません！！ただ、MSが、動かなくてっ」

「っ！！退くぞ軍曹！！」

イヴェットの命令に、軍曹は忠実に従った。

イヴェットのジンクスを抱えて軍曹のジンクスが離脱する。

「次こそ決着だ！！」

シュバルツにそう言い残して。

「逃げられちゃいましたね」

「准尉」

「わかってますよ、兄さんを殺せなかったのは痛いですが、まあヨシとしましょう」

准尉はそう言ってシュバルツのジンクスを抱えてカテドラルに帰投した。

敵MSが退いていくのを見てカレンは胸を撫で下ろした。

「退きましよう、カレン。私たちの勝利です」

「そうなの？」

「ええ」

カトレアはカレンに言うと、

「帰りがけにベリアさんを探索してみましよう」

そう言ってカトレアはベリアが向かった地点に移動する。

その後、探索は失敗に終わり、二人は帰投した。

間期第八話 ?セフィロト?

先の戦闘が終結してから少しの時間が経った。

戦闘で疲弊した者達は、しばらくの休息を得ることを許され、それはセフィロトのガンダムマイスターであるセロにも言える事だった。事態は急を要する、とは言え情報の解析が終了するまではしばらくの自由時間が与えられ、セフィロトのマイスターは各々の時間を過ごしていた。

「そう言えばセロはどこ行ったか知ってるか？」

何気無くレイが尋ねる。

「あー、セロさんなら彼女に会いに行きましたよ」

レイの言葉に返事したのはリナだった。

「……あいつ彼女いたの!?!?!」

「知らなかったんですか？」

セフィロトのメンバーの誰一人として知らなかった情報を当然の様に知っているリナにも驚きだが、それ以上にあのセロ・バージュに恋人がいた事にメンバーは驚愕していた。

「何でも一緒に傭兵やってた関係で知り合った仲らしいですね」

リナはそう言いながら情報の解析を進める。

この情報は戦闘のどさくさに紛れてベリアがデータベースごと引っこ抜いて来た物だ。故にプロテクトを解除しないと情報を読むことができない。

「…でも、あいつ等は本気であんな計画を実行する気なんですか？」

「情報を見る限り実行する気らしいですね」

そう言いながらリナとリンは情報を解析する。

「武力介入pran-XXX、大規模破壊型戦略兵器利用奇襲作戦Project-nore。この計画が仮に成功すれば地球の人口は数千人にまで減るでしょう」
「AEU領内にあるとある病院」

ゼロ・バージュは久しぶりにここを訪れていた。

「…変わってねえなあ、俺も、お前も」

ゼロがいるのは一つの病室。

そのベッドの上には一人の女性が横たわっていた。

「…」

女性は無言で、虚空を見つめている。

否、彼女にはそれしか出来ないと言った方が正しい。

セロは一つため息を吐きベッド脇の椅子に座る。

「まったく、少しは反応してくれよ。泣きたくなるだろ」

セロは冗談めいた口調で彼女 セラ・バジエスタに話しかける。

最近では医者しか来てないのか、彼女の病室は非常に簡素だ。

…まあ、いちいち大量の見舞品を持ってくる彼女の妹がしょっちゅう来るのも問題だが。

「そついやこの前お前と似たような戦い方をするパイロットにあつてな、メチャクチャ強かったからお前なんじゃないかって来てみたんだが、無駄足だったようだな」

セロは一方的に話し続ける。

「ま、アレにお前が乗っていたら今頃俺は生きていないんだけどな」

そつ言つてセロは微笑む。

「まったく、ガラにもねえことするもんじゃねえな。つと、俺はもう帰るわ」

そつ言つてセロは立ち上がる。

と、そのタイミングをちょうど見計らった様に病室のドアが開く。

「…あら？」

病室に入ってきたのはセラの実妹であり、現在はカトレア・ヴォーダンと名乗っている少女だった。

「あなたは…、いい加減姉さんは諦めたと思ってたんですが、意外と一途なんですね」

「そー言うお前こそ、毎度毎度来るたび馬鹿みたいに見舞品を持ってくるそうじゃねえか。医者共も迷惑してたぜ」

「妹が姉を心配するのは当たり前でしょう」

そう言いながら二人はここで立ち話もなんだと言うことで場所を病院のカフェテリアに移した。

「んで、何でオレが支払うんだ？」

「せっかく貴方に会えたんです。これくらいはしてもらいませんか」

カトレアは当然の様に言いながらやたらと凝ったデコレーションがしてあるパフェを口に運ぶ。

「…ん、美味しいです。まあ、あの屋台のおでんには劣りますが」

カトレアはそう言いながらパフェを食べる。

「…そう言えば、貴方は今何と言う呼ばれ方をしているんですか？
私はカトレアと呼ばれていますか」

多分、もう変わることは無い名前でしょうとカトレアは笑う。

「俺か？俺はセロ・バージュって呼ばれている」

セロはそう言ってコーヒーを飲む。

しばらく二人は黙々と食事を続ける。

やがて、食事を終え、セロは二人分の料金を支払う。

「じゃーな、もう会おうこともねーだろ」

セロはそう言ってカフェテリアから出ていこうとする。

「…貴方は変わりましたね。私と同じ様に、名前だけでは無く」

カトレアの呟きにセロは足を止める。

「…どういう意味だ？」

セロの問いにカトレアは答える。

「簡単ですよ、かつての貴方は大切な者すら護れなかった。だから貴方は大切なモノを作らなかつたんでしょう？」

「だから、それが何の関係があんだよ」

セロの問いにカトレアは笑顔で答える。

「しかし、今の貴方からは大切なモノを持つ人間の匂いがします。意外とわかるんですよ、こう言うの」

カトレアは真剣な顔で付け加える。

「私にも、大切なモノがあります。それを護るためなら命を懸ける覚悟があります、そして、それは貴方にも有るのでしょうか。だからこそ貴方は大切なモノを作った。違いますか？」

暗い、暗い闇の中、絶望の底から？私？は生まれた。

今の？私？がニネット・カリオンなのか、それともセラ・バジエスタなのか、それすらもわからない。

周囲の人間は？私？をニネット・カリオンと呼ぶ。

つまり、私はニネット・カリオンなのだろう。？私？はそう結論付けようとする理性を否定する。

違う、私にはニネット・カリオンの記憶が無い、あるのはセラ・バジエスタとしての戦闘技術だけだ。

今まではここで思考が終わらなくなっていた。

堂々巡りの思考。

しかし、最近は最後に一人の少年が現れる様になった。

「…ケビン、か」

会いたいな、？私？の思考にスキマが生じる。

本来あり得ないハズのスキマは、？私？の思考を侵食する。

？私？ガンダムジャオエルのパーツに過ぎない存在に、一つの光明が差ししていた事に気付く人間は、誰もいなかった。

カテドラル内部、カレンの部屋。

「…これって」

カレンは自分のデスクの上に置かれていた情報ディスクの内容を読んでいた。

「…テロの計画？しかも…」

その計画の荒唐無稽さは、もはや驚きを通り越して呆れるほどだった。

「何を見ているんです？」

いきなり後ろからカトレアが覗き込んできた。

「カトレアちゃん！！いつ帰ってきたの!？」

「つい先ほど。色々買ってきたので…」

そう言ってカトレアはテロの計画らしき物を読む。

「…なるほど、カテドラル内部に使われている100近い疑似太陽炉。動力と武装に多くを割かれているこのMAは、そのせいで多くのブラックボックスが存在する。しかし、実際このMAは30基の太陽炉で稼働しており、残り70基は圧縮粒子弾頭に使用されている、ですか…」

カトレアはこれを見てよし、と言う。

「見に行きましょう。私としても自社製品が疑われるのは余りいい気分ではありません」

カトレアはそう言ってカレンの手を引っ張る。

カレンはカトレアに押される形でカテドラルのブラックボックスを探る事になった。

「…どう言うことだよ。ロダンの兄貴」

ミケランジェロは自分が兄と慕うロダンから、彼と彼の主が行おうとしている計画を聞いていた。

「ふむ、聞こえなかったか。ならもう一度言うべきだな。私たちがセフィロト？の守護天使の最大の目標、それを説明しよう」

「それでは、？中隊？の皆さん。貴方達の力を今一度貸していただきたい」

レイは？中隊？のメンバーに言う。

「私たちの敵が行おうとしているプラン、それについて説明します」

「私たちが行おうとしている計画、Project-nore。これはかつてCBの武力介入の計画としてセフィロトと言う組織が考案した物だ」

ロダンは語る。自らの目的を。

「この計画は、当時技術者集団であったセフィロトのメンバーが開発したガンダム、ガンダムジャオエルをもってして初めて実行できる物だ」

ロダンは語る。破滅への道筋を。

「この計画は、ガンダムジャオエル、かつてのセフィロトが開発したMSをもってして初めて可能になるものです」

「ちょっと待て」

説明するレイをイヴェットが制止する。

「どう言うことだ？貴様らと奴等は、つまり同じ組織の同胞と、そう言うわけか？」

「正確には少し違います。彼等は一度滅ぼされているハズなので、から」

そう言ってレイは語る。

「元々、CBのサポート組織の一つ、セフィロトは技術者集団でした。CBの根幹を成すシステム、ヴェーダからその実力を認められ、太陽炉を預けられるほどに彼等は有能でした」

しかし、とレイは続けベリアが引き継ぐ。

「セフィロトの技術者達は、やがて目的を達成する事だけに技術を使う様になりました。武力による紛争の根絶、それを最大効率で行う方法を」

「その方法とは、CBの持つ全ての太陽炉をガンダムジャオエルに集結させ、人類その物の数を減らす事だった。人類の数が減れば、食糧問題も宗教問題も国際問題も、その全てが解決するだろう」

ロダンはミケランジェロに語る。

「そのため、ジャオエルには徹底した強化が施された。動力さえ存在すれば、それこそ一軍を相手に出来るほどにな」

だが、とロダンは話の流れを変える。

「ジャオエルには致命的な欠陥が存在していた。ジャオエルを完全に操作するためには強力な脳量子波を持つ存在でなければならぬこと、まあ、これはイノベイドの生成技術でクリア出来るだろう。これだけならばな」

「ってことはまだ何かあるのかよ」

ミケランジェロの質問に、ロダンが答える。

「ああ、悲しいことにな。ジャオエルを完全戦闘起動させたパイロットは例外無く死亡した。圧倒的な情報量に脳が耐えきれなかったのと、超高密度粒子に触れた結果だ」

まあ、戦闘中はシステムに生かされるんだがなとロダンは付け加える。

「ちょっと待ってください!!!」

ケビンが説明を止める。

「それなら何も僕たちの協力が必要無いでしょう？そのガンダムジヤオエルとか言う相手と戦いさえすれば良いんだから」

「良い質問ね、ケビン・ウォーカー。そして、これこそ私たちが貴方達に協力してもらいたい理由よ」

ベリアはそう言う。

「ジャオエルの欠陥、死亡率は確か98.8%だったつげ。まあ、細かい数字は問題無いわ。問題は一つ、もしその欠陥を克服する方法があるとするれば？」

その言葉に全員の表情が変わる。

「そのために考案されたのがリスクの分散ね。そのために何人もの人間が犠牲になったわ。具体的には強化された人間をサブパイロット

トに据える、その為にね」

ベリアは一つ、間を置く。

そして、モニターに一人の少女が映し出される。

その少女は、ケビンの知っている顔をしており

「実験を生き延びた唯一の少女、ニネット・カリオン。彼女がジャオエルのサブパイロット…いえ、生体演算コアとでも言うべきね、とにかく、彼女には強化が施されているの、具体的に言うと、脳にリーダーを埋め込まれたり、神経を光ファイバーに変えられたり、内臓や骨を金属で強化されたり」

「極めつけは記憶の転写、だな」

途中でゼロが口を挟む。

「そのニネットとか言うガキには間違いなくセラ・バジエスタの記憶が転写してある。あの戦闘機動は真似できるモノじゃねえ」

「…けるな」

ゼロの言葉が終わるか終わらないか、そんな時にケビンが呟く。

「ふざけるな！！何でニネットが犠牲になる必要があつたんです！！あの娘は普通の女の子なのに！！」

「ざけんなっ！！あんなメスガキ一人にんな事して、何が変わるっ

っーんだ!」

ミケランジェロはロダンに食って掛かる。

「解っているのだろう。貴様も、世界を変えるには犠牲が付き物だ。なら、その犠牲の一人に何故そこまでこだわる？」

「…ざけんなよ、あんたは、リンドとか言うヤツのために戦って、でも、こんなアホな計画の為にガキを利用するようなヤツじゃ無かったハズだ」

「だったらどうする？私を殺すか？」

そう言っつてロダンは銃を手取る。

「…もう、あんたにやついてけねえ。俺は抜けさせてもらっつ」

「これっつて…」

「ワオ、まさか本当にこんなものを搭載していたとは」

カレンとカトリアはカテドラルのブラックボックスに侵入していた。

「ワオ、じゃなくて…、どうするの？」コレ

あまりの事態にカレンの理解は追い付かない。

それも、当然だ。

「コレだけの圧縮粒子弾頭があれば、世界を滅ぼす事すら可能だ。」

「…私としては、今すぐにも破壊すべきと思うのですが…」

「それは遠慮してもらいたいな、カトレア」

突如、二人に声がかけられる。

「シャオ…さん？」

「翁、やはりこれは貴方の仕掛けでしたか」

シャオ・ヴォーダンに対しカトレアは銃を向ける。

「おお怖い…とでも言うと思ったかね、カトレア。それにカレン嬢だったかな？この事を知って、どうするつもりだ？」

シャオの問いかけにカレンは即答する。

「母さんに連絡します。私の母は知っていますよね」

「ヘレン・ウォーカー、か。あんな小娘が今さら何ができる？」

「つまり、もはやバレても問題無いレベルまで計画は達しているわ

けですか」

「流石はカトレア。私の言いたいことを理解している」

「ふざけないでください。世界を滅ぼすつもりですか!？」

「カトレアちゃんの言う通りです!!こんな物を使ったら、地球に人が住めなくなってしまうます!!」

カレンの言葉にシャオはため息を吐く。

「安心せい、残す人間は残す。そして、残った人間を支配する役割をリンド様はワシにお与えなされた。ならば、期待に答えるしか無かるっ」

「…糞碌しましたね、シャオ・ヴォーダン。かつての貴方ならこんな計画には賛同しなかったでしょう」

「なら、どうする?そのウォーカーの小娘の母親に泣きつくか?幸い軍の連中は引き上げておる。言ってみれば今のカテドラルはワシの、いやリンド様の城じゃぞ」

シャオの言葉を聞いてカトレアは歯噛みする。

そんな時だった。カテドラルに警報が鳴り響いたのは。

ミケランジェロ・ネスカはカテドラルの中を疾走していた。

彼は医務室から一人の少女 ニネットを連れだしMSデッキに向かっていた。

「…ミケランジェロ、さん？」

「おっ、目え覚ましたか」

ニネットを背負いながらミケランジェロはMSデッキにたどり着く。

「よし、ツヴァイはまだ動くな」

そして、ミケランジェロはツヴァイテュルフィングの太陽炉に火を入れる。

そして、バスターソードをライフルモードに変更し、カテドラルから脱出した。

「申し訳ありません。まさかあれほどまでに愚かだったとは…」

ロタンは自らの主…リンド・リンクスと通信していた。

「…ふむ、私もちょうどジャオエルの通常戦闘起動のテストをしたかと思っていた所だ」

「と、言いますと？」

「コアの奪還は私が行う。お前はこれから来る同士達と顔合わせでもしておけ」

警報にシャオが一瞬気を取られる。

「今です!!!カレン!!!」

その隙を逃さずカレンを連れてカトレアはMSデッキに向かう。

「ディスクは持っていますね!」

「そ、そうだけど…」

「なら、アテはあります」

カトレアとカレンはプラスジnkクスに乗り込む。

そして、二人はカテドラルを脱出した。

ツヴァイテュルフィンングでカテドラルから脱出したミケランジェロの前に、12枚の羽を持つガンダムタイプのMS ガンダムジャオエルが立ち塞がる。

「…てめえが、リンド様とか言うヤツか」

目の前にいるMSから放たれるプレッシャーにミケランジェロは必死に震える手を堪える。

「だとしたら何だい?キミは二ネットを差し出すのかな。それは良い!大歓迎だ!!!」

「ジョーダン言ってんじゃあ!!!」

ツヴァイテュルフィングは両手のバスターソードのライフルモードの一撃をジャオエルに叩き込む。

「だろう。ならハナから私とキミに他の選択肢などあるわけが無い。安心しなよ、コクピットは狙わないから」

リンドはツヴァイテュルフィングの攻撃をあっさり回避する。

「てめえが二ネットの人生を歪めたヤツか!!」

「なら、どうしたと言うんだい?ごめんなちゃーいとも言ってほしいのかい?」

「つてめえ!!」

両手にバスターソードを持ちツヴァイテュルフィングは接近戦を仕掛ける。

「てめえが兄貴をあんな風にした!!」

「だったら?」

二本の大剣を器用にかわし、ジャオエルは腰にマウントしてある二丁のライフルを持つ。

「てめえを倒して兄貴の目を醒まさしてやる!!」

「やってごらん。出来たら飴ちゃんあげるよ」

ジャオエルは攻撃をかわす。

「行けよ！ファング！！」

そして、ファングがジャオエルを取り囲み

「食らいやがれ！！」

一斉に射撃した。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

ミケランジェロは荒い息を吐く。

「これで終わりかい？ならこちらのターンだ」

爆炎の中から現れたジャオエルは無傷で、掠り傷一つ負っていないかった。

「さ、かわしてごらん」

ジャオエルは二丁のライフルを使いツヴァイテュルフィングを攻撃する。

「クソが！！」

ツヴァイテュルフィングは回避に専念しつつ、攻撃の隙を窺う。

「おや、まだ諦めないのかい？いい加減無駄な努力はやめたら？」

「ほぞけー!!」

ツヴァイテュルフィングは攻撃を回避しながら接近し、大剣で斬りかかる。

対するジャオエルはライフルからビームサーベルを展開する。

「銃剣だと!!」

展開したサーベルでツヴァイテュルフィングのバスターソードを受け止める。

「バカな!! 光学兵器で受け止められるだど!?!」

「さ、返してもらおうか」

ジャオエルは受け止めたまま機体を背後にスライドさせ、攻撃を空振りさせる。

そして、ツヴァイテュルフィングの背後に回り込み蹴りを喰らわせる。

「がああー!!」

ツヴァイテュルフィングは地面に叩き付けられる。

そして、ジャオエルはサーベルをツヴァイテュルフィングに突きつける。

間期第九話 歴史に記されない戦争

中東に位置する連邦軍の基地。

そこに一機のジンクスが接近してきていた。

「そのジンクス！！所属と官姓名を…」

「コリニック社テストパイロット、カトレアです！！敵対の意思は有りません。ジンクスに乗ってきたのはこれが一番確実にここに来れるからです。着陸の許可を」

カトレアはそう基地の管制官に言う。

「あ、ああ。だが、身元の確認が…」

「だったら通信を使わせてください！私はヘレン・ウォーカーの娘です。私が母さんに連絡すれば身元は保証されます」

カレンは基地の管制官にそう言う。

「緊急の用件があります。シュバルツ・E・ベリアシュタッド大尉に取り次いでください！！」

「しかし…」

「とりあえず、着陸の許可を」

「管制官、彼女達に着陸の許可を」

「シュバルツ大尉！しかし…」

「彼女達の身柄は私が責任を持つ」

「り、了解！！第三MSデッキに機体をしまってください！！」

管制官は突然の来訪者…カレンとカトレアに着陸許可を出した。

「賢明な判断、感謝します」

カトレアはそう挨拶して、着陸した。

「さて、突然の来訪のワケを聞かせてもらおうか、お嬢さん方」

シュバルツは二人にそう言う。

「簡潔に説明します。このディスクの中身を見てください」

カトレアは言いながらディスクを差し出す。

シュバルツはディスクを受け取り、手近な端末でそれを確認する。

ディスクの内容を見た瞬間、シュバルツの眉根に皺が寄る。

「…これは、テロの計画か？」

「はい、このディスクは私がカテドラルの中で偶然見つけたものですが…」

「ただ、その計画に出てくる圧縮粒子弾頭と思われる兵器はカテドラルの中に実在していました」

カレンの言葉をカトレアが引き継ぐ。

「…確かに、カテドラルにはいくつものブラックボックスがあったが…」

「グズグズしている暇は有りません。この計画が実行されてしまえば終わりなんですよ!!」

カトレアはシュバルツに詰め寄る。

「だが、軍には軍のルールがあつてだな。そんな、強制捜査のようなマネはそうそう出来んのだよ」

ましてや、こんな出自が不確かなものではな、とシュバルツは諭すように言う。

その言葉を聞いて二人は黙り込む。

シュバルツの言っていることは完全に正論だ。

少なくとも、自分たちが言っていることよりは遙かに

「意地悪はほどほどにしといた方が良いでしょうよ、大尉」

と、彼の後ろに控えていた准尉が発言する。

「え……」

シュバルツは苦笑する。

「確かに通常なら不可能だが、ルールには抜け穴と言うものがあるのだよ。だからといって多用するわけにもいかんがな」

シュバルツは笑いながら、

「一緒に戦った人間の頼みを断れるような人間では無いのでな。協力させてもらう」

そう言つてシュバルツは部下にプラスジnkスの整備と自分たちのジnkスの整備を完璧にするよう命令する。

「シュバルツ・E・ベリアシュタッド。騎士道に基づき貴女達の頼みを聞き届けよう」

「シュバルツさん……、良い人でしたね」

カトレアはカレンに話しかける。

「うん、あんな不確かな情報で動いてくれるなんて」

カレンはカトレアに返す。

「そう言えば、カレン。貴女はどうします？今ならプラスのコクピットから降りる事も可能ですが」

カトレアはカレンに告げる。

「元々、貴女は私の我が儘でプラスに乗ることになりました。今なら引き」

カレンはカトレアの口を塞ぐ。

「私たちは友達でしょ。だったら最後まで付き合ってたげるのが筋つてもんよ」

カレンはカトレアに、自分が出した結論を告げる。

「…よろしいのですか？貴女の命の保証は出来ないのですよ？」

「カトレアちゃんが護ってくれんじゃ無かったの？」

カトレアの念押しにカレンはそう答える。

「それに、ここで逃げたら一生誰にも顔向け出来ないわよ」

カレンの言葉に、カトレアは頬を朱に染める。

「言いますね。カレン。なら、私は貴女の信頼に応えましょう」

そう言ってカトレアはひざまづき、カレンの手の甲にキスをする。

『こー言つのが似合つてのは、さすがお嬢様って所ね』

カレンは、場違いな感想を抱いた。

決戦までの僅かな時間。

確かな絆が生まれた。

「やあ！集まってくれたかい！！セフィロトの守護天使の諸君！！」
褐色の肌と銀色の髪を持つ青年、リンド・リンクスはカテドラルに集まった面々に挨拶する。

カテドラルに集まったメンバー：セフィロトの守護天使は一斉に跪く。

「コクマー、ラツイエルを拝命、ロダン・アルレツキーノ。参上しました」

「ビナー、ザフキエルを拝命、ティファエラ・シュルツ。御目にかかれて光栄です」

「ゲブラー、カマエルを拝命、ハイド・メルキス。お久しぶりですね、リンド様」

「ティファレト、ミカエルを拝命。ソーン・ソーンツァ。貴方の盾となりましょう」

「ネツアク、ハニエルを拝命。リオナ・バーシュタイン。初めまして。リンド様！」

「マルクト、サンダルフォンを拝命。シャオ・ヴォーダン。貴方の信頼に応えましょう」

六人のメンバーがそれぞれ名乗りをあげる。

「うーん、何人か欠けているようだけど、ま、問題無いかな」

リンドはそう言いながら、メンバーの顔を見渡す。

「良いかな、君たちの仕事は、解っているね。私を護り、私に尽くす事だ」

「了解しております。リンド様。我らが貴方様の剣となり、盾となりましょう」

ロダンは跪いて誓う。

「私たちの命、ご自由にお使いください」

「そうかい、そうかい。それではMSは届いているだろう？君たちはMS、ガンダムを用いて私たちの邪魔をする？セフィロト？を破壊する事。ガンダムは第三世代のコピー機にそれぞれチューンを施してあるから使えない事は無いはずだ。私はこれからジャオエルへ向かい、カテドラルとの接続作業を行わなければならない」

リンドはそう言って部屋を後にする。

「あ、そうそう。戦闘の指揮はロダンとシャオに任せるから、そのつもりでね」

ケビン・ウォーカーは先の戦闘で失ったジnkスの代わりに手に入れたMS、ガンダムスローネドライマーディアの整備を行っていた。

そして、整備の手を休めず自分に与えられた役割を確認する。

即ち、カテドラル内部に侵入、そしてニネット・カリオンの救出…
不可能な場合は抹殺。

それがケビン・ウォーカーに与えられた任務だった。

「自分の仕事を成功させる事だけを考える、か」

ケビンはこの任務を自分に任せたセロの言葉を思い出す。

ケビンとドライメーディアをカテドラルに送り込む為に、他の全てのメンバーは囷となる。

そして、ケビンがニネットを救出、ジャオエルのコントロールを敵のトップに一任させる。

それにより、ジャオエルのパイロットは圧倒的な情報量にさらされ脳に致命的なダメージを負うことになる。

どんな強力なMSでもパイロットが死亡してしまえば鉄屑に過ぎない。

それが、完全なジャオエルに対する唯一の対抗手段である。

「…やってみせますよ」

ケビンは決意を固める。

つまり、この戦いには皆が笑えるハッピーエンドか、人類滅亡のバッドエンドしか無い。

単純な話だとケビンは考える。

つまり、自分がニネットを救い出せればハッピーエンドだと。

「兄さんの思考に似てきたかな」

ケビンは最後の整備を終わらせる。

彼の道に何が待ち受けているのか、それは何者もわからない事だった。

アンリ・マユのMSデッキでゼロ達は自分の機体の整備をしていた。

「積めるもんは全部積んでくれ！！持っていかなくて後悔するよかマシだ」

ゼロは整備しながら装備に注文をつける。

「了解です！！」

リンはルシフェルの追加装備を機体のアタッチメントに装着する。

「重かったり、バランスが悪かったりしたら捨てても結構です」

そう言いながらリンは戦いに備える。

「…そう言えば、明日生き残れたら聞かせてもらいたい事があります」

リナがGNアームズを整備しながらセロに言う。

「何だ！」

セロはリナに返す。

「セラさんってどんな人なんですか？」

リナの言葉にセロの顔が引きつる。

「…なんで、んな事が知りたいんだ？」

「だって、セロさんがあそこまで一途に思い続けている人なんですよ、気になるじゃないですか!！」

「確かにそれは俺も気になっていた」

レイが二人の話に割り込む。

「…わーっただよ、生きて帰ったら全部話してやるよ」

セロはそう言いながら機体の整備を続ける。

「…でも、完全戦闘起動したジャオエルに私たちは勝てるんでしょか？」

リンが疑問を投げかける。

「さあな、ただ、俺たちは何が有ろうと自分たちの信念を貫くだけだ。違うか？」

ゼロはメンバー全員に問いかける。

「まさか、あなたの意見に全面賛成する日が来ようとはな」

「そうですね！結果は後からついて来ます！！」

ゼロの言葉にリンは納得する。

彼等の絆は確かな物になっていた。

翌日、セフィロトと？中隊？の部隊はコリニック社実験施設、サンクチュアリに侵攻していた。

「MS部隊、この戦いは世界が懸かっています。絶対に敗けないでください！！」

「了解した！！行くぞ、軍曹！！」

「……」

イヴェットと軍曹のジンクスが先陣を切る。

「皆、隊長に続けえ！！」

続いて？中隊？のメンバーがイヴェット達についていく。

と、一機のジンクスにサンクチュアリからの粒子ビームが突き刺さる。

「総員、散開しろ！！敵には腕の良い狙撃屋がいる！！」

イヴェットは部下に指示を出す。

？中隊？のメンバーはそのまま散開した。

「対応が早いな…。殺り甲斐があるわい」

サンクチュアリから狙撃を行った四本足のMS デュナメスの改造機、ガンダムサンダルフォンのコクピットの中でシャオ・ヴォーダ
ンが唸る。

「スローネアインネイリング…、いや、今はガンダムラツイエルだ
ったか、とガンダムザフキエルとやら。砲撃を開始してくれ」

シャオの指示と共にガンダムラツイエルとヴァーチェの改造機 ガ
ンダムザフキエルが砲撃を開始する。

「…しかし、まだガンダムが出てこないとは…。恐らく、ジャオ
エルの出撃タイミングを見計らっておるのだから…、まあ、良い

か
」

シャオがそこまで思考したとほぼ同時、サンクチュアリの中央に置かれていたカテドラルの上部が競り上がり、展開していく。

その中心には、ガンダムジャオエルが据えられており、やがてその姿を完全に現す。

「な…」

その姿を見たイヴェットは思わず言葉を失う。

その姿は戦艦に匹敵するような巨大な翼を六枚持ち、さらに巨大なアームからはMSの胴体ほどもあるサーベルが展開している。

さらにそれらの威容に加え、圧倒的なGN粒子を噴出しており、その姿は神々しくすらあった。

さらに、ジャオエルは少しずつだが上昇を開始している。

ジャオエルから放たれる圧倒的な覇気に押される？中隊？のメンバー。
！。

「行くぞ！！ケビン！！」

「了解です！！セロさん！！」

しかし、その空気を破ったのは二人のパイロットだった。

「ガンダムルシフェル！！セロ・バーシュ！！目標を叩き潰しに行

く!!」

「ドライメーディア、ケビン・ウォーカー、作戦を開始します!!」
二機のガンダムはまっすぐにジャオエルを目指す。

「ガンダムB・R、行くわよ!!」

「GNアームズ、レイ・アーデルハイト!ベリア、ドッキングを!
」

B・RとGNアームズはドッキングして、ジャオエルを目指す。

更に、

「こちらは地球連邦軍、独立教導部隊。隊長のシュバルツだ。通信は聞こえているな?我々も加勢させてもらう」

シュバルツが率いる部隊が駆けつける。

「初めから飛ばしますよ!!カレン!!」

「わかった!!テストパターン1001、私たちは世界を救えるか、開始します!!」

カトレアとカレンの二人も戦場に現れる。

「全く、無駄な事が好きなんだねえ!!人間ってやつあ!!」

ジャオエルが翼を分解、無数のファンングとして飛ばす。

「我々が活路を開く!!」

イヴェットとシュバルツ、そして彼等の部下がファングを迎撃する。

「行ってこい!! 新入り! お姫様は必ず連れ戻すんだぞ!!」

…そして、歴史に記されない戦争が始まった。

間期第十話 決戦（前書き）

やっと書き終わった〜！！

リアルが忙しかったですが、これからは余裕ができます。

さ、頑張ろう。

間期第十話 決戦

「…突出してくるガンダムを狙えい！！あの二機が出てきてから敵の士気が上がってきおる！」

シャオはそう叫ぶ。

「ガンダムカマエル、ハイド。出撃させていただきます」

「ガンダムハニエル、リオナ・ガーシュタイン。行つくよー！！」

「ガンダムミカエル、ソーン・ソーンツァ。全てはリンド様の為に！！」

各々の叫びと共に新たに三機のガンダムがケビンとセロの前に立ちふさがる。

「…流石に、三機を抜くのは厳しいか…？」

セロが呟いて、ルシフェルにバスターブレードを構えさせようとした時…、

「ヒーローは遅れてやって来るってなあ！！」

突如、戦場に新たなMS…ツヴァイテュルフィングが現れる。

ツヴァイテュルフィングはバスターソードを両手に構え、三機のガンダムに対峙する。

その隙にドライメーディアはカテドラル内部へ、ルシフェルはジャオエルに向かう。

「追え！！ハイド！！！」

「了解しました」

カマエルは変形して、ドライメーディアを追う。

「…さて、リオナ。お前は前線に出て殲滅を手伝ってこい」

「えー！そんなのつまないじゃん！！」

「命令だ」

リオナはやや不満そうだったがハニエルは前線に向かう。

「さて、これで一対一になったわけだな」

「だったら何だっつてんだ！！この小物野郎が！！」

「簡単な事だ。君はここで死ぬことになると言っただけの、な」

そう言っつてミカエルは二枚刃の特徴的な刀身を持つ太刀 GNツインエッジを構える。

「おもしれえ！！」

ツヴァイテュルフィングも二本の大剣を構える。

「…我が使命を邪魔した罪、償ってもらおうぞ!!」

そして、ミカエルは弾かれたように前に出た。

「行くぜえっ!!」

ツヴァイテュルフィングはその場で二本の大剣を連結させる。

「やっぱ、こっちの方が使い易いな」

ミケランジェロは連結し一本の大剣となったバスターソードで迎撃する。

「我が太刀の錆となってもらおう!!」

「こっちのセリフだアホンダラ!!」

ドライメーディアのセンサーが敵MSの接近を告げる。

ファンングを撃ち落としながら進んでいたケビンは背後から接近してくるMS…ガンダムカマエルに機体を向き合わせる。

「初めまして、そして永遠にさようなら、だ!!」

カマエルは高速で変形してサーベルを振り抜く。

「くっ!!」

ドライメーディアもサーベルを抜き放ち、カマエルと斬り結ぶ。

「貴様等の目的など解っている！！目的はあの演算パーツだろう？」
通信回線が開き、ケビンにハイドの声が聞こえる。

「リンド様の計画は、確かに痛みが伴う。だがそれは甘受すべき痛みだ。人類が新たな未来を切り開き、理想世界に至るための最低限のな！！！」

ハイドは叫び、カマエルはドライメーディアを蹴り飛ばす。

「見せてやろう！！わが力を！！」

カマエルは再び変形し、機首にGNフィールドを発生させながら突撃する。

「…貴様みたいなヤツに負けたら、僕はウォーカー家の恥だ」

ケビンの中で冷たい怒りが燃え上がる。

「必要最低限の痛み？人類が未来を切り開くための？理想世界のため？笑わせてくれますね！！コメディアンにでも転職したらどうですか！！」

ケビンはドライメーディアの粒子噴出口から粒子を使い、機体の姿勢を制御する。

「人をパーツ扱いするような！！簡単に人を殺せるような貴方達がよりにもよって理想世界？たかが知れますね！！女の子を犠牲にするようなヤツの作った世界なんて！！！」

「全軍に通達！！ドライメーディアが敵のガンダムを撃墜しました！！」

リナが通信で全軍に伝える。

「良い男になったな。ケビン」

さて、とイヴェットは機体にライフルを構えさせる。

「私たちも敗けてられないな！！そうだろう？軍曹！！」

「…仰る通りです！」

そして二人は一機のガンダム…ヴァーチェの改造機であるガンダムザフキエルと向かい合う。

ザフキエルは二機に向けてGNバズーカを構え、更に両肩に追加されたガトリングレールガンを乱射する。

電磁加速された弾丸を二機のジnkスは回避する。

「…流石にこの威力は脅威だな」

そう呟いてイヴェットは周囲を見渡す。

『ファングを撃墜するのも不可能になって来たか…』

「隊長、ご命令を」

「軍曹、あの装備を使う意思はあるか？」

「了解、命令を遂行します」

軍曹は自身のジnkスの両肩のパーツを展開させる。

「…あの、シャオとか言うジジイは厄介だが、コイツ等自体は連携を断ってしまえば楽に潰せる」

イヴェットの見抜いた通り彼らはシャオ・ヴォーダンの指示による連携で動いている。

ならば、取るべき策は一つ。

すなわち、

「軍曹！！お前はあの老人を天国に送ってこい！！コイツは私が面倒を見る」

そう言いながらイヴェットはザフキエルにライフルを放つ。

「さて、そこの連邦の部隊！いや、シュバルツ！！私に手を貸してもらおうぞ！！」

「相変わらず自分勝手だな。君は！！」

「それでこそこのイヴェット・テレーズだ！！」

そして、シュバルツと准尉の二人と共にザフキエルに立ち向かう。

「軍曹！！アレを使い！！」

「了解！」

軍曹のジnkクスは両肩から吸着式の地雷を周囲にばら蒔き、自らそれを撃つ。

「なっ…!!！」

それによりサンクチュアリの建物が倒壊、ザフキエルに向かって倒れていく。

「これじゃ…」

ザフキエルは一旦攻撃を中止して、倒壊に巻き込まれないように後退する。

「視界が悪いわね…、ま、狙いは簡単なんだけど」

ザフキエルのコクピットの中でティファエラは呟く。

倒壊した建物と粉塵に紛れての接近戦。

この状況では普通ならこの作戦を取る。

「確かに効果的なんだけど…、相手が悪かったわね」

ザフキエルに搭載されているレーダーはオリジナルのヴァーチエから強化されている。

更に、それに合わせてザフキエルにはセンサーが探知した煙幕や爆

炎等の直接的に生死に関わらない物をモニターには映さない。

「つまり…」

ザフキエルは標的…ナイトジnkスをロックオンしてGNバズーカを放つ。

GNバズーカのビームは狙いを誤たず、ジnkスの機影に命中し

「爆発…しない!?!」

次の瞬間、ジnkスは爆発せずに消える。

次の瞬間、粒子ビームが両肩のガトリングレールガンを破壊する。

更に、次々と粒子ビームが命中し、ザフキエルはGNフィールドを展開する。

「出番だぞ!!! シュバルツ!!!」

そして、GNランスを構えたナイトジnkスがザフキエルの正面から現れる。

「悪いが、貴様等の目的を達成させる訳にはいかないのでな!!!」

「くっ…!」

ナイトジnkスがザフキエルを貫く、その直前

「…逃げられたか」

ザフキエルは全ての装甲をパージ。

ナドレとなってジャオエルの援護に向かった。

「まあ、武装はほとんど置いてったんだ。問題はあるまい」

シュバルツはそう言って戦場を飛び回るファングの群れに目を向ける。

「…やはり、と言うべきかな」

ファングに対応出来なくなった部下達が次々に落とされている。

「イヴェット！！私たちはファングの迎撃に向かう！！」

「良いだろう。貴様の指示を聞いてやる」

イヴェットはそう返事をする。

そして、二機のジnkスはファングの迎撃に向かった。

「そんな…、ハイドとティファエラお姉ちゃんがやられちゃったなんて…」

リオナの言葉には明らかな動揺が含まれている。

それでも戦闘を行う辺りは優秀と言つべきだろう。

「落ち着け。あの二人が落とされる事は予想の範疇だ」

ロダンはリオナを諭す。

「私はカテドラル内部に侵入した敵を排除しに行く。お前はその間にこの敵を排除しておけ。できるな？」

「うん、リョーカイっ!!」

リオナはロダンに返事をする、ハニエル ドミオンの改造機の装備であるガトリンググレネードをB・R・Rに向けて構える。

「さっ、行つくよー!!」

そして、ガトリンググレネードが火を噴いた。

「レイ!!」

「わかってる!!」

B・R・RとGNアームズはドッキングを解除。

「あいつのグレネードに当たったらひとたまりも無い!!解ってる

と思うが」

「当たったらゲームオーバーでしょ!!! 解ってるわよ!!!」

そして、ベリアはB・R・の性能をフルに使って回避する。

「つたく!!! 弾幕ゲーでも無いってのに!!!」

大剣を持つMSと大太刀を持つMSが互いの得物をぶつけ合う。

「わりーが貴様はここで死ね!!!」

「私とミカエルに死ねだと? 思い上がりも大概にしろ!!!」

大剣を持つMS ツヴァイテュルフィングは、大太刀を持つMS
ガンダムミカエルを相手に立ち会いを演じていた。

一合、二合、三合と打ち合っでは離れを繰り返す。

「テーマ等みたいなあ!!! 人殺しが理想を語る資格なんてねーんだよ!!!」

「それは貴様にも言える事だ!!!」

「だから俺は理想を言っつてねーんだよ。解る?」

二人は互いに罵り合いながら斬り合いを続ける。

『ツヴァイテュルフィングのパイロット...、確かロダンの兄弟分だ

だ

ソーンはミケランジェロに告げる。

ミカエルの右腕には、大型のビームサーベルの発振機：否、それはビームサーベル等という兵器では決して有り得ない、そんな形をしていた。

「超高出力GNビームブレード、Emerald。またの名を翠晶と言う。斬る瞬間しかブレードを発生させる事が出来ないのが、まあ不満と言えば不満だが、それは相手にリーチを読ませないと言う利点に繋がる」

ソーンはそう告げて、ミカエルの両腕を構える。

「さあ、始めようか！！貴様が死ぬか、私が死ぬかの戦いを！！」

そして、追加ブースターに光が宿り、ロケットのような勢いでツヴァイテュルフィンクに突っ込んでいった。

ミケランジェロはツヴァイテュルフィンクのバスターソードの残った一本をライフルモードにして再び戦いに挑む。

「上等！！」

ミケランジェロの声は、しかし絶望など微塵も含んでいなかった。

無数のファングの弾幕を、打ち付けるグレネードの弾幕も、レイとベリアは回避し尽くしていた。

「ドライメーディアのパイロットがカテドラルへの侵入に成功した
そうです」

リナからの通信が入る。

「やったか!!」

レイは回避し続けながら攻撃の機を狙う。

「さて、問題はラツィエルだが…」

すでにラツィエルはケビンを追ってカテドラル内に突入している。

「…私たちならやる事やるだけよ」

そして、ベリアはサーベルを投げる。

「ビームコンフューズ!!」

そして、投げたサーベルにビームを当て、拡散したビームは多くの
ファングとグレネードを破壊する。

サンクチュアリ都市区画。

そこはかつて職員が住んでいた痕跡は既に無く、殆ど廃墟と化して
いた。

そこを異形のMSが駆け抜ける。

ガンダムサンダルフォン。デュナメスの改造機であり、敢えて飛行機能を捨ててGNドライブの強大なエネルギーを全て武装につき込んでいる機体だ。

それを追うのは一機のMS。彼の養女でもあるカトレアの駆るプラズリンクスである。

「どうした？カトレア。何故、あの力を使わない？」

「…貴方に、問いたい事があります」

カトレアは、自分の中で暴れだす狂気と戦いながら言葉を絞り出す。

カトレアの言葉にサンダルフォンは動きを止めずに問いを返す。

「何だね？」

それは、質問を許す言葉だ。

カトレアはそう判断してシャオに質問をぶつける。

「翁、貴方は何故このような馬鹿げたプランに賛同しているのですか？このプランは、かつて貴方が最も嫌っていた虐殺を行う為の物なのですよ」

「何、簡単な事よ。古い先短い老人が、最後に分不相応な望みを得ただけの、な」

シャオはカトレアの質問に答えながらもスナイパーライフルの狙撃を中止しない。

「何故そんな無意味な戦いをするんだい？君なら新しい世界でなら支配階級になれるのに」

「生憎、俺には今の世界でやるべき事があるんでな」

セロはリンドと話しながらルシフェルを動かす。

「何故だい？僕のイノベイドとしての力で君は従わせる事が出来なかった。そして、君はジャオエルの攻撃を凌いでいる。つまり、君の精神の強さと能力の高さは証明されているじゃないか？」

「…確か、貴様の力は会話による相手の思考操作だったな。主体性の無い人間や絶望している人間には貴様の言葉は酷く甘美に聞こえるんだよな」

「へえ、バージルから聞いていたのかい？」

セロは答えずファングの迎撃を開始する。

「君だっつてわかっているんだらう？この世界には救われない人間が多すぎる。そう言うふうに出て来ると。なら、今のシステムを破壊して新しく、全ての人間を救うためのシステムを構築し直すべきだ。何故、それがわからない！！」

「んな事誰も頼んじやいねえ！！」

「それはどうかな！！案外みんな願っているかもよ！！」

「ならば仮にそうだとして、どうやってそれを証明する！！証明出来

ないならお前の言っている事に意味はねえ!!」

「どうやら君とは分かり合えないようだ!!」

「こっちのセリフだ!!」

そして、ジャオエルはカテドラルの大型ブレードアームを振るう。

それをルシフェルは紙一重でかわす。

「まあ良い!!世界が変われば本気で戦う事も出来なくなるだろうからな!!精々楽しませてもらうじゃないか!!」

カテドラルにドライメーディアが到着してからやや遅れて、ガンダムラツイエル アインネイリングがカテドラルの内部に帰投する。

「…的確に通路を選択しているな…」

相手はつまり、カテドラルのデータを持っている。そして、行き先も大体解る。

演算装置ダアト。

それさえ壊せればこちらの作戦は実行不可能になる。

「急がねばな」

そして、ロダンはダアトの場所まで走り出す。

ケビンはカテドラル内の演算装置、ダアトの場所まで走っていた。

時折揺れがケビンを襲う。

「泣き言を、言うわけには、いかない…！」

ケビンは自分に言い聞かせる。

ジャオエルの圧縮粒子弾頭は、自分がニネットを救い出せれば放たれる事は無い。

圧倒的な力を持ってしてもそれを扱うための資格は間違いなく必要だ。

そんな事を考えながら、ケビンはダアトの位置にたどり着く。

そこは、巨大な広間になっており、その中心には一人の少女が一機のMSのコクピットの中で機械に繋がれていた。

そして、そのMSは

「驚いたかい？テロリストの少年」

後ろからの声に、ケビンは振り返り銃を構える。

しかし、相手　ロダン・アルレッキーノはそれを意に介さずに話し続ける。

「ダアトジャオエル。本来守護天使を持たない隠されたセフィラであるダアト。それにジャオエルを据える辺り、リンド様はわかっただけだ。」「いらっしやる」

二ネットを繋いでいるMS ガンダムジャオエル。

いや、ダアトジャオエルと言っべきだろうか。

「さて、君の助けるべき姫君だが、後30分もしない内にその脳の必要の無い部分は焼ききられ、完全な演算装置と化す。何が言いたいのか、解るな？」

ケビンは無言で引き金を引く。

ロダンは銃弾を容易く回避しケビンに近づき銃を持つ腕を蹴り上げる。

そして、無防備になった腹に渾身の一撃を叩き込む。

「がっ……」

次の瞬間、ケビンは吹き飛ばされる。

『腹の…前で…何かが…爆発したような…!!』

「発射と浸透射の応用だ。何、今さら誰も見向きもしない、古い技術だよ」

ロダンは自嘲するように呟く。

しかし、ケビンにそれを理解する余裕が有るわけが無く、ただ地べたに這いつくばる。

そして、再び立ち上がる。

「なるほど、伊達や冗談で来たわけでは無いらしいな!!」

ロダンは構えを取り、ケビンに襲いかかる。

ケビンは腰のナイフを抜いて構える。

今ここに、世界の命運をかけた戦いが始まった。

ミカエルの追加ブースターに火が灯る。

そして、凄まじい推力を発揮して、ツヴァイテュルフィングに襲いかかる。

両腕から一瞬緑色の閃光が疾るがそれを距離を取る事でツヴァイテュルフィングは回避する。

そして、ライフルモードのバスターソードで迎撃するが、それは一発も当たらず全ての攻撃は回避され、あるいは受けながら突撃してくる。

「どうした!! 臆病風にでも吹かれたか!!」

ソーンの叫びに呼応するかの様に、ミカエルは速度を増す。

「こいつ…本物のバケモノかよ!!」

ミケランジェロは必死で回避し続ける。

接近されてしまえば終わりだ。

ミケランジェロには痛いほどよくわかる。

バスターソードのライフルモードの射撃でなんとか追い払ってはいるが、しかしそれ以上に敵は速い。

「だが…」

しかし、ミケランジェロはツヴァイテュルフィングに武器を構えさせる。

「敗ける訳には！いかねえ！！」

そして、ツヴァイテュルフィングはファングを射出する。

「今さら苦し紛れのファングなど！！」

ソーンはファングの軌道を見切り、それを容易く回避する。

「そんな兵器でこの私を倒せるとでも！！」

そして、ミカエルは翠晶でファングを切り払う。

「そんな小手先の技で私を討てると思うな！！」

決戦は始まった。

世界の行く末を決める戦いが。

間期第11話 決着

カテドラル中央演算制御区画？ダアト？

そこに鈍い打撃音が響く。

「どうした！！その程度か！！」

ロダンはケビンに対し、手加減抜きで打撃する。

「ま…だまだあ…！！」

ケビンはナイフを握り直し、ロダンに向かって駆け出していく。

「威勢だけは認めよう…！！」

しかし、ロダンはケビンのナイフをあっさりとかわす。

そして、気合と共に蹴りを放つ。

ケビンはギリギリで蹴りをかわすがそのままロダンは踏み込みをかける。

そして、ロダンは手加減抜きの打撃をケビンに食らわせる。

「がつ…」

そのままケビンは吹っ飛んでいく。

「いい加減、諦める。貴様には何も成すことができない」

ロダンは冷酷に告げる。

「貴様自身、気づいてないハズが無いのだろうか？既に貴様は立つことすら難しいと言つのに」

そして、ロダンは再び床を蹴る。

「何故、戦おうとするー!!」

ケ빈はナイフを構え、ロダンと対峙する。既に生きている事自体が奇跡のような体で、圧倒的な力を持つ敵に対峙する。

「そんなの…、決まっているでしょう!!」

ケ빈はナイフを構えながら叫ぶ。

「貴方達が僕達の敵だから、貴方達が理不尽に人を殺そうとしているから、それが理由です!!」

「なら、この私を倒してみせろ!!」

「言われなくても!!」

そして、ケ빈はロダンに向かってナイフを突き出すが、ロダンは紙一重でそれをかわし、強烈なパンチを食らわせる。

「がっ!!」

ケビンは再び吹き飛ばされる。

『まだだ…』

ケビンは思考する。

『まだ…、あの位置さえ取れば…』

ケビンは朦朧とした思考の中、思考に浮かんだ策を確かめる。

『そうだ…、だから…』

『倒れてちゃ…、いけないでしょ!…!』

そして、再び立ち上がる。

「まだ、立てるのか…」

対するロダンは少しだけ驚きを見せるも、すぐに構えを作る。

ケビンは異常なまでに鋭敏になった知覚で、ロダンの呟きを聞き取る。

「当然、でしょう」

そして、再びナイフを構える。

「貴方に…負けたら…」

そして、ケビンはナイフを握りしめ、

「誰も、救えませんからね!!」

そして、再び二人は交差する。

二人の実力差は言ってみれば大人と子供だ。

あるいは、象と蟻と言い換えても良いかも知れない。

『でも…』

ケビンは思考を空回らせながらも途切れさせない。

『教えてあげますよ…』

『蟻に噛まれると、意外と痛いということ…!!』

コクピット内で警報が鳴る。

いや、正確には鳴り続けていると言っべきか。

既に慣れた音を聞きながら、セロは後方から迫ってきたファンゲをかわし、そしてジャオエルに攻撃を加える。

しかし、攻撃はジャオエルのGNフィールドに防がれてしまう。

「無駄無駄、無駄なんだよ！！君たちのやっていることは全部！！」

リンドはそう叫ぶ。

「そう、そもそも人類が進歩しようと言う考えがそもそも無駄なんだよ！！人間は進歩しようとするたびに、必ず誰かを不幸にする！だから、僕は計画を実行するんだ！！何で理解しない！！」

セロはリンドの絶叫を聞く。

リンドの言っていること、それは正にセロが常々思っている事でもあった。

人間は進歩するため、先に進むため、豊かになるため、そう言い訳し続けて、しかし全くその成果はでていない。

確かに科学によって生活は便利になっただろう。

しかし、かつてアインシュタインの理論が核兵器を産み出したように、人間は世界を救うための力を持ちながら平気でその力を同胞に向ける。

セロがCBに参加したのは、今度こそ、世界を、人間を変える事が出来るのか。自分たちならそれが可能なのかを確かめる為だった。

「…確かに、テムエの言っていることは正しいのかも知れないな」
セロは、静かにそう告げる。

「だけどな…、いや、テムエには言うだけ無駄か」

セロは何かを言おうとして、そして押し黙る。

「今は…、テムエをぶつ殺す、それだけだ!!」

ジャオエルのファンングを破壊しながら、ルシフェルは武装を振り回す。

「…それがお前の答えか!!」

対するジャオエルはファンングの操作スピードを更に上昇させる。

更に両手のビームライフルで攻撃を開始する。

戦いは、まだ続いている。

ジャオエルと連結されたカテドラルの周辺で、二機のガンダムタイプのMSが鎬を削っていた。

その内一機はツヴァイテュルフィング。

そしてもう一機がガンダムミカエル。

いや、正確にはミカエルが一方的にツヴァイテュルフィングを追いかけていると言うのが正しいか、とにかく戦いが続いていた。

「どうした！！逃げるだけが貴様の戦いか！！」

ソーンはミケランジェロを挑発する。

対するミケランジェロは舌打ちをしただけで、更にスピードを上げる。

『落ち着け…、落ち着けよ、俺。そうだ、キレた時こそクールにいくんだ』

彼はかつてロダンから学んだ事を思い出す。

『そうだ…、コイツくらい、倒せなきゃ、兄貴には絶対に追い付かねえ』

ミケランジェロは思考する。

そして、策を考える。

地力ではツヴァイテュルフィングでは決してミカエルに勝つことは出来ない。

そして、それだけでは無い。

敗けると言うことは、即ち死を意味する。

そして、この相手は間違いなく強い。

機体の性能に頼る事なく、さりとて機体を殺すわけでもなく、完全

にMSを生かしている。

更には両腕に装備された大型GNビームブレード、翠晶。

それを扱う事に特化した機体構成。

全体に取り付けられたスラスタと追加ブースターからの機体制御と、凶悪な加速。

間違いなく今、戦場にいるMSの中ではジャオエルを除けばトップクラスに位置するだろう。

だからこそ、ミケランジェロは敗けられない。

自分より強い相手と戦う為の方法は、既にロダンから学んでいる。

『そう、敵うわけがない相手からは、まずは…』

「逃げるだけってのは癪だよな」

そう言っただけでミケランジェロはツヴァイテュルフィングのバスターソードでジャオエルの羽の一部を斬る。

大質量の羽は、ミカエルを目掛けて落下する。

「そんな小細工が!!」

ミカエルは翠晶を振るい、落下してきた羽を切り裂く。

「本当に小細工だとも思ってたかよ!!」

ミカエルが切り裂いた羽の一部。その後ろからツヴァイテュルフィングがバスターソードを振りかぶる。

既に翠晶を振り抜いたミカエルには、対応する術は無い。

「ちいっつー!!」

ミカエルは右手を切り裂かれるも、左側の翠晶を駆使してツヴァイテュルフィングの右腕を切り離す。

そして、ツヴァイテュルフィングはミカエルの右腕を 装着された翠晶を 持ってそのまま下に降りる。

ミケランジェロの狙いは簡単だ。それは、相手に武装で敗けているなら相手の武装を奪ってしまえば良い。

そして、サンクチュアリは元来工場だ。

即ち、MSに腕を付けるなど、サンクチュアリの施設さえあれば

「容易い、と言うわけか!!」

ソーンはミケランジェロが利用しようとしている施設を探すが、一向に見当たらない。

相手を見逃した自分の不覚に歯噛みしながらも、ソーンは探索を開始する。

そして、探索はすぐに終わった。

地面に空いていた巨大な穴。

地下実験場への資材搬入用のエレベーターだ。

そして、ソーンは知っている。

地下には実験用MSを修理するための簡易な工場があると言つことを！！

「させるか！！」

ソーンはミカエルを地下に向かわせる。

幸い、地下実験場はミカエルを極秘に製造していた区画でもある。

つまり、ソーンはその道筋を知っている　！！

地下に突入してから少し経った。

ミカエルに突然座標データが送られる。

座標データが指し示すのは、地下実験場。

広大な地下のその中でも更に広い、MSが暴れる事すら可能とする実験場だ。

そこに、ツヴァイテュルフィングは存在した。

失った右腕の代わりに翠晶を付けたミカエルの右腕を付けて。

「ケリ着けようぜ、ガンダムさんよ」

ミケランジェロはツヴァイテュルフィングに構えを取らせながらソーンに言う。

「承知した。ところで貴様、名は何と言う？」

「ミケランジェロだよ。ミケランジェロ・ネスカだ」

二人はまるで世間話をするような口調で会話する。

「そうか。私はソーン・ソーンツァと言う。あと数分の付き合いだが、覚えておけ。地獄で自慢できるぞ」

対するソーンも左腕を構える。

「残念だったな。地獄で自慢するのは」

そして、二機の太陽炉は限界まで、稼働率を上昇させ

同時に二機が飛び出した。

ツヴァイテュルフィングが右腕の翠晶を振るう。

対するミカエルはそれをギリギリで回避し、突きを放つ。

突きは、誤たずにツヴァイテュルフィングを貫き

「やーっと、捕まえた」

そのまま、ツヴァイテュルフィングに突き刺さった翠晶をツヴァイテュルフィングは左手で押さえる。

「見事だ！！誇ってくれ！！」

ソーンは、最後にその言葉を遺して、翠晶の粒子刃によってかき消された。

グレネードの弾幕を、GNアームズとB・R・はかわし続ける。

一発でも当たってしまえば即死と言う状況の中、ベリアは落ち着きを保てていた。

自分でも不思議だとベリアは思う。

かつて、ユノとドミオンのマイスターを争った時でさえ、こんな感覚は無かった。

そして、相手の動き、グレネード一発一発の軌跡が手に取るようにわかる。

それは、ベリアが敵　ガンダムハニエルの元になった機体、ガンダムドミオンに対して熟知していたと言うことに他ならない。

「いや…、あの時は母さんが助けてくれたっけ」

ベリアはドミオンのマイスター選抜の時の記憶を思い出す。

そんな余裕すら存在した。

じる。

程無くして、ハニエルは無力化された。

戦場を埋め尽くす無数のファング。

それに対抗するのは？中隊？のメンバーとシュバルツ率いる部隊。更にコリニック社のテストパイロットでもあるカトレアとカレンの二人が大量のファングを相手取っていた。

すでに何人かはファングによって撃墜されており、そのまま動かなくなっている。

「しかし…、鬱陶しいですね、ファングと言う物は」

カトレアは、ファングを落としながら呟く。

「カレン。きちんとデータは収集していますか？この機体データは必ず何かの役に立つハズです」

カトレアはファングを落としながらカレンに確認する。

「…何で、カトレアちゃんはこんな状況で冷静でいられるの？」

カレンはカトレアに尋ねる。

「冷静？ まさか。操縦に集中しているから恐怖を感じないだけですよ」

カトレアはそう言いながら、ファングをかわし、そして握り潰す。

「…それに、私には強くならなければいけない理由があります。あの老人の後継として、姉さんの妹として、認めたくは有りませんがあの馬の骨の義理の妹として、あるいは」

カトレアのプラスチックは攻撃を避けつつ確実にファングを落とす。

「カレン・ウォーカーの友達として、私は誰よりも何よりも強くならなければなりません。故に」

カトレアは落ちていた銃器を乱射する。

「私は、最強です」

そして、カトレアは自称に恥じないだけの強さを見せつけた。

「カハッ」

ケビンは吐血する。

「…内臓が破裂したか。手加減はしたつもりだが」

ロタンは構えを解かず、ケビンが立ち上がるのを待つ。

よろめきながらも、ケビンは立ち上がる。

「もはや、やめにしよう等とは言わん。お互いに、最後まで殺し合

おう」

そう言うロダン自身も、すでにいくつかの切り傷ができている。

『まだだ…』

ケビンは、吹き飛ばされた時に拾い上げた銃を構える。

「銃、か？今さらそんな玩具がこの私に通用する等と言う夢でも見たか？」

ケビンは、無言で銃を構え

『まだ、まだだ…』

震える手を、何とか押さえる。

象に蟻が勝つ方法。それは頭を使う事だ。

そして、ロダンが踏み込みをかけようと足に力を入れた、その時

「今だ！！」

ケビンは引き金を引いた。

ロダンは、その放たれた弾丸を優れた動体視力で見切ろうとして、
弾丸に、貫かれた。

腹を弾丸に貫かれたロダンは、そのまま仰向けに倒れる。

その隙にケビンはダアトジャオエルのコクピットに赴き、二ネットを解放する。

『演算コア。離脱』

『システム、強制終了』

『エラー』

そして、ケビンはダアトジャオエルの全てのモニターにエラーの文字が浮かぶのを確認した。

そのまま二ネットを抱えて広間をでようてケビンは歩き出す。

その時、

「負けたよ。まさか君が最後に二ネットを狙うとは思わなかった」

ロダンは声を絞り出すように言う。

「…あなたを倒すには、正攻法では不可能と判断しただけです。それに」

それに？とロダンは聞き返す。

「貴方達にとつても、二ネットは大切な存在のハズです。だから、狙えば必ず身を呈してでも護ると、そう判断しただけです」

あの最後の銃弾。あれはロダンと、その真後ろにいたニネットが直線上になる場所から撃たれた弾丸だった。

そして、ロダンほどの実力者なら確実に状況を把握できているはずだ。

少なくとも、避けてしまって全てをペアにしないほどには

「貴方の信義を利用した、卑怯な策、ですよ」

そして、ケ빈は部屋を出ようとするが

「だからこそ、君は私を倒すことができた。大事なのはそこだ」

ロダンはケ빈に対し、最大級の賛辞を送った。

「願わくは、違う形で出会いたかったよ」

そして、ロダンは倒れたまま、天井を見上げる。

「全く、鍛えすぎるのも困り者だな。すぐには楽になれない」

そう言ってロダンはケ빈達に先に行くように言う。

ロダン・アルレッキーノとケ빈・ウォーカーの戦いは、ケ빈・ウォーカーの勝利で幕を閉じた。

「カテドラルが、崩れる、か…」

ロダンはそう眩きながら、天井を見上げる。

そして、ダアトに駆け込む足音を聞いた。

「ロダン…」

「ティファエラ、か。残念ながら、私は敗けてしまったよ」

ロダンはそう言いながら、視線でダアトジャオエルを指し示す。

ダアトジャオエルのコクピットを見て、ティファエラは全てを察した。

「そんな…」

「これで、私たちの敗けだ。大人しく退場すべきだと、私は、思うのだが…」

ティファエラはダアトジャオエルのコクピットに入り込み、いくつかのコンソールを操作する。

「何をやっている？ティファエラ」

「決まっていますわよ。ここから逃げるために、ダアトジャオエルを使わせてもらうというだけの事」

ティファエラはそう言つと、ダアトジャオエルを起動させる。

「なるほど、君は生きる、か」

ロダンはそう言いながら、自分の命が無くなるのを感じ、そして

「何を言っているの？貴方も一緒に、よ」

ティファエラはロダンの肩を持ってダアトジャオエルのコクピットに向かう。

「な……」

「助けるな、は無しですね。貴方は私の大切な仲間なのですから」

そう言っただけでティファエラはロダンをダアトジャオエルのコクピットに運び込み、そして

後日、この戦場から離脱する、12枚羽のMSを見たと言う兵士が多かったです。

カテドラルが崩壊するなか、リンドはカテドラルからジャオエルを切り離した。

「……これほどまでとは、思わなかったよ」

リンドは目の前のMS…ガンダムルシフェルを見据えて言う。

そのまま、ジャオエルは12枚羽を広げて、両手に銃剣を構える。

「これで、テメーの負けは確定したんだ。とつとと…」

そこまで言って、セロは首を振る。

「いや、テメーにも最後の意地って奴があるよな」

そして、ルシフェルは既に捨て去った武装の中から残ったバスターブレードを構える。

「わかってるじゃないか」

リンドがセロに言う。

それと同時に、ジャオエルの背中が、光を帯びていく…、完全戦闘起動した証だ。

「ガンダムジャオエル完全戦闘起動。リスクは知っていると思うが…」

そして、リンドは両手の銃剣を構え

「最後は、君を倒して終わりにする…！」

「やってみやがれ…！」

そして、二機のガンダムは再び戦いを始めた。

ジャオエルがライフルを放つ。

放たれた粒子ビームをバスターブレードの刀身で受けながら、ルシフェルはジャオエルに接近戦を挑む。

『近づかれれば、こちらが不利…とても思ったか!!』

ジャオエルは銃剣を使い、バスターブレードを受ける。

そして、ジャオエルはルシフェルに蹴りを浴びせる。

「ぐっ…、ハハッ」

ルシフェルのコクピットの中、セロから笑みがこぼれる。

「安心したぜ、テメーが俺と同じ 戦士だったって事にな!!」

「笑わせる!! 私…いや、僕を戦士以外の何者と思っていたんだ!!」

「どっかのキチガイの教祖様だよ」

「なるほど、それなら誤解されても仕方が無いな!!」

ジャオエルは距離を取りながら、銃撃を行う。

「君の言う通りだよ!!だが…」

それは、まるでイノベーターが放つような、そんな光だった。

「良いねえ!!やはり何も考えずに戦えると言っつのは最高だよ!!
君もそう思うだろう!!」

「同感だ!!」

二機は凄まじい速度で斬り合い、撃ち合い、鏖迫り合い、そして、
殺し合っていた。

『愚かだな…、私は』

リンドはそう思考する。

計画を実行するために、人類を救うために、もはや過ちを犯せない
ように全てを破壊し尽くす。

その為の計画を実行しようとしていた。

彼は人類の進化を信じられなかった。

そんな物は夢物語だと、全てを否定した。

『本当に、愚かだよ…』

しかし、リンドは忘れていた。

人類ではなく人間を見ることを、だ。

人間さえ見ていれば、自分は希望を見出だすことは出来たのだろうか

か。リンドは思考しかけて首を振る。

無意味な思考だ。既に自分はジャオエルのシステムに取り込まれている、戦いが終わったら待っているのは死だ。

しかし、リンドはそれすらも清々しく思っていた。

組織から追放されて以来、彼とヴェーダのリンクは失われている。彼は他のイノベイドと違って肉体の死がそのまま消滅につながる。

しかし、今のリンドはそれすら受け入れる事ができた。

かつて、人類を見て絶望したリンドは、人間に希望を見出だした。

「そっだ…、だったら…」

リンドは既に限界を迎えていた。

強制的に脳に送られ続ける情報は、既にリンドの脳を焼ききろつとしている。

リンドは戦いながら、悔やむ。

最後にヒトとして死ねない事を、戦闘マシンとして死んでしまう事を。

「っ…」

しかし、リンドは見た。

ルシフェルがビームトンファーでジャオエルの両腕を切り落とし、コクピット目掛けてビームトンファーを構えているのを。

「…、ありがとう。僕には出来すぎた人生だったよ」

リンドはゼロに礼を言い

そして、ルシフェルはジャオエルのコクピットを貫いた。

霧がかかった道に、リンドは立っていた。

何もわからずリンドはただ歩く。

そして、リンドはふと前を見る。

霧がかかっているのに、何故か彼女　バージル・リムはハッキリと見えた。

「希望は見つかったか？」

バージルはリンドに尋ねる。

「お陰様で」

リンドはバージルに向かって歩く。

バージルとリンドは並び、そして共に霧の中に消えていった。

エピソード

一連の事件は終わりを告げた。

その中で、ちょっとした後日談を語ろうと思う。

戦闘の中、機能を停止したハニエル。

そのコクピットを？中隊？のメンバーがこじ開ける。

「なっ……」

そこにいたのは年端のいかない、四肢を失った少女だった。

彼女の四肢は、コクピット内の機材に繋がれており、ほとんど完全に機械と一体化していた。

「隊長。この娘はどうします?」

軍曹はイヴェットに尋ねる。

「どうもこうも、エリックの所に運び込んでおけ」

そして、リオナはエリック・ラジェストンにより治療を受ける事になった。

二ネット・カリオンは自らの視界に光が射し込んでいる事に気がついていた。

そして、ニネットは恐る恐る目を開ける。

そこにいたのは、ケビンだった。

「あ…、目、覚めたんだ」

ケビンはニネットに声をかける。

「ここは…」

「エリックさんっていう医者 of 病院だよ」

いぶかしむニネットに対し、ケビンは説明する。

「僕もついさつきまで治療していたんだけど…、エリックさんは凄いな。人工臓器のスペシャリストとか言うだけの力を持っている」

ケビンはそう言いながら自分の手術跡を見せる。

ニネットにも、おぼろ気な記憶が蘇る。

あの戦いをニネットは見ていた。

ダアトの宿命から、ケビンは自分を救うために戦っていた事を。

「…ケビン。あなたは何故私を助けたんですか？」

ニネットの疑問に、ケビンは少し返答に困る。

イヴェットと軍曹からは、助けたお前が責任を持つと、何故かタキシードとドレスを渡された。

二人が何を言いたいのか、わからないほどケビンは子供では無い。

そして、ケビンは自らの心確かめる。

「君に一目惚れしたから、じゃダメかな」

ケビンは赤面しながら二ネットに言う。

「一目惚れとは何ですか？」

二ネットはケビンに対して疑問を投げ掛ける。

「まあ、そう言うのはこれから学んでいこう」

ケビンは二ネットに言う。

二人の道は、まだ始まったばかりだった。

宇宙にあるCBの秘密ドック。

そこにはセフィロトのメンバーと、新たにセフィロトに加わったミケランジェロ。そして、ユノ・アーキスがいた。

「悪いわね、ユノ。私たちの機体まで改修してもらって」

ベリアはユノに話しかける。

「いえ、ベリアさんの頼みをそう簡単には断れません」

ユノはベリアに向かってそう返す。

それでは私は、と言ってユノは自分の機体に行く。

その後プロトレマイオス？に合流するんだらうとベリアは思い、そして目の前を見る。

ツヴァイテュルフィングを改修したメフィストガンダム。

B・Rはさらなる追加装備を施され、完璧に近づき、回収したアインネイリングはファウストガンダムとして、新たにセフィロトに運用される事となる。

そして、セロは目の前の機体：ジャオエルとの決戦で中破したルシフェルを改修した新たなガンダム　ルシファーガンダムを見る。

「ま、そこそこのメンツなんじゃねーの」

セロはそう言って機体を見上げる。

「俺もアイツに偉そうな事を言った手前、戦うのをやめるわけにはいかんしな」

セロはそう言って、機体のスペックを確認する。

「ま、使えねーわけでも無さそうだしな」

そして、セファイロトは新たな戦場に向かう。そこに待つのが何であれ、彼らが絶望することは決して無いだろう。

カレンとカトレアは、二人でカトレアの姉であるセラの病室に見舞いに来ていた。

カトレアは、姉さんに友達を見せたいと、カレンと共にやって来ることにした。

「入りますよ。姉さん」

カトレアはセラの病室に入る。

病室の中で、セラは相変わらず虚空を眺めている。

「この前来たときにも話しましたが、彼女が私の友達のカレンです」

「は、はじめまして」

カレンはやや恐縮しながらセラに挨拶する。

それから、特に何の変哲も無い話をそれから少し続けて、カレンとカトレアは帰っていった。

それと入れ違いになるように一人の青年 セロが病室に入ってくる。

「…また、来ちゃったな」

セロは部屋に入りながら呟く。

「ま、色々話したい事も有るが、お互い無事で何よりだ」

セロはセラに話しかける。

それから少し話しをして、セロは部屋から出ていく。

「…早く戻ってこいよ。世界は思ったよりずっと面白い」

二期第一話 襲撃（前書き）

遅れに遅れた二期第一話！スランプ入ってたので出来れば生暖かい目で見てください！！

二期第一話 襲撃

ジンクス？とアヘッドがカタロンの基地を襲撃する。

粒子ビームが放たれ、デブリに偽装した基地は瞬く間に破壊される。

「生態反応消滅しました」

「よし、任務完了。念のため爆破しておけ」

「了解」

アヘッドのパイロットの指示にジンクス？のパイロットは忠実に従う。

証拠を隠滅するために装備された爆弾を基地に取り付ける。

そして、基地から少し離れた所で爆弾を起動させる。

起動した爆弾は基地を完全に破壊し尽くす。

「任務完了。帰投する」

そして、アロウズの部隊は母艦に帰投する。

「そう言えば、聞きました？イヴェット・テレーズがカタロンに参画したとか言う噂」

「下らん。あの女がカタロンに参画したならもっと大々的に知られ

ているハズ」

そこで、アロウズのMS小隊の隊長はおかしな事に気づく。

リーダーにノイズが走るのだ。

「ジャミングか？」

アロウズの隊長は少し思考して、部下に警戒するよう呼び掛ける。

すると、案の定隠れていたMS 青く塗装されたオーバーフラッグ
やイナクト、それにティエレンと言った旧世代MSが現れる。

「どうやら死にたいらしいな！！全機、攻撃開始！！」

隊長の言葉に従い、アロウズの小隊はカタロンの部隊に攻撃を加える。

「そんなMSで、我等に勝てる」と

そして、一機のジnkスがビームライフルを放とうとした時、異変
に気づく。

「なっ…ビームが出ねえ！！」

隊の他のメンバーも似たような状況だ。

アロウズ部隊のメンバーが戸惑っている内にオーバーフラッグは接近して、隊長のアヘッドを切り捨てる。

「なっ…、隊長が殺られた!!」

「クソッ、何でビームが出ないんだよ!!」

その合間にも、ジンクス？が撃墜される。

「全く…、アロウズのパイロットはまともに回避運動も出来ないのか…」

イヴェットは呆れたような声音で呟く。

その際にもジンクス？は落とされる。

「ドライメーディア、任務を完了。ステルスフィールドを解除します」

今まで隠れていたニネットのガンダム…ドライメーディアがステルスフィールドを解除する。

「ケビン、お疲れ様です」

ニネットはオーバーフラッグのパイロット…ケビン・ウォーカーに声をかける。

「…まさか、あの基地が囷だと気づかないとは思いませんでしたよ
ケビンはイヴェットに告げる。

「何、だからこそ意表を突けると言つものだ」

イヴェットがケビンに笑いながら告げる。

あの戦いの後、MSを破壊された？中隊？は、自らの支配領域にカ
タロンを匿う代わりにMSの供与を受けていた。

「まあ、この宙域からは早く離脱するでしょう。スポンサーからの
情報がある」

イヴェットは部隊員に話しかける。

「ケビンの兄、アベルが地上にいるらしい。私たち、オペレーショ
ン・ローレライはこれよりアベル・ウォーカーの暗殺のため地上に
降りる。ケビン、構わないな？」

ケビンは少し躊躇ってから答える。

「…兄は、アロウズの象徴です。更に僕たちの仲間を何人も殺して
います。だから…」

そして、ケビンは迷い無く言い放つ。

「僕が、決着をつけます」

とある宙域に存在する宇宙要塞。

宇宙要塞と言っても小規模な物でまた、すでに放棄された物だ。

そこに一機のMS　メフィストガンダムが侵入する。

「おつかねえなあ、つたく」

メフィストガンダムのパイロット…ミケランジェロは施設の隔壁を破壊しながら進んで行く。

「…しっかし、マジに有るのかね、イオリアの遺したデータとやらは」

『常識的に考えれば、もう残ってないでしょう』

メフィストガンダムの最大の特徴 機体に搭載された人格 A I フェレスがミケランジェロに告げる。

「だろうな…」

ミケランジェロは呟きながら探索を進める。

「生態反応は無し、つか…」

成果の出ない探索に飽き飽きしてきた所で、メフィストが何かに引っ掛かる。

それと同時に施設に警報が鳴り響く。

「何だ何だ!？」

『警備システムが起動したようです。私が解除を試みます 解除不能。迎撃の準備を』

「つたく!! 使えねえな!!」

メフィストは両手のバスターソードを構える。

そして、出てきたMS 鹵獲されたものらしい ティエレンをバスターソードで切り刻む。

ティエレンは呆気なく破壊されていく。

「技術の進歩をなめんなってんだ」

『同感です』

フェレスが言葉を紡いだ直後、施設に激震が疾る。

『施設の自爆装置が稼働。早急に脱出することを推奨します』

「わかってる!!」

ミケランジェロはすぐに脱出ルートに入り、施設から脱出する。

「まったく、ここもハズレかよ」

ミケランジェロはぼやく。

『これで三連敗ですね』

「言うな、ポンコツ」

ミケランジェロはモニターを軽く叩く。

彼はセフィロトの本隊とは別に、イオリアの遺産と呼ばれるプログ

ラムを探索していた。

イオリア計画の目的について何か手がかりになるような物を見つけるためにだ。

『ミケランジェロ。貴方に連絡があります。今すぐアンリ・マユと合流、CBの障害となる可能性がある部隊を叩いてください』

「了解、メフィストをコンテナに接続しといてくれ」

ミケランジェロはそう言っつてメフィストのコクピットの中で仮眠を取る。

メフィストはコンテナに接続され、そのまま地上に向かった。

「…ローレライが動いていますか…。わかりました。？スポンサー？には私も言っつておきます」

地上、サンクチュアリ跡地の無事だった施設を統合し、新たに作られた施設。ネオ・サンクチュアリ。

ここで、カトレアはテストパイロットをやっていた。

最近ではシャオの後継として政治方面にも関わるようになってきたが、それでも彼女はテストパイロットだった。

「さて、明日のテスト内容は…連邦から依頼された物ですね。確かMSの拡張性を試すための…」

カトレアは呟きながら、資料を読む。

それから、とある場所に通信を繋ぐ。

「…はい、例の件ですが…。やはりスポンサーについては余り信用されない方がよろしいかと。はい、連邦内部でもシユバルツ大尉の部隊が動いていますし…はい、わかりました。それでは無事を…」

カトレアはそう言って通信を切る。

それからシャオとの通信を繋ぐ。

「翁ですか？例の工作は上手くいってますか？…本家にはコリニツクをヴォーダンが乗っ取るための策の一つとでも言っておいてください。あの無能達の中から情報を漏らすような事があれば…わかりますよね」

カトレアはそう言って通信を終える。

そのままソファアで横になる。

機体の調整はカレンに任せている事もあって不安はほとんど無い。

「…アロウズとカタロン。どちらが勝っても、私たちには関係無いと割り切るには…、私もカレンも、若すぎますよ、翁」

カトレアはカレンの兄弟であるケビンがカタロンに参画している事を知っている。

カタロンが勝つにせよ、アロウズが勝つにせよ、間違いなくカレンは傷つく。

「…カレンだけは護ってみせますよ」

カトリアは決意を込めて呟く。それを見ている物は、何も無かった。

地上に向かうリニアの中で、ケ빈は仮眠を取っていた。

しかし、もうすぐ自分か兄か、どちらかが死んでしまうような状況で普通に眠る事ができるわけもなく、ただ無為に時間を潰す事になっていた。

「眠れないか？ケ빈」

「イヴェットさんですか…」

今、このリニアはスポンサーにより彼らの貸し切りとなっている。

「余り気負うな。お前の兄の実力は本物だ。そんな事ではただでさえ低い勝率が更に下がってしまう」

イヴェットは諭すように言う。

「アレは間違いなく天才だ。何人ものパイロットを見てきた私が断言する」

「…イヴェットさんは怖くないんですか？」

聞いてしまったてケ빈はしまったと思った。

「怖い？私がか？冗談も休み休み言った方が良いな」

「…すみません」

「気にするな。どうせお前に出来なければ誰にもできん」

イヴェットは言っただけ席を立つ。

「明日までに完璧にコンディションを整えておけ。最悪の事態には最高の準備をする必要がある」

そう言っただけイヴェットは自分の部屋に戻っていった。

無数のビームの光条が戦場を飛び交う。

それを回避しながらルシファールガンダムは一機、また一機とMSを撃墜する。

「はっ 精鋭部隊つつつてもこの程度かよ!!」

ゼロは口では嘲りながらも気を抜かない。

そこに、砲撃が叩き込まれる。

ゼロは間一髪で砲撃を回避し、砲撃が放たれた方向に機体を疾らせる。

砲撃を放った機体…。

アテナは一瞬怯んだように見えたものの、すぐに次の砲撃を放つ。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ブリュンヒルデはルシファアの気迫にたじろぎつつも、変形して距離を離す。

「逃げるのかよー!!」

セロは嘲るような口調で言い放つ。

「…ボク達を、余り嘗めない方が良い」

ブリュンヒルデのコクピットの中でリタが呟く。

それと同時にデブリに隠れていたジンクス？がルシファアの背後から攻撃を仕掛ける。

「ハッ、俺のケツを取るたあな!!」

セロは呟く。

前方のブリュンヒルデもこちらに向かって反転して来る。

「おもしれえ!!」

セロはMS達を相手取るために機体を再び動かした。

「全く…、あいつはしゃぎ過ぎてないか？」

レイは呟きながら砲撃を放つ。

ファウストガンダムから放たれた砲撃は、しかしあっさり回避され

る。

「そりゃそーか。いくら何でも砲撃に当たるような奴がエース部隊にいるわけは無いよな」

レイはファウストの腰のレールガンで牽制する。

「おっ先い!!」

ベリアのB・Rが敵の母艦　メーティアを叩くべく行動を開始する。

「俺も、動きますか」

レイとファウストガンダムは、射点を変えるべく行動を開始する。

そこにアテナの砲撃が叩き込まれる。

レイはギリギリでかわしたが、片足をもっていかれる。

「…アテナか、パイロットは確かメアリー・コリンズとか言ったか…」

レイの加虐心に火が灯る。

「ちょうど良い、コリニックの社長に娘の死体をプレゼントしてあげますか」

そして、レイは機体をアテナに向ける。

そして、GNランチャーを放つ。

アテナはそれを回避し、更にアテナについていたジnkクス？アサル
トがミサイルを放つ。

ファウストはフレアを使ってミサイルを攪乱、そしてジnkクス？ア
サルトに対してビームライフルで射撃する。

アテナとジnkクス？アサルトはファウストに釘付けになる。

「っと、後はベリアがメーティアを落とすだけか」

ベリアのB・R・は、攻撃をかわしながらとにかく前進をし続けて
いた。

今回の戦いはメーティアさえ落とせば勝ちが決まる。

故にB・R・は前進を続ける。

「艦長！！未確認のガンダムがこちらに向かってきます！！」

「対空防御、弾幕を張れ！！」

メーティアは弾幕を張ってB・R・を近づけないようにする。

しかし、B・R・はそれを嘲笑うかのように前進をやめない。

B・R・はブリッジの前に到達し、ビームマグナムを構える。

『ここまでか…』

アンドリユーを含め、ブリッジの誰もの心に絶望が去来する。

「だめっ！！」

しかし、突如B・R・に対しアフロディアが体当たりしビームマグナムは放たれる事は無かった。

「ちっ…」

ベリアは舌打ちをしつつアフロディアを引き剥がそうとする。

しかし、その隙にオーディンに接近されてしまい一時的に戦場を移す。

「まったく、流石はアベル・ウォーカーの部隊ってところから」

ベリアはぼやきつつも目的を忘れない。

「ま、そいつの親父の部隊は母さんが殺ったんだし…」

ベリアはB・R・にビームトンファーを展開させる。

「私に出来ない事でも無いっか」

そして、ビームトンファアを構えたB・Rはオーディンと斬り結ぶ。

アフロディアの支援を受けたオーディンと、性能の底上げを図った改修を施されたB・R。

二機は戦闘を繰り広げながらメーティアから離れていった。

『うっう』

『痛い…』

伏兵として隠れていたジnkクス？のパイロットの音が通信機から漏れ聞こえる。

それを意に介する事無くブリュンヒルデとルシファアは斬り合いを続ける。

「はっ、良いぜえ！良い戦いだ！」

セロは叫びながら戦つ。

さながら狂戦士のように、荒々しく、猛々しく。

「…こいつ、人間のくせにっ！！」

リタは一瞬激昂しかけるも、すぐに冷静さを取り戻す。

そして、冷えた頭で考える。

『こいつ…、何でこんな桁違いの性能を…、まさか!!』

リタはすぐにその答えに行き着く。

「トランザム、か…」

機体の性能を三倍まで叩き上げるトランザムシステム。

オリジナル太陽炉の切り札にして、CBにのみ存在するシステム。

『だが、それをこんな長時間…、専用のシステムでも作ったのか…』

そこまで考えてリタは対処法を導き出す。

すなわち、トランザムが終了するまで逃げ切ること、それさえ成し遂げれば勝つ事ができる。

『気づいたか…』

セロは敵の動きが変わった事に気付く。

ルシファールガンダムに搭載された新システム、Wトランザム。

トランザム中に機体に貯蔵してある圧縮粒子を機体に回す事によってトランザムの使用時間を飛躍的に伸ばしたシステムだ。

更に外部にトランザムを使っていることを隠すための二重装甲など、

実戦の中で得た技術を詰め込んだ機体になっている。

「種さえ分かれば!!」

ブリュンヒルデはルシファーから逃げる。

それをルシファーが追いかける。

そして、セロはセフィロトのメンバーに通信を入れる。

「撤退だ!! 作戦は完了。次の作戦に移る!!」

そして、セロはアンリ・マユに帰投した。

ファウストがアテナに砲撃を放ち、アテナはそれを回避する。

反対にアテナが砲撃を放つてもファウストは砲撃をかわし、レールガンで迎撃する。

「…しかし、メーティアの特別機はやりますね」

一般兵とは大違いだとレイは呟く。

「…まあ、俺もそこそこ楽しめたし…」

レイは呟きながら、離脱の機会を図る。

今回の目的はアロウズの中でも特に精鋭を集められているメーティアを襲撃、あわよくば殲滅してアロウズ全体にプレッシャーをかけ

る事を目的としている。

故に目的は十分に果たしていると言える。

「…それに、あつちにミケも合流したようだし…」

レイは呟きながら一つの選択肢を選ぶ。

「行け！！ファンゲ！！」

メフィストが改修される際に浮いたファンゲを搭載しているファウストは、ファンゲを射出する。

「空気程度には役に立つ兵器ですよ、どうしますか？コリニックの令嬢」

そのままファンゲを残してファウストはアンリ・マユに帰投した。

アフロディアとオーディン、それにB・R・の戦場には新たにメフィストが乱入してきていた。

メフィストはとにかく手当たり次第に攻撃を開始する。

『相変わらずエレガントさの欠片も無い戦い方ですね』

「消すぞこの野郎」

ミケランジェロは呟きながらも戦場をかき回す。

「離脱するぞ！！ベリア！」

「りょーかい!!」

ベリアはミケランジェロが構築した離脱ルートを通り、戦場から離脱した。

「逃げるよ」

オリビアが離脱するMSを目で追いかける。

「逃がすか!!」

メーティアのメンバーは追撃しようとする。

「待て、深追いはするな」

それに対しアンドリュー艦長とココが制止する。

「我々には次の任務が待っている。それに敵の目的は我々にプレッシャーを与える事だろう。ならわざわざ乗ってやる必要もあるまい」

アンドリューはそう判断し、部下を帰投させる。

「後はコリニックの私兵部隊にでも任せておけ」

そう言いながら、一つ咳払いをする。

「まったく…、年は取りたく無いものだな。冷静な判断が出来るようにになってしまっ」

「艦長？」

「何でもない。コッ」

部下を殺された怒りを呑み込んで、アンドリューはメーティアを次の任地へ向かわせる。

そこで何が待っているのかは誰にもわからない事だった。

「いや〜、本当に助かったわよ。ミケ」

「その呼び方はやめろ」

『良いじゃないですか、ミケ』

「バラすぞポンコツ!!」

アンリ・マユに帰投したセフィロトのメンバーは、任務すなわちアロウズに対する遊撃部隊を行うため、情報を集めていた。

「まあ、それは置いといてだ。次の作戦目標が決まったぞ」

セロが紙の束を持ってブリーフィングルームに入ってくる。

「で、どんな任務なんだよ」

「まあ、落ち着けミケ。次の任地は地上、コリニツクの私兵部隊が相手だ」

「コリニツクの？アロウズじゃなくて？」

ベリアの疑問に答えたのはセロと共に部屋に入ってきたリンだった。

「正確には、アロウズと独自に取り引きをするための下請け、と言
うべきでしょう。余り表沙汰にできない商品を取り扱っているみた
いですね」

そう言ってモニターに資料を写す。

そこに写っていたのは箱形の胴体に足が付いたような機械…オート
マトンだ。

「…なるほどな、つまりコイツを叩けば取り敢えずは安心してとこ
か」

「いえ、他にもいくつかルートがありますが…、まあ気休め程度に
はなるでしょう」

「だが、その気休めは必要だ」

レイガリンの言葉を引き継ぐ。

「ま、話はまとまったし…」

「動きますか」

アベルを討つために地上に降りたオペレーションローレイ。

「ケビン、本当に大丈夫ですか？」

「ゴメン、ニネット。僕は大丈夫だから」

ケビンはオーバーフラッグを駆り、アベルが立ち寄るとの情報が入った基地に向かう。

彼らの作戦は、ステルスフィールドの中でビームを無効にした後で、軍曹率いる別動隊が襲撃、パイロットが乗る前のリベリオンを破壊。更にそのままアベルを暗殺すると言う作戦だ。

「…前方に熱源反応!!」

しかし、いきなり基地からビームが放たれる。

更に、ケビン達に通信が入る。

「調子はどうだい？何も知らずにノコノコと…、騙されたとも知らずに」

前方にビームを放ったMS…メイガスのパイロットが嘲る。

更にケビン達の背後からMSが現れる。

「さあ！！せいぜい良い声をあげて死んでもらおう！！」

二期第二話 策謀

「ステルスフィールド展開!!」

二ネットがドライメーディアのステルスフィールドを起動する。

「各機散開!!」

イヴェットの指示にローレライのメンバーは即座に反応する。

「…裏切られた、か」

イヴェットは呟く。

コリニック社の私兵部隊は特殊な試作MSをテストするために集められたテスター集団だ。

その中でも特に強力な実力を持つ部隊はアロウズと共に実践によりデータを収集する事になっている。

無論、イヴェット達はそんな事は知らない。

しかし、イヴェットは一つの結論を出す。

「こいつらを叩く!!ステルスフィールド内なら互角だ!!」

「……………了解!!」

ローレライのメンバーはイヴェットの指示に従う。

各々の武器を携え戦闘を開始する。

「ふむ…、裏切られてもまともに対処できるか」

メイガスのパイロットは頷く。

「ま、それでこそ僕に箔が付くってもんだね」

そして、メイガスのパイロット カイム・ナイルは部下に命令する。

「困んで滅多討ちにしちゃいな！！ビームは効かないばいつから実弾兵器でね！」

カイムの言葉にアロウズのメンバーは忠実に従う。

カイムが用意したNGNバズーカや、実弾マシンガンでローレライのメンバーに応戦する。

「読まれている！？」

「敵はこちらの戦術を読んでいるか…」

イヴェットは呟く。

「ローレイ、各メンバーに告ぐ。私とケビン、それにニネットが
囷になる。お前等は離脱して別動隊と合流しろ」

イヴェットの命令にローレイのメンバーは忠実に反応する。

ローレイのメンバーはすぐに戦線を抜ける。

「隊長!!」

「逃げたのは追わなくて良い。問題はコイツ等だ」

カームは呟く。

「なるべく生け捕りにしよう。体に聞くこともある」

カームはメイガスのNGNバズーカを構える。

「どうだい？アロウズの皆さん。その方が君達にとっても有益だ
は思うが」

「今の指揮官は貴方です」

アロウズのメンバーの声にカームは気を良くする。

「うむ、それでは全軍、あの旧式MS達を捕獲しろ!!」

コリニック社特殊実験施設ネオ・サンクチュアリ

「…これがフラグメント、ですか」

カトレアは目の前のMSを見る。

「はい、今回私が貴方との模擬戦で使用するMSです」

フラグメントのパイロット…アシャの声は極めて抑揚が無い。

「わかりました。カレン、CKの準備はできてますね」

「うん！！いつでも出せるよ」

カレンの言葉にカトレアは頷く。

「それではジンクス用追加ブースターと翠晶のテストを開始したいと思います。アシャ、準備を」

アシャはカトレアに言われるとすぐにフラグメントに向かう。

「…なんか、あの人怖いね」

「そうですか？私にはむしろ…」

カレンとカトレアは話しながらCKジンクスの装備をチェックする。

「使用は接近戦、OSの同期も完了。いつもながら完璧な整備です。カレン」

「…誉めても何も出ないよ」

「何か出そうと思ったわけでは有りませんので」

カトレアは呟くとCKジnkクスに火を入れる。

「CKジnkクス、カトレア&カレン、テストを開始します」

そして、CKジnkクスはテストのための戦場に降り立った。

「カトレアちゃん！！フラグメントは高機動と強力な火器をもつて
る！！だから…」

「でも、接近さえしてしまえば！」

カトレアは翠晶をCKジnkクスに構えさせる。

「行きます！！！」

そして、翠晶を構えたCKジnkクスはフラグメントに向かって全速
力で突撃する。

フラグメントは肩のチェインガンを使って弾幕を張る。

「弾幕ですか!!」

カトレアは射線から離れるようにCKジnkスを動かす。

「アシャとか言うテストパイロット…やりますね!」

「ほんと、この前戦ったカイクとか言う奴より普通に強い!!」

カレンとカトレアは言葉を交わし、敵に対する認識を改める。

「まあ、私たちには敵いませんが!!」

高速で飛び回りながら弾をばら蒔くフラグメントに対し、カトレアはビームライフルで迎撃する。

「…まさか、リベリオン並みのスピード!??」

カトレアは驚愕しながらも応戦をやめない。

フラグメントは弾をばら蒔きながら戦場を蹂躞する。

「かわすのが精一杯ですね…」

カトレアは思わず弱音を漏らす。

「それにしても…あの加速で正確な射撃か…アシャさんは何者なんだろ?」

カレンの疑問に答えられる人間はいなかった。

バズーカの弾丸をかわし、レールガンを叩き込む。

しかし、重量級MSであるメイガスは揺るぎもせず、むしろ、レールガンを放ったオーバーフラッグにグレネード弾を放つ。

グレネードをギリギリでかわしたオーバーフラッグはそのまま接近してきていたジンクス？に羽交い締めになされてしまう。

「ケビン！！」

「余所見している暇があるのかい？」

メイガスは右手からエグナーウィップを射出、ドライメーディアはギリギリでかわすがそこに電磁ネットが叩き込まれる。

「ああああああああああああ！！」

機体に電流が流れ、二ネットの意識は一瞬遠くなる。

「二ネット！！」

ケビンがオーバーフラッグのコクピット内で叫ぶ。

「このままでは……」

イヴェットが呟く。

イヴェットのイナクトはブレードライフルで射撃を繰り返しながら距離を取りつつ立ち回っている。

「まともに回避運動も取れないパイロットに遅れを取るとはな…」

イヴェットは呟きジंकウス？を見据え、更にメイガスを見据える。

「まあ良い、遊んでやるよ。私が死ぬまでな！！」

もはや、ドライメーディアもオーバーフラッグも実戦には耐えきれないだろう。

故に、イヴェットは最後まで自分は戦う事を選んだ。

「そつちに逃げたぞ！！」

「捕まえる！！」

イヴェットのイナクトは上手くメイガスと立ち回りながら戦場を駆け回る。

「…とは言え、既に弾切れか…」

メイガスはランチャーからトリモチ弾を放ち、イヴェットのイナクトを追い詰める。

「…そう易々と私が軍門に下ると思っているのか？まったく…」

そして、イヴェットは叫ぶ。

「無礼られた物だな！！このイヴェット・テレーズも！！」

「……ここまでか」

イヴェットは呟きながら、自分の意識が消えていくのを感じた。

「それで、確かに隊長は私と合流するように言ったんだな？」

軍曹が合流してきたローレライのメンバーに質問する。

「あ、ああ。確かにそう言った」

「てか、どーすんのさぐんそー」

「お前は黙っている。リオナ」

はいはいとリオナは素直に頷く。

「自分たちは今から撤退を開始する。恐らく今ここにアベル・ウオ
ーカーはいない」

「し、しかし、それでは隊長達が……！」

「命令を復唱しろ」

軍曹は冷徹に言う。

「は？」

「命令を復唱しろと言った。三度は言わん」

「…はっ、現戦域から我々は離脱します」

「それで良い。諸君、離脱しよう」

軍曹は少しだけ遠くを見ながら言う。

「今は隊長達を信じて待つ。それが最善だ。ヨーロッパ支部に受け入れを打診しといてくれ」

軍曹は言いながら自分の機体 ガトリングタンクに向かう。

「全軍、この戦域から離脱する。異議のある者はいないな」

軍曹は生き残った部下に命令する。

「隊長がいない今、部隊の指揮権限は自分にある。自分は君たちを無駄死にさせるわけにはいかん。…わかってくれ」

軍曹は言いながら拳を握る。

握り締めた拳からは、血が流れていた。

「…頼む、わかってくれ」

その軍曹の様子に何も言うことは出来なくなり…、結果、命令はすぐに遂行された。

「イヴェット・テレーズの逮捕に成功した、か…」

連邦のとある基地に入電する。

「了解、この基地に収容できる様にしておくよ。アロウズの皆さん
そう言いながらその基地の司令は少しだけ目を擦る。

それからしばらくして、廊下を走る音が聞こえる。

「ラインハルト！…どう言うことだ！！」

「何の事だい？ シュバルツ」

基地司令…ウィーベック・ラインハルトはシュバルツの怒声に
応える。

「貴様…、自分からアロウズ打倒などと抜かして、その為に私
たちも誘ったハズだ。それが…」

「話はわかる。だけどね、物事には効率と言う物がある」

ラインハルトはそう言いながら、手元の資料を見る。

「それに、アロウズの新兵器を拝むチャンスでもある。ついでに私
には強い味方が付いているし…ね」

ラインハルトはそう言いながら椅子に腰かける。

「だが…」

「君が言うことは正しいよ。ただ、物事には順序があるってだけさ」

そのままラインハルトは目を閉じる。

「すまないが三日ほど寝てないんだ。少し眠らせてもらおう」

ラインハルトはそう言って目を閉じる。

「おい！！…もう眠ったのか」

シュバルツはやや呆れた後、すぐに行動に移る。

その行動は、アロウズにもシュバルツ自身にも思わぬ影響を及ぼす事になるのだが、今それを知ることのできる人間はいなかった。

弾幕をCKジnkクスは掻い潜る。

接近戦を挑めないCKジnkクスはそのまま撃ち合う事しかできない。

そして、それはフラグメントにとっても同じ事だった。

お互いに相手に決定打を叩き込む事は出来ない。

更に追加ブースターのお陰で追い付いているCKジnkクスと全身がブースターのようなフラグメントの粒子消費量はほとんど変わらない。

つまり、ほぼ完璧に互角の戦闘なのだ。

「…あれだけばら蒔いても当たりませんか」

「…仕留められない、ですか…」

本気で行くかとも思ったが、いくらなんでもテストでアレをやるのは自分の主義に反するとカトレアは思い直す。

「…お互い、粒子残量が無くなった時が、負けですか…」

「だったらまだこっちが有利だよ!!」

確かに余り機体に粒子を貯蔵出来ないフラグメントにこの展開はやや不利だ。

しかし、そんなことはアシヤも理解しているはずだ。

つまり…、

「…っ!!」

いきなりフラグメントがこちらに突撃を仕掛ける。

「何もしないなら勝てない、なら仕掛ける」

アシヤは無感情に呟く。

「カトレアちゃん!!」

「わかってます!!データよろしくお願いします!!」

カトレアはCKジnkスの右腕に装備された翠晶を構え、そして居合いの構えをCKジnkスに取らせる。

フラグメントが弾幕を張りながら近づくのを最低限致命傷のみをか
わして…、

「今です！！」

フラグメントとお互いの得物を突き付け合う。

それにより模擬戦は終了。結果は引き分けだった。

「やりますね。貴方に対する評価を変えなければなりません」

カトレアはアシヤにそう伝える。

「模擬戦、凄かったですよ！！」

カレンもアシヤに賛辞を送る。

「…」

アシヤは軽く会釈をして、自分の部屋に向かう。

「あの人……」

カレンは何故かアシャから違和感を感じた。

二期第三話 進軍

体に揺れを感じてケビン・ウォーカーは目を覚ました。

彼の両手には手錠が付けられており、それから徐々に記憶が蘇る。

「やっとお目覚めか」

見れば同じように手錠をかけられたイヴェットとニネットが目の前にいる。

そこでケビンは自分が車に乗っている事に気づく。

それも護送車とでも言うべき物に、だ。

「…作戦は、失敗してしまいましたか」

「まあ、騙されていたからな。あそこにアベル・ウォーカーがいなかった以上失敗したと言わざるを得ないだろう」

イヴェットは呟く様に言う。

「…とは言え、敵の新型を落とす事に成功したんだ。まるで失敗とは言えないだろう？」

「…すごく、前向きな意見ですね」

ニネットの言葉にイヴェットは鼻を鳴らす。

「そうとでも思わなければやってられん」

そしてイヴェットは横になる。

「ケビン、ニネット。お前等も休んでおけ。基地に收容されたら尋問責めだぞ」

そのまま寝息をたてはじめる。

「…凄いですね、この人は」

少なくともこんな状況で眠れるような図太さは自分は持っていない。

「これが俗人と大物の違いでしょうか」

ニネットは呟く。

「ま、他にする事も無いしね…」

「アンリ・マユ、地上に降下。間もなく目標地点に到達します」

「クリニック社私兵部隊に対して強襲をかけます。敵部隊はシンクス?を中心とした構成になっています」

「了解した」

アンリ・マユから先行して一機のMSが地上に降下する。

MS ルシファールガンダムはそのまま地上に降りる。

「施設を確認、MSは出来るだけ起動前に破壊してください」

ゼロは無言でジंकクス？を破壊する。

起動していないジंकクス？は瞬く間に数を減らしていく。

そして、近くのコンテナを破壊する。

「任務完了、帰投す」

ゼロがアンリ・マユに帰投しようとしたその時、ルシファアのすぐそばをビームの粒子が通り過ぎる。

「どうやら、帰しちゃくれないようだな」

そして、ゼロはビームが放たれた方向に視線を向ける。

そこでは二機の白いMSがこちらに銃口を向けていた。

「メタトロン、ロダン・アルレッキーノ、目標を確認。ティファエラ、覚悟はできているか？」

「メタトロン、ティファエラ・アルレッキーノ。ま、いつも通りにやれって事でしょ」

そして、二機のメタトロンはルシファアに視線を向ける。

「ま、アンタ等のやりたい事はわかるけど…」

「依頼人曰く、ルールを守れないなら退場してもらおうしか無い、ら

しい」

そして、メタトロン は12枚羽を展開、両手の銃剣からビームを放つ。

ルシファーはすんでの所でそれをかわし、ビームガトリングで応戦する。

「ティファエラ」

「OK」

メタトロン の背部に装着されたレドーム状の装置が起動する。

「ジャミングシステム、作動！」

次の瞬間、ルシファーの動きが多少鈍くなる。

しかし、それは一瞬、すぐに普段の動きを取り戻す。

「やるな…。パイロットはリンド様を殺ったヤツか？」

「キーノ、どうする?」

「勝って帰る。それだけだ」

メタトロン は両手の銃剣からビームサーベルを発振させ、ルシファーに斬りかかる。

「キーノったら…。最高ね」

ティファエラはメタトロン に両手のビームライフルを構えさせる。

「ま、ついでだけどリンド様の仇でも、取っちゃおっかな」

メタトロン はビームを放ち、じわじわと、しかし確実にルシファ
ーの逃げ道を塞ぐ。

「キーノ、援護は任せて!!」

「いつも通りに頼む」

「了解」

そして、ルシファアはバスターブレードで応戦するも、トランザム
が解除されている状態ではやや押されている。

「こいつ等……」

セロは歯噛みしつつも攻撃を捌き続ける。

「アンリ・マユ、状況は把握しているな」

「はい、もうすぐミケランジェロさんが援軍に向かいます!!」

リナの返事と同時にメタトロン は斬りかかる。

更に、12枚の羽が切り離されファングの様に機体を追撃する。

「逃がさん!!」

「させねーよー!」

「どーかしらねっ!」

セロは戦いつつ、サブモニターの表示を確認する。

後少いでトランザムの使用が可能になる、そこから逆転する事は充分に可能だ。

「…つまんねえな」

セロは呟く。

そうだ、メーティアの時みたくトランザムで圧倒するだけじゃつまらない。

むしろ、それ以上に強い何かと戦うためにもトランザムはとっておくべきだ。

どこか、狂った思考をしながら、セロは顔に笑みの表情を浮かべていた。

「座標設定、完了。ガンダムタイプが一機、ガシリーズに似たMS二機が戦闘しています」

「構わん、全員焼き払え。傭兵どもには消えてもらっ」

「了解、衛星掃射兵器メント・モリ、テストを開始します」

そして、地上に向けて巨大な砲筒が向けられる。

「管制室、ターゲットの確定、メント・モリ、発射します!!」

そして、砲筒から、巨大な光が放たれ

連邦軍基地、尋問室。

「…貴様等はカタロンの構成員で連邦に対しテロ行為を繰り返していた。間違い無いな」

「あの状況で他の答えがあると思ってるんですか？あなた方は？」

「気にするな、ケビン。こいつ等は脳まで筋肉で出来ている。寧ろここまで話せる事が奇跡だ」

「連邦の軍人の脳は筋肉なんですか？イヴェットさん」

「そうだぞ、ニネット。こいつ等みたいな脳筋になってしまったら手遅れだ。ケビンにも嫌われてしまうぞ」

「！本当ですか！？ケビン!？」

「ハハ、僕は例えニネットの脳が筋肉でも嫌ったりしないよ」

「良かった…」

ケビン達が話している内にアロウズの尋問官が机を叩く。

「貴様等!!ふざけてるのか!!」

「見る、ニネット、ケビン。あの表情を。発情したゴリラみたいだろっ」

「ハハハ…、発情したゴリラを見たことが無いからわかりませんね…」

「発情したゴリラはこんな顔なんですか?イヴェットさん」

「いや、これより少しマシかな…」

「~~~~~!!!!!!!!!!!!」

尋問室の外、シュバルツとラインハルトは佇んでいた。

アロウズが何か暴力的な手段に訴えたらすぐに止めるためだ。

「とは言え、これではアロウズが哀れだな。シュバルツ」

笑いを堪えながらラインハルトが言う。

「言うな、ところで私たちはいつからコメディを見ている？」

シュバルツも笑いを堪える。

「ところで少し真面目な話、良いか？」

「ああ。どうした」

「ゲイリーとか言うヤツが来たとき渡せって言われてたアレだが…」

シュバルツの顔が引き締まる。

「…アレは渡すな」

「わかってますよーだ」

自分の同期に癖の多い人物が多くいることを嘆きながらシュバルツは続ける。

「あのMSは危ない。理由はわからんが、そんな感じがする」

「わかってるさ。だから君に無茶言っつてこの基地に来てもらったんだからさ」

ラインハルトはそう言っつて煙草を吸っつ。

「ま、せいぜい役に立っつてもらっつとしよっつか。イヴェットにもカタロンにも」

「ちょっと前、コリニック社が作ったガンダムが奪われる事件、あったよね」

「そうですね」

「コリニック社製の新兵器ってやたらと奪われる印象があるんだけど…」

「それは気のせいではありません。まあ、この機体は最初からカترونに譲渡する予定らしいです」

カレンとカトリアは一機のMSを見上げる。

「GNC-2490、ローレライガンダム。私たちにできる事はこの機体がまともに使われる事を願うだけです」

機体設定

ガンダムサンダルフォン

デュナメスの改造機

パイロット シャオ・ヴオーダン

セフィラの守護天使によって運用されていたMS。

デュナメスの狙撃戦能力を強化した機体であり、他の性能を犠牲にした分狙撃の精度はオリジナルを遥かに越える。

しかし、飛行能力を捨ててしまったために総合力はかなり落ちており、戦闘においては僚機の支援が必須となる。

また、四脚と言う珍しい形態をとっている。

武装

GNスナイパーライフル

ガンダムラツィエル

パイロット ロダン・アルレッキーノ

アインネイリングの真の名前

スローネアインのGNランチャーをもう一つ追加したことに加え、

更に二門のレールガンを追加している。

パイロットの元々ツヴァイテュルフィング、ドライメーディアと連携を取ることが前提なので、総合力はそれほど高いわけでは無い。

しかし、ポテンシャルは非常に高い機体に仕上がっているため、パイロットによつてはいわゆる無双をする事が可能（これはサンダルフォンを除いたセフィラの守護天使の機体全てに言える事だが）

武装

GNランチャー×2

両肩に取り付けられたGNランチャー。

コンデンサーも追加されているため、速射を可能としている。

なお、他の二機とドッキングすることで威力を強化できるがパイロットの性格上余り行わない戦術である。

GNビームサーベル

通常のをそのまま使用している。

GNハンドガン

非常装備であり、全ての武装が破壊された時に使用する。

レールガン×2

高威力のレールガン。ドライメーディアとの連携の為に追加されたが本来の目的で使われる事は無かった。

ガンダムザフキエル

パイロット ティファエラ・シユルツ

ヴァーチェの改造機

中にはナドレを搭載しており、ナドレはトリアルシステムの有無を除けばオリジナルと変わらない。

武装はヴァーチェの物にガトリングレールガンを追加しただけの物。

しかし、このガトリングレールガンは中々に侮れない装備であり実弾兵器であり、尚且つ弾一つ一つに対ビームコーティングが施されているためにGNフィールドを張ることが可能な機体に対してはかなりの実力を持つ。

武装

ヴァーチェの物と同じ

ガトリングレールガン

上記の通り。

ガンダムミカエル

パイロット ソーン・ソーンツァ

エクシアの改造機

エクシアの全身に追加装甲を取り付けた物で、装甲をパージしたら中からは全身に追加ブースターを取り付けた機体が出てくる。強力な装備である翠晶を搭載しており、油断していると一瞬で撃墜されてしまう。翠晶を扱う事に特化した機体であり、通常の手段で倒す事は非常に難しい。

装備

型式番号 GB-999 Emerald

超高出力を誇るビームブレードであり、疑似太陽炉を使っても緑色の刀身を形成する事から名付けられた。

またの名（ウツクシ）ウツクシと言つより通称）を翠晶ウツクシと言つ。

型式番号の999は最強を意味する数字を三つ重ねた物であり、ビーム系接近戦闘装備の中では間違いなく最強の装備。

GNバスターソードやGNブレード等の実体剣にGNフィールドを纏ったような兵器ならそのまま切断できる。斬るときしか刀身を発生させる事が出来ないが、それは相手にリーチを読ませないと言う利点にそのまま繋がる。

高密度のGNフィールドですら易々と切り裂いてしまえる。

これを相手につばぜり合いを行おう物ならそのまま刀身ごと持っていかれる。

非常に高価であり、オリジナルで現存するのは五機しか無い。

ちなみに、セフィロトの所持している物以外の翠晶はカレンとカトリアがリンド達のデータを流用して再現した物。

GNツインエッジ

二枚刃を持つ大太刀。

刀身にGN粒子を纏わせる事が可能。

小太刀と大太刀とを分割することも出来る。

ガンダムハニエル

パイロット リオナ

ドミオンの改造機。元々はベリアがドミオンの正規マイスターに選ばれていた場合、この装備が採用される事になっていた。後にタンクユニットが完成し、ドミオンとは全く違う物になっている。

武装

内蔵装備はドミオンと同じ。

ツインGNビームガトリング×2

GNミサイル

GNビームサーベル×2

ガトリンググレネード

タンクユニット

ハニエルの追加武装ユニット。単体でMAとして機能しており、単体で扱う場合はガトリングタンクと呼ばれる。

パイロットは軍曹。

武装

GNビームキャノン×2

GNビームガトリング×2

GNビット×6

GNミサイルランチャー

ガンダムカマエル

パイロット ハイド

キュリオスの改造機。キュリオスの飛行能力を底上げするための装備を追加されている。そのため武装はオリジナルのキュリオスと変わらない。

武装

キュリオスの物と同じ。

CBGN-XXXX ルシファーガンダム

マイスター セロ・バージュ

ジャオエルとの戦いで中破したガンダムルシフェルを改修した機体。

武装を追加した他、B・Rの粒子解放システムを組み込む事に成功した。

それによりトランザムとシステムの併用で機体の性能を9倍まで跳ね上げる事が可能。

また、疑似太陽炉をサブ動力として使っているためトランザムの使用時間が極めて長い。

また、ルシフェルと同じく独創的な武装が多い。
武装

GNパイルバンカー

巨大な杭打ち機。MSでもMAでも当たりさえすれば一撃で破壊する事ができる。

GNツインエッジ

ミカエルの物と同じ。

GNバスターブレード

大剣であり、刀身にGNフィールドを纏わせる事で二通りの斬撃が可能になっている。

ライフルモードにする事でビームマグナムクラスの射撃が可能となる。

G Nビームサーベル

通常の物。

G Nビームガトリング

ゼロの要望により実体弾との撃ち分けを可能としたビームガトリング。

これにより、G Nフィールドに対抗できるようになった。

G N C W - 0 2 メフィストガンダム

セフィロトと組むことになったミケランジェロのツヴァイテュルフィングを改良した機体。

主に単独行動を取るミケランジェロの為に疑似人格A Iフェレスを搭載している。

武装

G Nバスターソード×2

G Nビームサーベル×2

翠晶×2

GNCW - 01 ファウストガンダム

カテドラルから回収したインネイリングを改造した機体。強力な砲撃能力を持つ。

武装

GNビームランチャー×2

GNビームサーベル×2

レールガン×2

GNビームライフル×2

GNNB - 1 ガンダムジャオエル

パイロット リンド・リンクス

CBを追放されたイノベイド、リンドが使用するMS。第二世代機と同時期に開発された機体でありながらその性能は第四世代に匹敵しうる。

セフィロトの武力介入プラン？Project Nore？の中核として開発されたMSであり、三機が試作された。

その内一機はバールが破壊し、もう一機は間期シナリオで破壊されている。

カテドラルユニットと併用する事で全世界に対して圧縮粒子弾による攻撃を行う事が可能となる。

12枚羽を持つ特徴的な外見をしている。

武装

ジャオエル専用GNビームライフル×2

GNビームサーベル×6

GNファング×12

カテドラルユニット

超巨大MAカテドラル。その真の姿。

天使の羽のような巨大な武装ユニットになっている。

ジャオエルと接続する事により絶対的な戦力を得る。

武装

カテドラルファング×10000

超大型GNビームサーベル×4

GNキャノン

圧縮粒子弾頭×100

二期第四話 天軍

それは唐突に起こった出来事だった。

メメント・モリによる砲撃をルシファーがトランザムで防ぐ事に成功したのとほぼ同時刻、ネオ・サンクチュアリは何者かの襲撃を受けていた。

「カトレア・ヴォーダン。貴女は見ているだけで良いですよ」

「いえ、私とカレンの愛の巢でもあるサンクチュアリの護るのも私の仕事ですよ、アシャ」

「…愛の巢って何？カトレアちゃん」

「私とカレンの関係を題材に書いたR-18小説のタイトルです」

生きて帰れたら消去しようとかレンは心に誓い、CKジnkスの後部座席に座る。

「敵MSは一機。見たことの無いガンダムタイプです」

「ガンダムタイプ？CBの物では無いのですか？」

カトレアの疑問にサンクチュアリのオペレーターは応える。

「いえ、これまでのCBのどの機体にも、アレと合致するものはありません」

「新型じゃ無いの？」

「CBの機体は既に6機確認されています。CBのガンダムは量産出来ない以上アレはCBの物では無いと言つことになります」

「じゃあ、アレは…」

カレンが考え込んでる間にカトレアは出撃の準備を完了させる。

「考えるのは後です、カレン」

「ん、わかった。カトレアちゃん」

カトレアはCKジnkスのドライブに火を入れる。

「CKジnkス、カレン& amp ;カトレア、テストを開始します!!」「」

「アシャ・ノールズ、フラグメント、…貴女達は見ているだけで構いませんよ」

そして、二機のMSは戦場に飛び立った。

「非常警報？」

「何があつた!!」

尋問官が振り返る。

イヴェットの声に集まってきた兵士が動きを止める。

「ケネット、イビン!!」

イヴェットはケビンとニネットの偽名を呼ぶ。

二人はイヴェットに従ってMSデッキに移動する。

すると、ラインハルトが小声で耳打ちする。

「実は近くまで来てるんだよね、カタロンのみんな」

「!! 本当ですか!!」

「僕が嘘を言うメリットが…」

「あるから言ってるんです」

「…嘘は言っていない」

そう言いながらMSデッキに到着する。

「これは…」

「ヴァルブガンダム。人に渡す物だけに乗ってって良いよ」

「…何か企んでいるんですか?」

ケビンの疑念にラインハルトは笑顔で応える。

て

「今の私はあの時の私では有りませんよ」

フラグメントは圧倒的な加速を見せる。

「魅せてあげますよ。このフラグメントの底力を!!」

「仇…、討ち損なっちゃったね」

「いや…、むしろアレで良かった」

そう?とティファエラはロダンに言う。

「まあ、これでアロウズとの契約は白紙だ。当面は別の依頼を受けよう」

ロダンはそう言ってメタトロン を移動させる。

「りょーかいつと」

ティファエラもメタトロン を動かす。

「そー言えば、ロダン。知ってる?連邦内部の反アロウズ勢力」

「ラインハルトの事か。あの男を信用することはできないな」

そう言ってロダンはかつて一度だけ会ったラインハルトを思い出す。

「政治において、あの男を出し抜くにはそれなりの覚悟が必要だ。最悪死を覚悟する必要がある」

「そんなに？あの政治家将軍が怖いの？」

「あの男は本物だよ」

ロダンが機体を動かす。

「それに、そろそろ私たちの目的も果たそうと思う」

「…？リグ？ね…っ」

「大丈夫か？」

最近腹痛に襲われる事があるティファエラに声をかける。

「そろそろちゃんとした検査を受けないとな」

「…それで、何とか防げたって事ですか」

「ああ、流石に死ぬかと思ったが…、やっぱ最大出力のトランザムはすごいな」

ゼロはあの時ギリギリでトランザムを発動。

何とかメメント・モリの砲撃を防いだ。

「GNフェザーの応用による絶対防御フィールド？アイギス？まさかこれ程とは思わなかったよ」

「ヒハッ、今さら乗り換えようなんざ、考えんなよ」

「まさか、俺は乗れと言われた機体に乗るだけさ」

レイは呟くように言う。

「それに、ミケランジェロがまた外したらしい。？リグ？の破壊任務はな」

「そおかよ」

「それと、ルシファーは整備で当分使えない」

「ま、当然か」

ルシファーガンダムはオーバースペックを發揮してしまったため機体の各部にガタがきていた。

「あんな無茶苦茶はできねーって事か」

「わかってるじゃないか」

そう言ってレイは部屋から出ていく。

「…ったく、まさかこんなんで使えなくなるたあな」

セロは誰もいなくなった部屋で呟く。

「計画は練り直し、か。全く、面倒臭い」

セロはそう言い捨てて、部屋を出ていった。

無数の穴を開けられ、地面に倒れ伏すアンノウン。

「…動きが早すぎますね…、計画に修正が必要ですか」

その近くに着陸する特徴的なフォルムを持つMS フラグメント。

「さて、帰投しましょうか」

アシャは呟いて機体を格納庫に入れる。

そして、後には大破したアンノウンだけが残った。

二期第五話 原初の聖典

ネオ・サンクチュアリ内部の医療施設、そこがカレンとカトレアが目覚めた場所だった。

それから彼女達は交戦したMSの正体について聞かされる。

技術部曰く、アレは大型オートマトンとでも言うべき、完全に自律した兵器らしい。

「…でも、そんなのどこで作ったの？」

カレンの疑問は当然だ。

MS、それもガンダムタイプを開発するにはかなりの設備が必要になる。

そんな設備はそこいらのテロリストに準備できる物では無い。

「それを調べるために、傭兵を二人雇った。腕利きだぞ」

見舞いに来ていたシャオは傭兵 ロダン・アルレッキーノとティファエラ・アルレッキーノを紹介する。

「今後はこの二人が不明MSについては調査する。お前達二人は口レライの完成を急げ」

シャオはそう言って病室を出る。

「…釈然としませんが、これもビジネスです。カレン」

「わかってるけど…」

そう言っつて二人は着替えて検査に向かう。

幸い軽い打撲だけだったために、検査は手早く終わった。

「…そう言えば、アシャさんは？」

カレンはふと気になってカトレアに聞く。

「宇宙に上がったらしいです。何でもフラグメントのテストを終えたらしいので」

カトレアはシャオから聞いた話をカレンに伝える。

「そうなんだ…」

「どうかしました？」

「お礼、言いそびれちゃったな」

「またいつか会えますよ」

そう言っつてカトレアは会話を切り上げる。

そして、二人は地下の整備ブロックへ向かった。

「お久しぶりです。アシャ・ノールズ」

慇懃な声でアシヤは同胞に迎え入れられる。

「久しぶりだ。ここは相変わらずだな」

そう言っただけでアシヤは椅子に座る。

「旧プレデント揮下、ジnkクス10機、フラッグ23機、ティエレ
ン15機、イナクト20機、ヘリオン30機、リアルド26機、と
りあえず動かせる機体を全て動員しました」

部下がアシヤに告げる。

「アロウズによる虐殺、それに対抗するための力…か。まあ、これ
だけあればあの時のような無様を晒す事も無い…かな」

アシヤは呟きながらMSを見てまわる。

そして、おもむろに声をあげる。

「みんな、作業を中断して聴いてくれ」

アシヤの声に、作業していたメンバーが手を止める。

「君たちには、戦わずに平穩無事に暮らす道があった。まずは、そ
の道を放棄して、私についてきてくれた事に感謝する。ありがとう」

メンバー…、かつて反政府勢力？プレデント？と呼ばれていた者達
は、アシヤの声を静かに聴く。

「そして、君たちは本当に愚かだ、この私も含めて、な」

アシヤは演説を続ける。

「かつて、我々はカイザルと言う男の下、世界を変えるために戦っていた。しかし、今だからこそ言おう。あの戦いに正義は無かった」

アシヤは言葉を切る。周囲にどよめきが起こる。

「だが！！かつて偽りの正義に騙されて戦った私たちにこそわかる事がある！！護るべき物！！戦うべき敵！その全てが！！」

いつの間にか、どよめきは収まっている。

「私たちはかつての過ちを正す！！何故ならばそれこそが正義だからだ！！私たちは戦うべき敵を討つ！！護るべき者を護るために！！そう、戦う理由を取り戻すために！！」

アシヤはそこで言葉を切る。

「今、ここに！！反政府勢力？プレデント？の再結成を宣言する！！」

どこことなくスローネに似たフォルムを持つガンダム…、スローネをベースにしているため、当然とも言えるのだが…を持つガンダム、ヴァルプガンダムはアヘッドをバスターソードで切り裂いていた。

背後からジnkクス？がGNランスで攻撃を仕掛けるものの、それを回避、回避したビームはそのままアヘッドに当たり、アヘッドは爆散する。

「なかなか強力な機体らしいな、それは」

イヴェットから通信が入る。

「…アロウズの最新鋭機だったらしいですからね。正直、整備とかが大変だし使えないと思ってたんですが…」

ヴァルプは背後から斬りかかってきたジンクス？に切り返し、撃墜する。

「まだ一度も被弾してないんですね」
ケビンの言葉をニネットが引き継ぐ。

ヴァルプガンダム…、その本来の存在意義、それは幾多もの戦場を切り抜けた経験、それを持つゲイリー・ピアッジ…またの名をアリエー・アル・サーシエスト、人間を遙かに越えた基礎能力を持つイノベイターの力を融合させるためのシステム、それを積んでいる事だ。

そして、偶然にもこの機体を動かすパイロット、カテドラルからここまで、多くの戦場を越えてきたケビン・ウォーカー、非人道的な人体実験により、通常のイノベイターすら凌ぐ基礎能力を手に入れたニネット・カリオン。

この機体を動かすパイロットとして、これほど相応しいコンビも余り多くは無いだろう。

「とは言え、あまり調子づくな。コイツ等はアロウズの中でも弱い方だ。それに、今後の話もある」

イヴェットはそう言って、拠点に機体を向ける。

ケビン達もそれに従う。

「さて、これからどうするか、だ。軍曹、お前の意見は中東支部と合流する、だったな」

「はい、確かにヴァルブガンダムは強力な戦力です。しかし、それはあくまで？戦術？としての強さです。アロウズやソレストアルビーイングのような？戦略？に寄った強さではありません。それこそ、アベル・ウォーカーの様な？例外？には、太刀打ちできないでしょう」

「軍曹はこう言っているが、ケビン、お前はどう思う？」

「その事なんですが…」

ケビンはそう前置きして、一本のメモリースティックを取り出す。

「それは？」

「今日、二ネットが見つけた物です。コクピットの片隅にあったらしくて…」

そう言っただけケビンには備え付けられているノートパソコンにメモリースティックを差し込む。

そして、中の情報を読み込む。

「これは…！」

イヴェットはその情報に驚愕する。

「ソレスタルビーイング、その計画に関連したファイルらしいです。これにはソレスタルビーイングの基幹となる量子演算コンピュータ…ヴェーダって言うらしいですね…の情報が入っていました」

ケビンはそう言ってファイルの中を見る。

「ヴェーダは巨大なネットワークで、そのターミナルにはいくつか予備があります。そして、その一つが…」

「なるほど、宇宙に…、それも手の届く範囲に有るわけか…」

イヴェットは呟く。

「話を戻します。特に、このターミナルは？リグ・ヴェーダ？と呼ばれており、他のターミナルとは違い、かつてヴェーダを開発するために作られた試作品…、その一つです」

つまり、とケビンは言葉を続ける。

「このターミナルユニットを調べれば、ソレスタルビーイングの計画について、何かがわかるかも知れませんが、フォン・スパークが言っていた、？世界を裏から操る者？についての情報も」

「…つまり、情報において圧倒的に不利な私たちにとって、ターミナルを奪取する事さえできれば状況がひっくり返る可能性すらあると言っことか」

イヴェットは笑う。

「確かに面白いが、これに手を出すわけにはいかんな。九割九分罠だ」

「…ですよね」

ケビンは呟く。

「ラインハルトは狡猾だ。ああ見えて何を考えているか理解できん」

「では、合流と言っことで…」

「いや、わざわざ合流して叩きやすくしてやる必要もあるまい。私たちはこのまま当初の任務を続行する」

「…なるほど、見抜いたか」

基地の司令室でラインハルトは小さく呟く。

「まあ、この程度見抜けて当然か」

そう言いながら、ラインハルトはゆっくりと目を閉じる。

「イヴェット・テレーズ。彼女を自由に動かす事は僕には不可能だ。代わりの駒を用意する必要がある。選定は僕にやらせてもらう。これは確定事項だよ」

通信機を介しているわけでも無いのにラインハルトは何者かと会話するような口振りで話す。

「ああ、そう言っている。僕たちの思考を読める君に嘘を吐くほど僕は愚かじゃないよ」

ラインハルトはそう言って煙草を吸う。

「僕が変わったって？昔はわざわざ健康を害するような行為はしなかった？ハハ、それは君が言っている進化ってヤツだよ、何？違う？まあ細かい事は抜きだよ抜き」

吸い終わった煙草をラインハルトは灰皿に押し付ける。

「本来の仕事をほっぽり出して君の下に付くのは手駒を選ばせてくれると言う約束を守ってもらえるからだよ、リボンス・アルマーク」

そして、ラインハルトは再び目を開ける。

その光彩は、妖しく輝いていた。

二期第六話 甘い毒

「…つまり、君は争いを肯定するのかい？」

「少し違うな。肯定するも何も、戦場に立った時点で正義も悪も無い。生きるか死ぬか、そしてその中で最後に立っていたヤツがその戦いの勝者になる」

病院の待合室で二人の男が議論をぶつけ合っている。

「たけど、それは野蛮では無いかい？」

「野蛮…、か。ま、そうだろうな。結局戦争なんてのは合法化された殺し合いだ。昔の中学生が殺し合う映画と変わらねー」

むしろ、それより質が悪いと男の内の一人 セロ・バージュが言う。

「そんな事お偉いさんも、それどころか真つ当な人間ならだれでもわかるだろ。わかっているのにやめられない。人類つてのは本当に愚かだ」

俺を含めてな、と言ってセロは軽く笑う。

「つまり、貴方は人が人を殺すのを見て見ぬふりをすると？」

もう一人の男…、ホープ・E・ブリッジがセロに尋ねる。

「ま、そうなるかな」

セロはそう呟く。

「人が死ぬのが悲しいと、そう思った事は無いのかい？」

「…、無いな」

セロは呟くように言う。

「俺が本気でキツितって思ったのは、後にも先にもアイツがいなくなつた時だけだ」

とはいえ、とセロは付け加える。

「あなたの意見は正しいんだろうな。正しいだけでは何もできんが」

「では、どうすれば何かをできるようになるのかい？」

「勝つたもん勝ちだ。戦場で人を殺したくないなら、人を殺さずに勝利すれば良い。甘いだぬるいだ言われようが、勝ちさえすればそれは正しく成し遂げられる」

セロはそう言つて何かを思い付いた表情になる。

「そつだ、あんた神父だろ。ちょっと懺悔を聞いてくんないか」

突然の申し出に、特に断る理由も無いのでホープは了承する。

「…アレは、どんくらい前だったかな…」

セロはゆっくりと話し出す。

「人間は夢を叶える事ができない。それがアイツの口癖みたいなもんだっとな」

セロは語り出す。

「夢つてのは叶えてしまえばそれは単なる実現可能な事象の一つでしかない。さっきあんたに言ったのはこう言う理屈だ」

ホープが頷いたのを確認して、セロは話し続ける。

「アイツは本物の天才だった。天災レベルのな」

そう言うってからセロは少しためらう。そして、言い訳するように言う。

「まあ、なんだ。俺は惚れた女の一人も護れなかったヘタレだって話だ」

そして、セロは話を切り上げようとする。

「…そうですね、続きは教会で聞きましょう」

ホープはそう言って移動教会に行く。

「お、おい」

「至少くらい待たせても、問題は無いでしょう」

それより今は貴方です、とホープは言う。

「救える者を救わずにいるのは耐えられません」

そう言つて、ホープはセロを懺悔室に押し込める。

「安心してください。貴方の秘密は決して口外しませんから」

ホープはそう言つてセロに向き合う。

「…、そうだな。ここまで話すのはあんたが初めてになるかな」

そして、セロは語り出す。

「…さっきの理屈、覚えているよな。その理屈だと、最大の罪がある」

「罪、とは？」

「？弱い？と言つことだ。あの理屈だと、どんな相手にも強ければ意志を通せるが、弱けりゃ奪われるだけだ」

そして、セロは語り始める。かつての自分の？罪？を。

「つまり、私に反逆者になれと言つのだな？ラインハルト」

「コトが終わつた後には英雄になつてるかもねえ」

シュバルツとラインハルトは基地の司令室で話し合っていた。

「君は部隊を率いてエレyson隊と合流。そのままカタロンと連邦

の橋渡しとして戦ってほしい」

「しかし…」

「何、君にしか託せない重大な任務だよ。それに、請けるか請けな
いかはこれを見て決めると良い」

ラインハルトはデータディスクを起動する。

そこには、アロウズが使っていたオートマトンによる虐殺が記されて
いた。

「っ!」

「まあ、君の騎士道…ノブリス・オブリージュとか言ったかな、が
これを許せるのか、

聞いてみたいな。今すぐに」

「許せるかっ!」

「だったらすぐに準備を初めてほしい。少なくとも一時間後までに
は行動できるようにね」

ラインハルトはそう言って椅子に深く腰かける。

「サンクチュアリのお嬢さん方も動いている。補給や整備は彼女ら
に頼めば良い」

シュバルツは何も言わずに部屋を出ていく。

それから三十分後、シュバルツ達のMSが基地から出撃した。

「良く訓練された、部下だねえ」

ラインハルトは呟く。

「さて」

そう言ってラインハルトは基地全体に聞こえるようにスピーカーを調整する。

そして、基地の人員に告げる。

「総員、今の持ち場を離れて基地から退避しろ。こいつは命令だ」

突然の放送に基地の人員に動揺が走る。

「何、もつじきこの基地は殲滅される。それに付き合う必要はあるまい」

そう言って、ラインハルトは目を瞑る。

そして、目を開き

「死にたく無ければとつと逃げろ！！ボンクラども！！」

一喝と共に、基地の人員は速やかに命令に従う。

「そうだ…、それで良い」

ラインハルトは嘯く。

そして、笑みを浮かべる。

それは、自らの運命に逆らった者の笑みだった。

「協力、感謝する。セフィロト」

「…プレデントはカタロンの下部組織として、戦いを続け、そして俺たちは自分の目的を果たす。ギブアンドテイクだ。感謝される謂れは無い」

アシヤの感謝の言葉に、レイはそう返す。

「だが、君たちは私たちの信念を理解してくれた。私たちはそれに応えなければならない」

そう言ってアシヤはセフィロトのメンバーに頭を下げる。

セフィロトのメンバーはそれを受け止める。

「…敗けられないね」

「敗けられるかよ、こんな豪華なメンバーで」

セフィロトとプレデントは現在、同盟を結んだ。目標は、ソレスタルビーイング機関プログラム、ヴェーダ。その原点たるリグ・ヴェーダ。

「まあ、大した持て成しも出来ないが、茶でも飲んでいってほしい」

アシャはそう言ってレイを応接室に連れていく。

その時、基地に警報が響く。

「未確認MSが接近！！ガンダムタイプです！！」

未確認MSをメフィストが迎撃する。

「この程度！！」

メフィストは両手のバスターソードを振るい、寄せ付けないように戦う。

アンノウンは背中中のチェインガンを起動、掃射を仕掛ける。

「うおっとお！！」

ミケランジェロは間一髪でこれをかわす。

「何なんだよ、こいつは！！」

ミケランジェロは思わず毒づく。

「私と同じ戦い方だと？」

アシャはアンノウンの戦い方を見て、一つの可能性を思い出す。

それは、地上でコリニツクに潜入していた時、彼が見た最強の兵器。

「まさか…、完成したのか？アレが」

だとすれば、とアシヤは思考を巡らせる。

あの理論から開発された兵器は太刀打ちすることすら悪手になる。

「悪いが、私も出る。すまん、茶はまたの機会に取っておいてくれ」

そう言つてアシヤは自分の機体 グランダムffに乗り込む。

「全く…、あのお嬢さんも粋な計らいをしてくれる」

地上で少しの間、共に過ごした少女の顔をアシヤは脳裏に浮かべる。

カイザルが使っていたグランダム。これはその機体をサンクチュアリの技術で極秘に再開発した物だ。

「お互い、利用し合う関係だが…」

今は関係無いと口の中で呟く。

「アシヤ・ノールズ、グランダムff！！未確認のガンダムタイプを排除する！！」

「サンキュ、あんたに色々話したら何か楽になったよ」

「それは良かった。貴方に救いがありますように」

セロはホープに礼を言い、そしてセラの病室に見舞に行く。

そのセロの前に、一人の青年が立つ。

「…何をしに現れた」

「いや、少し君の大切な物を借りに、ね」

青年…浅い緑色の髪と紫の瞳を持つイノベーター…、リボンス・アルマークはそこにいた。

「…言うておくが、セフィロトの太陽炉には自壊プログラムが仕込まれている。無理にアクセスしたらその場でドカン、だ」

セロはそう言うってリボンスに銃を向ける。

幸い、周囲に人は少ない。

「何、僕も今さらセフィロトの太陽炉には興味がないからね。それより、僕は君の力を使いたい」

リボンスはセロに近づく。

「君が僕に従う証拠に、手始めに連邦軍第65集積基地を殲滅してほしい。君なら造作も無いだろう？」

誰一人としていなくなった基地の司令室、ラインハルトは紅茶を飲

んでいた。

そして、基地の施設が爆発する。

「…意外と遅かったじゃないか、リボンズ」

ラインハルトは呟き、紅茶をすする。

その合間にも、無人の基地の施設が次々に破壊されていく。

「まあ、君にも事情があるのかな」

ラインハルトは紅茶で喉を潤し 文字通りの末期の水を味わい、執務機の椅子を立つ。

司令室の窓から見た外は、すでに崩壊している基地だった。

そして、司令室の窓の前に、一機のMS ルシファーガンダムが現れる。

一瞬、ラインハルトとルシファーガンダムの目が合う。

「…ああ、なるほど。君にも何か大切な物があるんだね」

ラインハルトはルシファーの瞳を見据える。

「…さようなら」

そして、ラインハルトはルシファーガンダムのビームトンファの一撃を受け、この世から消滅した。

「弱肉強食か、笑わせる」

セロはルシファアのコクピットの中で自嘲気味に呟く。

「… 怨んでくれてもいいぜ。俺はアンタを忘れない」

セロはコクピットの中で独白する。

「死を思え、死を忘れるな、死から逃げるな、死に立ち向かえ。ま
ったく、お前の言う通りだな、セラ」

そして、ルシファアガンダムは飛び立った。

二期第七話 停止 前編

「そうか…、わかった」

シュバルツは通信機を置く。

「どうでした？大尉」

准尉がシュバルツに尋ねる。

「ラインハルトは死んだ。もはや、私たちはあの男の命令に従う理由は無い、と言うことだ」

シュバルツはそう言って目を閉じる。

思い出すのは、かつての士官学校の入学式。あの時、シュバルツとラインハルト、そしてイヴェットは出会った。

「あの時の仲間も、今は私とイヴェットだけ、か…」

そして、シュバルツは任務の内容…エレイソン隊との合流、について思い出す。

エレイソン隊はすでに解散している部隊だ。

つまり、何らかの裏がある任務だと言うこと。

そして、この任務はシュバルツにも予測できる。

すなわち…

「アロウズの悪行、その証拠を世界に分かりやすく公開する必要がある、とあいつは言っていたな」

ラインハルトは最初に最低限の命令をした後は完全に現場任せだ。

彼自身自分に用兵の才能が無いことを自覚していたし、何よりシュバルツと言う優秀な部下がいたからだ。

そして、最後に下したシュバルツへの実行不可能な命令。それは、すなわち…。

「好きに戦え、と言うことが」

シュバルツは理解した。

アロウズ いや、その裏にある？何か？を叩くこと。

それが自分に出来るラインハルトへの弔いだと。

「まったく…貴様は私を何にしたいんだ？ラインハルト」

グランダムffはバスターソードを構え、それを大きく振りかぶる。

その隙をアンノウンは狙ってくる。

「そつくると思った!!」

しかし、レイがピンポイントに射撃を撃ち込む。

アンノウンはそれに被弾しつつも、動きを止めない。

「つつしやあああああああ！！！！！」

しかし、そこにメフィストがバスターソードで斬りつけ、更にグラ
ンダムfffもバスターソードを振り下ろす。

「…よし、機体を回収しろ」

アシヤは部下に指示を出す。

ブレデントのメンバーはアシヤの命令に迅速に従う。

「我々にとって太陽炉は希少な資源だ。くれぐれも壊すなよ」

アシヤは部下に釘を刺すとブレデントの基地に帰投する。

「…fff（最強）の名は伊達じゃないって事か」

「何、私も傭兵時代は最強を目指していたんでな」

アシヤはミケランジェロの呟きに応える。

「ひたすらに強くあろうとして、折られた。カイザルに拾われなければ死んでいたな」

アシヤは呟きながら、機体を基地に入れる。

「まさか、プレデントを再興したのは…」

「そこまでだ、セフィロトのお嬢さん」

リナの言葉を遮ると、アシヤはモニターをチェックする。

「異常は無いな」

そして、アシヤは機体を降りる。

「どうだ、茶の続きでも」

「…カトレアちゃん」

「どうしました？カレン」

「何で、そんなイライラしてるの？」

「いえ、私は全然イライラなどしていませんよ。あのジェシカ・ア
ンダーソン（メスブタ）が変態的な技術開発を行っていたり、より
にもよって、その被験体がアベル・ウオーカー（未来のお義兄様）
だったりする事や、挙げ句にヘレンさんに娘はやらんとか言われた
事や、給料減らされた事とか、あの？アンノウン？に手も足も出な
かった事や、CKジnkクス（私たちの愛の結晶）が旧型になりかけ
ているとか、そんな事で私がイライラすると？」

『あゝ、だからこの前母さん友達を選びなさいって言ってきたんだ』
カレンは妙に納得した表情を作る。

数日前、カトレアは偶然ヘレンに会う機会があった。

その際、カトレアは

「カトレア・ヴォーダンです。サンクチュアリでカレンのパートナ
ーをしています。カレンって可愛いですよ、美しいですよ、最
高ですよ、綺麗ですよ、（以下一時間に渡りカレンを賛美し続
け更に30分ほどカレンの事を題材に作った詩を読み上げ）そんな
わけでカレンを私の嫁にください!!!」

とヘレンに詰め寄り、当然の如く拒否された。

「やはり、お義兄様にも話を通した方が良かった、でしょうか」

「…なんか、色々間違ってる気がするけれど、それは置いといて」

カレンは強引に話の修正をする。

「カレン…、今、ここで押し倒しても構いませんか？」

「ダメだよ!!!私の初めてはお兄ちゃんにあげるんだから!!!」

「…なら、仕方ありませんね」

カトレアはそう言って資料を読む。

「なるほど、これは…」

アンノウンMSの詳細な資料、そして、連邦軍内部のクーデター派
の動きが記された資料だ。

「…ヴォーダンも、そろそろ動かざるを得なくなってきたようですね」

日和見もお仕舞いですか、カトレアはどこか寂しげに呟く。

「さて、私たちも立場を決めなければなりませんね」

そう言ってカトレアは施設内に緊急会議の召集をかける。

「ま、民主的に多数決といきましょう」

「…セラは、無事なんだろうな」

「少なくとも、君が僕の命令を聞いている間はね」

リボンスは、セロにこう告げる。

「…で、次の命令は何だ？リボンス・アルマーク。死にたいならいつでも介錯してやるが」

「残念だけど、それには及ばないよ。君の次の仕事は、君の仲間…セフィロト及びプレデントの壊滅だ。一人たりとも生かす必要性も無いしね」

「…了解した」

セロの言葉にリボンスは少しだけ驚く。

「…どうもあっさり請け負うかい？」

「安心しろ、勝ちすぎたヤツは必ず罰を受ける。その時が俺たちの最後だ」

「…なら、せいぜい楽しみに待つとしようか。それと、今回の任務はアベル・ウォーカーとリタ・リバーズを同行させる」

「御託は良い」

セロはそう言い捨てると通信を切る。

「…怨めよ、お前等」

「これは…」

ケビン・ウォーカーは目の前の兵器を見て、戦慄を覚えていた。

「もはや、形振り構ってはいられないだろう。我々の戦利品…対アベル・ウォーカーに使わせてもらう」

イヴェットの指示で、次々と？ソレ？はミサイルに詰め込まれていく。

「ケリは宇宙でつける。あそこなら汚染を気にせずに戦えるしな」

イヴェットは事も無げに言う。

「…なあ、ケビン。どういう気分だ？実の兄にこんな兵器を向ける気分と言うものは」

イヴェットの質問に、ケ빈は答えるのに躊躇してしまう。

その様子を見て、イヴェットは少しだけ笑みを見せる。

「お前が答えるのに躊躇するような人間で良かったよ。そうでなければ今ここで射殺していた所だ」

イヴェットは笑いながらそう言う。

「…兄さんは、アベル・ウォーカーは越えてはならない領域に入ってしまった。なら、せめて…」

「身内であるお前が葬る、か。全く、ウォーカーの人間はいつもそうだな。何でもかんでも自分でしょいこんで、最後は重さに耐えられなくなつて潰れてしまう」

イヴェットの言い回しに多少引つ掛かる物を感じた物の、ケ빈はそれを追及せずに作業に向かう。

「…さて、そこにいるんだろう？リオナ、軍曹」

「気づいてくたさ？」

「お気づきでしたか、隊長」

ケ빈と話していた事に気を使って、物陰に隠れていた軍曹と、軍曹が肩車している少女…リオナが現れる。

「貴様と私の仲だ。何かを遠慮するような間柄では無かったように思っていたか？軍曹」

「は、隊長。差し出がましいマネをお許してください」

「グンソーはねえ、イヴェットおば…お姉ちゃん表情が柔らかくなつたとか言つてたよ？」

「そうか、リオナ。ところでお前は軍曹から降りないのか？」

「えへへ、実は…」

「無事にこの戦いを終える事ができたら、彼女は私が引き取るつもりです」

軍曹はそう告げる。

「ほう、貴様が子育てか」

「…子育て、と言うのは少し違います。もはや私たちには死ぬことすら許されない。なら、最後まで誇りを持って生きたい。そして、それには？許し？を得る必要がある。なら…」

「アベル・ウォーカーを討つて世界を変えて、英雄になることで許しを得るか。私たちらしくて良いな、それは」

イヴェットは笑いながら言う。

「…隊長。もともとは外人部隊だった私たちに、生きる場所と使命を与えてくださったのは、貴女です。だからこそ…」

？貴女も許されてください？軍曹はそう言って自室に向かう。

「許し、か…」

イヴェットは自分たちの境遇を回顧する。

「…まったく、許されてはいないが、救いはすでにあるよ、軍曹」

イヴェットはそう言って自室に向かう。

準備はすでに、終了段階まで進んでいた。

そして、世界は動き出した。

私たちが宇宙にいる間、地上ではブレイクピラー事件が起きていた。

そして、世界が変動する中…

「向かってくるMSを三機確認！！内一機はルシファーガンダム…、友軍信号切っています！！」

「どうやら、アイツは裏切ったらしいな」

「兄さん！！」

リナの言葉に、レイが動く。

「ミケランジェロ、リン、リナ、ベリア。お前達は暫定的にアシヤの指揮下に入っておけ。アイツは俺が殺る」

レイは決意を滲ませた口調で言う。

「アイツは俺の手の内を知っている。だからこそ、俺が行く」

「でも！！」

「心配するな。俺は帰ってくる」

そして、セフィロト対イノベーターの戦いが、切って落とされた。

二期第八話 停止 後編（前書き）

やっと終わった。後は最終決戦です。

二期第八話 停止 後編

三機のMSが戦場に向かう。

「アベル・ウォーカーか、こちらはゼロ・バージュ。…せいぜい足は引っ張るな」

「その言葉、そっくりお返しする」

「二人とも、せめて任務中は協調を…」

「協調？こんなヤツと？すまないが俺には無理だ」

完全にシンクロしたセリフを二人は言い放つ。

二人には何か相容れないものがあるのだろうと、リタは無理矢理納得する。

「さて、確認しましょう。我々の目的はC B別動隊、セフィロト及び、反政府勢力、プレデントの壊滅です」

リタがそこまで言った時だった。

「どうやら、そんなに悠長な事は言ってもらえないようだぜ」

「っ、バカな！！この距離で気付くだと！！」

リタは驚愕で叫ぶ。

「どうやら、アイツ等も気付いたようだな」

アベルは冷静に分析する。

「なるほど、少数精鋭による徹底的な一騎討ち戦法か。俺たちみたいな相手には有効な手だな」

アベルと同時にゼロも同じ結論に追い付く。

「戦力の大多数を逃がし、少数で戦いを進める。討ち取る事ができたらカリスマを確固たる物にできる。戦術的にも戦略的にもアイツ等が打てる最高の一手だな」

「だが」

リタのブリュンヒルデが加速する。

続いて砲撃が宙を疾る。

三機は散開してそれを回避。

そして、敵に向かい合う。

そして、ファウストガンダムが急加速をかけ、ルシファーに体当たりをかける。

そのまま、ルシファーのコクピットにハンドガンで攻撃を仕掛けるが、ルシファーは間一髪でそれを振り払う。

「レイ…、お前か」

「残念だ、セロ。まさか俺がお前を討たなければならぬとは」

ファウストはGNランチャーを発射して、急速に姿勢を制御する。

「さ、始めようか。仲間どうしの殺し合いを」

「上等だ!!ゴラァ!!」

ルシファーはバスターブレードを構える。

「それで良い!!やっぱりあなたはそれで無くちゃあ面白くない!!」

レイはルシファーにGNランチャーを向ける。

「あんたも俺も、さんざん殺しているんだ。殺されても文句は言うなよ!!」

「はっ、それはウォーカーとか言う大佐殿に言ってやれよ!!」

そして、二機は殺し合いを開始した。

「くそっ、動きが速い!!」

ミケランジェロが攻撃を仕掛けるが、リベリオン?はそれを嘲笑うかのよう回避し続ける。

「どつて、ミケー!!」

B・R・に乗るベリアが戦いビームマグナムで援護する。

「その程度!!」

「甘いんだよ!!」

しかし、ブリュンヒルデとリベリオン？はそれらを簡単にかわしてしまつ。

「なるほど、少しはやるようだな」

しかし、回避した地点にグランダムffがファングの射撃を叩き込む。

そのままグランダムffは全身のスラスターを吹かし、急速にリベリオン？に接近する。

「あのサイズでこのスピードかよ!!」

「デカブツがみんな遅いとも思っていたか？」

そして、グランダムffはバスターソードでリベリオン？に斬りかかる。

『サイズの、受けるのは無理か…』

アベルは機体をずらし、攻撃を受け流す。

「そう来たか!!」

そして、アベルがメーサーバイブレーションソードで止めをさそうとしたところを、B・R・がビームトンファーで斬りかかり、妨害する。

そして、B・R・のコクピットの中、ベリアが全周波で通信をかける。

「聞こえてる！！アベル・ウォーカー。いえ、クロス・グレイヴ！
！聞こえているなら通信のチャンネルを5629に合わせなさい！
！」

ベリアの声に、アベルは一瞬硬直する。

そして、通信のチャンネルを合わせる。

「望み通り、通信のチャンネルを合わせてやったぞ」

話しながらも、アベルは機動を止めない。

「はじめまして、私の名前はベリア・リム。貴方の父親を殺した人間の娘で、ユノの親友よ」

「なっ……」

「このブリュンヒルデについてくるだど！？」

「はっ、ウォーカーとか言うクソガキがいなくなった途端これかよ」

ミケランジェロはメフィストガンダムで、ブリュンヒルデと戦って

いた。

「くそっ!!」

ブリュンヒルデはGNビームライフルで迎撃するも、大剣の刃に防がれる。

「バカな、イノベーターであるこの私が!？」

「イノベーターだかインベーターだか知らねえがなあ!!」

ブリュンヒルデに斬りかかりながら、ミケランジェロは叫ぶ。

「てめえ等みたいに何の覚悟も無く戦場に出てくるガキに敗けるほど、俺たちや暇じゃねえんだよ!!」

そして、メフィストがブリュンヒルデに斬りかかる。

「…人間、風情が!!」

ブリュンヒルデは盾のGNビームガンをもフィストに向け、放つ。

メフィストはそれを間一髪で避け、二打目をバスターソードで受ける。

その際にブリュンヒルデは変形して、戦場から一時的に離脱する。

別の戦場 アベル・ウォーカーを援護するために。

「行かせるかよ!!」

メフィストもその後を追う。

戦場は、乱戦の様相を呈してきた。

銃と剣、二つの力がぶつかり合う。

ファウストの銃撃と砲撃は、上手くいなされルシファアの剣撃は届く事は無い。

「互角だな、レイ」

ファウストの砲撃をかわしながら、ゼロが呼び掛ける。

「本当に。ゼロ」

二人は最低限の言葉だけで話し続ける。

否、本来この二人の間に言葉は不要だった。

何故なら、この二人をつなぐ信頼関係は人に推し量れるものではない。

例えるなら、そう。この二人は魂で繋がっている。セフィロトの実働として、最もお互いを信頼していた二人が、今は殺し合いを演じている。

「ま、今はそんなことはどうでも良いだろう？ゼロ」

「そうだな！！レイ！！」

そして、二機はお互いが最も得意とする戦術を情け容赦遠慮無く、繰り返し続ける。

「感謝するよ！！この戦いを仕組んだヤツに！！これであんたを遠慮無く殺せる！！」

「残念だったな！！テメーをぶつ殺すのは、俺に許された特権なんだよ！！ドアホが！！」

そして、二機は再び距離を取り、二人はお互いに罵り合う。

相手から、自分を殺す躊躇いを取り除き、純粹な殺し合いを演じるために。

「すぐに楽にしてやるよ！！」

バスターブレードを構えたルシファーが、再び突撃を仕掛ける。

「は、トランザムも使わずにこの俺を倒せると、そんな夢でもみたのか？」

レイは両手にライフルを構え、弾幕を張る。

更に、ビームランチャーの砲撃をも織り混ぜる事で、ルシファーを近寄せせない。

「バカが！！トランザムなんざ使わなくても、俺はテメーより強いんだよ！！」

砲撃に押され、ルシファーが下がる。

「だったらとつと俺を殺して証明してみせろ!」

「言われなくてもな!」

凄まじい機動を見せつけ、お互いに言葉を紡ぐ。

B・R、グラндаムff、リベリオン?の三機はそうやって戦っていた。

「母さんから聞いたわ。あなたの親父は最後まで勇敢に戦っていた」

ビームトンファーとメーサーバイブレーションソードがぶつかり合う。

「ユノからあなたのノロケ話を聞かされたわよ。ま、話半分に聞いてたけどね」

ベリアの言葉に、クロスは機動を少しも緩めない。

「あなたの弟に会ったわ。あの子は私たちが諦めていた女の子を絶望から救いだした」

再び二機がぶつかり合う。

人間と純粹種、機体の性能差、ベリアはそんなものを微塵も感じさ

せずに戦いを繰り広げる。

「あんたの妹に会ったわ。あの子は危うかった友達を、支えていた」
ベリアは叫ぶ。

「アンタ、恥ずかしくないの！！ユノを男を見る目がない女にするつもり！？親父のプライドにケチ付ける気！？それとも何？あんたは…」

「言いたい事は、それで終わりか？」

アベルは冷たい声音で言い放つ。それと同時にリベリオン？が凄まじい加速を見せる。

「っ、B・R…！！圧縮粒子、解放！！」

やや遅れて、B・Rはシステムを起動。

機体の速度が跳ね上がる。

「ウソ！これでも振り切れない！？」

リベリオン？の圧倒的なスピードは、瞬く間にB・Rを追い詰め

る。

「そんなこと、百も承知なんだよ!!俺は俺の道を征く!!誰にも邪魔はさせない!!」

そして、メーサーバイブレーションソードがB・R・を捉える。

「もらった!!」

B・R・の左腕が切り裂かれ、回避したB・R・の右足を奪う。

そのままGNフィンガーランスで止めを刺すべくコクピットに狙いを付け

「悪いが、貴重な協力者だ。死なせるわけにはいかん」

アシャの声と同時にグランダムffのファンクがリベリオン?に襲いかかる。

リベリオン?はそれを回避する。

「無事か?」

「え、ええ、何とか」

「それは良かった」

アシャは眩き機体にバスターソードを構えさせる。

「あの男を引き込むつもりだったようだな」

アシヤはベリアに問う。

「そうよ、それが……」

「いや、何分貴女には人を見る目が無いのだと感じてな」

アシヤの言葉にベリアは絶句する。

「アレはケダモノだ。人の言葉も解さんだろう」

そして、アシヤはファングを回収する。

戦場が一瞬だけ沈黙する。

「大佐……！」

「すまねえ……！逃がしちゃった……！」

そして、ブリュンヒルデとメフィストが現れたと同時に、再び動き出した。

ファウストの射撃を、ルシファーはひたすらかわし、ビームガトリングで攻撃するも、上手く防がれてしまう。

お互いに決定打が与えられない状況。打開するのは至難の業だ。

「ちっ……」

「ちょこまかちょこまかちょこまか……！ハエかアンタは

「!!」

レイはひたすら撃ち続ける。

「アンタに何があったのかは聞かないでおいてやる!! どうせ、人質でも取られたんだろ?」

レイの言葉に、セロが一瞬反応する。

「だからアンタはいつまで経っても愚図なんだよ!!」

「テメーに何がわかる!!」

「何も解るわけないだろ!! 何も知らないんだから!!」

二人の意志がぶつかり合う。

「アンタも俺も、所詮自分の事しかわからない、ちっぽけな存在だ!!」

そして、ファウストは全ての砲門を開き、最大火力でルシファーを焼き尽くす。

「消える!! セロ・バージュ!!」

凄まじい光が宇宙を照らす。

「だからテメーはいつも詰めが甘いんだよ」

しかし、ファウストの砲撃を切り裂いて、大剣が現れる。

ルシファアは紅く、輝いている。

トランザム。

オリジナルの太陽炉にのみ許された力を持って、ゼロ・バージュはレイ・アーデルハイトを切り刻む。

「俺の、敗けか…」

レイは、少しだけ残念そうに呟く。

もはや、レイの命は風前の灯火だ。

「ま、アンタになら殺されても良かったかな」

そして、レイは静かに瞳を閉じる。

そのまま、少しだけ、時が過ぎ…。

ファウストガンダムは、レイ・アーデルハイトはこの世界から消滅した。

「三対二、か…」

アベル・ウォーカーは呟く。

『アイツ等は手負いが一機いるとはいえ、全員がエース級。…勝てないことは、無いだろうが…』

「撤退するぞ、リタ」

「っ！何故です！大佐！」

リタの疑問にアベルは簡潔に答える。

「この任務は正規の物では無い、それに敵も強い。勝てないことは無いが、わざわざ危ない橋を渡る必要も無いだろう」

「…了解、しました」

そして、アベルはリタを伴い撤退する。

「…帰っていった？」

ややホツとした声音でベリアが呟く。

「被害状況の確認急げ！！」

アシャの指示で、被害状況を確認する。

「っそんな！！」

「どうしたの？リナ」

リナのただならぬ様子にリンが声をかける。

「兄さんが、帰っていません」

リナの言葉にベリアが衝撃を受ける。

「そんな…、ウソでしょ？」

ベリアの言葉に、リナは首を振る。

「ウソ…よ、アイツ、また、私をからかって…」

ベリアの悲痛な叫びに、誰も何も言うことが出来なかった。

「よお、また会ったな」

セロがアベルに声をかける。

「…アンタ、戦っていた敵はどうした？仲間だったんだろ」

アベルの質問に、セロは簡単に答える。

「殺したよ。アイツは、まあ良いヤツだったがな」

セロの言葉にアベルは絶句する。

「そっぴや、クロス。お前はC Bの仲間じゃ手加減しているらしいな」

「…それが、どうした」

「いや、ただ選んで殺すのと選ばず殺すのは、どっちが高尚か、考えていただけだ」

ゼロの言葉にアベルはある種の戦慄を感じる。

「ま、考えても仕方無いか」

そして、ゼロは次の戦場に向かう。

我知らず、流れていた涙すら拭わずに。

広大な情報の海の中、？ソレ？はいた。

？ソレ？には身体が無く、記憶すらおぼろで、自我が有るかすら怪しかった。

だが、？ソレ？には確固たる、純粋な意志があった。

「ま……、あ……ぜ、せ……」

そして、？ソレ？は再び消えた。

二期第九話 再起動

「カレン。ローレライガンダムの調子はどうですか？」

サンクチュアリの地下。そこでカレンとカトリアは一機のMSを見ていた。

「うん…、良い調子だけど…」

「そうですね。アナザーZも上手く言っています」

そう言って、カトリアは資料を広げる。

そこには、リベリオンZと全く同じ機体が存在していた。

「それにしても、カトリアちゃん…、ジエシカさんの機体をそのままコピーするなんて…」

「最早四の五の言ってはいただけません。少しでもあの男を止めることが出来る可能性は作っておくべきです」

カトリアはそう言いながら、機体をチェックする。

「でも…、お兄ちゃんと戦うなんて私には…」

「ヒトが間違えた時、正しい道に引き戻すのは周囲のヒトです。そして、アベル・ウォーカーは確実に間違っている。なら、私たちが止めるべきでしょう」

カトレアはカレンに告げる。

「カレン、貴女も覚悟を固めてください。本当に貴女がアベル・ウオーカーを愛しているのなら、間違いを正し、これ以上罪を重ねることを止めるべきです」

カトレアは告げる。

自らの信義を。

「かつて、私の兄になるはずだった男は言っていました。一切の人殺しは正当化された事は無く、また、これからも正当化される事は無い。アベル・ウオーカーは殺し過ぎました」

そう言つてカトレアは締め括る。

「それに、ヴァルプルギス・ナハトもすでに実用の域に到達しています。少なくとも圧倒される事は無いでしょう」

そう言つてカトレアは微笑む。

「私もアベル・ウオーカーもあの男も、死んだ後には地獄行きです。なら精々生きている内に楽しませてもらいましょう」

？ソレ？は、まず自らの自我を取り戻す所から始めた。

そのための情報はすぐに見つかった。

元々は自分がそうなった時にすぐに見つけられるように細工していたのだが、今回は見事に成功した。

そして、次に情報の海からであるための肉体を探すことにした。

それは、幸い？フエイカー？と呼称される肉体が大量に余っていたためあまり苦勞することが無かった。

？ソレ？の唯一の懸念材料は、しかし、？ソレ？は仲間を信頼していた。そう、彼等なら復讐に囚われないで、道を見つけ出すと。

「そうか、わかった。また連絡してくれ」

ロダンはそう言って通信機の電源を切る。

「大丈夫なの？あなた」

「…その呼び方はやめろ。まだ拳式もしてないんだ」

アロウズからの依頼を投げた後、ティファエラの精密検査で妊娠が発覚。

そして、ティファエラは現在は産婦人科に入院中だ。

「メタトロンはすでにジャオエルに換装してある。後は、まあ傭兵としての最後の仕事になるだろうな」

これが終わったら喫茶店でも開くか、と半ば冗談混じりにロダンは言う。

「喫茶店…か。私、小さい頃はコックさんになりたかったのよね」

ティファエラは懐かしむように呟く。

「なりたいものになれば良さ。どのみちその為に俺は戦っている」

ロダンはそう言って笑う。

「全く、殺すしか能がない傭兵が、こんな事になるとはな。正直予想外だったぞ」

ロダンはそう言いながら、ティファエラの腹を見る。

生命を宿した自らの伴侶。

その生命を護るためにも…。

「そろそろ時間だ、俺は行く」

「気を付けて、もう貴方だけの体じゃ無いんだからね」

「善処する」

そして、ロダンの表情が変わる。

夫であり、父親である表情から戦士の表情へ。

「アロウズの連中、飽きないツスね」

「無駄口を叩く暇があるなら少しでも戦え」

シュバルツと准尉はマシンガンで難民に襲いかかるオートマトンを迎撃していた。

「全く、MSがあればこんな奴ら!!」

准尉がぼやきながらも掃射する。

「やむを得んだろう。どの道私達の機体は充電が必要だった」

今、シュバルツ達のジnkスは整備中だ。

急ピッチで行われているとは言え、かなり危うい。

「整備、終わりました!!」

「ここは我々が引き受けます!!」

と、ぼやいているとカタロンのメンバーが声をかけてくる。

「すまなかつたな」

「いえ、貴方ほどのパイロットにこんな事をやらせて…」

カタロンのメンバーは謝罪してくるが、シュバルツはそれを意に介さず機体に向かう。

「まったく、ウチの隊長は」

准尉はぼやきながらもどこか楽しそうに呟く。

元々、外人部隊に所属していて、兄の上司の紹介でシュバルツに出会い、今は自らの意志に従って戦える。

これほど兵士冥利に尽きる事は無いだろう。

「何をニヤニヤしている？准尉」

「いえ、貴方の下に就けて良かったなと思っていただけですよ」

そして、彼等はMSで自らをよろづ。

戦いの先の正義を信じて。

「よくやった。ゼロ・バージュ」

とあるカタロンの基地、そこにいた部隊をルシファーは全滅させた。

「いや、本当によくやってくれたよ君は。流石はイノベーターの紹介した男だ」

ゼロはその言葉に愛想笑いで返す。

「ところで中佐。戦場における士官の死亡原因のトップ、知っています？」

「ふむ、何だね、それは」

「それはですね」

そして、ゼロは機体を動かし、戦艦のブリッジにポイントする。

「味方の誤射、ですよ。ボンレスハム」

そして、セロは躊躇い無くルシファーに引き金を引かせる。

超圧縮されたGN粒子が、彼が付き従っていた男を焼き尽くす。

「…、殺しすぎたな」

セロは一言呟く。

人の命に重い軽いは無い。

憎むべき敵の命も愛すべき仲間の命も、政府要人の命も難民の命も、大人の命も子供の命も、その重さは等しい。

だからこそ、セロ・バージュは殺す相手を選ばない。

罪を背負い、忘れないために。

「詭弁だな、こりゃ」

セロが接近戦を好む理由。それは、殺した相手の感触が残るからだ。

大抵の人間が忘れたいと願う物を、セロは持ち続ける。

それは決して贖罪の為ではない。

罪を忘れず、罪から目を逸らさない、故に戦いをやめない。

何故なら、戦って戦って、最後に不様に死ぬまで生きることが、セロ・バージユの義務なのだから。

「通信は、入っているな。なるほど、月まで来い、か」

そして、セロはイノベーターにオーダーする。

ありったけの実体を持つ近接戦闘武装を用意しろ、と。

「さ、今回もキビキビ行くわよ!!」

ベリアとB・R・はアロウズのMSを切り裂いていく。

「まったたく……」

ミケランジェロとメフィストも、ひたすら敵を切り刻む。

「まあ、あのまま落ち込んでいるよりはマシだろう」

グランダムffも加えて、何とかプレデントの戦線は持っている。

「そりゃ、そうだけだよ」

仲間に裏切られて仲間を殺された。

そんな事があつたのに、ベリアは至って普段と変わらない。

「ハハツ、そんな事？ 私達の腐れ縁は死んだり裏切つた程度じゃ切れないのよ」

ベリアは快活に笑うと背後から斬りかかってきたアヘッドを一刀の元に斬り伏せる。

「良い仲間だな。羨ましいよ」

そして、アシヤはかつてのプレデントを思い出す。

カイザルに拾われ、プレデントの事実上の後継と言われ、そして力を示してきた。

その結果、生きる意味を見出させた。

「まあ、この世界も捨てた物では無いな」

そして、アシヤはジnkクス？を破壊する。

「壊すことしか出来ない自分にも、価値を与えてくれるのだから」

「では、ホープ・E・ブリッジ。貴方にはこの機体を預けます」

そう言ってカトレアはホープにアナザーZを預ける。

「…何故、僕にこれを？」

「勘違いしないでください。事が終わったら返してもらいます」

カトレアはそう念押ししてから説明を続ける。

「貴方は各地のアロウズに連絡してください。アベル・ウォーカーの名前で、顔さえ見せなければバレないでしょう」

そう言ってカトレアは変声機を渡す。

「使い方はここをこうやって押すと……」

カトレアの音がアベルの声に変わる。

「こうなります。貴方の保護した難民を我々が引き受けますので、貴方はこいやって戦線を混乱させてください」

「通達って言っても……」

「通達の内容は、具体的な事は貴方に任せますが、要は、自分はアベル・ウォーカーだ。この機体が証拠だ。この戦いに意味は無い。さっさと帰ってクソして寝ろ、と言ったところですか」

カトレアはホープに言う。

「貴方は人が人を殺す事に抵抗があるのでしょう？これなら誰も傷つかずに戦いを納める事が出来るでしょう」

「ああ、だから君は僕にアナザーZを」

そう言う事です。とカトリアは言う。

「貴方の信義と私達の利が合致した結果です。お互いに不都合は無
いでしょう」

「これって……」

「座標データ？まさか、リグの？」

「そうらしいです。ですが、一体誰が……」

これと時を同じくして、幾つかの表にでない勢力に座標データが送
られた。

「ま、別に問題は無いだろ」

そして、再び運命は動き出す。

二期第十話 始まりの聖典（前書き）

お久しぶりです。まずは更新が遅れたことにお詫びを。

愛想を尽かしていなければ最後までお楽しみください。

二期第十話 始まりの聖典

西暦2XXX 某人工衛星

「これが…、我々の…いや、人類の…」

「ああ、これが人類の新たな道標となり、必ずや人類を次のステージに導いてくれるだろう」

青年と老人が会話をしている。

青年は見るからに興奮した様子で、老人は冷静を装ってはいるがその言葉の端々に興奮が見え隠れしている。

「我々の計画も、遂にここまで来たんですね…」

「何を言っている？まだ始まってすらいないのに」

老人の言葉に青年は頭を掻く。

「…そうですね。でも、僕は信じたいですよ。いつか、人類がこれを正しく使って、永遠の平和を得ることを」

そう言って青年は巨大な箱を見上げる。

その箱の名前はヴェーダ。聖典の名前を持ち、後にCBの争いの原因ともなる。

「リグの位置は確か、ここだよね…」

セフィロトが遂行していた任務。

それは、イノベーターが奪い兵器の設計の為に利用していたヴェーダの最初のターミナルユニット？リグ・ヴェーダ？を発見、確保する事だった。

イノベーターは戦闘データを収集するために世界中にアンノウン…バルドールガンダムをばら蒔き、ソレを元に新たな機体…最強のガンダムを作ろうとしていた。

この情報は、リグの位置情報と共に送られてきた物だ。

「とは言え、プレデントに協力している私たちがこんな事に首を突っ込むなんて、ヴェーダでも予測出来なかったでしょうね」

「案外全部知ってやってるのかも知れませんよ？特に、リグは元々旧セフィロトが管理していた物ですし」

「なあ、俺にはそのヴェーダってやつが何なのかよくわかんねーけどよ、そんなにすげえ物なのか？」

ミケランジェロが疑問の声をあげる。

『そうですね…、猿にでも解るように言えば、これが無ければCBは何も出来なかった、そんな時代があったという事です』

「誰が猿だ、誰が！！」

「ミケランジェロ、フェレス。ちょっと黙ってくれないかな」

ミケランジェロとフェレスの様子を見かねたリンが叱責する。

「『すみません』」

リンの気迫に二人はすぐに謝る。

「まあ、ミケランジェロはバカだし新人だからしょうがないっちゃあしょうがないけど…」

「おい、誰が…」

ミケランジェロが怒りを露にしたとき、アンリ・マユに警報が鳴り響いた。

「敵襲!！」

「敵影確認、距離800。例のアンノウン　バルドールガンダムです!！」

バルドールガンダムの意思是、?ソレ?を見た。

?ソレ?はバルドールガンダムの意思に話しかける。

バルドールガンダムは?ソレ?の言葉を考える。

そして、バルドールガンダムは?ソレ?と会話する事を決めた。

?ソレ?は問いかける。

何故、お前は動いているのかと。

バルドールは答える。

それが自分の使命だからだと。

使命とは？

？ソレ？がバルドールに尋ねる。

ヴェーダの意思に従い、人類を管理する事。

人類を護ることこそ我が使命である、とバルドールは答える。

なら何故人類を攻撃するのか、と？ソレ？は聞く。

勘違いしているようだが、とバルドールは前置きして

自分の使命は人類を護ること。そのためには一人一人に関わっている暇は無い。

？ソレ？はバルドールに尋ねる。

一人一人を救うことが出来なければとてもでは無いが人類を護ることなど出来ないのでは無いか、と。

バルドールは答える。

自らを救うことが出来ない人類であるならば、遠からず滅びるだろう。

そうだった時の為に自分が存在している。

バルドールの意思是、与えられた使命を、使命を与えた人間を思い出す。

そして、？ソレ？に告げる。

故に、最強の力を得る必要がある。

人類を導き、護り、使命を果たすために。

バルドールは？ソレ？に告げる。

？フェイカー？のボディはある。好きなだけ使えば良い。

そして、バルドールは告げる。

久しぶりにヒトと話すことができた。感謝する。

そして、？ソレ？は再び現世に舞い降りた。

？フェイカー？ヒトに似た、だからこそ全く違う存在の肉体を得て。

？フェイカー？かつてセフィロトが行っていた人体実験。

その適合率は極めて低く、唯一の完成体である二ネット・カリオンが完成するまでに数百人の人間が犠牲になった。

この実験はバージルがセフィロトを壊滅させた時に消失した。

しかし、この研究からイノベイドを強化するための手法の一つとして考え出されたのが肉体の最適化だ。

要はイノベイド作成の技術で最適化された肉体を作り、ソレを元に改造処置を施す事だ。

結果生まれたのは完全なバケモノ。

その研究の検体がここに放置されていた。

そして、検体の一つに？ソレ？の意思が吹き込まれる。

？ソレ？は大きく深呼吸する。

そして、

「バルドールの意思も、意外と味な真似をするじゃないか」

そう呟いた。

「つまり、貴方は戦いを望んでいないと？アベル・ウォーカー」

「そつだ。すでに講和も進めてある。このまま戦いを続けても無意味だ」

アナザーZでホープは世界中のアロウズに勧告を進めていた。

アナザーZにはシステムの空き容量にいくつかの機能を搭載している。

カトレア曰く、脳量子波のようなインチキ技術など不要、とのことらしい。

「しかし、正式な命令状が無ければ…」

「だから、緊急の命令だと言っている。従わない場合は軍規違反で罰則を与える」

ホープはそう言ってアロウズを説得する。

「別に戦闘を続けても良いが、その場合は軍の命令ではない、単なる殺人だ。人殺しとも言う。それで良いなら続けると良い」

この言葉で決まりだった。

戦争と言うものはどう言い繕おうと結局は公権力による許しを得た殺し合いに過ぎない。

実際に戦場に立たない人間こそが戦争を美化し、争いを巻き起こす。

カトレアがホープに語った事はこう言う事だった。

そして、彼女はこうも言った。

『現場の兵士は何故、ああも簡単に人を殺すことができると思いますか？』

『それは、上からの命令、使命の為、何かしらの理由を付けて行爲を正当化しているからです』

『人殺し、それに上からの命令。これらの二つを組み合わせれば大抵の兵士は動きます』

「あの娘の言った通りだな…」

カトレアが言った通り、アロウズの部隊は撤退を始める。

「後は、これを世界中でやるだけか…」

「…ローレライは結局私が使うことになるようですね…」

カトレアは呟く。

「カレン、貴女はどうします?」

カトレアはカレンに問いかける。

「…私は、カトレアちゃんに付き合つよ。最後まで、ね」

カレンはそう言って作業を続ける。

「そうですね。私はそろそろ手術が近いので、今日は早抜けさせてもらいますね」

カトレアの言葉にカレンの背中が震える。

カトレアは、アベル・ウオーカーに対抗するために自らの肉体に強化手術を施そうとしていた。

無論、成功する保証は無い。

むしろ失敗する確率の方が高い。

「っ、何で！！カトレアちゃんはそこまでするの！！」

「アベル・ウォーカーがカレンに…私にとって最も大切な人間にとつて、最も大切な人間だからです」

「っ…」

結局、カトレア・ヴォーダンはカレン・ウォーカーの為に、全てを捨てようとしていた。

何故なら、それがカトレアの本質だったからだ。

カトレアはその必要があればどんな相手でも躊躇無く殺すだろう。

そして、罪を背負い続ける。

かつて、失わせてしまった幸福に対する贖罪として。

「それに、友達に幸せになってもらいたい、と思うのは不自然な感情では無いでしょう？」

「グランダムff、アシャ・ノールズ。 出撃する」

アシャ・ノールズはプレデントの終わりを覚悟していた。

ブレイクピラー以降、世界はよくも悪くも一つに纏まるうとしている。

そして、自分たちは間違いなく？異物？だ。

「…目的を、切り換えるべきかな」

アシヤは嘯く。

かつて、アシヤ・ノールズは紛争によって全てを失った。

故に、彼は戦う道を選んだ。

だからこそ、アシヤは人の生死に敏感だった。無表情の仮面を被らなければそれに耐える事が出来ないほどに。

「考えても、仕方が無いかな」

アシヤはセフィロトの事を思う。

ソレスタルビーイングのサポーターとして存在していたハズの彼らには確かな絆が存在していた。

彼らは何も特別な物を持たない単なる人間で、そうであるからこそ何物にも負けることがない。

或いは自分も彼らの様であれば、信頼できる仲間がいれば、また違った道を歩めたのかも知れない。

しかし、彼には自分の生きてきた道を否定する気も無かった。彼が

生きてきた道のりは苦難に満ちていたモノで、そうであるからこそソレを否定することは許されない。

「考えても、仕方ない…か」

そして、アシャは出撃する。戦いの中で見つけた答えが正しいことを証明するために。

ゼロ・バージュは目の前に群がるMSを薙ぎ払っていた。最早彼は戦う為の物以外には何も残っていない。それは恐らく本人にとつては幸運なのだろう。

何も考えずにマシーンとして戦うことは、縛られ続けてきた彼にとつては本望だった。

かつて、ゼロはレイに語った事がある。何も考えずに戦うこと、それは確かに罪だが同時に戦士の理想形でもある。

何も考えずにただ人を殺すためだけの戦士。それはある意味で最も優れた戦士だ。

「クソツ、効いているのか!？」

「同じ人間だ、殺れるは」

最後まで言うことが出来ずティエレンは切り裂かれ、返す刀でフラッグも破壊される。

ルシファールガンダムは立ち止まらずに次の敵を葬り去る。

二期第十一話 意志、或いは人間の力（前書き）

やっと完成しました。

それでは、どうぞ。

二期第十一話 意志、或いは人間の力

今、一つの勢力が終わりを告げようとしていた。

勢力の名前はプレデント。彼らは世界に抗い、世界を変えようとして、世界に敗れ、世界に滅ぼされた。

再起した彼らも、すでに風前の灯火だ。

彼らは、現在世界の各地で停戦を訴えている“アベル・ウォーカー”を襲撃するために、残存戦力を結集させていた。

「総員、聞こえているな」

アシヤはプレデントのメンバーに呼びかける。

「どうやら、我々も年貢の納め時らしい」

アシヤは悲壮感を感じさせない冗談めかした口調で話す。

「…どうした、誰も逃げないのか？逃げてても恨まんぞ？」

プレデントのメンバーは、しかし微塵の動揺すら見せない。ましてや逃げ出そうとするものはいない。

「…全く、度し難い大馬鹿共だな、お前らは。命あつての物種だといつのに」

それを率いる俺は何なんだろうな、ふと思った。

『大馬鹿を超える超馬鹿か…』

「逃げるくらいなら最初からプレデントに関わってなんかいませんよ」

「大体、俺たちに生きる道を与えてくれたのはプレデントじゃないですか。それならプレデントと一緒に消えるのも、まあ、アリだと思えますよ」

生き残ったメンバーはそう軽口を叩く。

「大体、俺たちは人を殺しているんだ。自分が虫けらみたいに死ぬことも、覚悟済みでさあ」

本隊の連中はどうだったかしらんが、と彼は付け加える。

「…まあ、良い。これから作戦を開始する。目標はアベル・ウォーカー。奴は今、何をトチ狂ったのか、世界中のアロウズに停戦を呼びかけている。ヴォーダンのお嬢さんからの確かな情報だ」

アシャはそういつて地図を広げる。

「作戦内容は極めて簡単。アイツを囲っているアロウズの部隊を無理矢理切り抜ける。そして、中心にいるアベルを撃破、抹殺する」

「本作戦は、我々の残存する全戦力を投入する。特攻と言い換えても良い」

そう言って地図を指さす。

「アロウズの部隊は現在中東のレジスタンスを攻撃している。目標は恐らくここで停戦勧告を行っているだろう」

アシヤはそう言って息を吐く。

「周囲にはアロウズの大部隊、作戦の成否に問わず、生きて帰るところとは難しいだろう。だが…」

アシヤはそこで言葉を切る。

「あの男は、我々の同胞を踏みにじり、我々の意志を嘲笑い、徹底的な力による蹂躪で、我々から故郷を奪った。その屈辱を、覚えているか？」

問いかける。

「我々の家族が死ぬ原因を、アロウズを率いたのは誰だ？この世界から力無き者の居場所を奪ったのは誰だ？」

問いかけは続く。

「そして、これはあの男が死なない限り、永遠に続くだろう。だからこそ…」

アシヤは机を叩く。

「あの男には、ここで死んでもらう。そのために命を捧げる事が出来るヤツだけついてこい」

…返事は聞くまでも無かった。

ここにいる人間には最早、矜持と命以外に失うものなど何も無く、残りの命をアシャ・ノールズに預けた者達だったからだ。

「…総員、戦闘準備！！非戦闘員は準備が済み次第順次退避しろ。カタロンの部隊が回収する手筈になっている。必ず生き延びて、我々のような愚か者が居たことを伝えてくれ。それが我々への最大の報酬だ」

「非戦闘員、退避急げ！！」

「もたもたするな！！とつとと脱出しろ！！同志の言葉が聞こえなかったのか！！」

怒号が飛び交う中、アシャ黙々と出撃の準備を進めていた。

「…」

アシャはこの戦いの意味を考え続けていた。

かつて、拾われた命を無駄に消費するだけだった自分。

拾った主を喪い、心を通じさせる仲間もいないままプレデントの新たな象徴としてではやされ、何者にもなれなかった自分。

無為に生きるだけだった自分、それを変えたのは一体なんだったのか、と。

「…ま、これから死ぬのに考えてもしょうがないか」

そして、彼はグラндаムffの操縦桿を握る。

「さて、グラндаムffフォルトインシモ、及びプレデント生存部隊…」

そこで、息を吸う。

「死に行くぞ」

返事も、その必要も無かった。

彼らには死地に赴く覚悟と、護るべき矜持しか存在しなかった。

「だから、何度も言っているだろう！！作戦は中止だと」

「そう言われてもですな、アベル・ウォーカー。我々にも説明が必要なのですよ」

「敵襲、敵襲です！！敵はMS一個中隊…」

その瞬間だった。プレデントのイナクトが急加速を行いジnkクス？に突撃、そのままジnkクス？諸共自爆する。

「…敵部隊、特攻を仕掛けてきます！！」

「…決まりですな。彼らを迎撃する。我々も命がけなんでね」

そう言い放ち、アロウズの指揮官は部隊に戦闘を命じる。

「敵は死を厭わない、最悪の部類だ。各機、徹底的に叩け」

「了解！！」「了解！！」「了解！！」「了解！！」「了解！！」

そして、プレデントの最終決戦が始まった。

対するはアロウズ。

現時点で世界の大半を占めている勢力。

世界そのものとも思える勢力の中心に位置する男を討つべく彼らは生命を燃やす。

さながら、古の神話に語られる、竜に立ち向かう戦士のように。

「全機、作戦開始……。一人でも多く、道連れになってもらおうじゃないか」

アシヤは部下に作戦を命じる。

世界を変える、その理想を成就するために。

ジンクス？が接近、GNランスによる射撃を仕掛けてくる。

「邪魔をしたつもりか？その程度で」

舐められた物だ、アシャはGNフィールドで攻撃を防ぎ、ファングで迎撃する。

ファングにより蜂の巣にされたジnkクス？はそのまま爆散する。

周囲を見渡すとすでに多くの機体が特攻を繰り返している。

その大半は成就する事無く撃墜されていく。

「……、何なんだ…、何故、こんな事が出来る…」

ホープはアナザーZのコクピットの中で呟く。

“自分たち”とは違い、人間には死という概念がある。

そして、大半の人間が死を恐れているという事も。

故に彼には理解出来なかった。

プレデントのとった行動が。

傍から見れば見れば、彼らのとった行動は極めて愚かなのだろう。

そして、実際に彼らの行動は愚か者の所行でしかない。

それでも彼らが止まることは無い。

彼らは背負っているのだ。

自らが護るべき“世界”を。

そして、彼らは知っている。

覚悟の無い者に敗れる屈辱を。

身を焦がすほどの怒りを。

故に彼らは理解を求めない。

だからこそ、殺しを鬨げることが出来る。

故に命を削ることが出来る。

ホープには、それが無謀にしか見えなかった。

故に気づかなかった。

アロウズの部隊がゆっくりと撤退している事に。

「しかし…、よかったですか？撤退してしまっ

「構わん。大体あんなお粗末な演技で我々を騙しているつもりだった愚か者を見捨てたところで誰も文句は言わないだろう」

「…そう、ですか」

「あんな物を命がけで守る、そんな徒労はごめんだよ。少なくとも私には、な」

「アロウズが退いている!!」

「好機だ討ち取れ!!」

「消える!!」

圧倒的な力を持つリベリオンズ。

そのデッドコピーであるアナザーZは、単純な戦闘能力ではオリジナルと比べるべくもないがそれでも情人には過ぎた力を持っている。バスターブレイドライフルでフラッグを落としティエレンをファングで蜂の巣にする。

「ダニーがやられた!!」

「仇は取ってやる!!」

そして、それにも臆さず特攻を繰り返すプレデントのメンバー達。

「信念無き力など!!」

アシャは叫びアナザーZにバスターソードを振り下ろす。

「くっ……」

ホープはそれを紙一重でかわす。

「まだ、まだあああああ!!」

意志と意志のぶつかり合い、魂と魂の削りあい、力こそがすべて、そんなありふれた言葉では表現出来ない、しきれない戦いが、そこには在った。

戦いという概念そのものを具現化した力と力のぶつかり合い、それは、神話の再現だった。

重量機の特性を生かした突撃を繰り返すグランダムff。

対するアナザーZは機体の性能をフルに使って応戦していた。

理想と信念のぶつかり合い。

これは正しく“そういう”戦いだった。

二機の軌跡は複雑にそれでいて一切の停滞を見せない。

グランダムffがファングを射出し攻撃をしかけ、アナザーZはただひたすらに回避に専念する。

そして、攻勢の一瞬の間隙を縫ってアナザーZはファングを射出。

グランダムffのファングと撃ち合いをさせる。

「くっ……」

アシャの口から苦悶の声が漏れる。

そして、アシャは唐突に思い出す。

何故、カイザルがプレデントの蜂起に自分を参戦させなかったのかを。

『何故、お前を地上に残すか、だと？』

『何だ、そんなこと』

『お前には地上の部隊を率いてもらう、それだけだ』

『…、納得しないか。それならもう一つ、理由を付け加えよう』

『戦場では良いヤツから死んでいく。そして、小狡く立ち回った者が生き残る』

『だが、そんなヤツが変わった後の世界で何が出来ると思う？』

『…答えは、また新しい戦争を作り出す。それだけだ』

『だからこそ、お前のような存在が必要なんだ』

『…どちらにしろ、本隊から生き残りを出す気は無い』

『あれだけの大罪を犯すんだ。俺たちだけの命だけで償いが足りるかだろうか』

『それじゃ、行ってくる。次に会うときはヴァルハラだな』

そして、彼は帰ってはこなかった。

噂によれば、CBのガンダムが協力していたとか。

もし、本当にそうであるのならば、CBを許すことは、アシヤには出来ない。

自分たちだけの勝手な思想に世界を巻き込み、それを修正しようとしたプレデントをすら滅ぼした。

故に…

「…悪いが、死ねなくなつた」

アシヤは叫ぶ。

「最早、貴様が何者でも構わん。地上のアベル・ウォーカー！！貴様を殺して、世界に道を切り開く礎とさせてもらう！！」

そつだ、そつだつた。自分には玉砕覚悟の特攻よりも、こっちの方がよっぽど“らしい”。

「意志を継いだ。死んでいった仲間から、死んでいった友から！！世界を変えろと、そのための力を率いると」

こんな単純なことすら忘れていた。

「貴様を殺して生き残る！！」

そつ、それこそ彼が折れずに戦い続けていた理由。

「…それを待つてた、大将！！」

次の瞬間、プレデントのメンバーから通信が入る。

「全機、死んでも大将を護りやがれ!!!この方は、世界に必要な人間だ!!!」

そして、戦場は加熱する。

一人を護るためだけに。

未来に意志を残すために。

「…動きが、変わった?」

アナザーZにコクピットでホープが呟く。

今までの策も何も無い突撃から洗練された戦闘機動に。

ホープは知らない。

彼らが何のために戦っているのかを。

護るべき未来の価値を。

人間の、意志の有る人間だけに許された、“力”を。

彼らは決して信頼し合ってたわけでは無い。

ただ、同じ物を持っていたただけだ。

理不尽に抗う意志。

世界を変えろという意志。

未来を創りたいという意志。

それは、永遠を持たない人間だからこそ持つことが出来る、最高の武器だ。

「変えろぞ、世界を」

アシヤは呼びかける。

「抗うぞ、理不尽に」

プレデントは無言で、しかしその身には確かに力が宿り。

「手に入れるぞ！！未来を！！」

声を大にして叫ぶ。

「「「「「「「「
「「「「「「「
「「「
「「「

そして、アナザーZとグランダムfffは再び交差する。

アナザーZの一撃は、しかしプレデントの砲撃により妨害される。

そして、爆炎が晴れた時、アナザーZの眼前にはグランダムfffがいた。

「君は…」

ホープが目を見開き何事か呟こうとした時、アナザーZはグランダムfffにより袈裟懸けに切り裂かれていた。

その後、プレデントのメンバーがどこに行ったのかは誰も知らない。

そんな事を詮索する理由も私たちには無い。

ただ、数年後のELS戦役にグランダムfffに率いられたジンクス？の部隊が目撃されたと言う証言が残されている。

彼らが本当に“彼ら”だったのかはわからない。

しかし、私は彼らに生きていてほしい。

世界には彼らのようなモノが残っている。

それが私たちの希望だから。

二期第十二話 神馬(前書き)

二期第十二話 神焉

神話の時代、言語は一つだったという。

バベルの塔。

思い上がった人類が神に近づこうと、その傲慢に任せて作った塔は、しかし神の逆鱗に触れてしまう。

結果、雷によつて塔は破壊され、人類の言語は分かたれた。

誰でも知っているような御伽話。

そして、神話の塔の名前を冠する施設。

衛星軌道上に存在し、イノベーターと呼ばれる存在が作り上げた人工衛星。

その施設も、バベルの名を冠していた。

そして、この“バベル”もまた裁きを受けていた。

…神ならぬ人間に。

「第5ブロック、隔壁破られました!!」

「第7ブロックもです!敵は…!」

次の瞬間、通信機から爆音が響き渡る。

『返してもらいに來たぞ』

ヒハッ、という特徴的な笑い声とともに、バベルの司令部が破壊される。

そして、バベルから一機のMSが出撃する。

「テメーが最後か」

ゼロ・バージュノルシファールガンダムはツインエッジを構える。

「……………」

敵MSは無言で武器を構える。

そして、…………死闘が始まりを告げた。

解析、開始。敵機体は高速戦に特化した軽量機であると推測。近距離戦を基調とした戦闘を行う。

敵パイロットの技量は著しく高い。ともすれば、アベルヤリボンズに匹敵する可能性すらある。

隙があるとすれば、やたらと近距離戦に拘るところか？

いや、あのマイスターに隙は無いと考えた方が無難か

…。

それとも、最悪の可能性を考える必要すらあり得る…、
か？

まあ、問題など無いこいつを倒して…。

そこまで考えた時思考にノイズが奔る。

そして…

ゼロ・バージュは敵MSから一瞬感情が見えた気がした。

…何だ、この感情は…。

ゼロはその感情の正体を読み取ろうとするも、敵MS…リボーンズ
ガンダムフォルテシスはすぐに無表情な動きに戻る。

…まさか、な。

ゼロは呟く。

ゼロは一つの可能性を。彼が最も待ち望み、同時に最も恐れていた
可能性を。

「お前なのか？セラ…」

とある宙域、そこで世界を変えるかも知れない戦いが過熱していた。

バルドールガンダム：リグ・ヴェーダとの決戦。

そのためにセフィロトはここにいた。

「何なんだよ！！この機動は！！」

『敵機体、背後に回り込んでいます。早急に対処を』

「わーってる！！」

「ミケ！！ファングが！！」

「ん…、おわあっつ！！」

ファングとバルドールにメフィストは挟まれた形になる。

『ここで、終わりですか…。意外と呆気無いものでしたね』

最悪とも言える条件の中やけに落ち着いた声でフェレスが呟く。

「…お前はそれで良いのかよ。フェレス」

バルドールがサーベルを抜き放ち、メフィストはそれをバスターソードで受ける。

『まさか』

背後のファングからGN粒子が放たれようとして…

「…、だよなあ…！」

ミケランジェロは、機体を急旋回させる。

「わりーが、こっちも譲れないんだよ!!」

そして、ミケランジェロは思い出す。

かつて彼に戦いを教えた者の言葉を。

『戦い方…か。そんなもの、気構えさえできていればどうにでもなるもんだがな』

『気構え…、ねえ。ちなみにロダンの兄貴はどんなのを？』

『そうだな…、俺の場合は…』

メフィストはギリギリで攻撃を弾き返す。

「後悔なんざ、あの世でいくらでもできる、だったよな」

『何を？』

「何でも無い」

そう、何でも無い、当然のことだ。

人間にはその場その場で最善を尽くす事しかできない。

故に、自分はここに立っている。

ともすれば忘れてしまいそんな簡単な、“始まり”。

それが、ミケランジェロ・ネスカにとっての矜持であった。

「…リナ、この戦い、どっちが勝つと思う?。」

リンは呟く。

「何?いきなり」

二人はアンリ・マユのブリッジからミケランジェロとバルドールの戦いを眺めていた。

「ま、このままだとミケは勝てない、…かも」

「…言っちゃうんだ、それ」

「気休め言ってもしょうがないでしょ。私たちにできる事は施設のハッキングくらいなんだから」

「そう…だね。ベリアさんのサポートくらい、ちゃんとやっとなきゃ」

リンの言った通り、彼女たちに来る事は最早それしか無い。

リグ・ヴェーダの正確な位置を突き止める事、それが、彼女たちの戦いだっただけ。

「ま、このリン・シャオロンにかかればお茶の子さいさいなだけ

どね」

リンは不敵な表情を見せる。

それに対し、リナはやや呆れたような表情を見せる。

「だったらとつとやったら」

「…オートマトンが邪魔ね…」

ベリアは呟きながら無人の要塞を進む。

「…サンクチュアリの増援はまだかしらね…」

独り言を呟きながら少しずつ基地の敵を掃討していく。

「それにしても…このオートマトン、何だか不気味ね」

ベリアが破壊したオートマトンは、通常の物とは違いヒトに近い形をしている。

それも先に進むにつれてその傾向が強くなっていく。

「…こんな時、レイがいれば」

ベリアは呟きながらも少しずつ確実に進んでいく。

その道が何に繋がっているかを知りもせず。

メフィストとバルドールの戦闘は既に佳境に入っている。

通常、MS同士の戦闘は長くとも十分以内で終了する。理由は簡単だ。パイロットが持たない。

戦闘という異様な環境、その中でMSの操縦と言う複雑な動作を続けるプレッシャー、大抵はどちらかが先に途切れ、即死に繋がる。

しかし、今ミケランジェロが戦っているのはそんな物とは無縁のAIであり、さらに極めて凶悪なシステムを内包している。

対するミケランジェロは最早、集中も体力も尽き掛けている。

「…フェレス。勝算は今どのくらいある?」

『…10%あれば良い方です』

だろうな、とミケランジェロは呟く。

もともと無茶な賭けだった。しかし、敗ける事の出来ない賭けだった。

だからこそ自分はここにいる。

バルドールが動く。

メフィストも両手のバスターソードを構え直し…

「随分と男を上げたじゃないか、ミケランジェロ」

突如として、バルドールの背後からビームが奔る。

バルドールは回避機動を取るが間に合わず、右腕を持っていかれる。

「ガンダムジャオエル、ロダン・アルレッキーノ。参戦するー!!」

「あ、兄貴!!何でここに!!」

「何、傭兵として依頼を受けただけに過ぎん。それに…」

ジャオエルは両手のライフルを構える。

「こいつを倒す方が先決だろう」

そして、ジャオエルが戦場に降り立った。

「任務は三つ。バルドールの破壊、リグ・ヴェーダの保護。そして

…」

ジャオエルは盾でバルドールの攻撃を受ける。

「ジャオエルの破壊、か。まあ、引退試合には丁度良い……、かな」

そして、ジャオエルは敵を見据える。

「俺たちがこれから生きる世界に管理者は必要無い。何故なら世界は……」

ロダンはミケランジェロにアイコンタクトを送り、ミケランジェロも応える。

「世界は、人間の物だからだ！！機械人形！！」

そして、ジャオエルは銃剣を構える。そして、銃剣から粒子ビームを放つ。

バルドールはそれを回避、そのままメフィストにファングを放ち、足止めをする。

『今更、こんなもんで止まるような私たちだとも！？』

「残念だが、それはねえ！！」

メフィストは、ファングの銃撃をバスターソードの腹で受け止めながら前進を続ける。その最中、銃撃が頭部に当たり、右目のカメラアイが剥き出しになる。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
あああああああああああああああああああああああああ

爆炎の中、佇むメフィストの姿はまるで…、

「メフィスト悪魔か。言いえて妙だな」

ロダンは呟きジャオエルを衛星に向ける。

「無限に進化する兵器、か。何を考えてソレスタルビーイングはこんな玩具を作ったのやら」

そして、ロダンは衛星の侵入口に到達する。

外にはオートメーション化されたMSが多くいる。

MSはジャオエルへの攻撃を加える。

ジャオエルはそれを避ける事すらせずに衛星の入り口に到達する。

MSは衛星内部まで追って来ようとするが……

「さよならだな、ジャオ」

ロダンはジャオエルを自爆させ衛星の入り口を塞ぐ。

そして、大量のオートマトンがロダンを目掛けて突撃する。

「感傷に浸る間も与えてくれないか。せっかちな」

そして、ロダンは構えを取る。

「…この程度なら素手で十分だ」

ロダンはオートマトンに向かって走り出す。

オートマトンは機銃でロダンを攻撃するが、ロダンは前進しながら紙一重で攻撃を避け続ける。

そのまま一気に接近し、勢いを付けてオートマトンを蹴り飛ばし相討ちさせる。

更に貫き手を使いオートマトンの外壁を突き破り内部の機構を破壊する。

そのままオートマトンを盾にしつつ前進し、盾にしていたオートマトンを蹴り飛ばしてそのまま飛び越える。

縦横無尽に駆け回るロダンに対し、機銃以外の攻撃手段を持たないオートマトンは対応できず同士討ちを繰り返すしかない。

「哀れなものだな、機械人形」

彼の言葉には本物の憐憫すら漂っていた。自分の意志を持たない事、それは彼にとって最大の苦痛でもあった。

「さて、隠れてないで出てきたらどうだ？」

オートマトンが全滅した頃を見計らってロダンは声をあげる。

「……折角隠れていたのにな」

そして、一人の青年が姿を現す。

それに対しロダンは構えを取る。

「そんなに身構えなくても良いよ。君みたいな達人に素人の俺が敵うわけないだろう」

「…私は、ロダン・アルレッキーノと言う。貴様は何者だ？」

「うっわ、先に自分の名前を名乗るとか。ここは俺に名乗るのは自分からとか言わせるのがお決まりだろ」

「悪いな、何ならやり直そうか？」

いや、良いと青年は断る。

「まあいい、こっちは名乗ったんだ。貴様も名乗るのが筋だろう」

ロダンは軽口を叩きながらも構えを崩さない。

本能的に解っているのだろう。目の前の青年が脅威そのものであると。

「ま、それもそうだな。俺の名前はレイ。レイ・A・フェイカーだ」

そう言って青年…アーデルハイトレイ・A・フェイカーは構えを取る。

「素人では無かったのか？」

「いや、俺は素人だよ」

そして、レイは力を込めて、床を蹴り……

「ただし、スーパーマンだけだな」

そのまま、凄まじい勢いで右ストレートを放つ。

ロダンはギリギリでそれを回避するが、それすらも知っているかのようレイは常識を無視した動きでロダンに追撃を加える。

ロダンは咄嗟にレイの突きを払いのける。

「その力……」

「そ、多分あんたも知ってる物だと思っぜ、セフィラの守護天使さん」

「っ！！」

ロダンはそのままレイを蹴り飛ばす。

レイはそのまま壁に叩きつけられる。

続けてロダンはラッシュをかける。

「……流石はミケの師匠と言っただけはある、正味な話この体じゃなかつたら三回は死んでたよ」

レイはそのまま無造作に手を振るう。

子供が駄々をこねる様な動き、しかしそれはフェイカーの肉体強度

により即死級の一撃となる。

「っ……」

ロダンにはバックステップでそれを回避する。

「ハハツ、大分この身体の使い方がわかってきたよ。おかげで“僕の計画も良く進んでいる。後は俺があんたを下せば良い”

「……、何これ、ふざけてるの？」

衛星最深部に侵入したベリアは呟く。

そこではパーツ状態のバルドルガンダムが何機も置いてある、言ってみれば工場だった。

そして、ベリアが見たのはそれだけではない。

無数のカプセル、その中にはヒトがいた。

刹那、ロックオン、アレルヤ、ティエリア、アベル、ユノ、バージル、リンド、セロ、リン、リナ、ラッセ、クリス、ベリア、グラハム、レイ、ロバート、ケビン、スメラギ、イアン、モレノ、アルエツト、その他にも優秀な戦果を挙げた軍人や優秀な技術者、有能な政治家に特異な思想家、とにかく多くの人間がそこに眠っていた。

『立体映像と解っているとはいえ…、気味の悪い光景ね』

周囲に警戒を払いながらベリアはゆっくりと進む。

『何をしに現れた』

突如、声が鳴り響く。

『ここは人間の立ち入る所ではない』

声は続く。

「……あなたこそ、何様のつもりかしら。こんな気味の悪いものを作って」

ねえ、とベリアはリグに呼びかける。

「……この人工衛星の名前、知ってるかしら？いえ、あなたは知ってるはずよね。この衛星の名前はあなたがつけたんだから」

『その問いに何の意味がある』

ベリアは声を見捨てて続ける。

「“セフィロト”それがこの衛星の名前で私たちが始まった場所」

リグは無言、ベリアに対して何も答えない。

「機械に感情をインプットして、機械のための体まで作って、挙句の果てには……、まあ、そんなことは問題無いわね。問題は……」

「あなたが世界を終わらせようとしている事よ」

「あなたがアロウズとイノベーターをだまくらかして作った施設。バベルとか言ったかしらね。コリニック級のファクトリーと世界最先端の技術。それに、大量の圧縮粒子弾、何よりメント・モリを遙かに上回る超大型粒子砲、バベル・ハンマー。そして、基地の基幹システムは全てがあなたの制御下にある。意味は解るわよね」

リグは相変わらず無言、それは肯定を現す無言だった。

「あなたはそれを地球に放つ。そのつもりだったんでしょ？」

『何を根拠に』

「簡単よ。それら全てがいつでも発射できるようになっていた。それも世界中の主要施設にね」

しかし、その計画は既に阻まれていた。

ゼロ・バージユによる襲撃が原因で。

「それにね、その信号をジャックした結果あなたが操作していた事が判明したわ。だからこそ私たちにこの仕事が回ってきたってわけ。なんせ、私たちの任務は……」

「ソレスタルビーイングの露払いなんだか

ら」

ロダンの震脚、そしてその構えから繰り出される凄まじい技巧の数々。

レイはそれを受けながらも怯む気配すら見せない。

そして、稀にはあるが致命的な一撃を放つ。

ロダンはその一撃を紙一重でかわす。

「答えないと思うが、一応聞いておこう。何故貴様はこれだけ喰らって倒れない？イノベイドにも痛覚はあるはずだが」

ロダンの質問にレイは簡単に答える。

「あんだ、想像力が足んないな。少し考えりゃわかることだろうに」

そして、レイはバックステップで大きく距離を取る。

「いくらでも復活できるイノベイドのシステム、そして、死を意識する必要の無い機械偽物の体の体。そんな体に痛覚なんざ残す利点がどこにある？」

ロダンは成程と呟きながら踏み込みをかける。

「貴様がバケモノだという事がよくわかったよ」

「そういつこつた!」

二人の拳が一瞬で交差する。

ロダンは首を反らして回避して、レイはそのまま頭頂部で受ける。

レイはそのまま強引に拳を振りぬく。

ロダンはそれを回避する。

「……やはり、一筋縄にはいかないか」

「そういう事だ!」

続いてレイは回し蹴りを放つ。

ロダンは舌打ちしながらもバックステップで後退する。

「どーした? 攻撃の手が緩くなってきたぞ?」

「何、貴様の倒し方を考えているだけだ」

「は?んなもん最初からねーんだよっ!」

そうか?、とロダンは返す。

「案外楽な方向があるかも知れないぞ？」

「じゃあ、やってみるよ!!！」

レイは拳を握りしめる。

「それでは、お言葉に甘えさせてもらおう!!！」

そして、ロダンは踏み込みをかける。対するレイは半歩だけ片足を引く。

そして、同時に渾身の力を込めて突きを繰り出す。

レイの突きはロダンの左腕を吹き飛ばし…

ロダンの突きは、レイの右腕を、文字通り吹き飛ばした。

「なっ…」

「次だ!!！」

完全な肉体を破壊されてあっけに取られるレイ。

ロダンはその隙を逃さずにラッシュをかける。

「……………、どこまで脳筋なんだよ。あんたは」

「悪いな、昔からこれしか取り柄が無いんだ」

「……、ここから先にあるドックのバイオメトリクスを書き換えた。あんたはそれを使って脱出しな」

レイはそう言っただけ目を閉じる。

そして、そのまま動かなくなった。

「それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうとするか」

ロダンは呟いてレイの言っていたMSに向かう。そして、一度だけ振り返り……、その後は、もう振り返らなかった。

「……セフィロトが、何故あのような強引な武力介入の手段を取ったのか、君は知っているか？」

リグの言葉にベリアは一瞬言葉に詰まる。

「私の予測演算によれば、時期に人類は自らの手で滅びる。だからこそ完璧な管理者が必要だった」

「……だから、その役目を担える存在としてリボンスに目を付けたわけね」

「しかし、彼では足りなかった。何もかもが」

リグは独白する。

「お前がここに来たという事は、私の計画を阻止したい、ということなのだろうな。違うか？」

ベリアはリグの言葉に首を振る。

『……お前に、覚悟はあるのか？私の計画なら少なくとも後500年は人類を保つ事が出来る。お前は、それを一時の感情で不意にするのか？』

「……管理されるだけの家畜に、生きる意味は無いわ。あなたも、本当はわかっているんじゃない？」

『正しい思想だ。だが、それは本当に正しい答えなのか？』

「そんなことは500年先の人類が考えれば良い事よ」

ベリアは言い返す。

「そりゃ、人間は間違えもするし、失敗なんざ日常茶飯事だし、バカで愚かであろうしようも無い生き物だけど、それでも人間だけの力はあるわよ。あなたじゃ量れないような力が、ね」

それに、と付け加える。

「人類が減んでも、それは人類の責任よ。あなたに出る幕は無いわ」

リグは少しだけ……そう、人間で言えばたじろいだ。

『それが、お前の答えか。貫くことは、出来るか？』

「努力はするわよ」

そして、リグは結論を出す。最早自分は不要だと。

『施設の自爆プロセスを実行。30分後に機密情報秘匿のため人工衛星、セフィロトを爆破します。施設内の人員は速やかに退去してください』

そして、リグは告げる。

お前には、世界を見届ける義務がある、と。

ヴェーダの記録によれば、セフィロトと言う組織はこの瞬間、消滅した。

生存者は0名。

完全な全滅であった。

……しかし、彼らは本当に滅んだのだろうか。

それを知る者は、最早一人しかいない。

とある施設のベッドに、セロ・バージュは一人の女性を寝かせる。

既に通信は送った。

後は決着をつけるだけだ。

二期第十二話 神焉（後書き）

次回、最終回

最終話 希望

「カトレアちゃん、本当に行くの？」

「ええ、名指しで挑戦状を叩きつけられて、尚且つそれは身内なんですよ。身内の不始末は身内が片を付けるべきです」

カトレアはカレンを諭す。

「それと、今回は帰れないかも知れませんが一つ、言っておきたいことがあります。ありがとうございます。あなたと会えたおかげで私はバケモノから人間になることができました。それと、あなたの事を、ずっと愛していました。そして、これからも」

そう言ってカトレアはMS…ローレライガンダムに乗り込む。

そして、そのまま機体と神経を繋げる。

「……………接続完了……………同調開始……………システムチェック……………問題無し……………同調律……………順調に上昇……………外部追加ユニット接続……………OK、メインシステム、オペレーションシステム、順次開放……………」

そして、カトレアは機体の出力を徐々に上げていく。

「トランザムブースター、起動。大気圏突破用ユニット完全起動」

ふと、カトレアは機体に何らかの調整が働いている事に気が付く。

見るとカレンが管制室から無線でシステムを最適化している。

「……………、ノリに任せて、キスくらいならしても良かったかも知れませんが」

カトレアは誰にともなく呟く。

そして、深呼吸をする。

「カトレア・ヴォーダン、ローレライガンダム。出撃します」

「ルシファーへの、フォルテシスのパーツ組み込み完了。稼働率100%。……………完璧だな」

ゼロ・バージュは呟く。

「バベル・ハンマーの粒子充填率も、問題は無い、か。全く、何もかもが上手くいきすぎだな」

既に、バベル・ハンマーの標準は世界中の主要都市に設定されている。一撃でも叩き込むことが出来れば恐らく世界は終わるだろう。

……………その先にあるのは終わらない戦争、人類が滅びるまで続く戦争だ。

アロウズが解体され、CBも大きなダメージを受けた今連邦軍も再編に忙しい今、完全に極秘だったこの兵器の存在を知る者はいない。

考えてみれば、滑稽な話だ。メント・モリの時から地上の人間は自分たちをいつでも殲滅できる兵器の下で何も知らずに生活してい

るのだから。

そして、これを阻止できる存在は無い。

彼が自らチャンスと称して通信を送ったカトレア・ヴォーダンを除いて。

「ブースターユニット、切り離します」

カトレアは呟いてユニットを切り離す。

既に地上との通信は途切れている。今、彼女の目の前にあるのは彼女……、否、人類そのものと敵対しようとしている“敵”だ。

「……………随分遅かったじゃないか。尻尾巻いて逃げたのかと思ったぞ」

「生憎、私は頭が悪いものでして。あなたのどこが怖いのか全く理解できないのですよ」

カトレアは目の前の“敵”を見据える。

「お久しぶりですね、ゼロ・バージユ。まさか、あなたとの再会がこのようなモノになるとは思っていませんでした」

「そうか？俺は“あの時”から何時かはこうなると思っていたが」

二人は言葉を交わす。

「……………一つ、聞きたい事があります」

「一つと言わず、幾らでも聞いて良いぜ」

カトレアは無視して続ける。

「貴方は、何故私にあのような通信を？かつての貴方なら問答無用で実行していたものですが」

「……………、知りたいか？」

カトレアは無言、セロは語り始める。

「簡単だよ。折角世界は保たれたんだ。CBによってな。そんな世界を問答無用で壊すのは、少しばかり気が退けてな」

「だから私に通信を？」

「ああ、本来ならアベル・ウォーカーでも呼びたかったんだが、まあしょうがない。世界中のエースが戦えない今、動けるパイロットの中で最も強いお前を選んだ、それだけだ」

「こっちも良いか？とセロは言う。」

「お前は何で逃げなかった？好きな人を連れてスタコラ逃げることだってできただろうに」

それに、とセロは続ける。

「お前は世界にそれほどの価値を見出していなかったはずだ。世界が滅んでも自分だけ生きていければ良い、そんなヤツが何故ここに来

た？」

カトリアは即答する。

「そんな事、決まってるじゃないですか。この世界に価値が無いのは、まだ何もこの世界に刻み付けた物が無い、それに気づいたからですよ」

ローレライガンダムは武器を構える。

「真っ白な紙に、何かを描くことを知った。大抵の人間は何を描こうか迷ってる内に時間切れになるものですが、幸いにも私には迷う理由が無かった。それならば、無粋にも紙を取り上げようとするあなたに反抗したいのは、当然でしょう」

「……………、お互い、本当にままならないな」

ルシファーがバスターソードを構える。

「これ以上無駄な会話を続ける気はありません。貴方も同じでしょう??」

「違うない!!」

そして、ローレライは垂直発射型GNミサイルを放つ。

垂直に上昇したミサイルは、その後ルシファーを目がけて突き進む。対するルシファーはビームサーベルを抜き放ち、ミサイルに向かって投げつける。

そのままバスターソードに内蔵されているビームライフルでサーベルを撃つ。

拡散した粒子が垂直ミサイルを叩き落とし、爆発が起こる。

凄まじい爆発と共に、セロは施設の機構を操作する。

施設のクレーンに吊るされていたコンテナの蓋が開く。

そのままコンテナ内から大量の実体剣が撒き散らされる。

「っ……、これは……」

「面白いシチュエーションだろ？」

ルシファアはバスターソードを手放し、そのままローレライに接近する。

対するローレライは手首のGNビームマシンガンで迎撃する。

ルシファアはGNフィールドでそれを防ぎながらローレライの近くのGNソードを掴み取り、そして、そのまま袈裟懸けに斬りかかる。

ローレライはバックステップでそれを回避。

そのままGNビームブレード“エメラルド”で迎撃する。

エメラルドの刀身はGNソードの刀身を呆気無く切り裂く。

「なるほど、半端なGNフィールドはチーズ同然てなわけか。上等だ」

ルシファアは切り裂かれたGNソードを捨てて、そのまま手近な武器を捨てる。

「それはお互い様でしょう」

二人は静かに言葉を交わす。

「貴方も、私も、あれから随分と生きてきましたね」

ルシファーがローレイに斬りかかり、ローレイは間一髪で回避する。

「本当だな。俺も、お前も」

ローレイがミサイルを放ち、ルシファーはそれを回避する。

そのままルシファーはGNマシンガンでローレイを撃つ。

ローレイは左肩を撃ち抜かれるも、ルシファーの頭部を破壊する。

「こんな時代だ。人々は自覚の無い悪意で世界を腐らせる。アベル・ウォーカーが良い例だ。何が誤った力の使い方を世界に示した、だ。この世界に人の命より大切なものなどあってはならないというのに」

「……………それにしても、貴方の行動は命を奪う事に積極的な様ですが」

ルシファーはバスターソードを手放し、GNツインエッジを手にする。

「だから、戦争が必要なんだよ。誰もが自分の命を守るためだけに戦う、大義も正義も信義も綺麗事も無い、全ての人間に平等に与えられる戦争がな!」

「解ってんなら話は速い!!」

ルシファーは斬りこみをかける。

ローレライは間一髪でそれを回避、レイピアでルシファーの左腕を切り落とす。

そして、ルシファーの長刀はローレライの頭を刎ね飛ばす。

「その程度か!?!カトレア!!」

「貴方も口の割には息が上がってきてませんか?」

高速で交差する二機のガンダム。

その軌道は、踊っているようでもあった。

「貴方の言っていることは、単なるエゴです!!」

「んなこたわかってる!!」

「なら……、まさか、貴方の目的は!!」

カトレアはゼロの目的に気付く。

「……………、させませんよ、そんな一人勝ち」

『……………、気づかれたか』

ゼロは心中で呟く。

「笑わせますね、そんな覚悟で私との戦いに挑むなんて」

カトレアは呟く。

「貴方も……、貴方は、私と同じだと思っていたんですが、違ったようですね」

「違うないさ、お互い自分の為だけに戦いをしている」

二機は鏝迫り合いを始める。

「とは言え、さっきのは一応本音だぞ。俺が思っている事、そして実行しようとしている事だ」

コクピットの中で、セロは笑みを作る。

「なら、私はそれを阻止せねばいけない、と言うわけですか」

調子が良いですね、とカトレアは呟く。

「貴方の目的は、死んでも阻止させてもらおうとします」

「昔みたいに負けた方が何でも言う事聞けってか？」

「そついう事です!!」

会話をしながらも、お互いの機体は削りあい続けている。

決して表沙汰になることは無い、けれども世界の命運を賭けた戦いは終幕に近づく。

ローレライはレイピアを構える。

ルシファーは長刀を構える。

二機は向かい合い、最後の交差に備える。

「……………、そついや、あの時は毎日が楽しかったな」

「そう……………、ですね。本当にどうしてこうなったのか」

そして、二機は残った力を全て推力に注ぎ込み……………。

ローレライがルシファーのGNドライブを破壊し、ルシファーがローレライの上半身を切り裂いた。

エピソード

「今日、この日を持って我々はコリニックから独立、サンクチュアリ・インダストリーとして新たな道を歩み始めます」

大勢の社員の前で、カトレアは演説をする。

「我々は、我々の時代の中で多くの命を喪い、忘れるべきで無い教訓を得ました」

イノベイド、ヒリング・ケアに似た女性があくびを噛み殺し、横のつなぎを着た中国系の女性に小突かれる。

「我々は、我々が持つ技術によって、世界に幸福と安寧を齎す事を

その第一義に掲げる事を誓います。そのために、貴方たちの力を貸してもらいます」

一人の女性がその言葉を聞いて微笑む。その近くで隻腕の男性が妻であるう女性と子供の二人の肩を抱いている。

その近くで一人の青年軍人が二人の女性に絡まれている。

「いい加減、はっきりしてくれませんか？」

「期待している女を食わずにはつたらかしといて連邦軍少尉様とは、良いご身分だなケビン・ウォーカー」

そんな声が聞こえてくる。

そのまま青年軍人は二人の女性に連れ去られる。

それを壮年の男性とその娘が苦笑しながら見守る。

そんな風景をしり目にカレン・ウォーカーはカトレアの姿を見据える。

彼女の友人は今や一つの組織の長となっている。

その事を思いカレンは少し懐かしい気持ちになる。

カレンの近くにはかつてのプレデントに似たマークを付けたテストチームが整列している。

「世界を救う最高効率、それは技術革新による利益の平等な分配を公平に行う事です。決して悪平等にならない為に使うべき力を」

そして、それから演説は締めくくられる。

そして、彼女は通信を受け取る。

「……………、そうですね、バベル・ハンマーはCBが破壊しましたか。感謝します。メアリー」

そのまま彼女は彼女の姉の家族に会いに行く。

その家族は驚いた顔で突然の来訪者を迎える。

そして、カトレアは彼に告げる。

「お久しぶりです。世界もまだまだ捨てたものでは無いでしょう」

最終話 希望（後書き）

この場を借りて剣也さんにお礼を。自分のような凡愚に小説の外伝を書かせてくださって、ついでに我儘もきいてくださって、ありがとうございます！！

こちらのトラブルで一時期完結が危ぶまれたりしていましたが、読者の皆さんや知り合った作者さんのおかげで乗り切ることが出来ました。

それと、この作品を連載していく中で他の作者さんと知り合えた事は自分にとって僥倖でした。

特に想像屋さんには機体の原案をもらったりしていました。

おかげで間期のストーリーがスマートに進みました。ここでお礼を言わせてもらいます。本当にありがとう！！

とは言え、この作品にも作者の技量不足が原因でいくつも設定が生かせてなかったり主人公が空気だったりと反省点があります。

そこら辺はこれから小説を書く時に生かしていきたいと思います。

それでは、次回作が有ればまた会いましょう！！

おまけ、ゼロ・バージュのキャラクターとしてのテーマ

戦場に投げ込まれて、戦場で狂ってしまった一般人と言うイメージで生まれたキャラ。

行動にブレが有ったり無かったりするのはその辺の作者のイメージが原因だったり。

個人的には愛着のあるキャラクター！。

人間的な部分をもう少し押し出したかった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9019r/>

ガンダム00～変革への道～外伝：生命の樹

2011年10月17日01時53分発行